

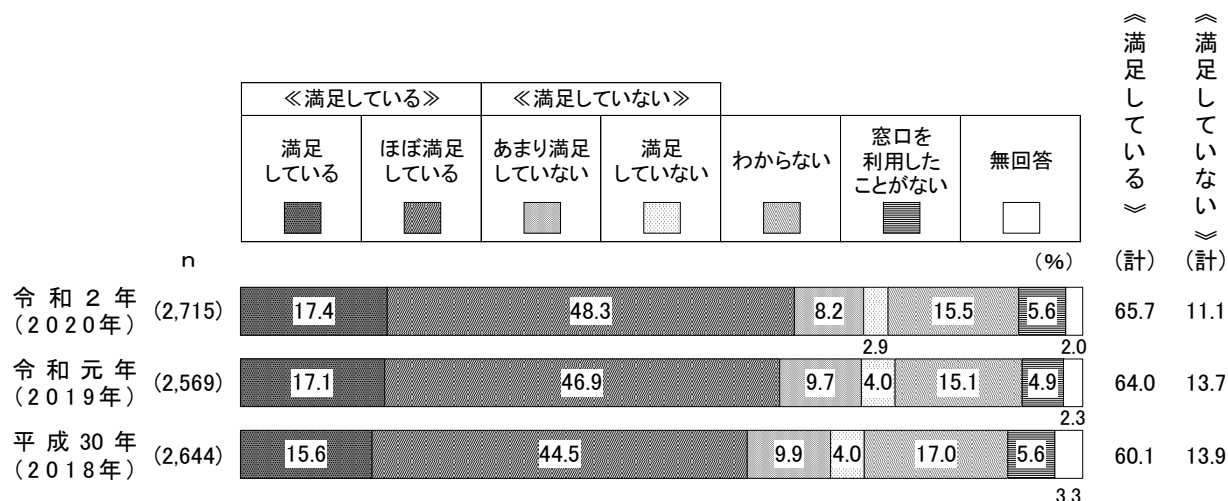
3. 「八王子ビジョン2022」の施策指標に関する調査

(1) 窓口サービスの満足度

◇《満足している》が6割台半ば

問15 あなたは、市の窓口サービス（職員の対応や提供内容、処理時間など）に満足していますか。（○は1つだけ）

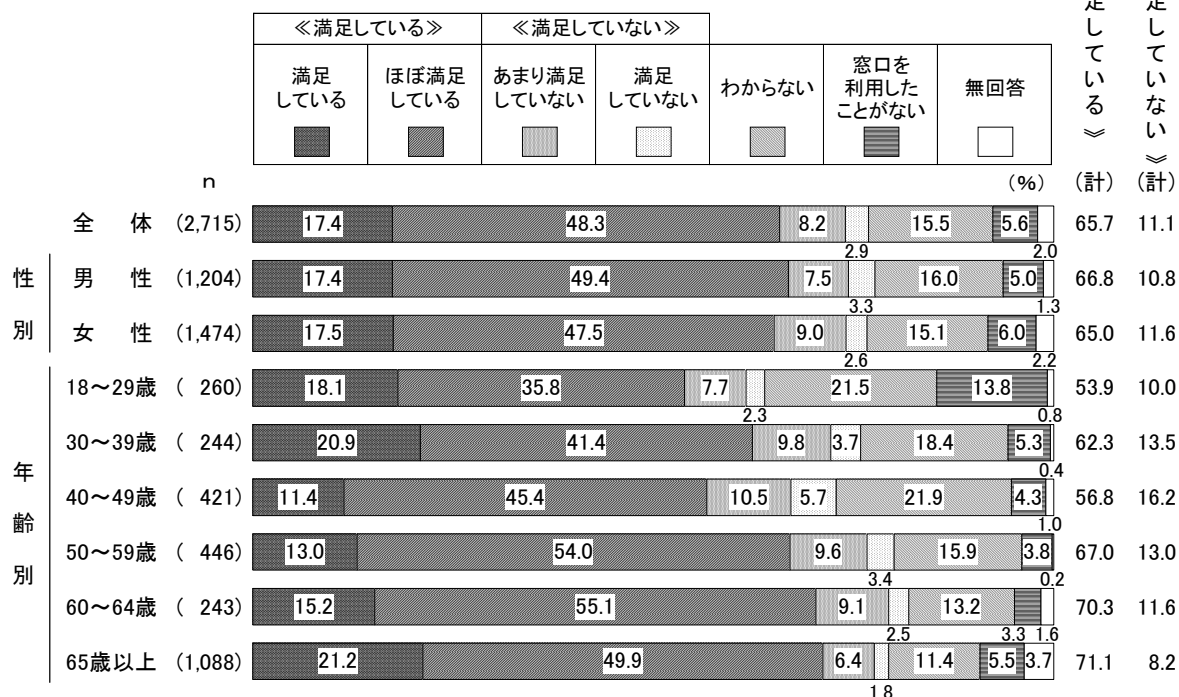
図3-1-1 窓口サービスの満足度－全体、経年比較



市の窓口サービス（職員の対応や提供内容、処理時間など）に満足しているか聞いたところ、「満足している」（17.4%）と「ほぼ満足している」（48.3%）を合わせた《満足している》（65.7%）は6割台半ばとなっている。一方、「あまり満足していない」（8.2%）と「満足していない」（2.9%）を合わせた《満足していない》（11.1%）は1割強となっている。

前回までの調査と比較すると、《満足していない》は令和元年（2019年）（13.7%）より2.6ポイント減少している。（図3-1-1）

図 3-1-2 窓口サービスの満足度－性別、年齢別

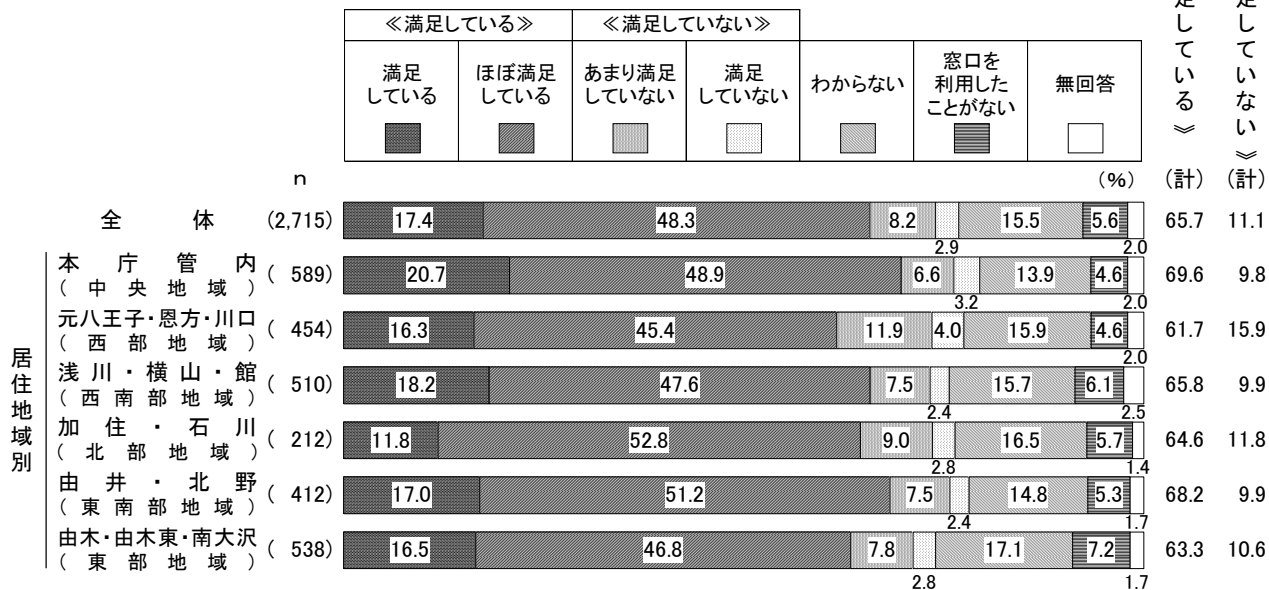


性別にみると、大きな傾向の違いはみられない。

年齢別にみると、《満足している》は60～64歳（70.3%）で約7割、65歳以上（71.1%）で7割強と多くなっている。一方、《満足していない》は40～49歳（16.2%）で2割近くとなっている。

(図 3-1-2)

図 3-1-3 窓口サービスの満足度－居住地域別



居住地域別にみると、《満足している》は本庁管内（中央地域）（69.6%）で7割弱と多くなっている。一方、《満足していない》は元八王子・恩方・川口（西部地域）（15.9%）で1割台半ばとなっている。(図 3-1-3)

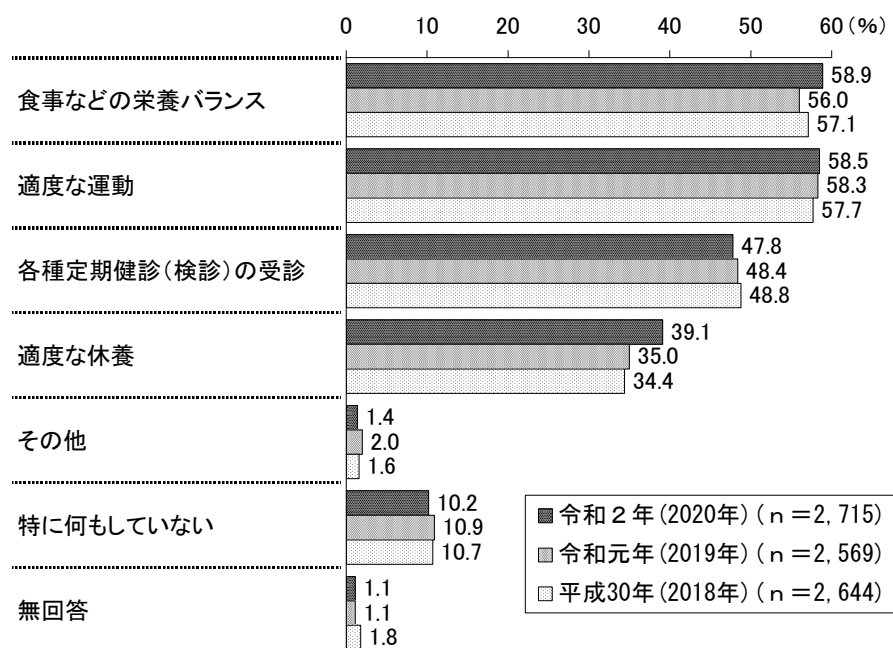
(2) 健康のために心がけていること

◇「食事などの栄養バランス」と「適度な運動」がともに6割近く

問16 あなたが健康の維持・増進のために、自ら心がけていることはどれですか。

(○はいくつでも)

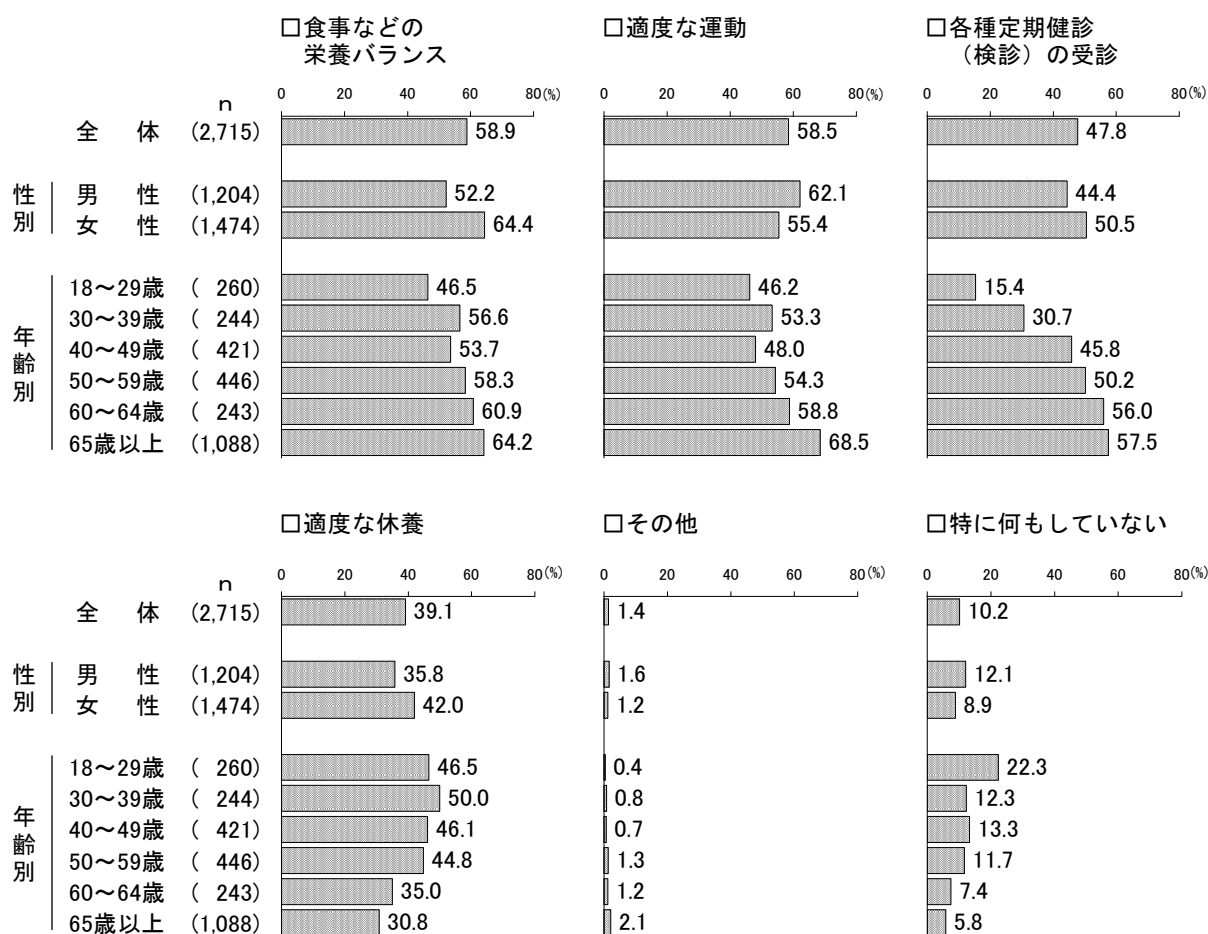
図3-2-1 健康のために心がけていることー全体、経年比較



健康の維持・増進のために、自ら心がけていることを聞いたところ、「食事などの栄養バランス」(58.9%)と「適度な運動」(58.5%)がともに6割近くで多くなっている。次いで「各種定期健診(検診)の受診」(47.8%)、「適度な休養」(39.1%)の順となっている。一方、「特に何もしていない」(10.2%)は約1割となっている。

前回までの調査と比較すると、「適度な休養」は令和元年(2019年)(35.0%)より4.1ポイント、「食事などの栄養バランス」は令和元年(2019年)(56.0%)より2.9ポイント、それぞれ増加している。(図3-2-1)

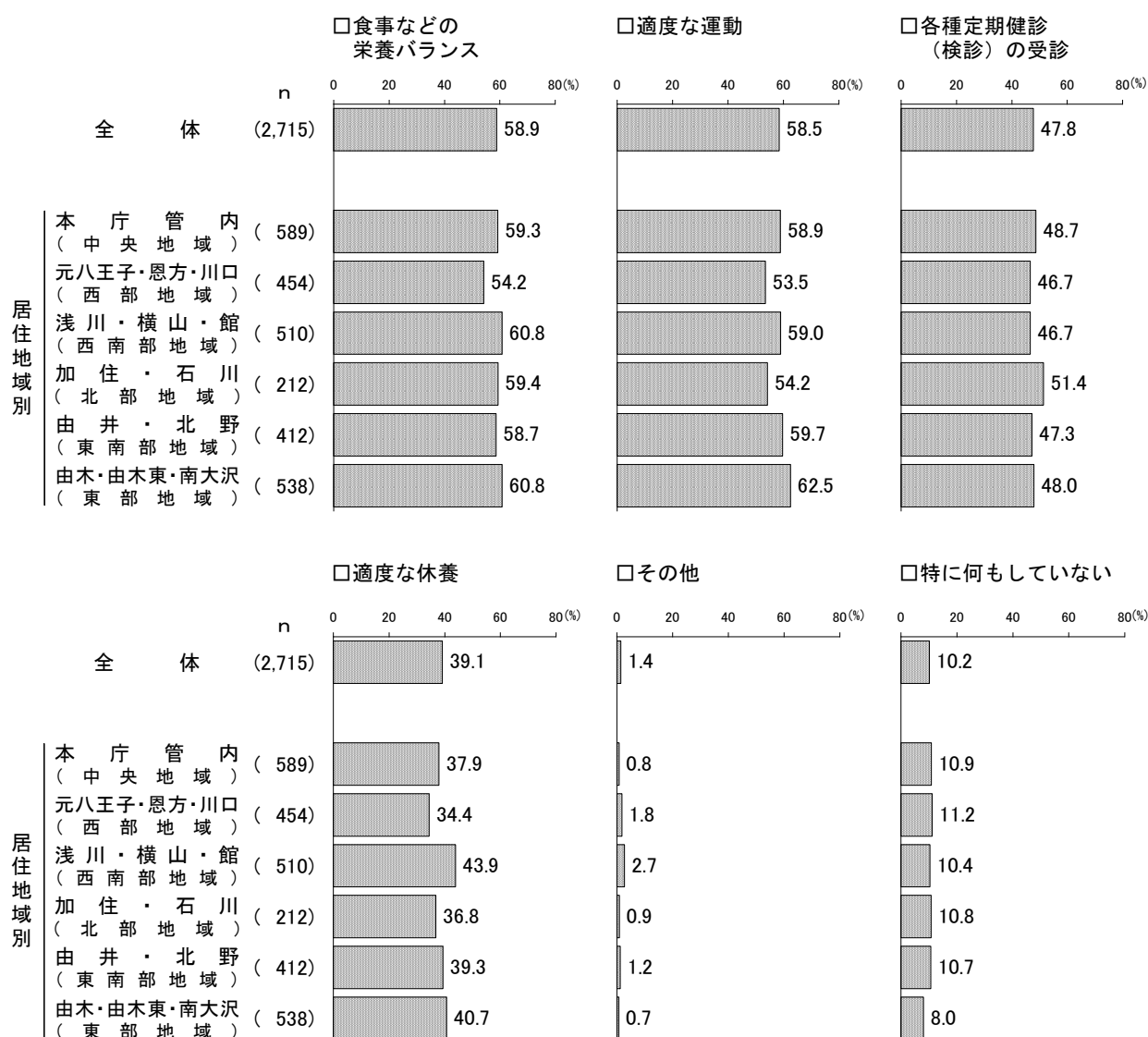
図 3-2-2 健康のために心がけていることー性別、年齢別



性別にみると、「食事などの栄養バランス」は女性（64.4％）が男性（52.2％）より12.2ポイント、「適度な休養」は女性（42.0％）が男性（35.8％）より6.2ポイント、「各種定期健診（検診）の受診」は女性（50.5％）が男性（44.4％）より6.1ポイント、それぞれ高くなっている。一方、「適度な運動」は男性（62.1％）が女性（55.4％）より6.7ポイント高くなっている。

年齢別にみると、「食事などの栄養バランス」は65歳以上（64.2％）で6割台半ばと多くなっている。「適度な運動」は65歳以上（68.5％）で7割近くと多くなっている。「各種定期健診（検診）の受診」は年代が高くなるほど割合が高く、60～64歳（56.0％）と65歳以上（57.5％）で6割近くと多くなっている。（図3-2-2）

図3-2-3 健康のために心がけていることー居住地域別



居住地域別にみると、「適度な運動」は由木・由木東・南大沢（東部地域）（62.5%）で6割強と多くなっている。「各種定期健診（検診）の受診」は加住・石川（北部地域）（51.4%）で5割強と多くなっている。「適度な休養」は浅川・横山・館（西南部地域）（43.9%）で4割強と多くなっている。（図3-2-3）

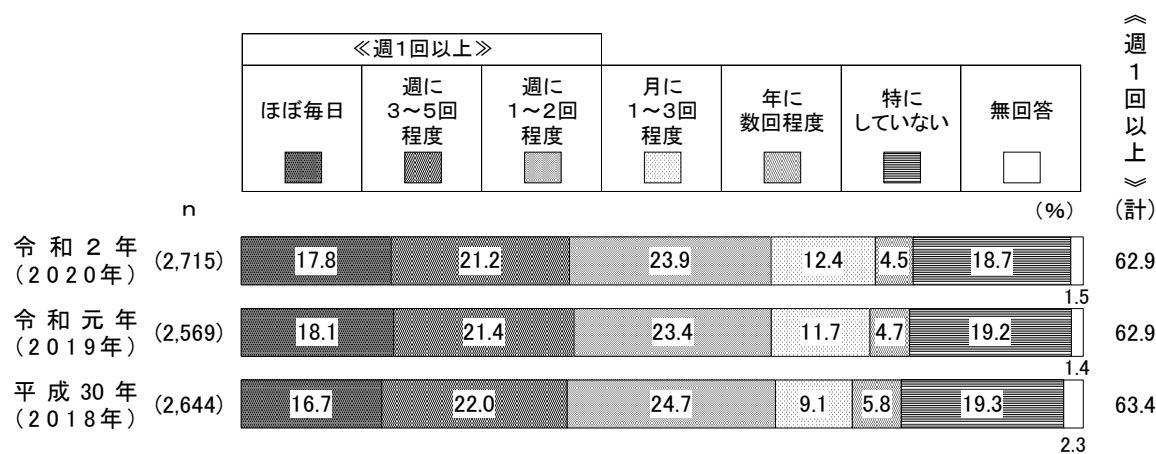
(3) この1年間の運動頻度

◇《週1回以上》が6割強

問17 あなたは、この1年間に、どのくらいの頻度で運動をしましたか。複数の運動を行っている場合は、その合計回数をお答えください。(○は1つだけ)

※運動には、野外活動（登山やハイキングなど）や健康の維持・増進のために通勤時の自転車・徒歩、散歩（散策、ペットの散歩を含む）などで1日合計30分以上行うものも含めます。

図3-3-1 この1年間の運動頻度－全体、経年比較

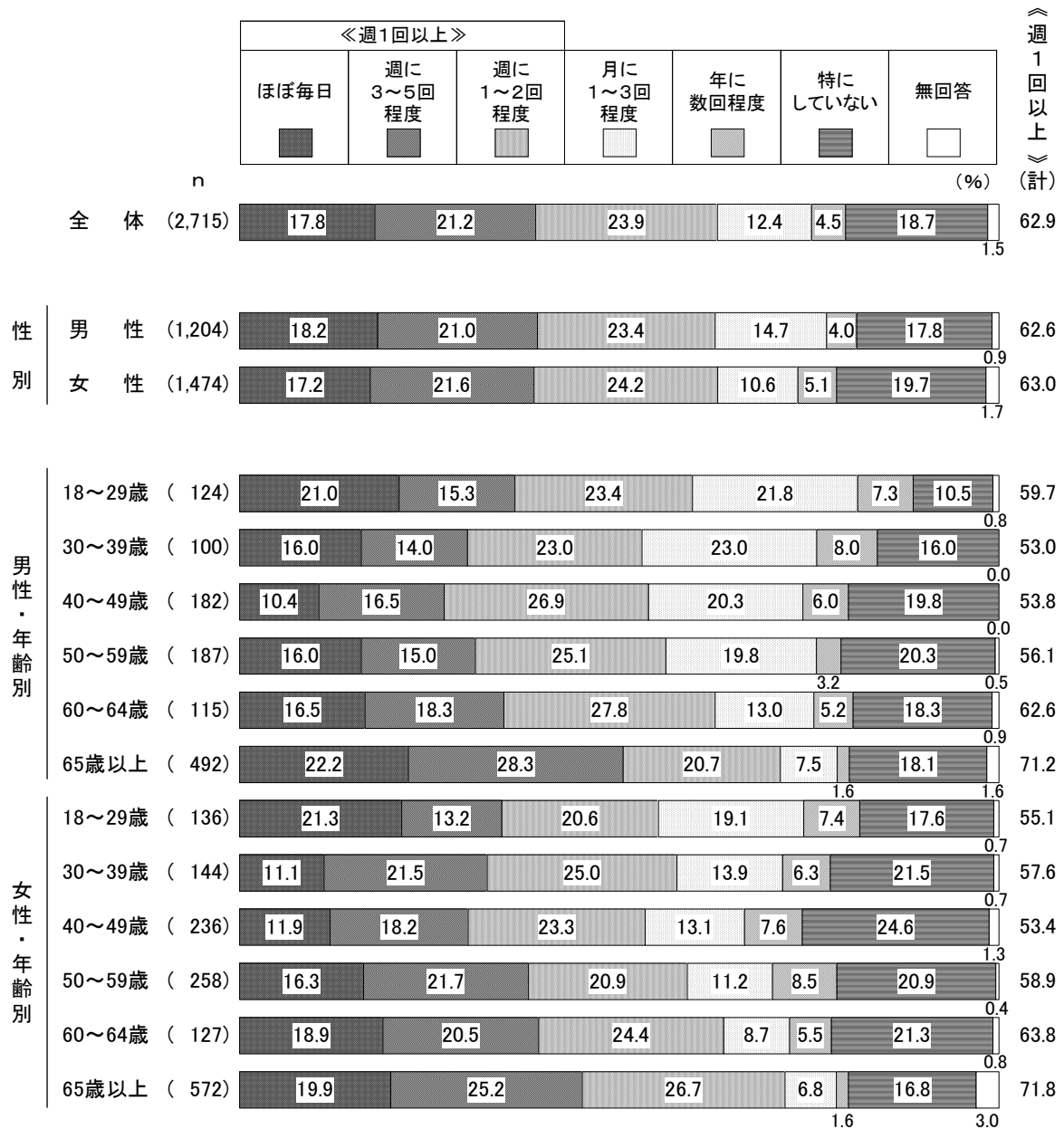


この1年間にどれくらいの頻度で運動をしたか聞いたところ、「ほぼ毎日」(17.8%)、「週に3～5回程度」(21.2%)、「週に1～2回程度」(23.9%)の3つを合わせた《週1回以上》(62.9%)は6割強となっている。また、「月に1～3回程度」(12.4%)は1割強、「年に数回程度」(4.5%)はわずかとなっている。一方、「特にしていない」(18.7%)は2割近くとなっている。

前回までの調査と比較すると、令和元年(2019年)と大きな傾向の違いはみられない。

(図3-3-1)

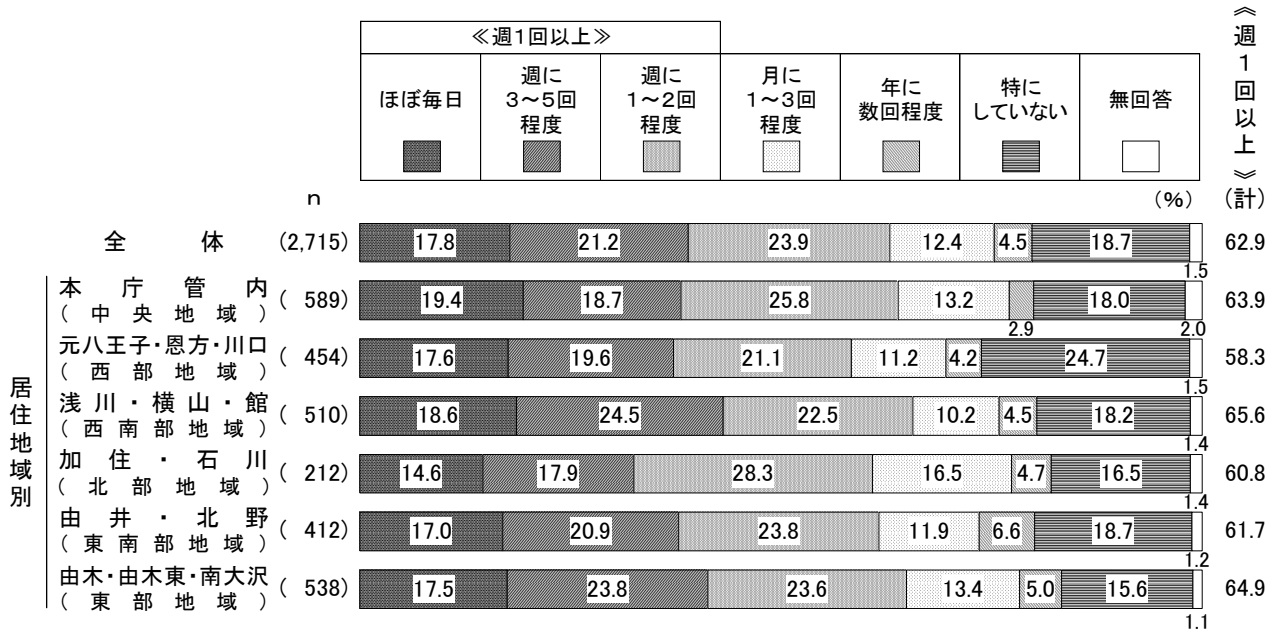
図 3-3-2 この1年間の運動頻度—性別、性・年齢別



性別にみると、「月に1～3回程度」は男性（14.7%）が女性（10.6%）より4.1ポイント高くなっている。

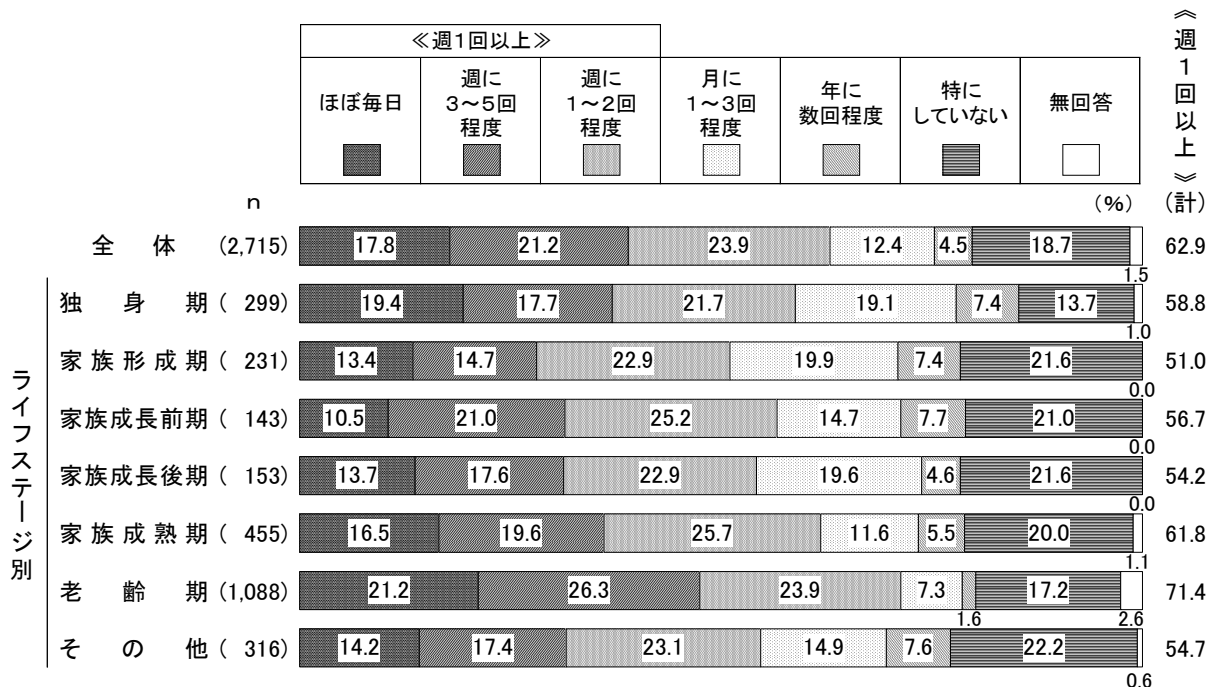
性・年齢別にみると、《週1回以上》は女性65歳以上（71.8%）と男性65歳以上（71.2%）で7割強と多くなっている。一方、「特にしていない」は女性40～49歳（24.6%）で2割台半ばと多くなっている。（図3-3-2）

図 3-3-3 この1年間の運動頻度－居住地地域別



居住地地域別にみると、《週1回以上》は浅川・横山・館（西南部地域）（65.6%）と由木・由木東・南大沢（東部地域）（64.9%）で6割台半ばと多くなっている。一方、「特にしていない」は元八王子・恩方・川口（西部地域）（24.7%）で2割台半ばと多くなっている。（図3-3-3）

図 3-3-4 この1年間の運動頻度－ライフステージ別



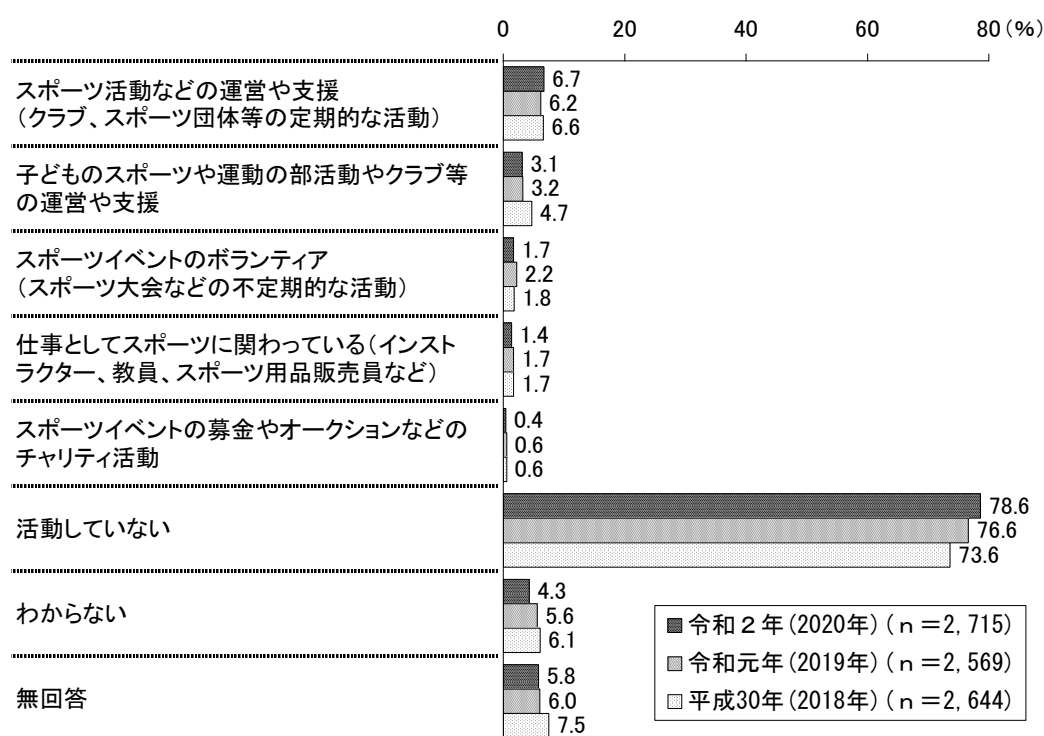
ライフステージ別にみると、《週1回以上》は老齢期（71.4%）で7割強、家族成熟期（61.8%）で6割強と多くなっている。（図3-3-4）

(4) この1年間に関わったスポーツを支える活動

◇「活動していない」が8割近く

問18 この中に、あなたがこの1年間に関わったスポーツを支える活動がありますか。
あてはまるものに○をつけてください。(○はいくつでも)

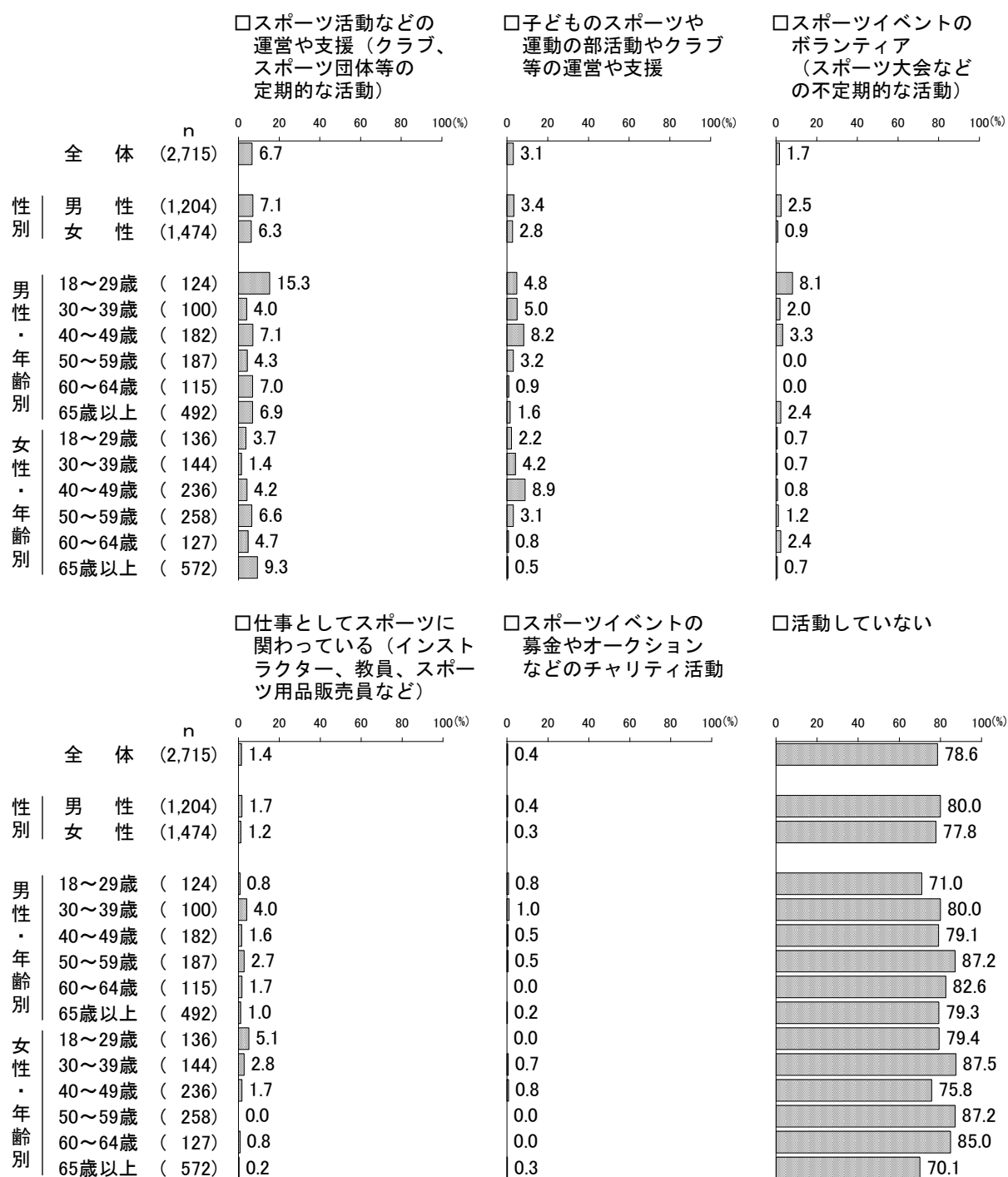
図3-4-1 この1年間に関わったスポーツを支える活動－全体、経年比較



この1年間に関わったスポーツを支える活動を聞いたところ、「活動していない」(78.6%)が8割近くとなっている。活動した中では、「スポーツ活動などの運営や支援(クラブ、スポーツ団体等の定期的な活動)」(6.7%)、「子どものスポーツや運動の部活動やクラブ等の運営や支援」(3.1%)などの順となっている。

前回までの調査と比較すると、「活動していない」は令和元年(2019年)(76.6%)より2.0ポイント増加している。(図3-4-1)

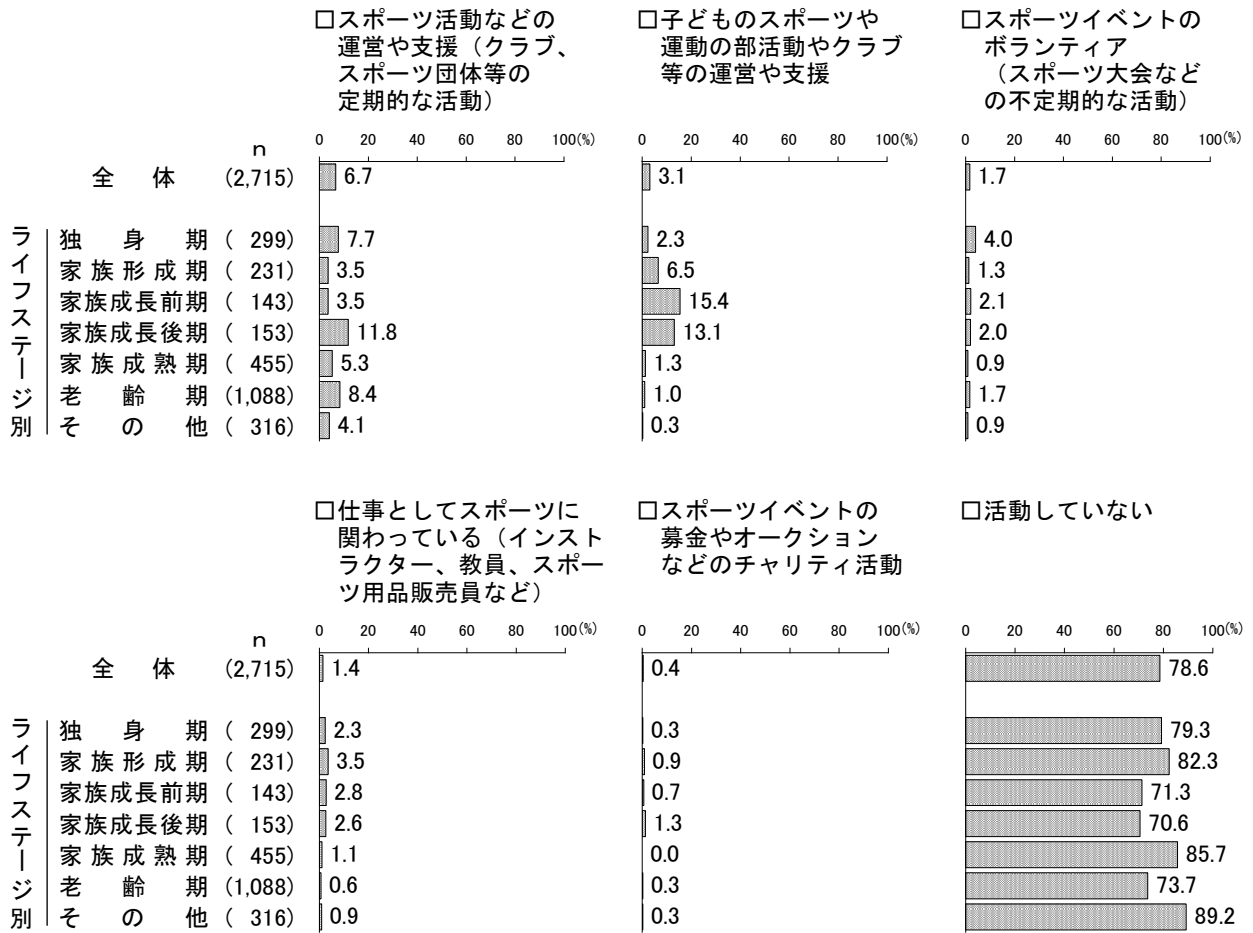
図3-4-2 この1年間に関わったスポーツを支える活動－性別、性・年齢別
 （「わからない」を除く）



性別にみると、「活動していない」は男性（80.0％）が女性（77.8％）より2.2ポイント高くなっている。

性・年齢別にみると、「スポーツ活動などの運営や支援（クラブ、スポーツ団体等の定期的な活動）」は男性18～29歳（15.3％）で1割台半ばとなっている。一方、「活動していない」は女性30～39歳（87.5％）、女性50～59歳（87.2％）、男性50～59歳（87.2％）で9割近くと多くなっている。
 （図3-4-2）

図3-4-3 この1年間に関わったスポーツを支える活動－ライフステージ別
 (「わからない」を除く)



ライフステージ別にみると、「スポーツ活動などの運営や支援（クラブ、スポーツ団体等の定期的な活動）」は家族成長後期（11.8%）で1割強となっている。「子どものスポーツや運動の部活動やクラブ等の運営や支援」は家族成長前期（15.4%）で1割台半ば、家族成長後期（13.1%）で1割強となっている。一方、「活動していない」はその他（89.2%）で9割弱と多くなっている。

(図3-4-3)

(5) 障害者スポーツへの関心

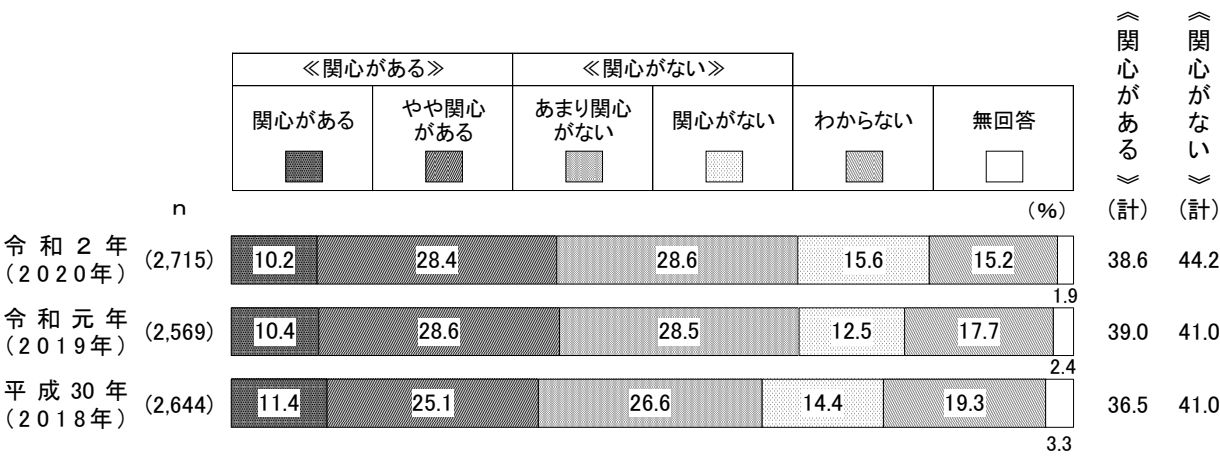
◇《関心がある》が4割近く

問19 あなたは、障害者スポーツに関心がありますか。(○は1つだけ)

※「障害者スポーツ」とは・・・

障害があってもスポーツ活動ができるよう、障害に応じ競技規則や実施方法を変更したり、用具等を用いて障害を補ったりする工夫・適合・開発がされたスポーツのことです。

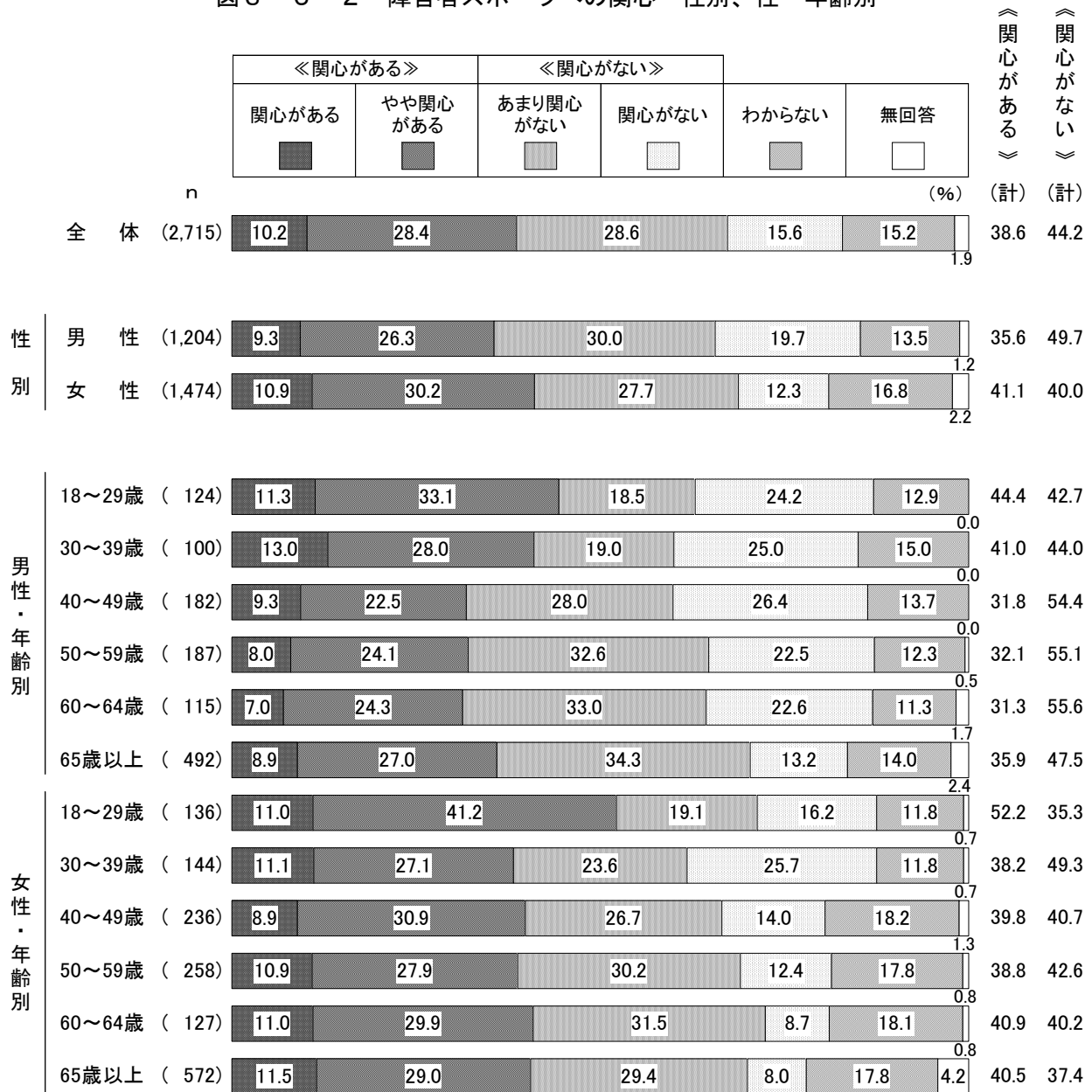
図3-5-1 障害者スポーツへの関心ー全体、経年比較



障害者スポーツへの関心の有無を聞いたところ、「関心がある」(10.2%)と「やや関心がある」(28.4%)を合わせた《関心がある》(38.6%)は4割近くとなっている。一方、「あまり関心がない」(28.6%)と「関心がない」(15.6%)を合わせた《関心がない》(44.2%)は4割台半ばとなっている。

前回までの調査と比較すると、《関心がない》は令和元年(2019年)(41.0%)より3.2ポイント増加している。(図3-5-1)

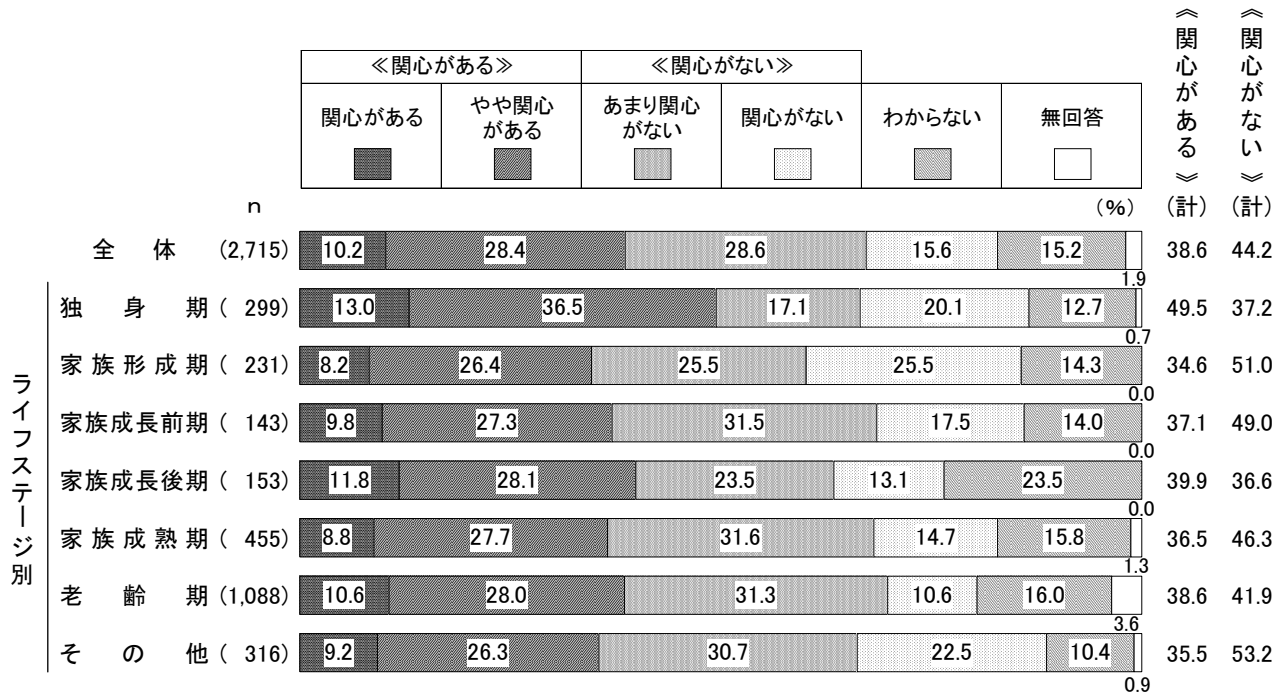
図 3-5-2 障害者スポーツへの関心—性別、性・年齢別



性別にみると、《関心がない》は男性（49.7%）が女性（40.0%）より9.7ポイント高くなっている。

性・年齢別にみると、《関心がある》は女性18～29歳（52.2%）で5割強と多くなっている。一方、《関心がない》は男性40～49歳（54.4%）、男性50～59歳（55.1%）、男性60～64歳（55.6%）で5割台半ばと多くなっている。（図3-5-2）

図 3-5-3 障害者スポーツへの関心－ライフステージ別



ライフステージ別にみると、《関心がある》は独身期（49.5％）で5割弱と多くなっている。一方、《関心がない》はその他（53.2％）と家族形成期（51.0％）で5割強と多くなっている。

（図 3-5-3）

（６）かかりつけの医療機関の有無

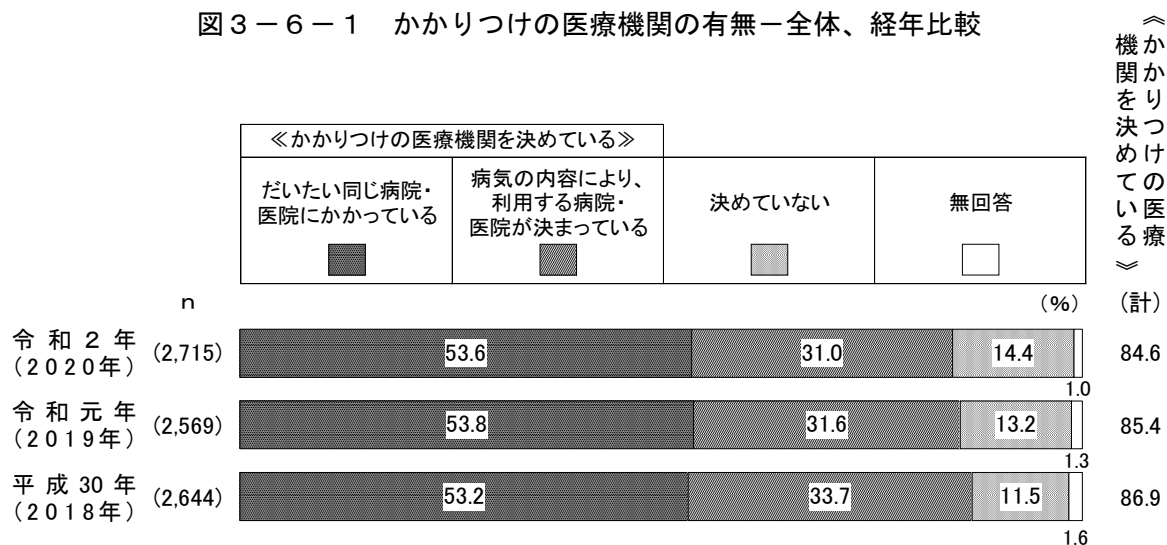
◇《かかりつけの医療機関を決めている》が８割台半ば

問20 あなたは、かかりつけの医療機関を決めていますか。（○は１つだけ）

※「かかりつけの医療機関」とは・・・

日常的な診療や健康管理等を行ってくれる身近な医療機関のことで、ふだんの健康管理、病気の初期治療のほか、大病院での検査や治療が必要かどうかの判断、紹介などをしてくれます。

図３－６－１ かかりつけの医療機関の有無－全体、経年比較

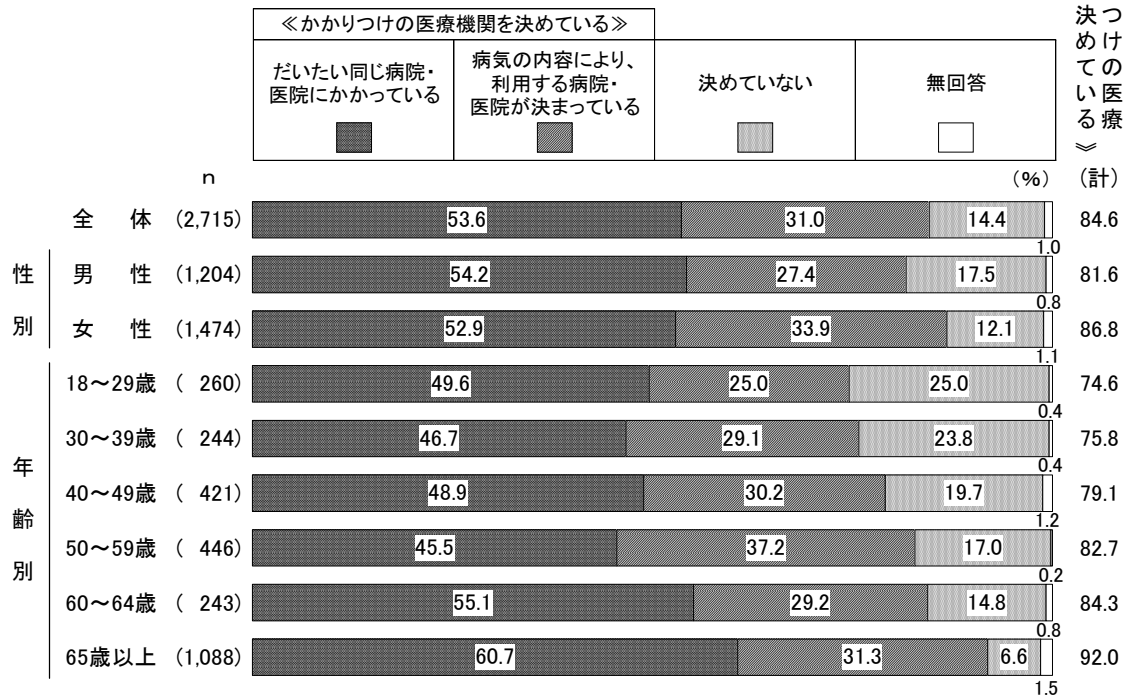


かかりつけの医療機関を決めているか聞いたところ、「だいたい同じ病院・医院にかかっている」（53.6％）と「病気の内容により、利用する病院・医院が決まっている」（31.0％）を合わせた《かかりつけの医療機関を決めている》（84.6％）は８割台半ばとなっている。一方、「決めていない」（14.4％）は１割台半ばとなっている。

前回までの調査と比較すると、令和元年（2019年）と大きな傾向の違いはみられない。

（図３－６－１）

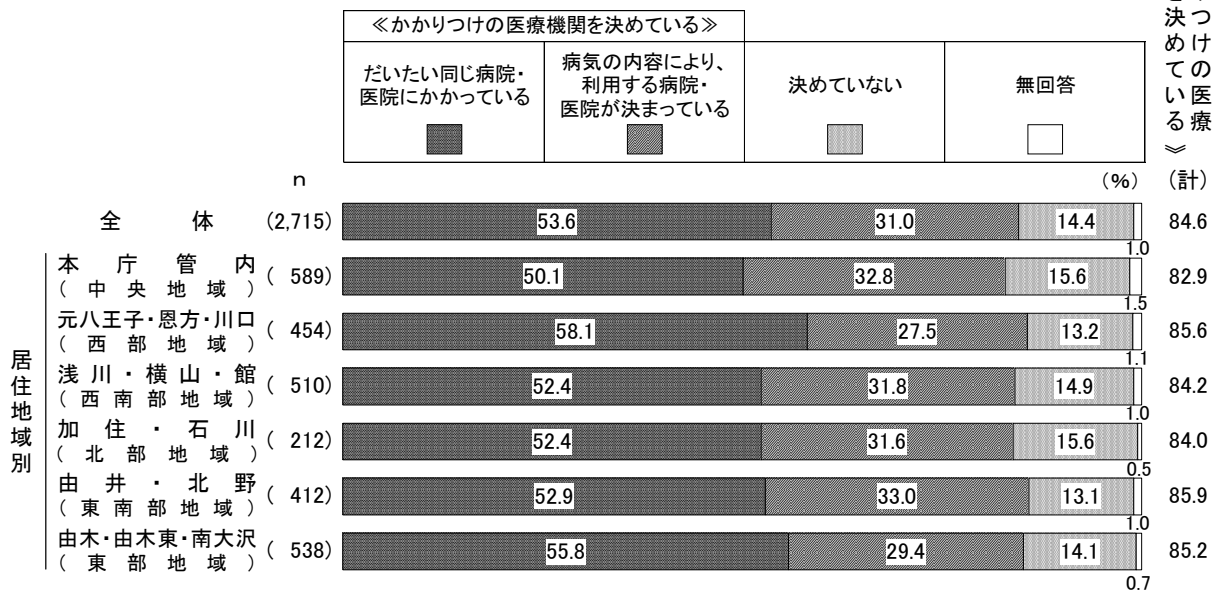
図 3-6-2 かかりつけの医療機関の有無－性別、年齢別



性別にみると、《かかりつけの医療機関を決めている》は女性（86.8%）が男性（81.6%）より5.2ポイント高くなっている。

年齢別にみると、《かかりつけの医療機関を決めている》は年代が高くなるほど割合が高く、65歳以上（92.0%）で9割強と多くなっている。一方、「決めていない」は18～29歳（25.0%）で2割台半ばと多くなっている。（図 3-6-2）

図 3-6-3 かかりつけの医療機関の有無－居住地域別



居住地域別にみると、「だいたい同じ病院・医院にかかっている」は元八王子・恩方・川口（西部地域）（58.1%）で6割近くと多くなっている。（図 3-6-3）

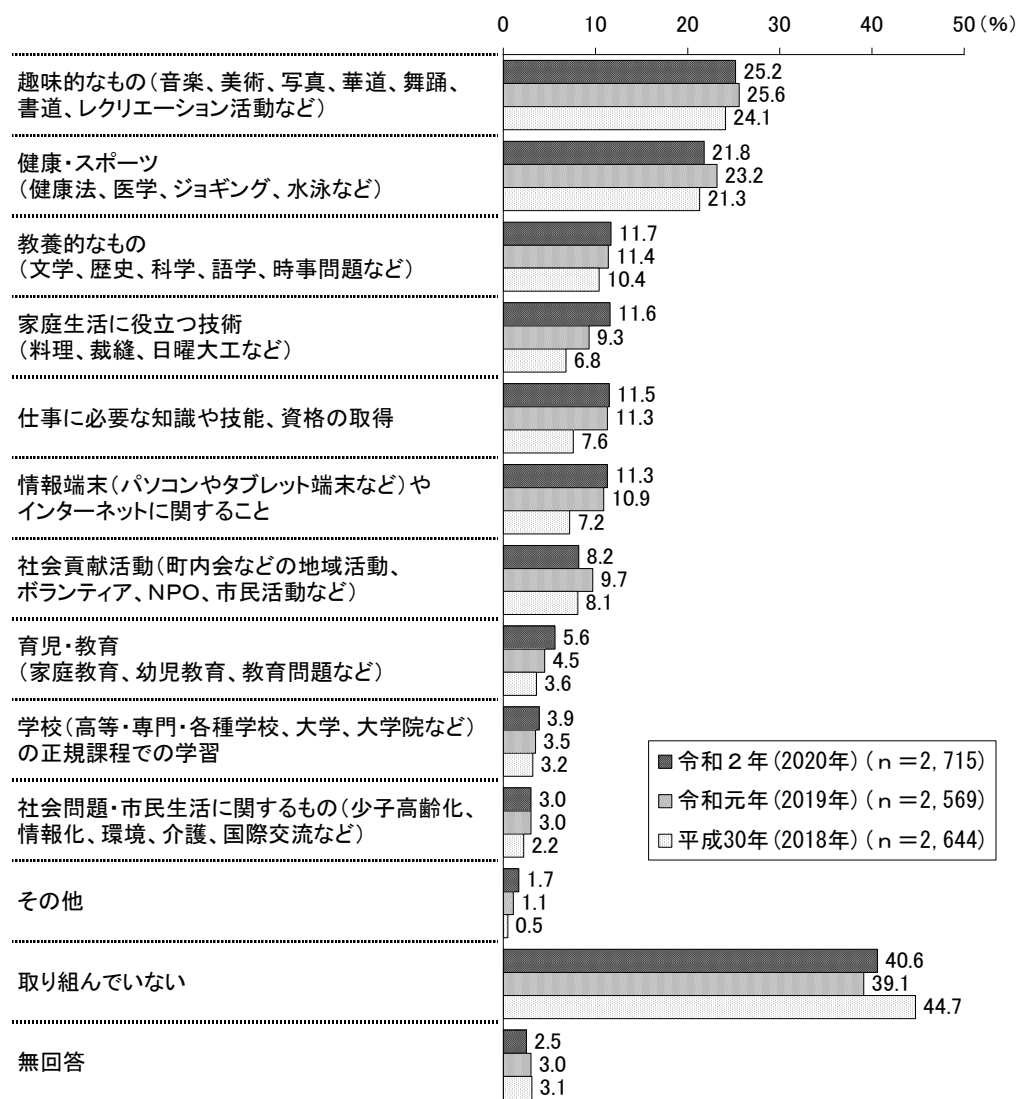
(7) この1年間に取り組んだ生涯学習活動

◇「趣味的なもの(音楽、美術、写真、華道、舞踊、書道、レクリエーション活動など)」が2割台半ば

問21 あなたは、この1年間に、次のうちどのような生涯学習活動に取り組みましたか。

(○はいくつでも)

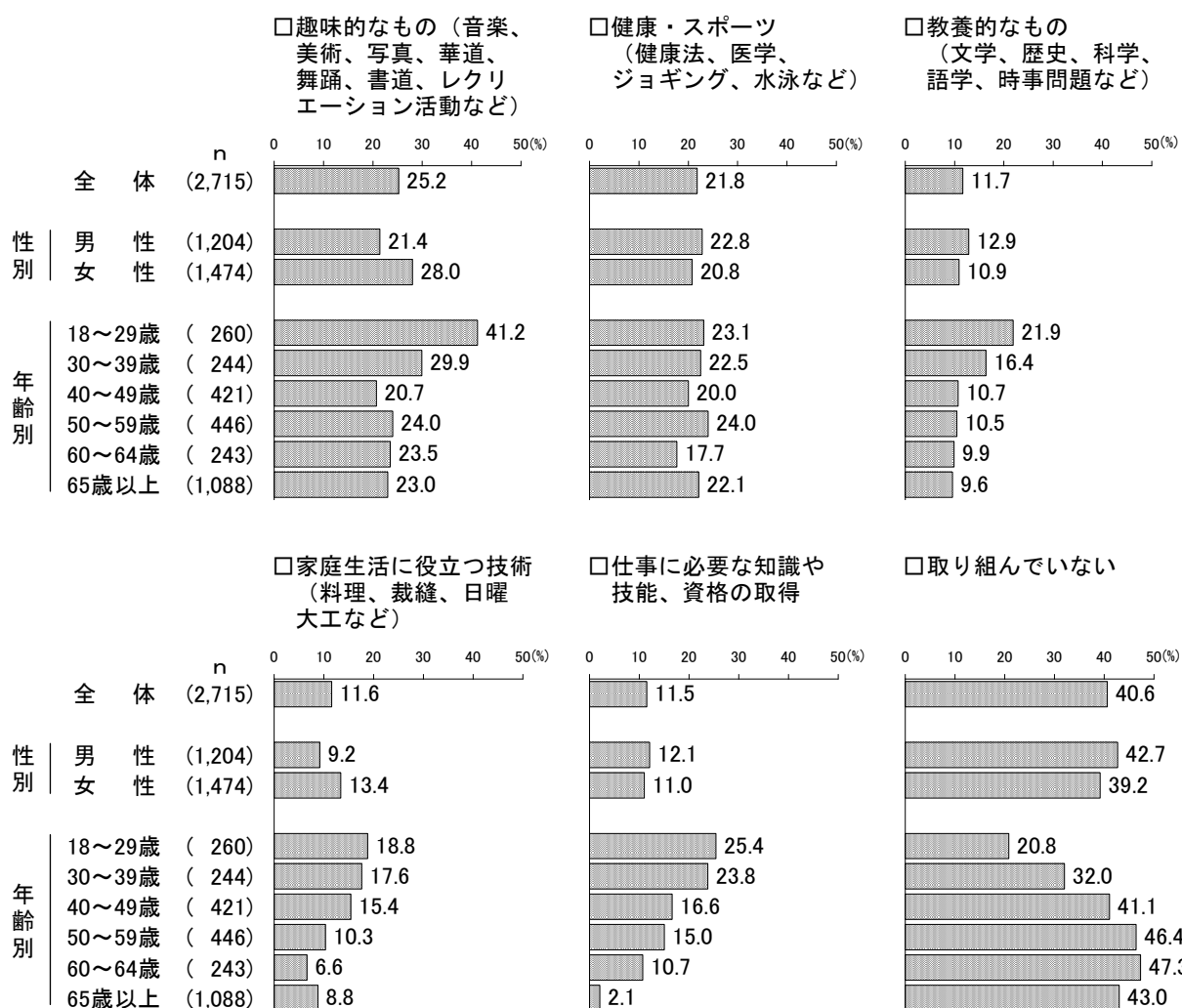
図3-7-1 この1年間に取り組んだ生涯学習活動－全体、経年比較



この1年間に取り組んだ生涯学習活動を聞いたところ、「趣味的なもの(音楽、美術、写真、華道、舞踊、書道、レクリエーション活動など)」(25.2%)が2割台半ばで最も多くなっている。次いで「健康・スポーツ(健康法、医学、ジョギング、水泳など)」(21.8%)、「教養的なもの(文学、歴史、科学、語学、時事問題など)」(11.7%)などの順となっている。一方、「取り組んでいない」(40.6%)は約4割となっている。

前回までの調査と比較すると、「家庭生活に役立つ技術(料理、裁縫、日曜大工など)」は令和元年(2019年)(9.3%)より2.3ポイント増加している。(図3-7-1)

図3-7-2 この1年間に取り組んだ生涯学習活動－性別、年齢別（上位5位＋「取り組んでいない」）

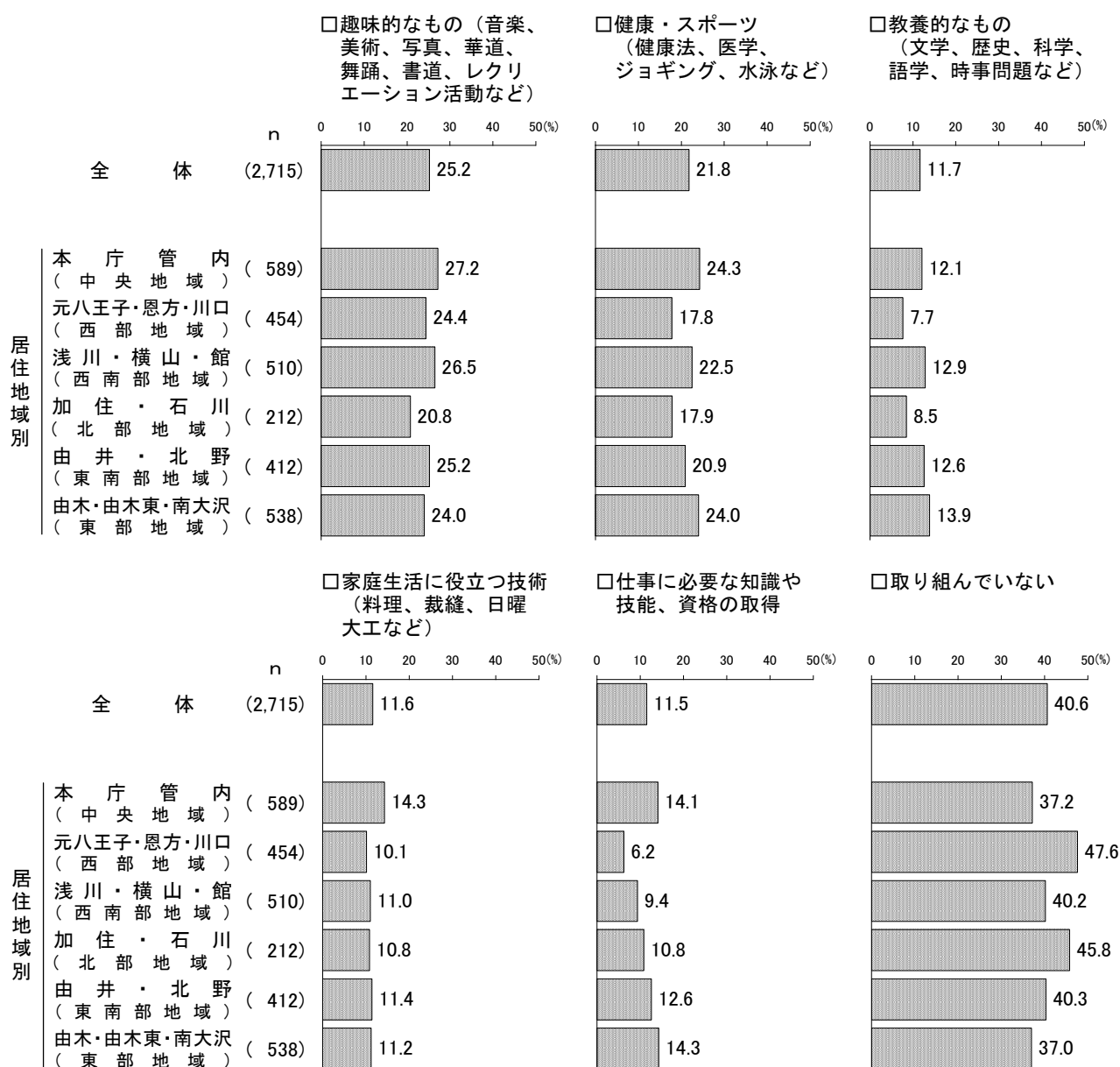


性別にみると、「趣味的なもの（音楽、美術、写真、華道、舞踊、書道、レクリエーション活動など）」は女性（28.0％）が男性（21.4％）より6.6ポイント、「家庭生活に役立つ技術（料理、裁縫、日曜大工など）」は女性（13.4％）が男性（9.2％）より4.2ポイント、それぞれ高くなっている。一方、「取り組んでいない」は男性（42.7％）が女性（39.2％）より3.5ポイント高くなっている。

年齢別にみると、「趣味的なもの（音楽、美術、写真、華道、舞踊、書道、レクリエーション活動など）」は18～29歳（41.2％）で4割強と多くなっている。「仕事に必要な知識や技能、資格の取得」は年代が低くなるほど割合が高く、18～29歳（25.4％）で2割台半ばと多くなっている。一方、「取り組んでいない」は50～59歳（46.4％）と60～64歳（47.3％）で5割近くと多くなっている。

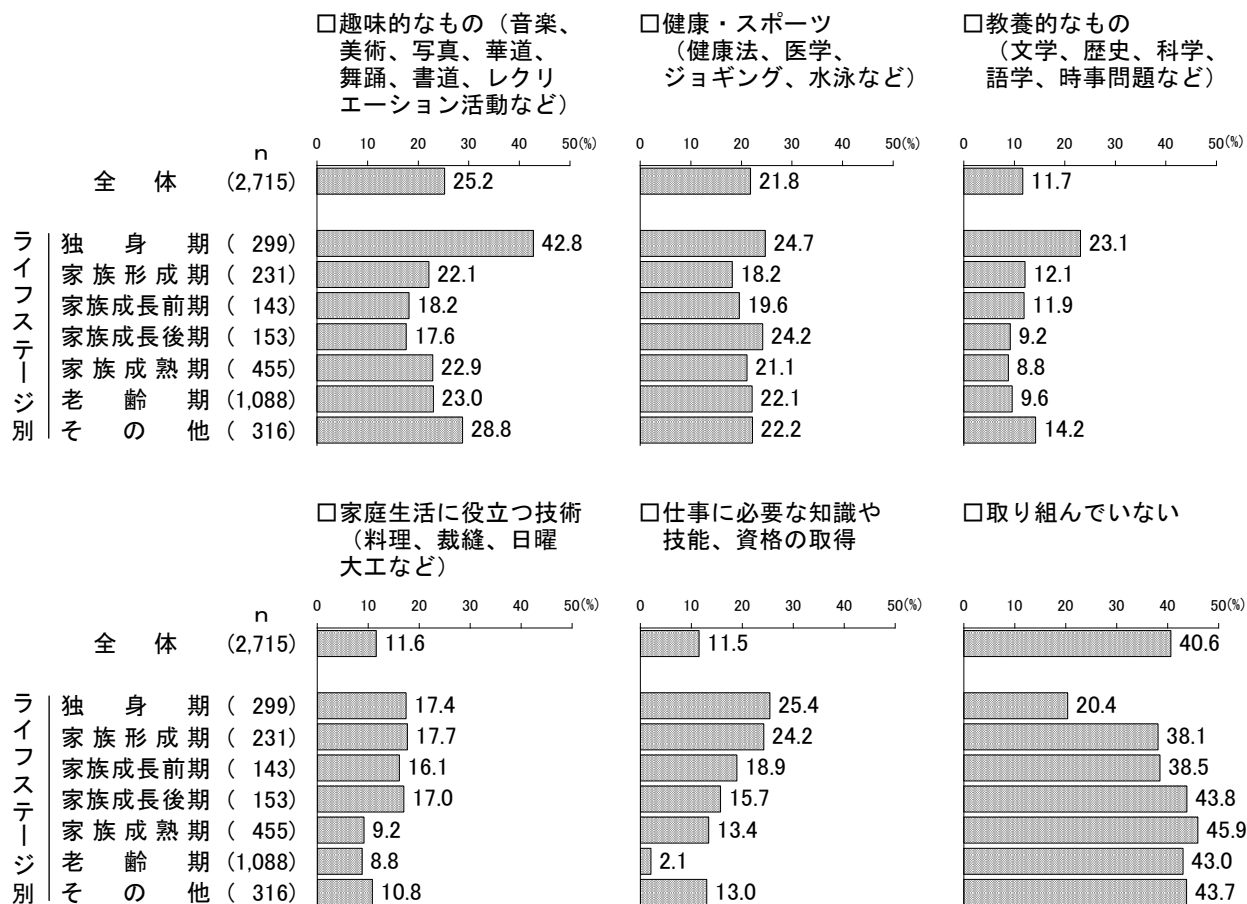
（図3-7-2）

図3-7-3 この1年間に取り組んだ生涯学習活動－居住地域別（上位5位＋「取り組んでいない」）



居住地域別にみると、「趣味的なもの（音楽、美術、写真、華道、舞踊、書道、レクリエーション活動など）」は本庁管内（中央地域）（27.2%）と浅川・横山・館（西南部地域）（26.5%）で3割近くと多くなっている。「健康・スポーツ（健康法、医学、ジョギング、水泳など）」は本庁管内（中央地域）（24.3%）と由木・由木東・南大沢（東部地域）（24.0%）で2割台半ばと多くなっている。一方、「取り組んでいない」は元八王子・恩方・川口（西部地域）（47.6%）で5割近くと多くなっている。（図3-7-3）

図3-7-4 この1年間に取り組んだ生涯学習活動－ライフステージ別
(上位5位+「取り組んでいない」)



ライフステージ別にみると、「趣味的なもの（音楽、美術、写真、華道、舞踊、書道、レクリエーション活動など）」は独身期（42.8%）で4割強と多くなっている。「仕事に必要な知識や技能、資格の取得」は独身期（25.4%）と家族形成期（24.2%）で2割台半ばと多くなっている。一方、「取り組んでいない」は家族成熟期（45.9%）で4割台半ばと多くなっている。（図3-7-4）

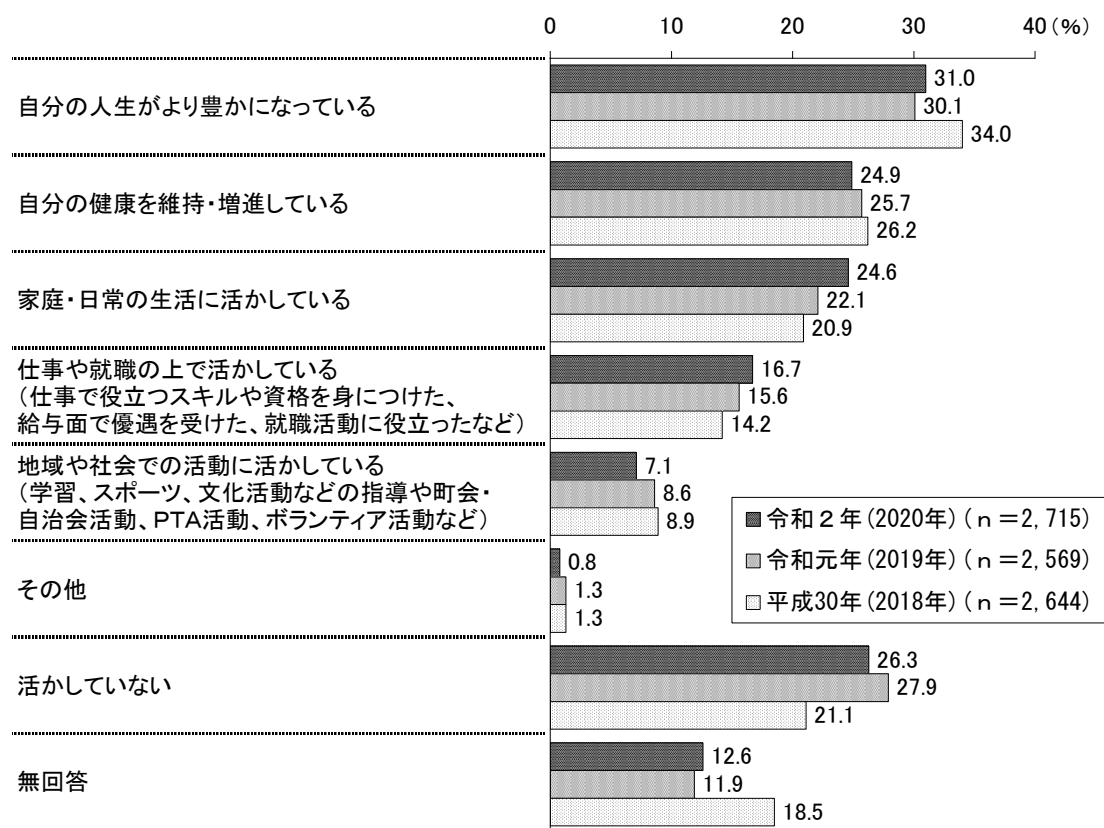
(8) 生涯学習で得た知識や技能、経験の活用方法

◇「自分の人生がより豊かになっている」が3割強

問22 あなたは、生涯学習で得た知識や技能、経験をどのように活かしていますか。

(○はいくつでも)

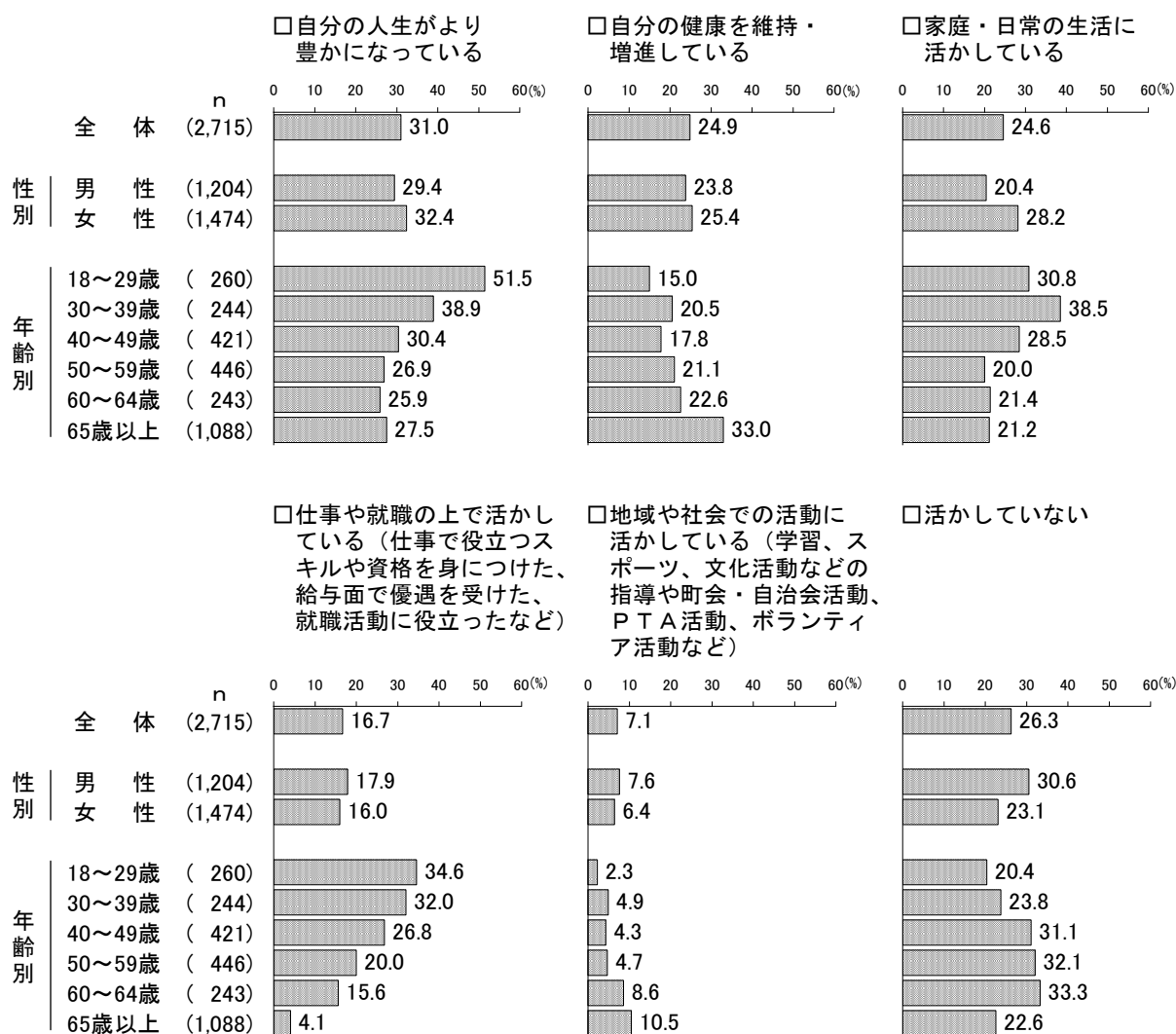
図3-8-1 生涯学習で得た知識や技能、経験の活用方法－全体、経年比較



生涯学習で得た知識や技能、経験をどのように活かしているか聞いたところ、「自分の人生がより豊かになっている」(31.0%)が3割強で最も多くなっている。次いで「自分の健康を維持・増進している」(24.9%)、「家庭・日常生活に活かしている」(24.6%)、「仕事や就職の上で活かしている(仕事で役立つスキルや資格を身につけた、給与面で優遇を受けた、就職活動に役立ったなど)」(16.7%)などの順となっている。一方、「活かしていない」(26.3%)は3割近くとなっている。

前回までの調査と比較すると、「家庭・日常生活に活かしている」は令和元年(2019年)(22.1%)より2.5ポイント増加している。(図3-8-1)

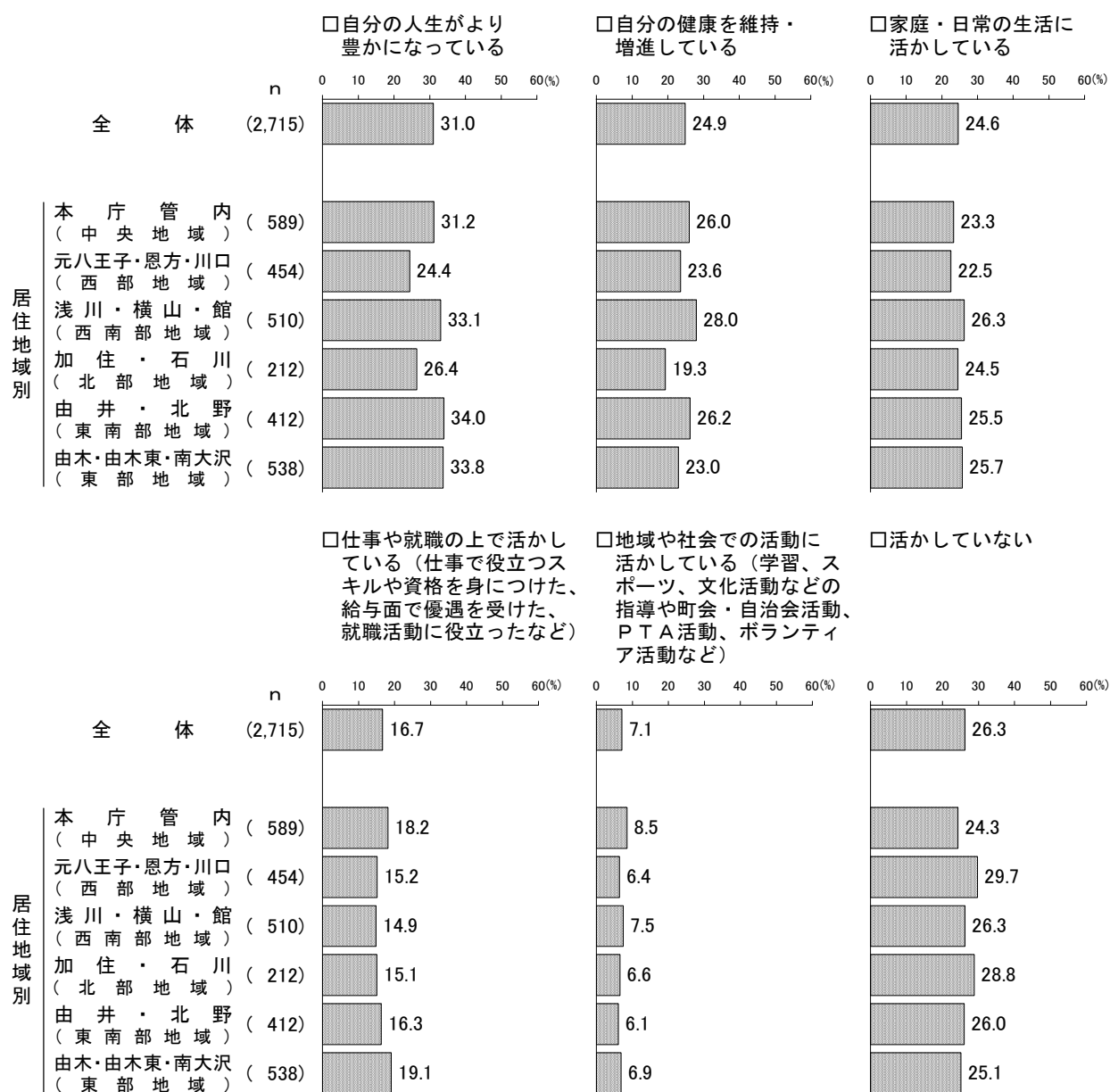
図3-8-2 生涯学習で得た知識や技能、経験の活用方法－性別、年齢別
(上位5位+「活かしていない」)



性別にみると、「活かしていない」は男性（30.6％）が女性（23.1％）より7.5ポイント高くなっている。一方、「家庭・日常の生活に活かしている」は女性（28.2％）が男性（20.4％）より7.8ポイント、「自分の人生がより豊かになっている」は女性（32.4％）が男性（29.4％）より3.0ポイント、それぞれ高くなっている。

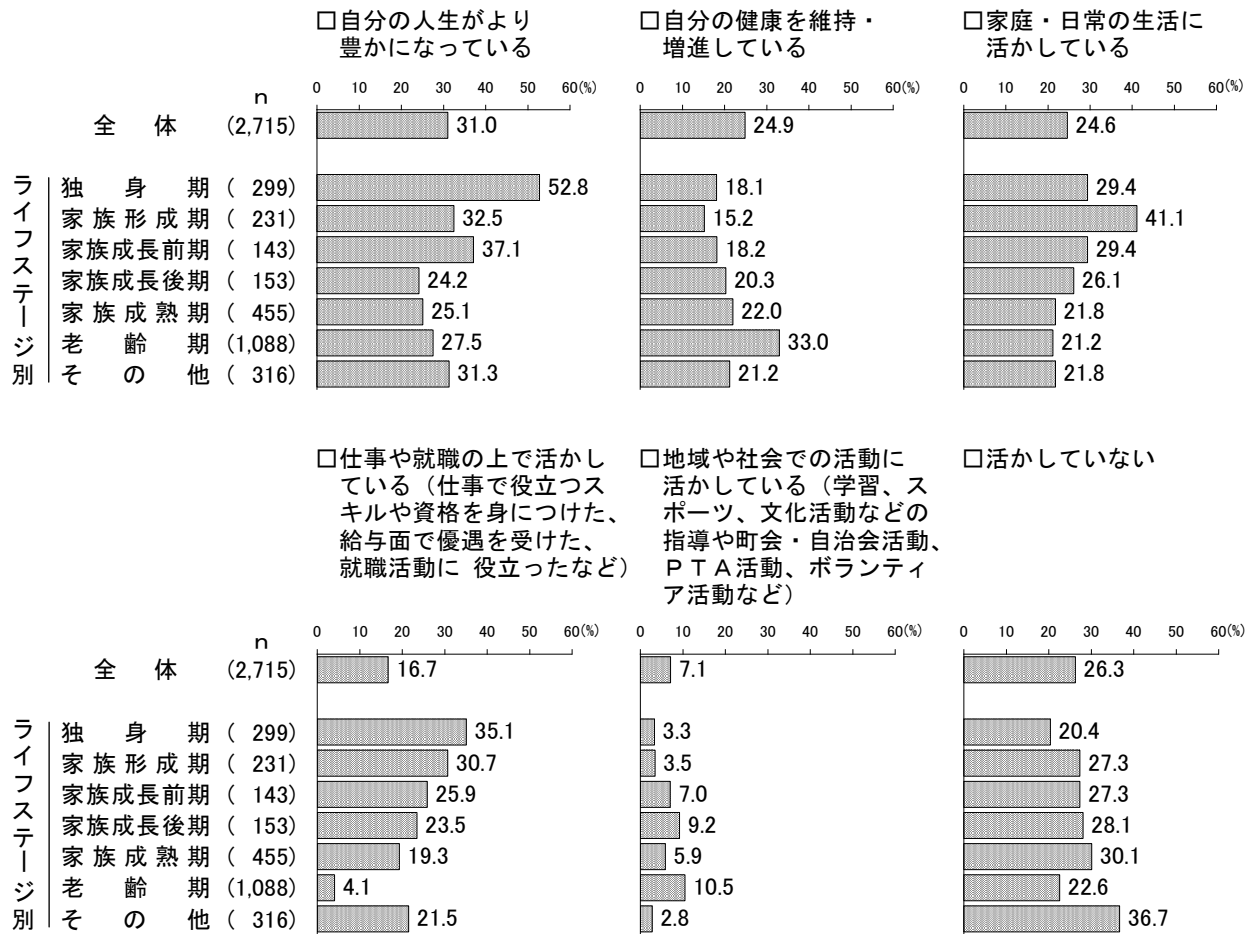
年齢別にみると、「自分の人生がより豊かになっている」は18～29歳（51.5％）で5割強と多くなっている。「家庭・日常の生活に活かしている」は30～39歳（38.5％）で4割近くと多くなっている。「仕事や就職の上で活かしている（仕事で役立つスキルや資格を身につけた、給与面で優遇を受けた、就職活動に役立ったなど）」は年代が低くなるほど割合が高く、18～29歳（34.6％）で3割台半ばと多くなっている。（図3-8-2）

図 3-8-3 生涯学習で得た知識や技能、経験の活用方法－居住地域別
(上位 5 位+「活かしていない」)



居住地域別にみると、「自分の人生がより豊かになっている」は由井・北野(東南部地域)(34.0%)で3割台半ばと多くなっている。一方、「活かしていない」は元八王子・恩方・川口(西部地域)(29.7%)で3割弱と多くなっている。(図 3-8-3)

図3-8-4 生涯学習で得た知識や技能、経験の活用方法－ライフステージ別
(上位5位+「活かしていない」)



ライフステージ別にみると、「自分の人生がより豊かになっている」は独身期（52.8%）で5割強と多くなっている。「家庭・日常の生活に活かしている」は家族形成期（41.1%）で4割強と多くなっている。一方、「活かしていない」はその他（36.7%）で4割近くと多くなっている。

(図3-8-4)

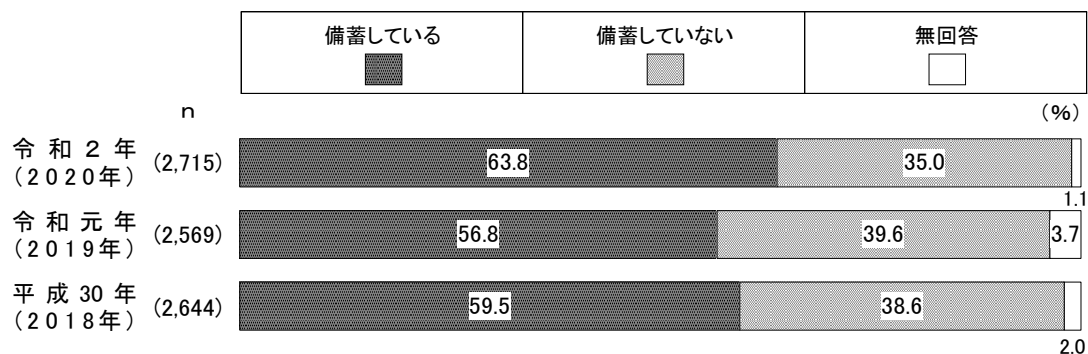
（９）食料の備蓄の有無

◇「備蓄している」が６割強

問23 あなたの家庭では、災害により電気、水道、ガス等といったライフラインが停止したことを想定して、食料、飲料水を備蓄していますか。

【１．食料について】（○は１つだけ）

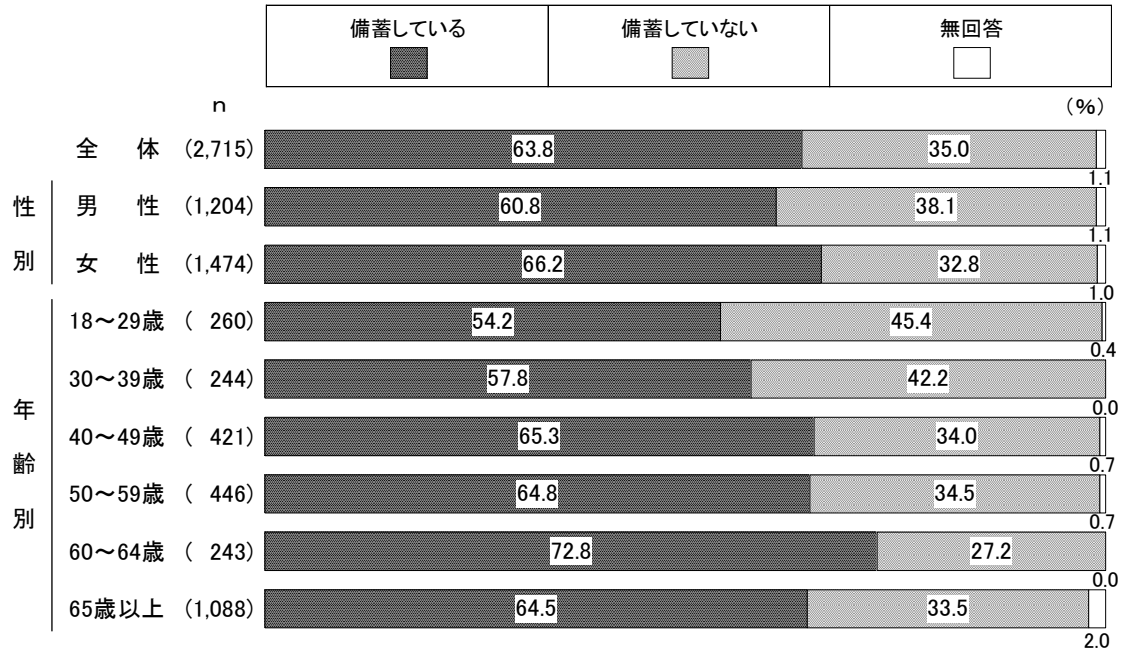
図３－９－１ 食料の備蓄の有無－全体、経年比較



災害により電気、水道、ガス等といったライフラインが停止したことを想定して食料を備蓄しているか聞いたところ、「備蓄している」（63.8％）が６割強となっている。一方、「備蓄していない」（35.0％）は３割台半ばとなっている。

前回までの調査と比較すると、「備蓄している」は令和元年（2019年）（56.8％）より7.0ポイント増加している。（図３－９－１）

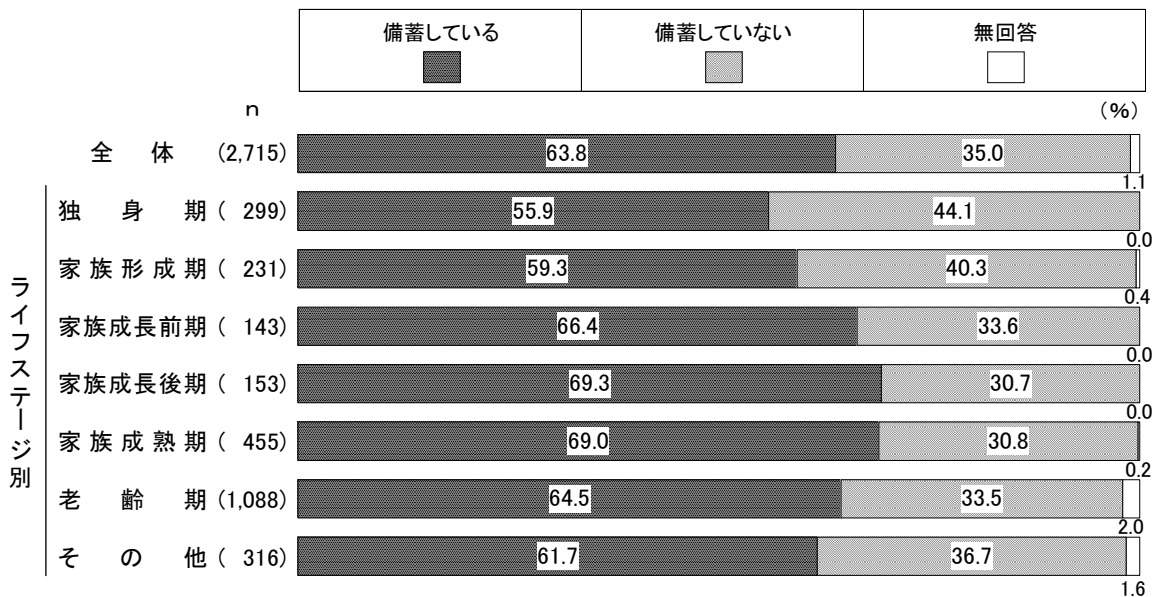
図 3-9-2 食料の備蓄の有無－性別、年齢別



性別にみると、「備蓄している」は女性（66.2%）が男性（60.8%）より5.4ポイント高くなっている。

年齢別にみると、「備蓄している」は60～64歳（72.8%）で7割強と多くなっている。一方、「備蓄していない」は18～29歳（45.4%）で4割台半ばと多くなっている。（図 3-9-2）

図 3-9-3 食料の備蓄の有無－ライフステージ別



ライフステージ別にみると、「備蓄している」は家族成長後期（69.3%）と家族成熟期（69.0%）で7割弱と多くなっている。一方、「備蓄していない」は独身期（44.1%）で4割台半ばと多くなっている。（図 3-9-3）

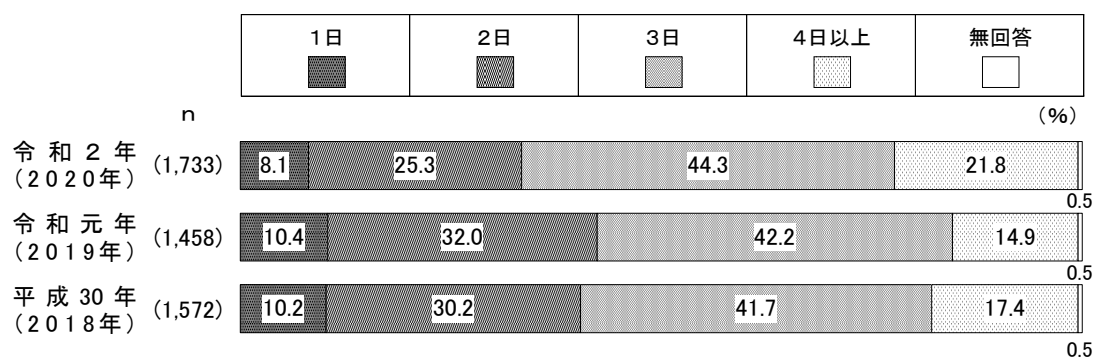
(10) 食料の備蓄量

◇「3日」が4割台半ば

(食料を「備蓄している」とお答えの方へ)

問23－1－1 家族が何日間過ごせる分の食料を備蓄していますか。(○は1つだけ)

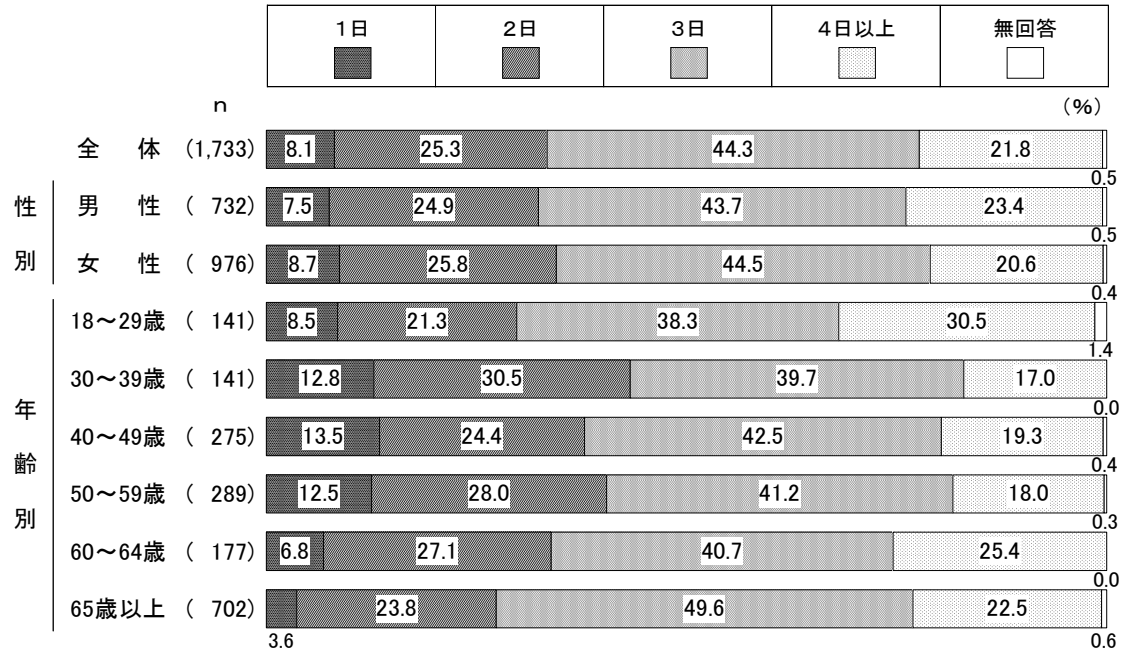
図3－10－1 食料の備蓄量－全体、経年比較



食料を「備蓄している」と回答した1,733人に、家族が何日間過ごせる分の食料を備蓄しているか聞いたところ、「3日」(44.3%)が4割台半ばで最も多くなっている。次いで「2日」(25.3%)、「4日以上」(21.8%)、「1日」(8.1%)の順となっている。

前回までの調査と比較すると、「4日以上」は令和元年(2019年)(14.9%)より6.9ポイント増加している。(図3－10－1)

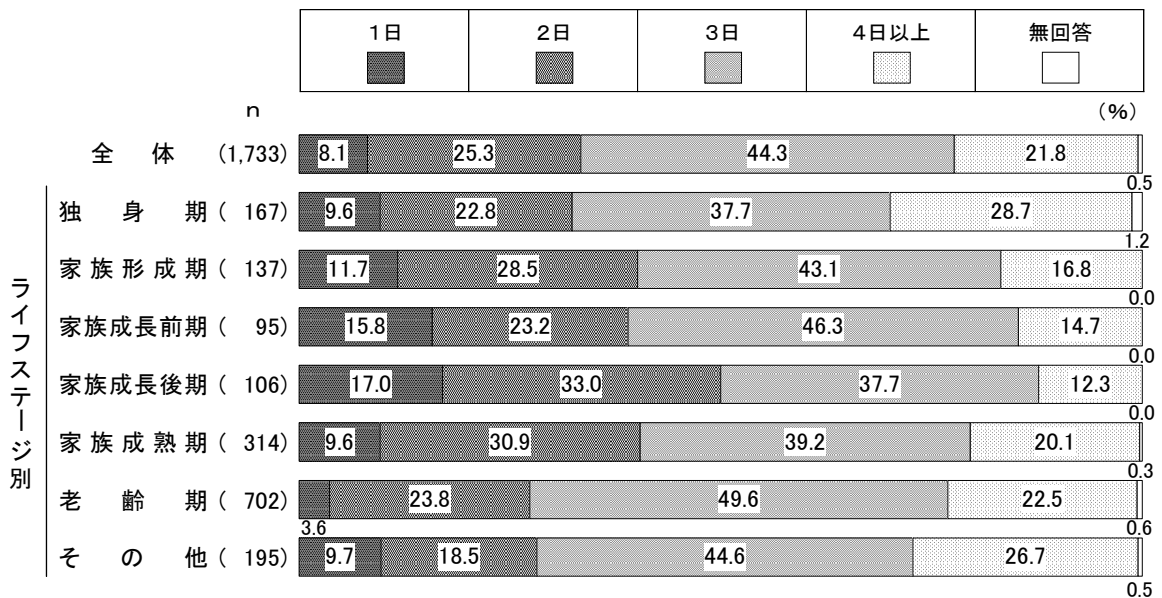
図 3-10-2 食料の備蓄量－性別、年齢別



性別にみると、「4日以上」は男性（23.4%）が女性（20.6%）より2.8ポイント高くなっている。

年齢別にみると、「3日」は65歳以上（49.6%）で5割弱と多くなっている。「4日以上」は18～29歳（30.5%）で約3割と多くなっている。（図 3-10-2）

図 3-10-3 食料の備蓄量－ライフステージ別



ライフステージ別にみると、「3日」は老齢期（49.6%）で5割弱と多くなっている。「4日以上」は独身期（28.7%）とその他（26.7%）で3割近くと多くなっている。（図 3-10-3）

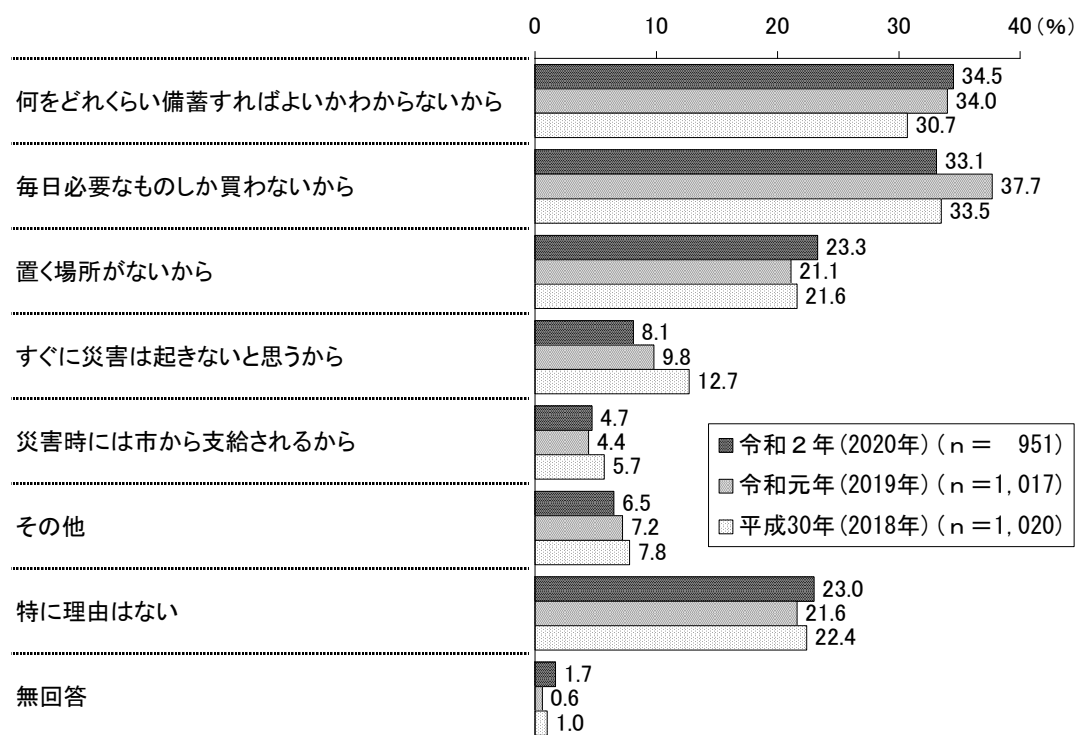
(11) 食料を備蓄していない理由

◇「何をどれくらい備蓄すればよいかわからないから」が3割台半ば

(食料を「備蓄していない」とお答えの方へ)

問23－１－２ 食料を備蓄していない理由は何ですか。(○はいくつでも)

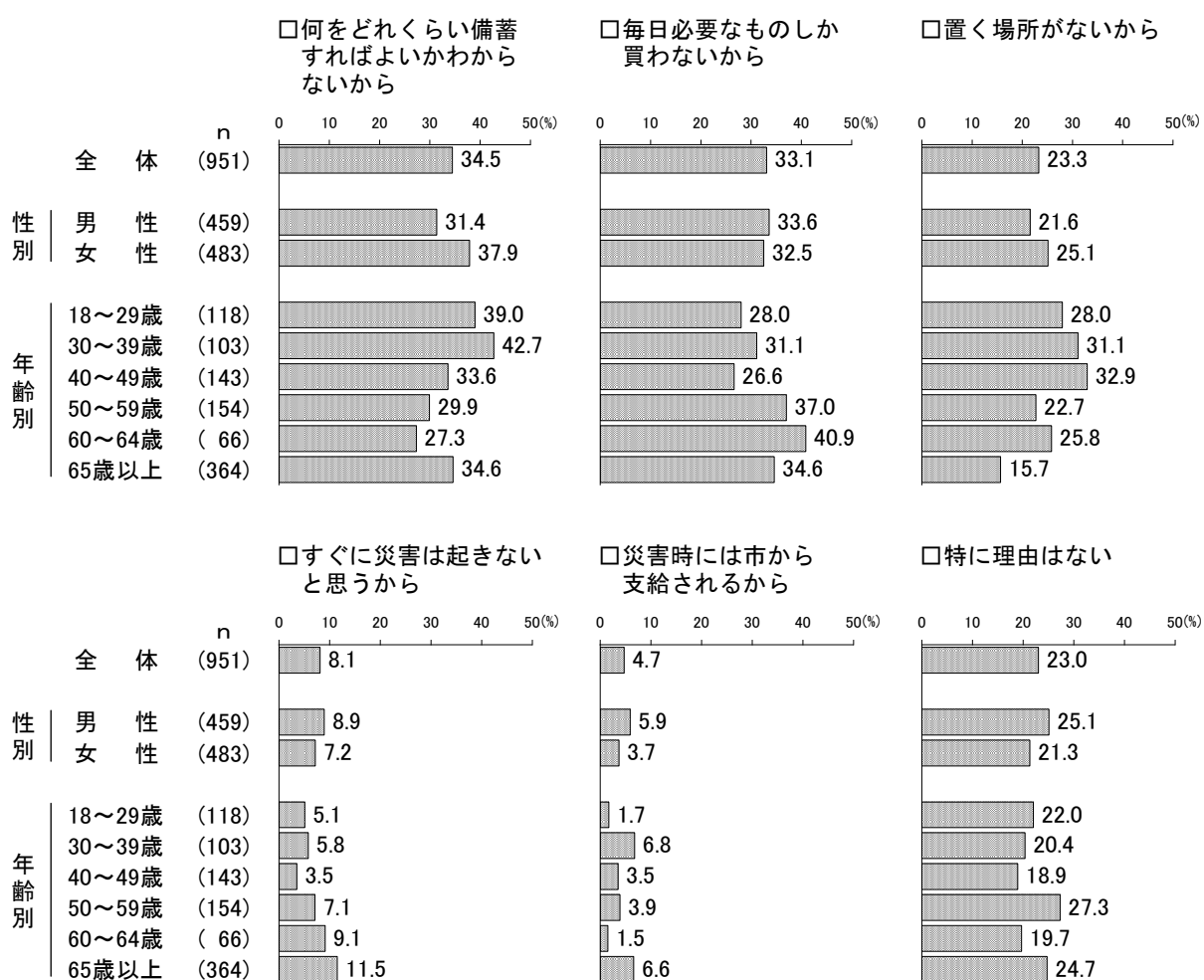
図3－11－１ 食料を備蓄していない理由－全体、経年比較



食料を「備蓄していない」と回答した951人に、その理由を聞いたところ、「何をどれくらい備蓄すればよいかわからないから」(34.5%)が3割台半ばで最も多くなっている。次いで「毎日必要なものしか買わないから」(33.1%)、「置く場所がないから」(23.3%)などの順となっている。

前回までの調査と比較すると、「置く場所がないから」は令和元年(2019年)(21.1%)より2.2ポイント増加している。一方、「毎日必要なものしか買わないから」は令和元年(2019年)(37.7%)より4.6ポイント減少している。(図3－11－１)

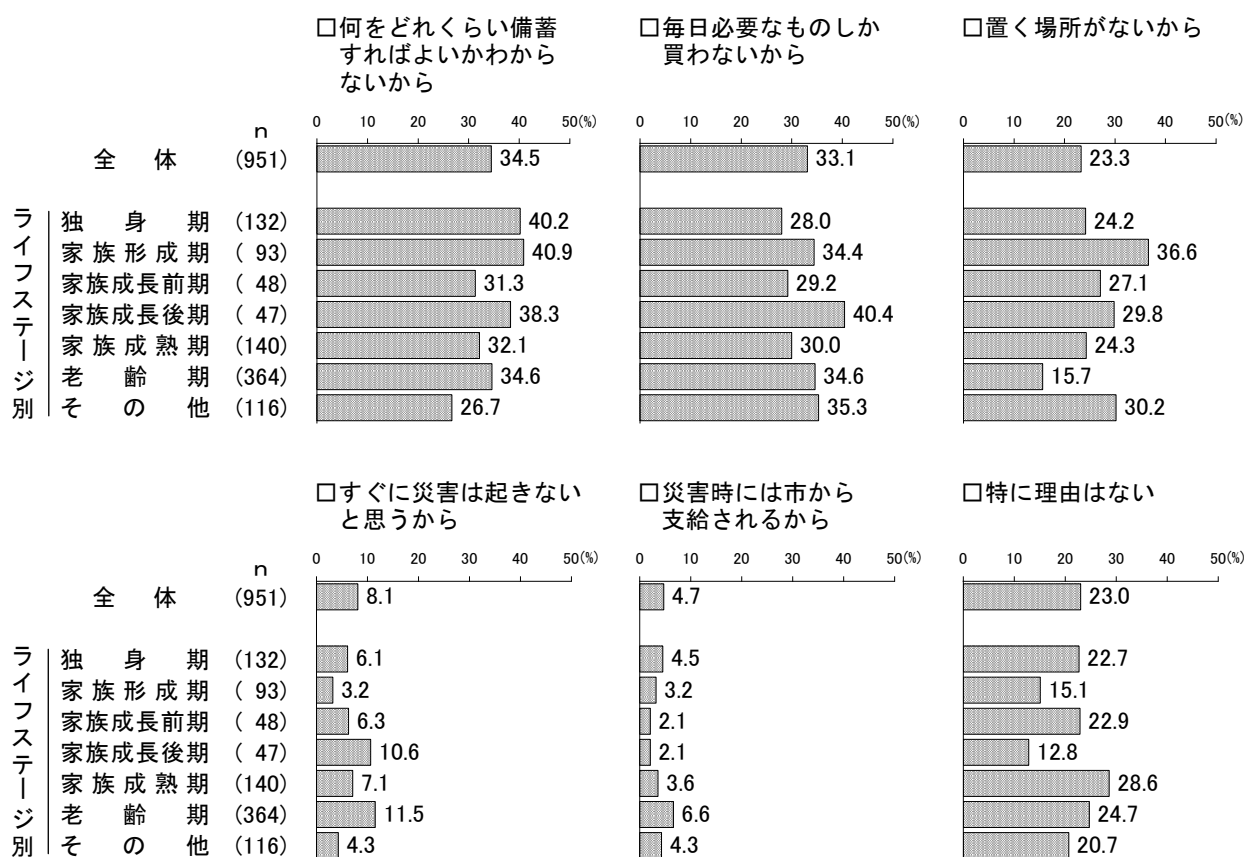
図 3-11-2 食料を備蓄していない理由－性別、年齢別（「その他」を除く）



性別にみると、「何をどれくらい備蓄すればよいかわからないから」は女性（37.9％）が男性（31.4％）より6.5ポイント、「置く場所がないから」は女性（25.1％）が男性（21.6％）より3.5ポイント、それぞれ高くなっている。

年齢別にみると、「何をどれくらい備蓄すればよいかわからないから」は30～39歳（42.7％）で4割強と多くなっている。「毎日必要なものしか買わないから」は60～64歳（40.9％）で約4割と多くなっている。「置く場所がないから」は30～39歳（31.1％）と40～49歳（32.9％）で3割強と多くなっている。（図 3-11-2）

図3-11-3 食料を備蓄していない理由－ライフステージ別（「その他」を除く）



ライフステージ別にみると、「何をどれくらい備蓄すればよいかわからないから」は家族形成期（40.9％）と独身期（40.2％）で約4割と多くなっている。「毎日必要なものしか買わないから」は家族成長後期（40.4％）で約4割と多くなっている。「置く場所がないから」は家族形成期（36.6％）で4割近くと多くなっている。（図3-11-3）

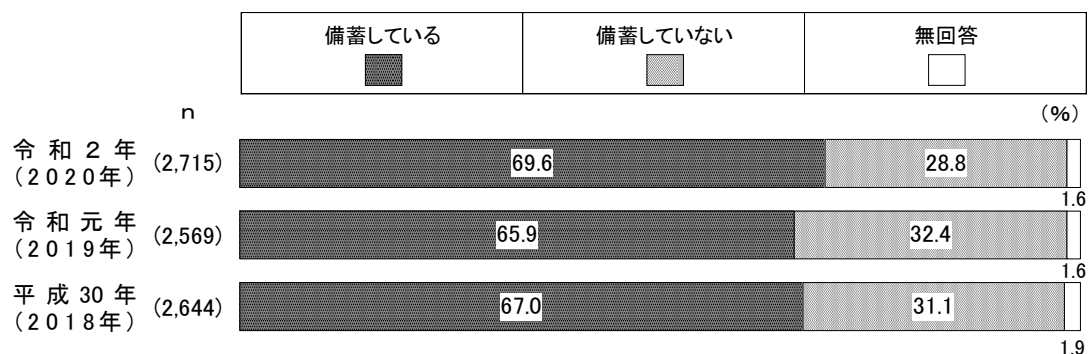
(12) 飲料水の備蓄の有無

◇「備蓄している」が7割弱

問23 あなたの家庭では、災害により電気、水道、ガス等といったライフラインが停止したことを想定して、食料、飲料水を備蓄していますか。

【2. 飲料水について】（○は1つだけ）

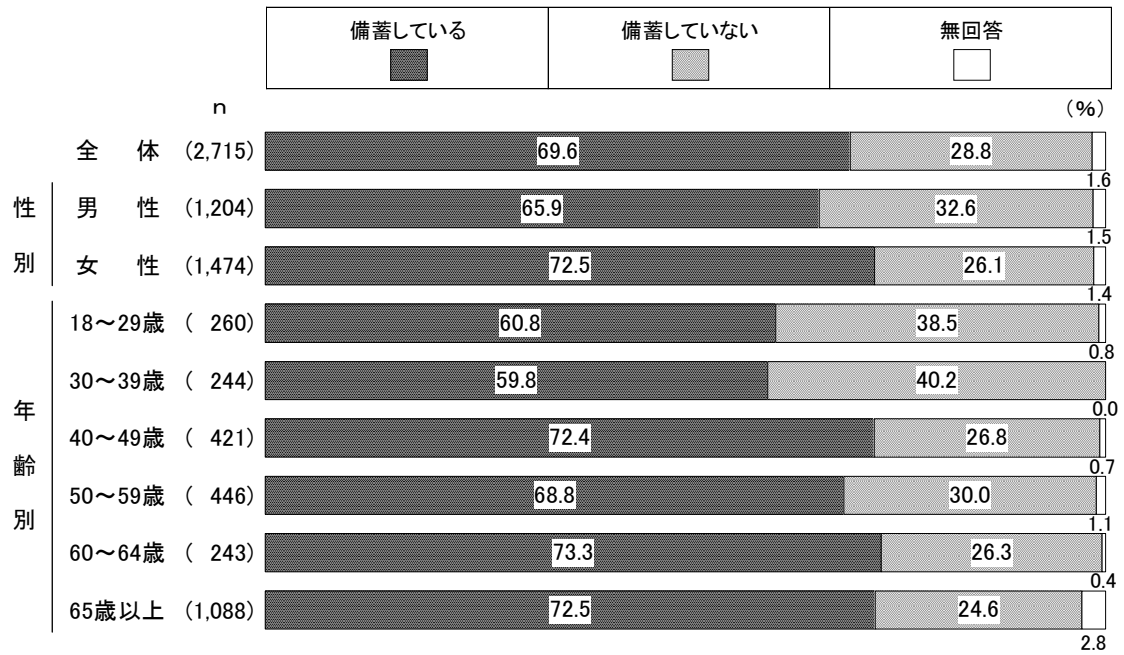
図3-12-1 飲料水の備蓄の有無－全体、経年比較



災害により電気、水道、ガス等といったライフラインが停止したことを想定して飲料水を備蓄しているか聞いたところ、「備蓄している」（69.6％）が7割弱となっている。一方、「備蓄していない」（28.8％）は3割近くとなっている。

前回までの調査と比較すると、「備蓄している」は令和元年（2019年）（65.9％）より3.7ポイント増加している。（図3-12-1）

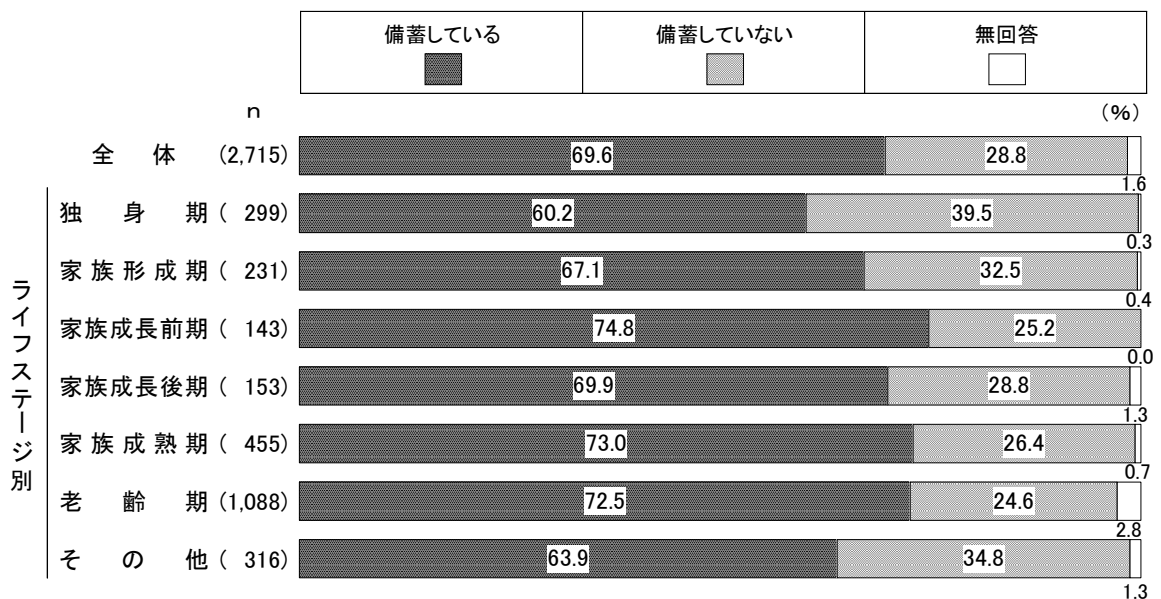
図 3-12-2 飲料水の備蓄の有無－性別、年齢別



性別にみると、「備蓄している」は女性（72.5%）が男性（65.9%）より6.6ポイント高くなっている。

年齢別にみると、「備蓄している」は40～49歳（72.4%）、60～64歳（73.3%）、65歳以上（72.5%）で7割強と多くなっている。一方、「備蓄していない」は30～39歳（40.2%）で約4割と多くなっている。（図 3-12-2）

図 3-12-3 飲料水の備蓄の有無－ライフステージ別



ライフステージ別にみると、「備蓄している」は家族成長前期（74.8%）で7割台半ばと多くなっている。一方、「備蓄していない」は独身期（39.5%）で4割弱と多くなっている。

（図 3-12-3）

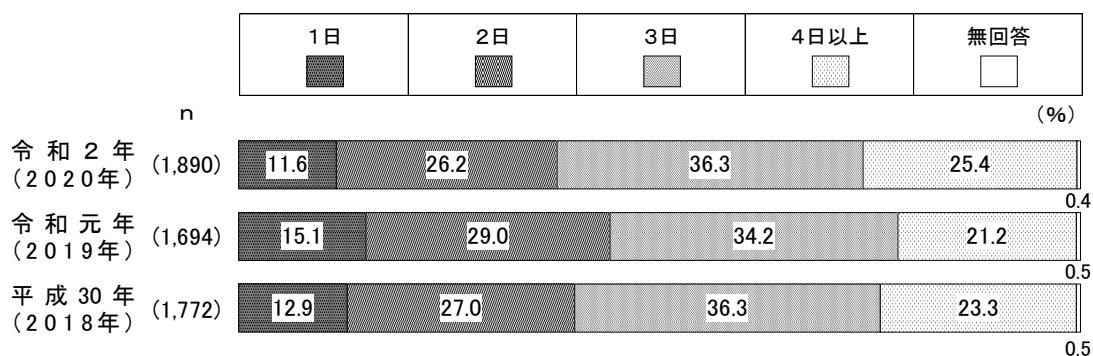
(13) 飲料水の備蓄量

◇「3日」が4割近く

(飲料水を「備蓄している」とお答えの方へ)

問23-2-1 家族が何日間過ごせる分の飲料水を備蓄していますか。(○は1つだけ)

図3-13-1 飲料水の備蓄量－全体、経年比較



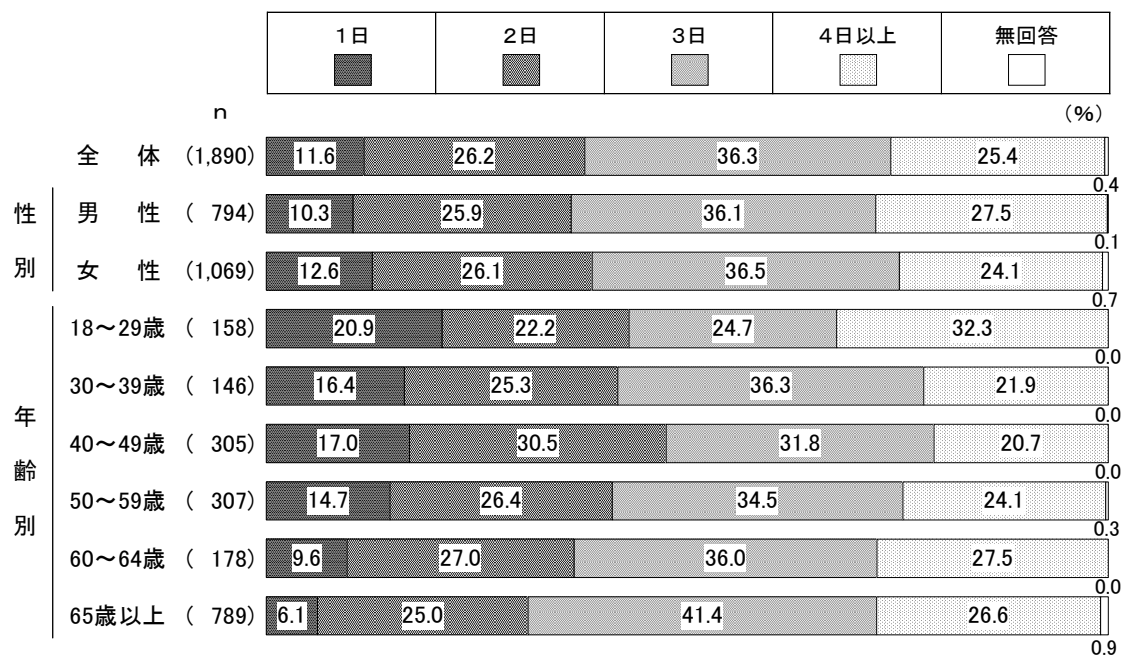
(注) 飲料水は大人1人1日3リットルで計算

飲料水を「備蓄している」と回答した1,890人に、家族が何日間過ごせる分の飲料水を備蓄しているか聞いたところ、「3日」(36.3%)が4割近くで最も多くなっている。次いで「2日」(26.2%)、「4日以上」(25.4%)、「1日」(11.6%)の順となっている。

前回までの調査と比較すると、「4日以上」は令和元年(2019年)(21.2%)より4.2ポイント増加している。一方、「1日」は令和元年(2019年)(15.1%)より3.5ポイント減少している。

(図3-13-1)

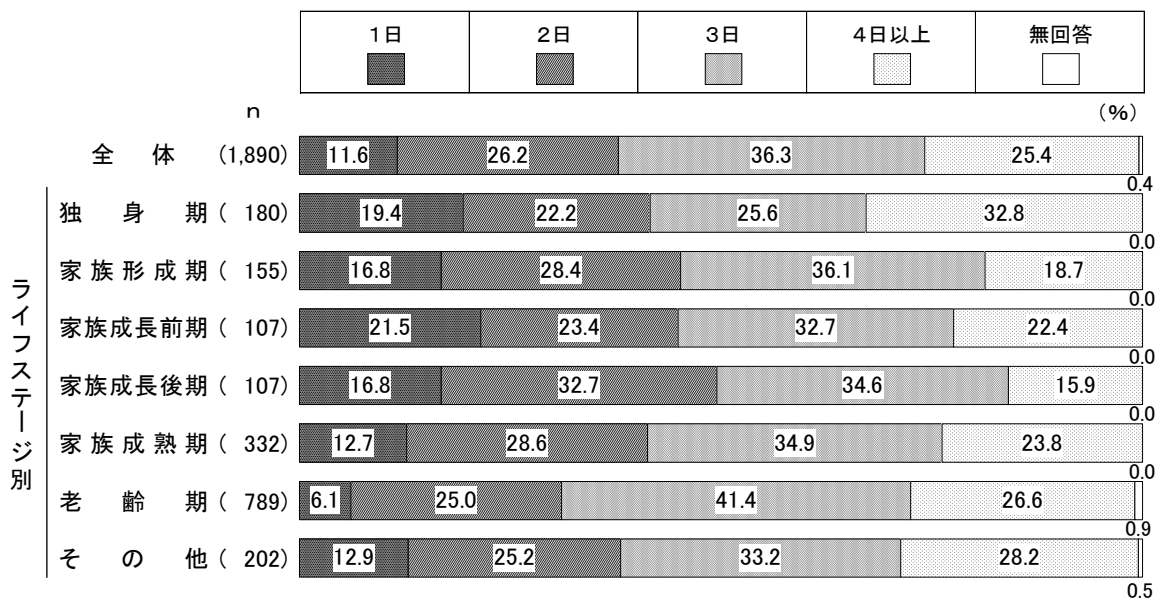
図 3-13-2 飲料水の備蓄量－性別、年齢別



性別にみると、「4日以上」は男性（27.5%）が女性（24.1%）より3.4ポイント高くなっている。

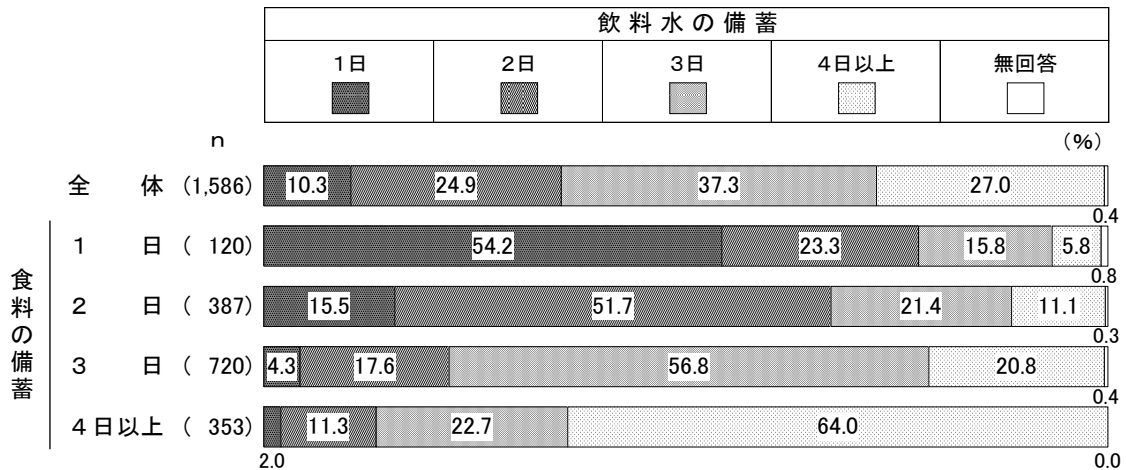
年齢別にみると、「3日」は65歳以上（41.4%）で4割強と多くなっている。「4日以上」は18～29歳（32.3%）で3割強と多くなっている。（図 3-13-2）

図 3-13-3 飲料水の備蓄量－ライフステージ別



ライフステージ別にみると「3日」は老齢期（41.4%）で4割強と多くなっている。「4日以上」は独身期（32.8%）で3割強と多くなっている。（図 3-13-3）

図 3-13-4 飲料水及び食料の備蓄の有無とその備蓄量



飲料水の備蓄量と食料の備蓄量の関係を捉える上で、飲料水及び食料の備蓄量をみると、飲料水の備蓄日数と食料の備蓄日数はほぼ相関関係にあり、「飲料水、食料ともに4日以上」(64.0%)が6割台半ばで最も多くなっている。(図3-13-4)

図 3-13-5 飲料水及び食料の備蓄の有無とその備蓄量（全体に占める人数及び構成比）

			飲料水の備蓄量						
			4日以上	3日	2日	1日	日数不明	備蓄無し	不備蓄有無
(n=2,715)			480 17.7	687 25.3	495 18.2	220 8.1	8 0.3	782 28.8	43 1.6
食料の備蓄量	4日以上	378 13.9	226 8.3	80 2.9	40 1.5	7 0.3	-	23 0.8	2 0.1
	3日	768 28.3	150 5.5	409 15.1	127 4.7	31 1.1	3 0.1	47 1.7	1 0.0
	2日	438 16.1	43 1.6	83 3.1	200 7.4	60 2.2	1 0.0	49 1.8	2 0.1
	1日	141 5.2	7 0.3	19 0.7	28 1.0	65 2.4	1 0.0	20 0.7	1 0.0
	日数不明	8 0.3	3 0.1	1 0.0	-	1 0.0	1 0.0	2 0.1	-
	備蓄無し	951 35.0	50 1.8	94 3.5	99 3.6	55 2.0	2 0.1	641 23.6	10 0.4
	備蓄有無不明	31 1.1	1 0.0	1 0.0	1 0.0	1 0.0	-	-	27 1.0

飲料水の備蓄量と食料の備蓄量の関係を捉える上で、飲料水及び食料の備蓄の有無とその備蓄量（全体に占める人数及び構成比）をみると、「飲料水、食料ともに備蓄無し」(n=641、23.6%)が全体の2割強と最も多くなっている。次いで「飲料水、食料ともに3日分」(n=409、15.1%)、「飲料水、食料ともに4日分以上」(n=226、8.3%)、「飲料水、食料ともに2日分」(n=200、7.4%)などの順となっている。なお、《飲料水、食料ともに3日分以上備蓄》(グレー網掛け部分)(n=865、31.9%)している人は全体の3割強となっている。(図3-13-5)

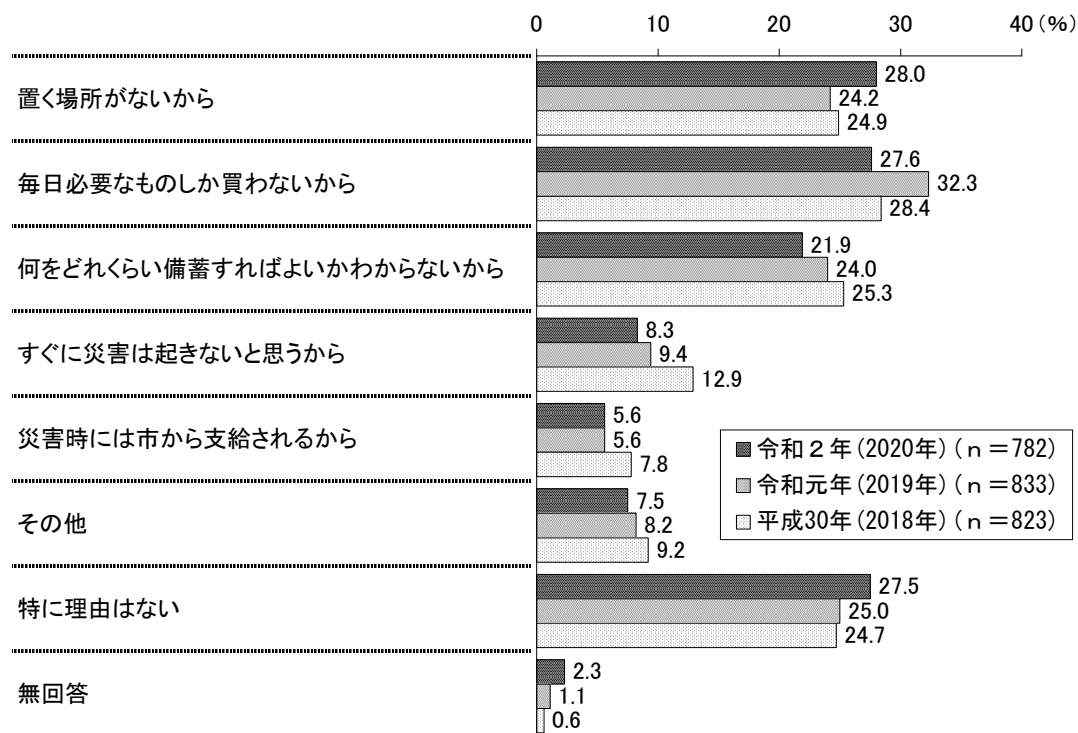
(14) 飲料水を備蓄していない理由

◇「置く場所がないから」と「毎日必要なものしか買わないから」がともに3割近く

(飲料水を「備蓄していない」とお答えの方へ)

問23－2－2 飲料水を備蓄していない理由は何ですか。(○はいくつでも)

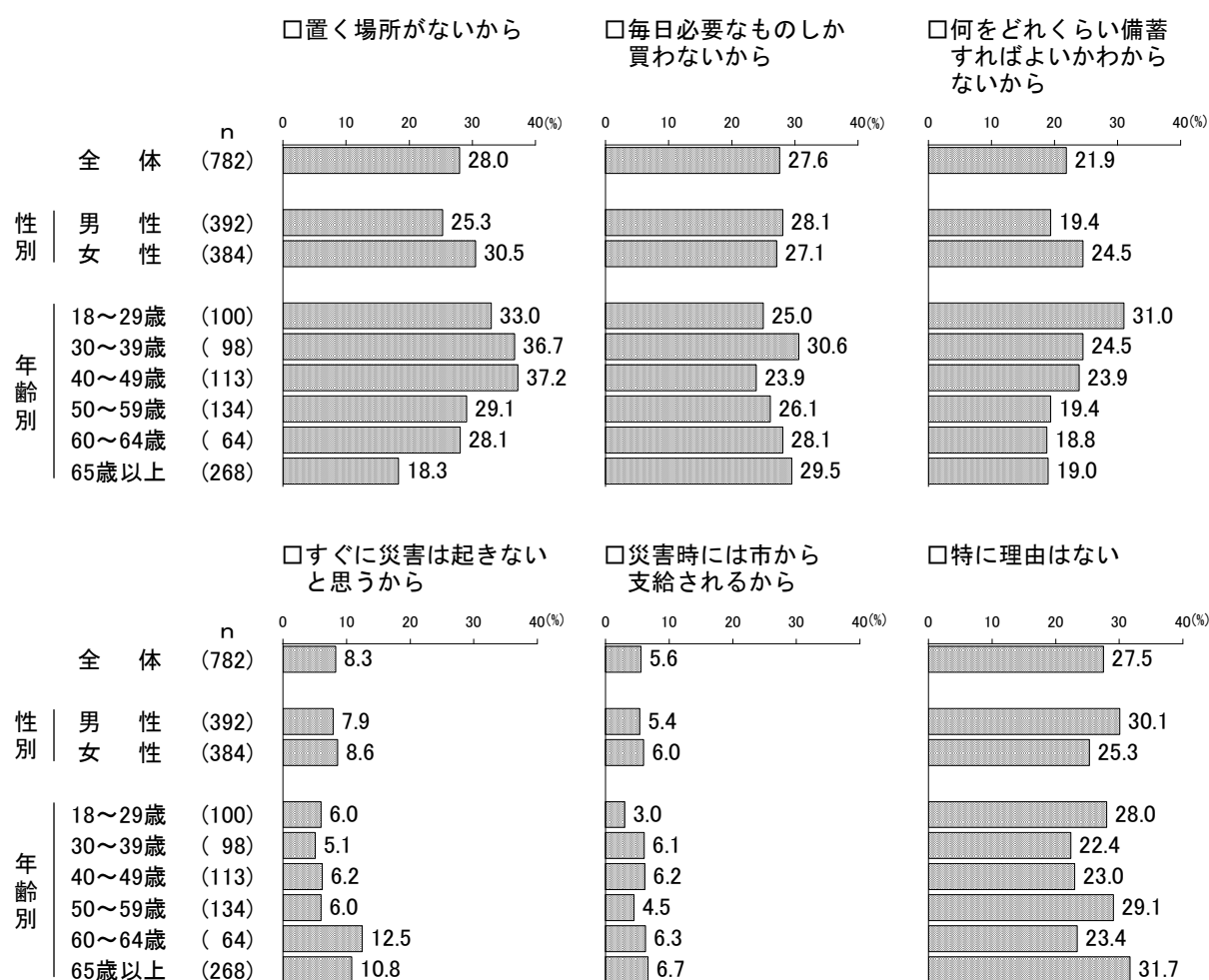
図3－14－1 飲料水を備蓄していない理由－全体、経年比較



飲料水を「備蓄していない」と回答した782人に、その理由を聞いたところ、「置く場所がないから」(28.0%)と「毎日必要なものしか買わないから」(27.6%)がともに3割近くで多くなっている。次いで「何をどれくらい備蓄すればよいかわからないから」(21.9%)などの順となっている。一方、「特に理由はない」(27.5%)は3割近くとなっている。

前回までの調査と比較すると、「置く場所がないから」は令和元年(2019年)(24.2%)より3.8ポイント増加している。一方、「毎日必要なものしか買わないから」は令和元年(2019年)(32.3%)より4.7ポイント、「何をどれくらい備蓄すればよいかわからないから」は令和元年(2019年)(24.0%)より2.1ポイント、それぞれ減少している。(図3－14－1)

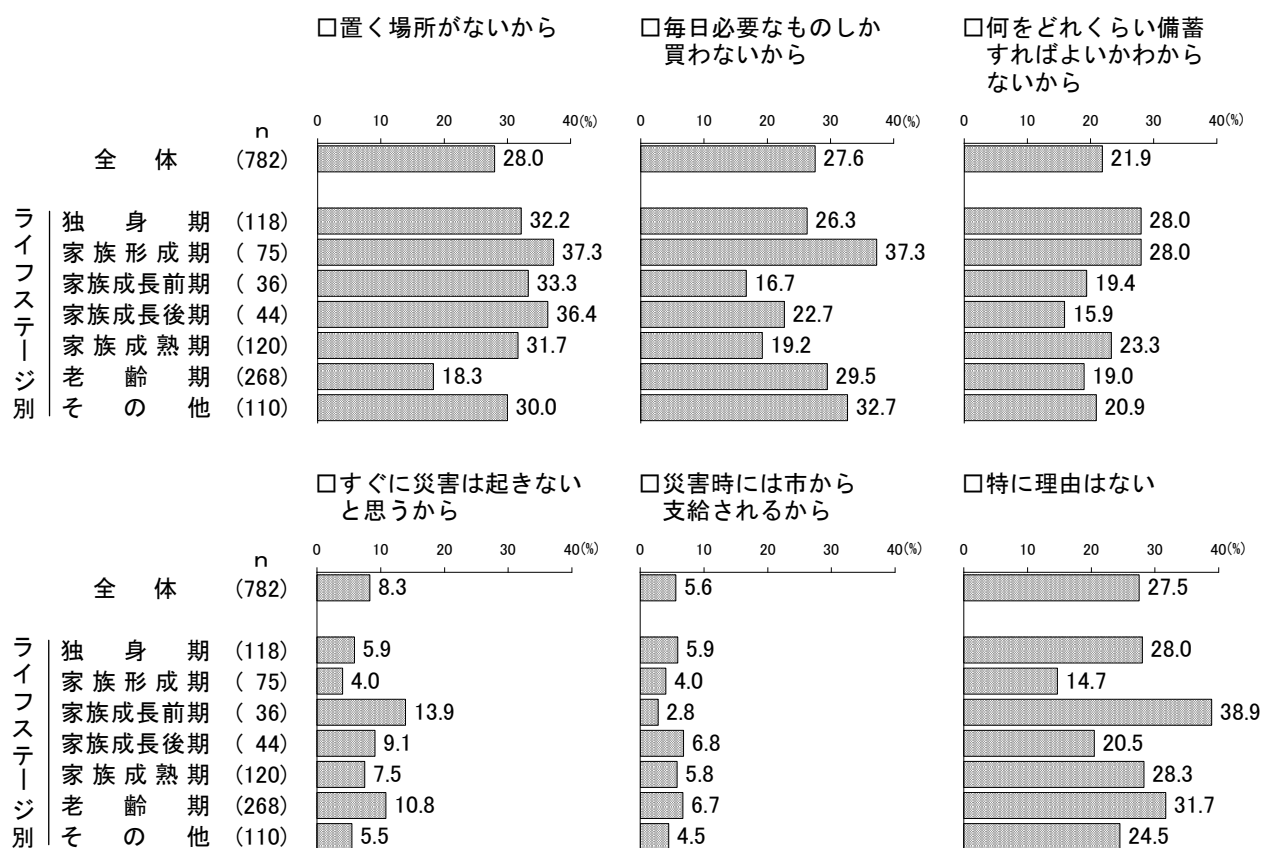
図 3-14-2 飲料水を備蓄していない理由－性別、年齢別（「その他」を除く）



性別にみると、「置く場所がないから」は女性（30.5％）が男性（25.3％）より5.2ポイント、「何をどれくらい備蓄すればよいかわからないから」は女性（24.5％）が男性（19.4％）より5.1ポイント、それぞれ高くなっている。

年齢別にみると、「置く場所がないから」は30～39歳（36.7％）と40～49歳（37.2％）で4割近くと多くなっている。「毎日必要なものしか買わないから」は30～39歳（30.6％）で約3割と多くなっている。「何をどれくらい備蓄すればよいかわからないから」は18～29歳（31.0％）で3割強と多くなっている。（図 3-14-2）

図3-14-3 飲料水を備蓄していない理由－ライフステージ別（「その他」を除く）



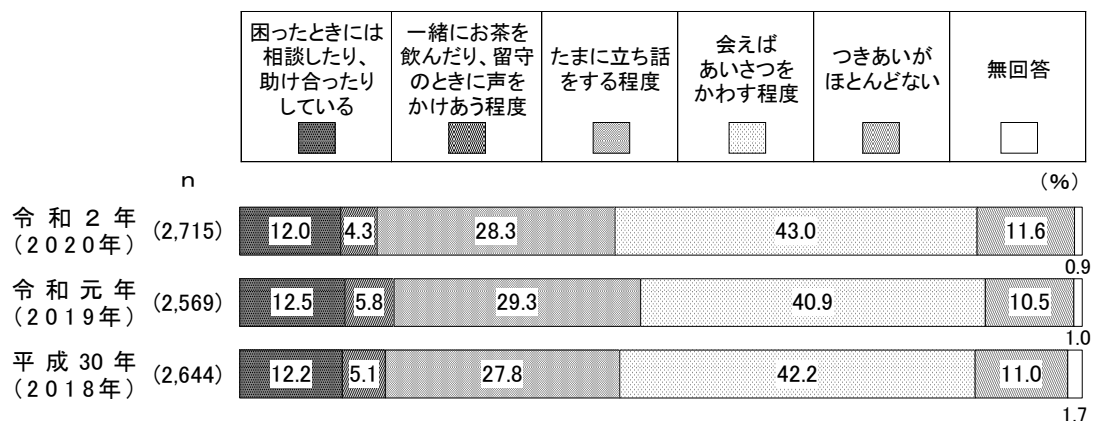
ライフステージ別にみると、「置く場所がないから」は家族形成期（37.3%）と家族成長後期（36.4%）で4割近くと多くなっている。「毎日必要なものしか買わないから」は家族形成期（37.3%）で4割近くと多くなっている。「何をどれくらい備蓄すればよいかわからないから」は独身期（28.0%）と家族形成期（28.0%）で3割近くと多くなっている。（図3-14-3）

(15) 隣近所とのつきあい方

◇「会えばあいさつをかわす程度」が4割強

問24 あなたは、日頃、隣近所とどのようなつきあい方をしていますか。(○は1つだけ)

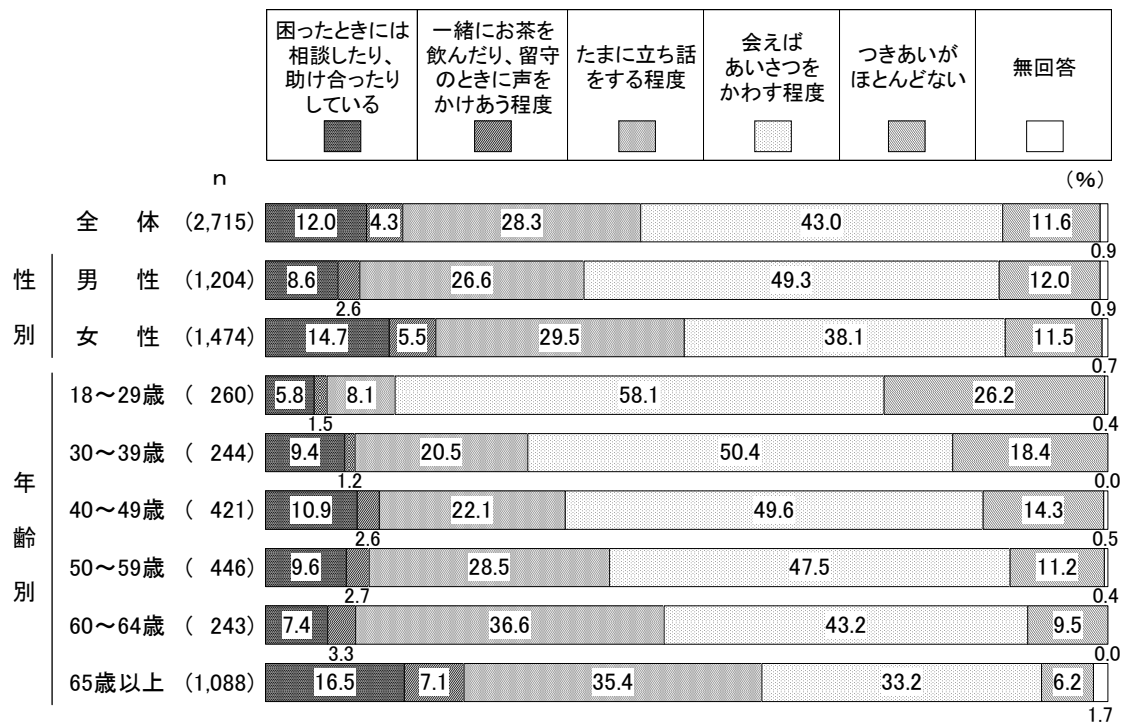
図3-15-1 隣近所とのつきあい方ー全体、経年比較



日頃、隣近所とどのようなつきあい方をしているか聞いたところ、「会えばあいさつをかわす程度」(43.0%)が4割強で最も多くなっている。次いで「たまに立ち話をする程度」(28.3%)、「困ったときには相談したり、助け合ったりしている」(12.0%)、「つきあいがほとんどない」(11.6%)、「一緒にお茶を飲んだり、留守のときに声をかけあう程度」(4.3%)の順となっている。

前回までの調査と比較すると、「会えばあいさつをかわす程度」は令和元年(2019年)(40.9%)より2.1ポイント増加している(図3-15-1)

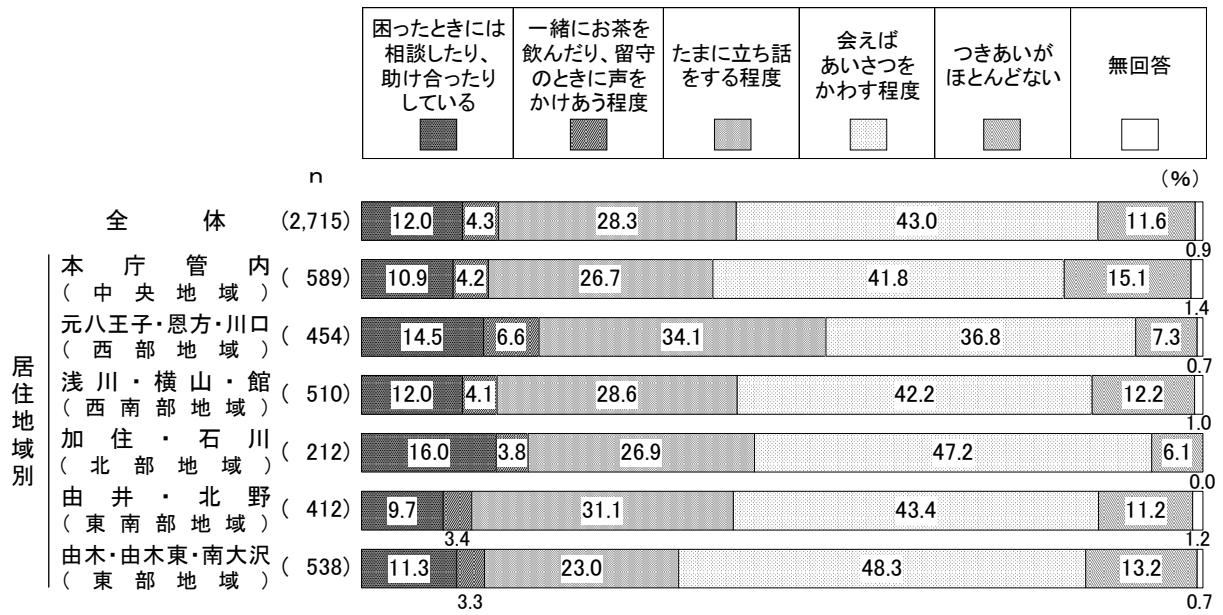
図 3-15-2 隣近所とのつきあい方－性別、年齢別



性別にみると、「会えばあいさつをかわす程度」は男性（49.3%）が女性（38.1%）より11.2ポイント高くなっている。一方、「困ったときには相談したり、助け合ったりしている」は女性（14.7%）が男性（8.6%）より6.1ポイント高くなっている。

年齢別にみると、「たまに立ち話をする程度」は60～64歳（36.6%）で4割近くと多くなっている。「会えばあいさつをかわす程度」は年代が低くなるほど割合が高く、18～29歳（58.1%）で6割近くと多くなっている。（図 3-15-2）

図 3-15-3 隣近所とのつきあい方－居住地域別



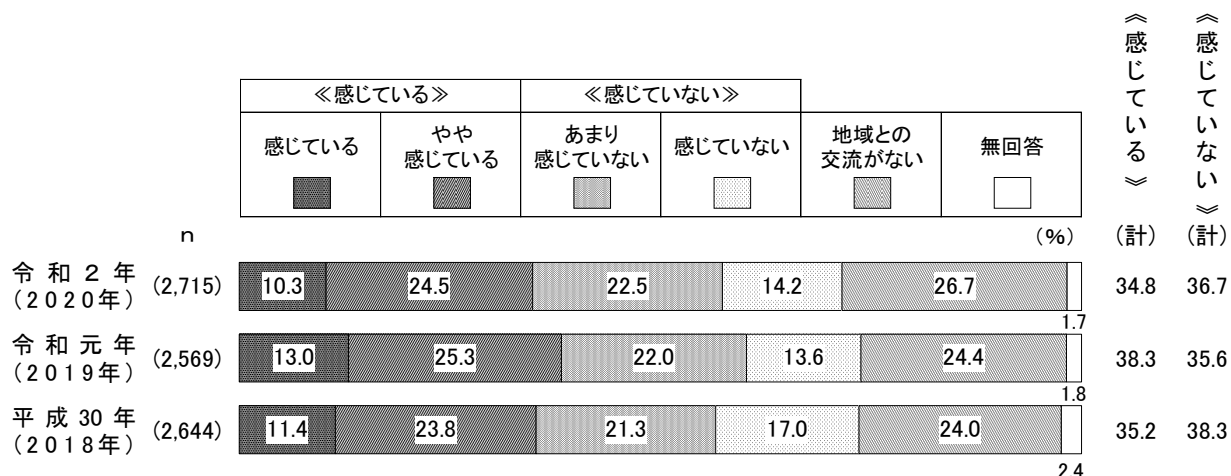
居住地域別にみると、「たまに立ち話をする程度」は元八王子・恩方・川口（西部地域）（34.1％）で3割台半ばと多くなっている。「会えばあいさつをかわす程度」は由木・由木東・南大沢（東部地域）（48.3％）と加住・石川（北部地域）（47.2％）で5割近くと多くなっている。（図 3-15-3）

(16) 地域での交流や活動による充実感や生きがい

◇《《感じている》》が3割台半ば

問25 あなたは、地域の人と交流したり、地域の活動に参加したりすることで、充実感や生きがいを感じていますか。(○は1つだけ)

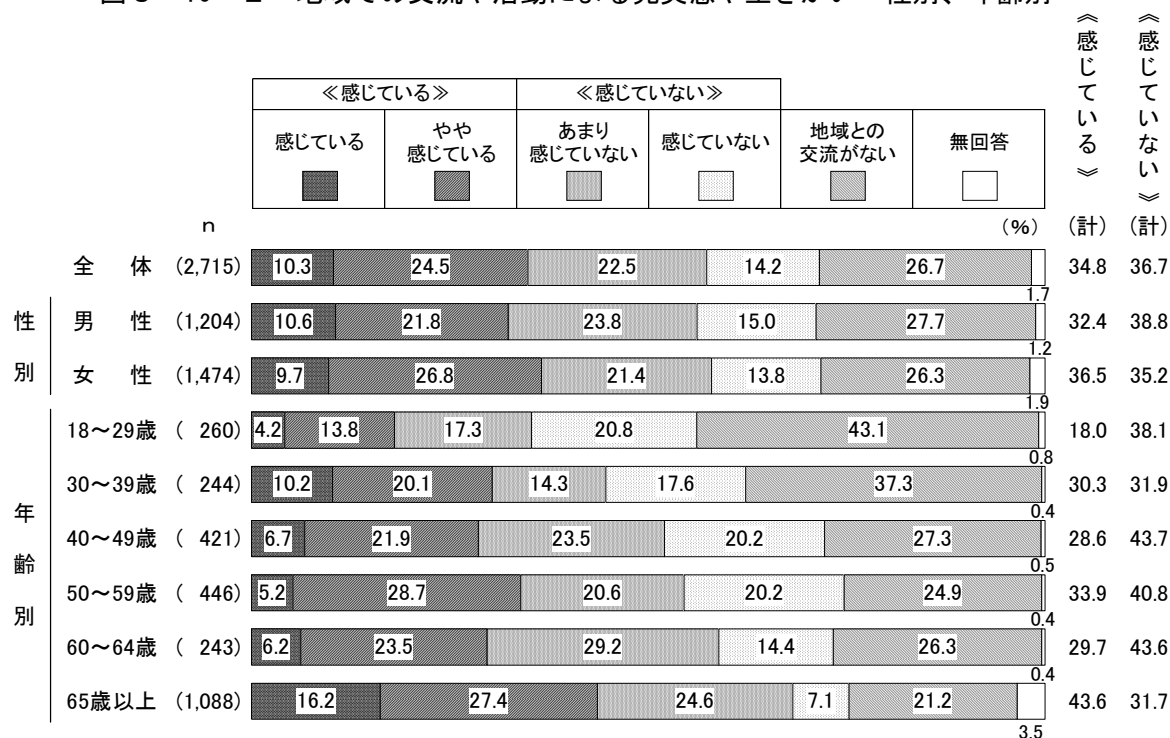
図3-16-1 地域での交流や活動による充実感や生きがい—全体、経年比較



地域の人と交流したり、地域の活動に参加したりすることで充実感や生きがいを感じているか聞いたところ、「感じている」(10.3%)と「やや感じている」(24.5%)を合わせた《《感じている》》(34.8%)は3割台半ばとなっている。一方、「あまり感じていない」(22.5%)と「感じていない」(14.2%)を合わせた《《感じていない》》(36.7%)は4割近くとなっている。

前回までの調査と比較すると、《《感じている》》は令和元年(2019年)(38.3%)より3.5ポイント減少している。(図3-16-1)

図 3-16-2 地域での交流や活動による充実感や生きがい—性別、年齢別

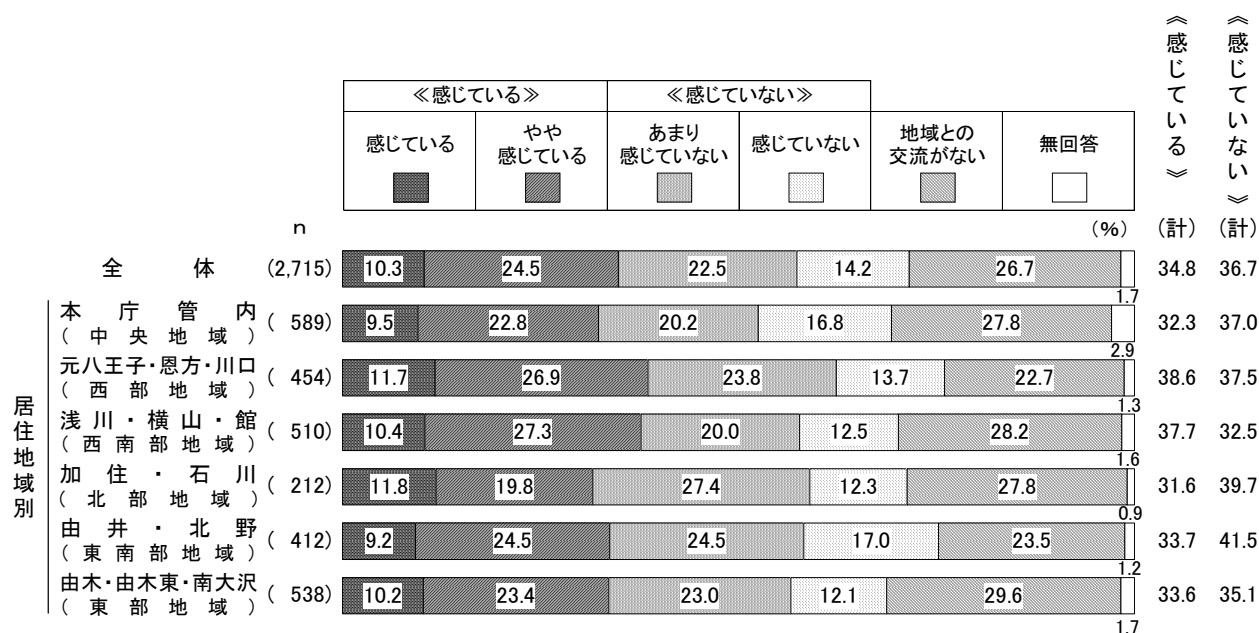


性別にみると、《感じている》は女性（36.5%）が男性（32.4%）より4.1ポイント高くなっている。

年齢別にみると、《感じている》は65歳以上（43.6%）で4割強と多くなっている。一方、《感じていない》は40～49歳（43.7%）と60～64歳（43.6%）で4割強と多くなっている。

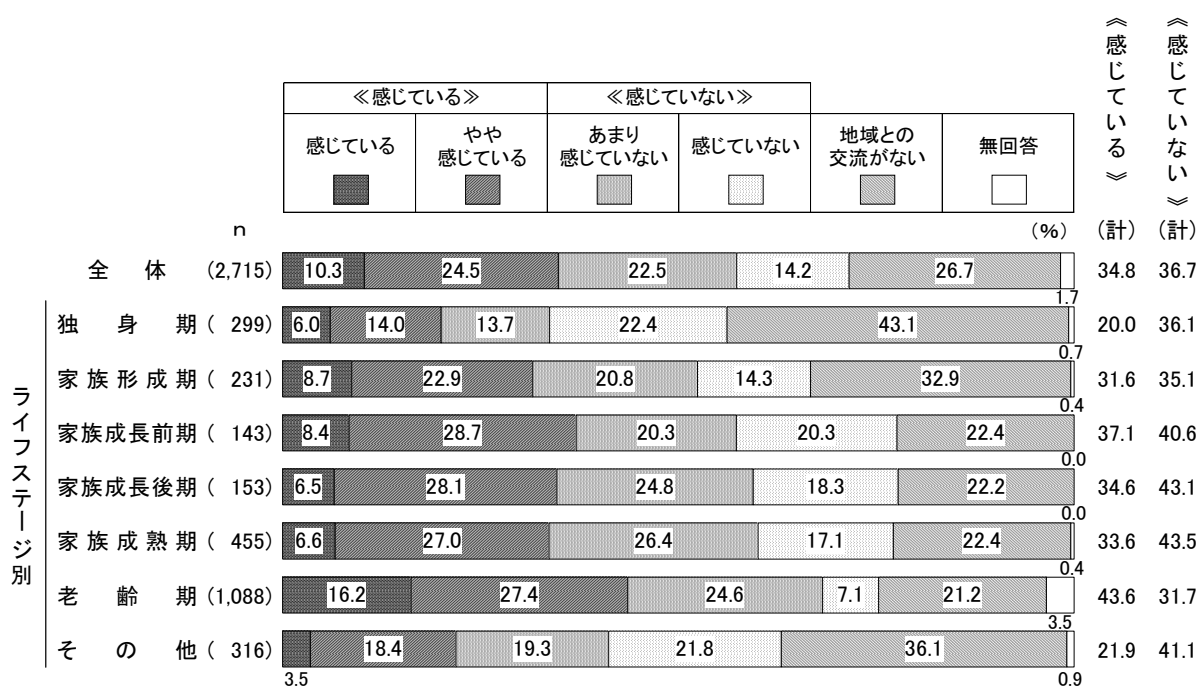
（図 3-16-2）

図 3-16-3 地域での交流や活動による充実感や生きがい—居住地域別



居住地域別にみると、《感じている》は元八王子・恩方・川口（西部地域）（38.6%）と浅川・横山・館（西南部地域）（37.7%）で4割近くと多くなっている。一方、《感じていない》は由井・北野（東南部地域）（41.5%）で4割強と多くなっている。（図 3-16-3）

図 3-16-4 地域での交流や活動による充実感や生きがい—ライフステージ別



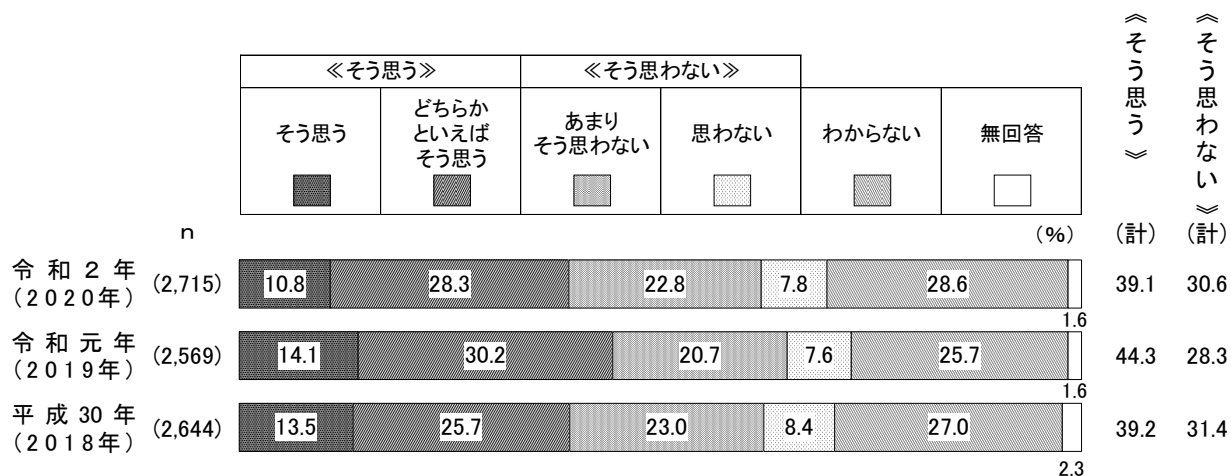
ライフステージ別にみると、《感じる》は老齢期（43.6%）で4割強と多くなっている。「地域との交流がない」は独身期（43.1%）で4割強と多くなっている。（図 3-16-4）

(17) 地域と子どもたちとのかかわりあい

◇《《そう思う》》が4割弱

問26 あなたのお住まいの地域では、子どもたちが、家族だけでなく地域の人にも見守られ、かかわりあいながら成長していると思いますか。(○は1つだけ)

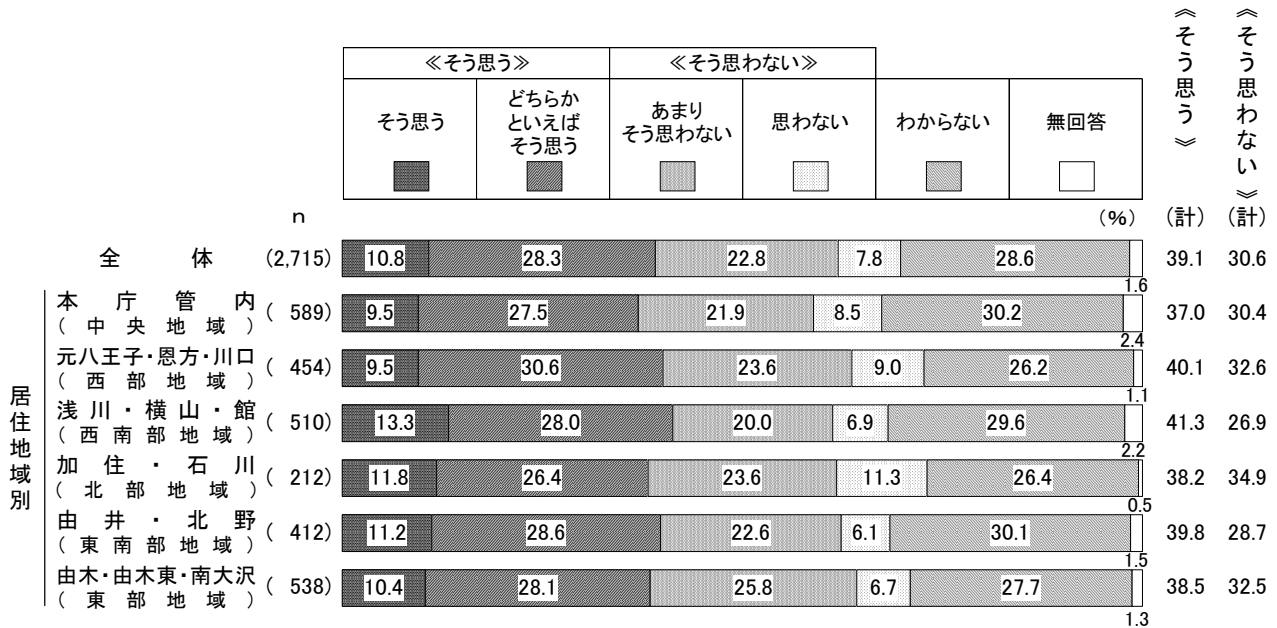
図3-17-1 地域と子どもたちとのかかわりあいー全体、経年比較



子どもたちが、家族だけでなく地域の人にも見守られ、かかわりあいながら成長していると思うか聞いたところ、「そう思う」(10.8%)と「どちらかといえばそう思う」(28.3%)を合わせた《《そう思う》》(39.1%)は4割弱となっている。一方、「あまりそう思わない」(22.8%)と「思わない」(7.8%)を合わせた《《そう思わない》》(30.6%)は約3割となっている。

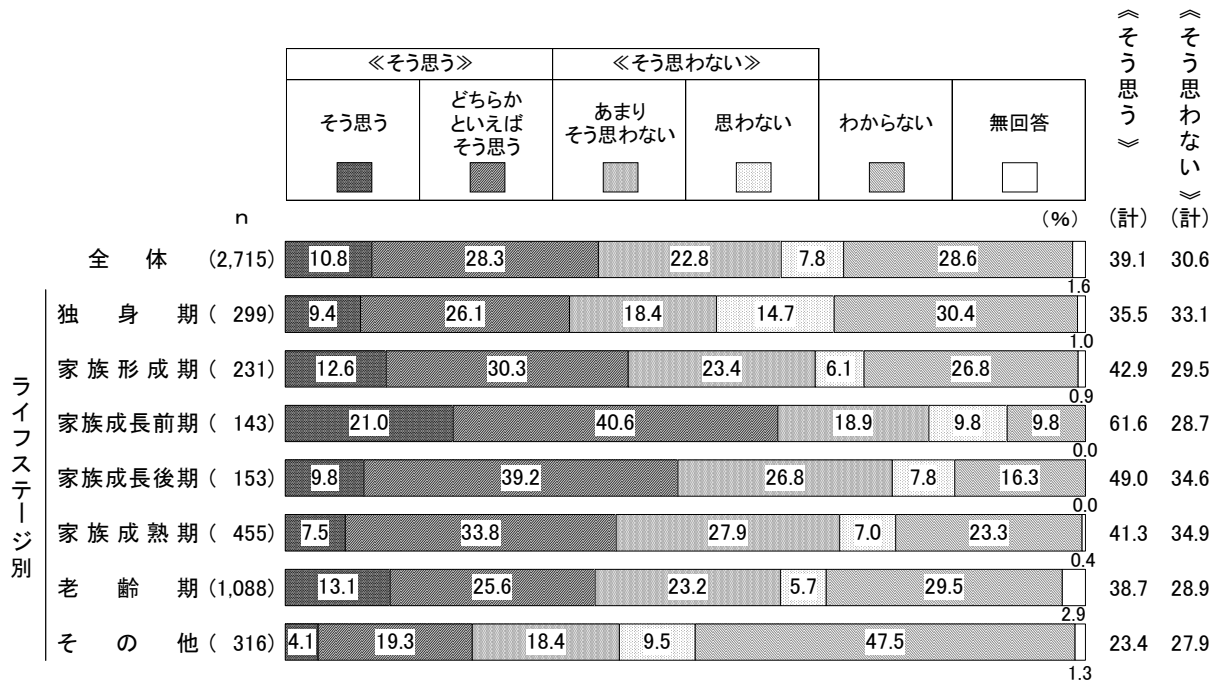
前回までの調査と比較すると、《《そう思う》》は令和元年(2019年)(44.3%)より5.2ポイント減少している。(図3-17-1)

図 3-17-2 地域と子どもたちとのかかわりあいー居住地域別



居住地域別にみると、《そう思う》は浅川・横山・館（西南部地域）（41.3%）で4割強と多くなっている。一方、《そう思わない》は加住・石川（北部地域）（34.9%）で3割台半ばと多くなっている。（図 3-17-2）

図 3-17-3 地域と子どもたちとのかかわりあいーライフステージ別



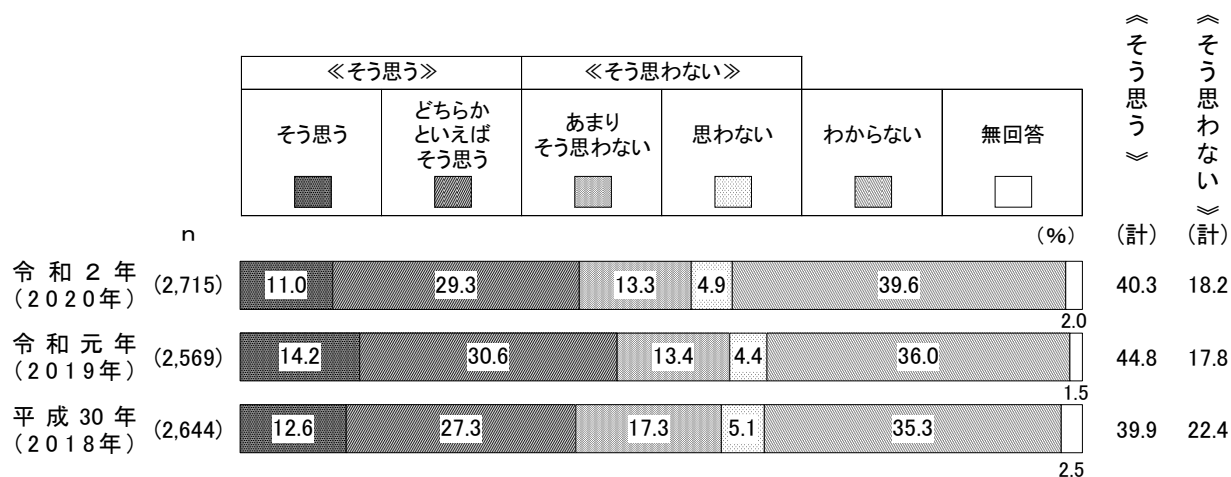
ライフステージ別にみると、《そう思う》は家族成長前期（61.6%）で6割強と多くなっている。一方、《そう思わない》は家族成熟期（34.9%）と家族成長後期（34.6%）で3割台半ばと多くなっている。（図 3-17-3）

(18) 地域と学校の協力による子どもたちの育み

◇《《そう思う》が約4割

問27 あなたのお住まいの地域では、地域と学校が、ともに協力し合って子どもたちを育んでいると思いますか。(○は1つだけ)

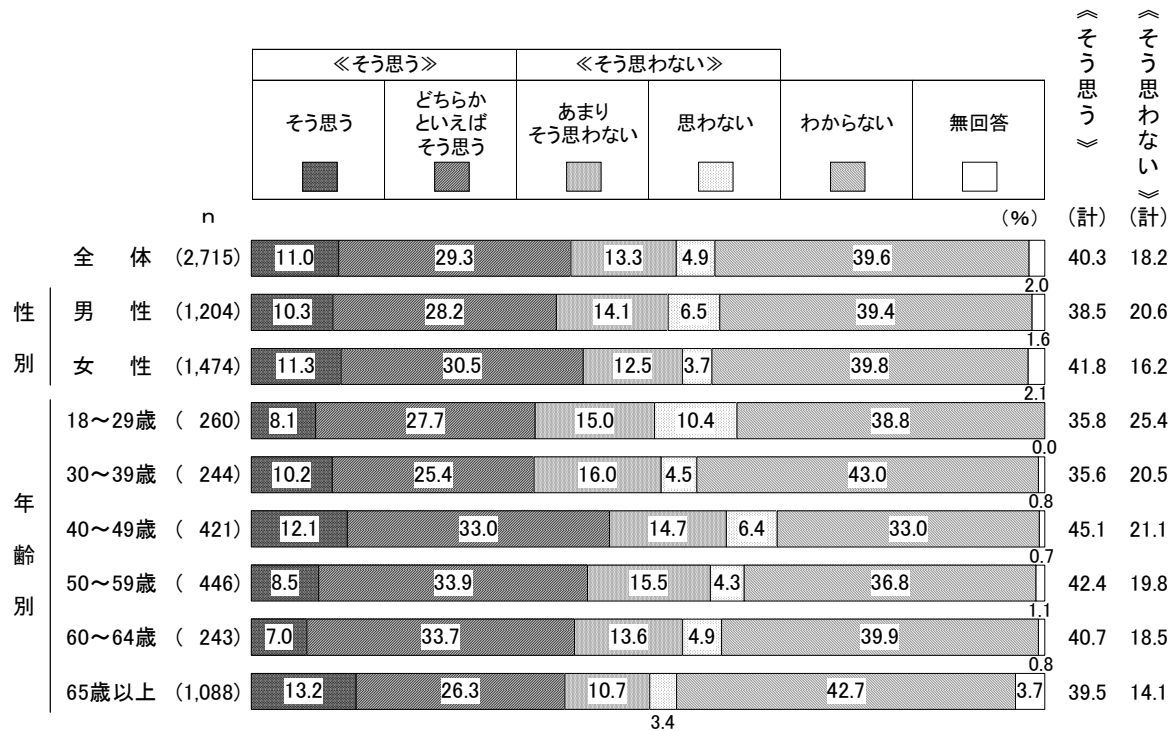
図3-18-1 地域と学校の協力による子どもたちの育みー全体、経年比較



地域と学校が、ともに協力し合って子どもたちを育んでいると思うか聞いたところ、「そう思う」(11.0%)と「どちらかといえばそう思う」(29.3%)を合わせた《《そう思う》》(40.3%)は約4割となっている。一方、「あまりそう思わない」(13.3%)と「思わない」(4.9%)を合わせた《《そう思わない》》(18.2%)は2割近くとなっている。

前回までの調査と比較すると、《《そう思う》》は令和元年(2019年)(44.8%)より4.5ポイント減少している。(図3-18-1)

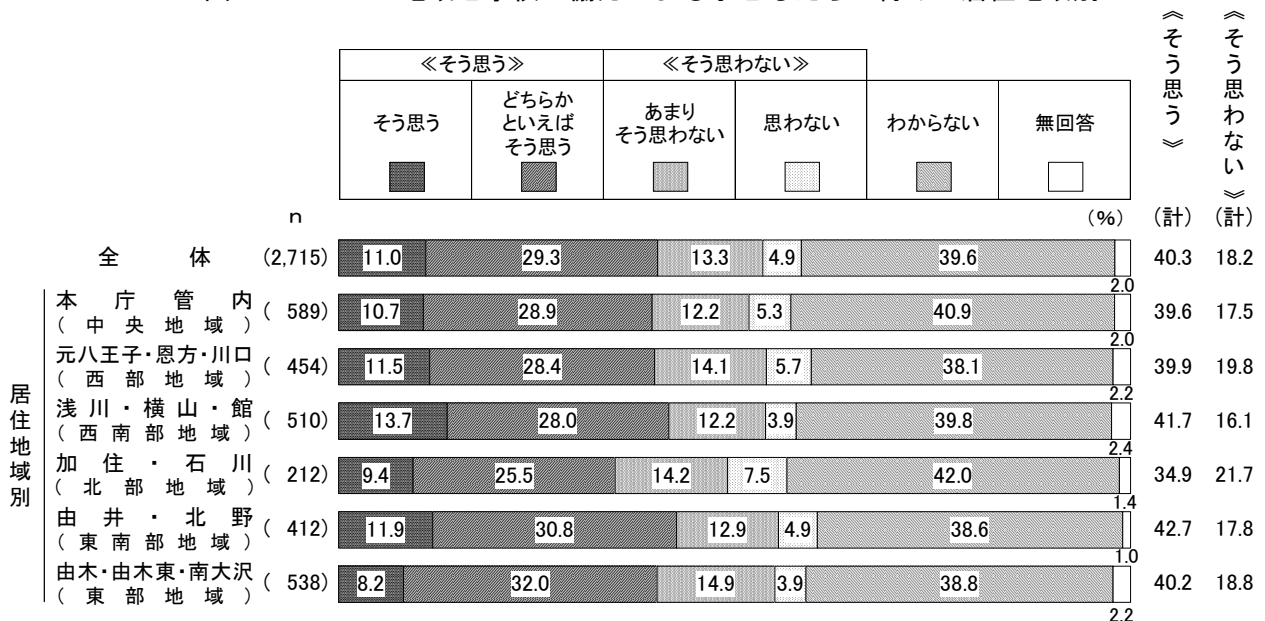
図 3-18-2 地域と学校の協力による子どもたちの育みー性別、年齢別



性別にみると、《そう思う》は女性（41.8％）が男性（38.5％）より3.3ポイント高くなっている。

年齢別にみると、《そう思う》は40～49歳（45.1％）で4割台半ばと多くなっている。一方、《そう思わない》は18～29歳（25.4％）で2割台半ばと多くなっている。（図 3-18-2）

図 3-18-3 地域と学校の協力による子どもたちの育みー居住地域別



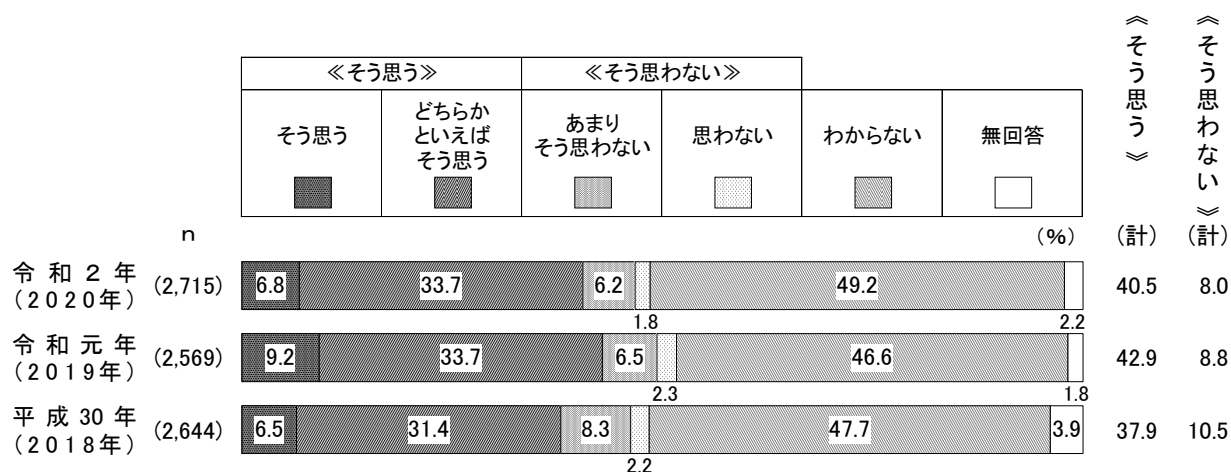
居住地域別にみると、《そう思う》は由井・北野（東南部地域）（42.7％）と浅川・横山・館（西南部地域）（41.7％）で4割強と多くなっている。一方、《そう思わない》は加住・石川（北部地域）（21.7％）で2割強と多くなっている。（図 3-18-3）

(19) 市などの支援による子育ての状況

◇《《そう思う》》が約4割

問28 あなたは、子育てをしている方々が、市などの様々な支援により、安心して子育てができていますか。(○は1つだけ)

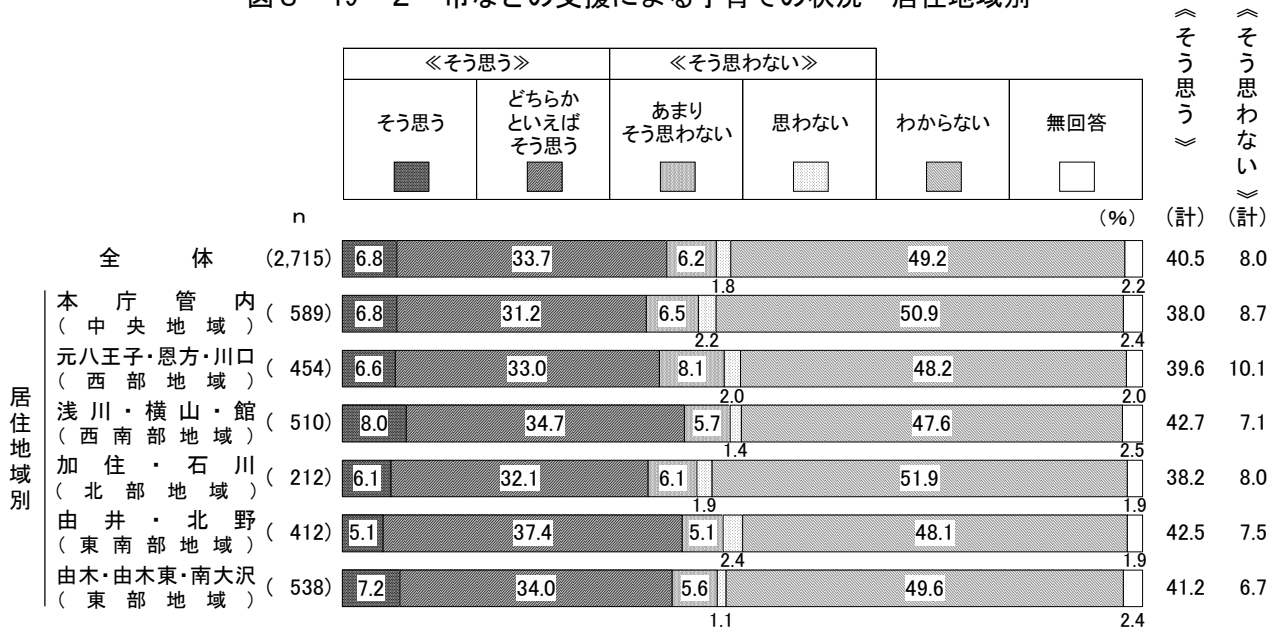
図3-19-1 市などの支援による子育ての状況—全体、経年比較



子育てをしている方々が、市などの様々な支援により、安心して子育てができていますか聞いたところ、「そう思う」(6.8%)と「どちらかといえばそう思う」(33.7%)を合わせた《《そう思う》》(40.5%)は約4割となっている。一方、「あまりそう思わない」(6.2%)と「思わない」(1.8%)を合わせた《《そう思わない》》(8.0%)は1割未満となっている。

前回までの調査と比較すると、《《そう思う》》は令和元年(2019年)(42.9%)より2.4ポイント減少している。(図3-19-1)

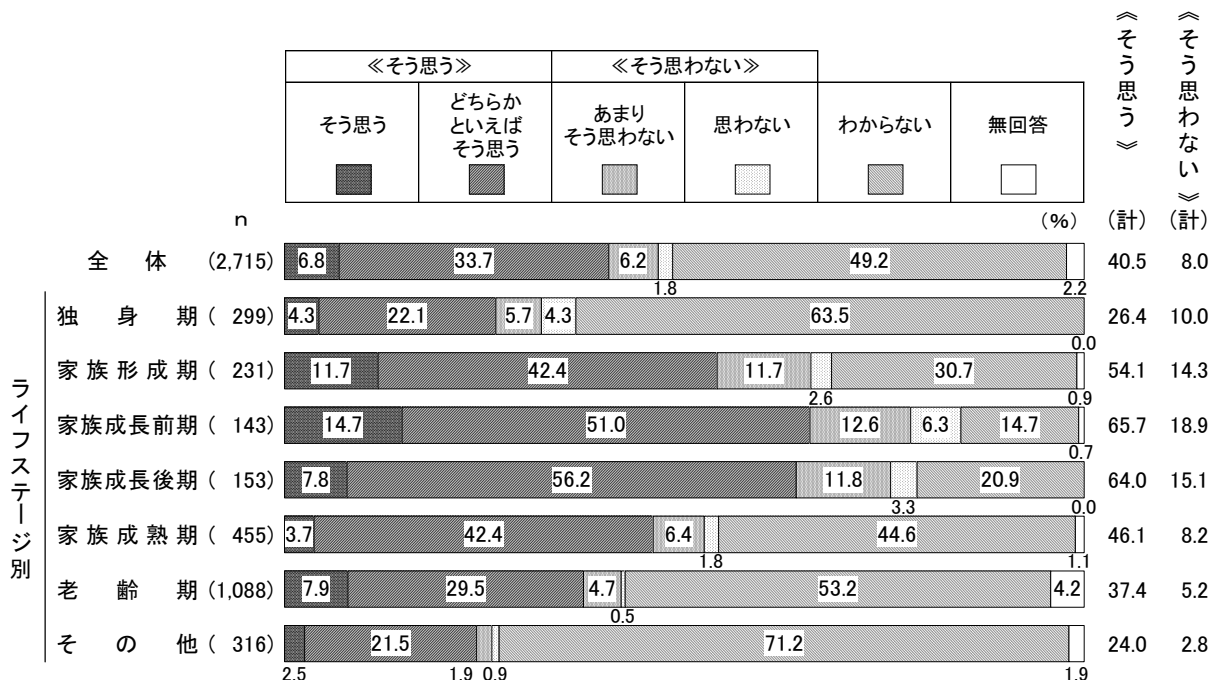
図 3-19-2 市などの支援による子育ての状況－居住地域別



居住地域別にみると、《そう思う》は浅川・横山・館（西南部地域）（42.7%）、由井・北野（東南部地域）（42.5%）、由木・由木東・南大沢（東部地域）（41.2%）で4割強と多くなっている。一方、《そう思わない》は元八王子・恩方・川口（西部地域）（10.1%）で約1割となっている。

（図 3-19-2）

図 3-19-3 市などの支援による子育ての状況－ライフステージ別



ライフステージ別にみると、《そう思う》は家族成長前期（65.7%）と家族成長後期（64.0%）で6割台半ばと多くなっている。一方、《そう思わない》は家族成長前期（18.9%）で2割近くとなっている。（図 3-19-3）

(20) 安心した子育てができていないと思う理由（自由意見）

（問28で「あまりそう思わない」または「思わない」とお答えの方へ）

問28－ 1 そのように感じる理由があれば、以下の欄にご自由にお書きください。（自由記述）

子育てをしている方々が、市などの様々な支援により、安心して子育てができていくのかについて「あまりそう思わない」または「思わない」と答えた217人に、そのように思う理由を自由記述形式で聞いたところ、93人から回答があった。その中から抜粋した意見を掲載した。なお、内容については、記述の趣旨を損なわないように留意しながら一部要約したものがある。

- 出産、子育てに対しての援助や特典が他の市よりもなく、八王子市で出産するメリットが感じられない。（女性18～29歳）
- 安心して子育てができると思う面も多くある。費用や健診等。でも実際は安心して子育てができない面もある。遊び場が少なく、公園でのサッカーも禁止になっている。子育て経験豊富な方や助産師さんと子育ての悩みを聞いたり話したりしたい。（女性30～39歳）
- あまり市から支援されている実感がない。（女性30～39歳）
- 今現在、子育てをしているが、支援はありがたいが安心できてはいないです。（支援があるから≠安心するとは限らないと思います。）コロナの情報などをもっと詳しく教えてほしいし、子供達の学校も地域によって差があるのを改善してほしいです。（みんな平等のはず……）
（女性30～39歳）
- 支援する方法が分かりづらく、手続きも面倒なケースがあるので簡素化出来るのであればなるべくそのようにしてもらいたい。（男性30～39歳）
- 令和2年4月から保育園2歳児クラスに入れようとしたが定員が、いっぱいに入園できないと言われた。保育士の方の少なさや色々な問題もあると思いますが、待機児童を減らすためになんとかしてもらいたいです。（男性30～39歳）
- 八王子市内においても格差が生じてきている。市街から離れれば離れるほど、過疎化してきている。（男性30～39歳）
- 施設数（保育園数等）や人員、資質が充分ではない。（男性30～39歳）
- 遊べる場所が少ないです。また、大通り以外の道路（裏道）では、自動車の一時停止無しや方向指示を出さないといった危険運転が多発し、通学路でさえ危険です。しかし、警察は裏道での取り締まりをしている姿は無く、無法地帯状態です。（女性40～49歳）
- 学童に入りたくても待機になる方もいるので安心して子育てとは言えないように思います。
（女性40～49歳）
- 学童が小3までなので、共働き家族にはツライ。（男性40～49歳）
- 高齢者の支援に比べ手厚くない。特に学童期の子が利用できるサービスが少ない。（男性50～59歳）
- 小・中学校が指定されていない。生活区域外に行っている人が多いため。（女性60～64歳）
- 地域の高齢化で子育て世代が少なく世代間のギャップが大きく、子育てしている方々との接点がない。子育て世代は共働きが多いのか見ていていつもせわしない、ゆとりがない感じがします。
（女性65歳以上）
- 子供達の遊ぶ場が少なく、家の近くでは、禁止場所が多く、どこへ行けばいいの？という感じで走ったり声を出したりも注意されたり、就学前の子は、多目に見てほしい。（女性65歳以上）
- 教育委員会が学校現場のニーズに応える姿勢が見られない。ずっと以前から。（無回答65歳以上）

(21) 市民協働の進捗状況

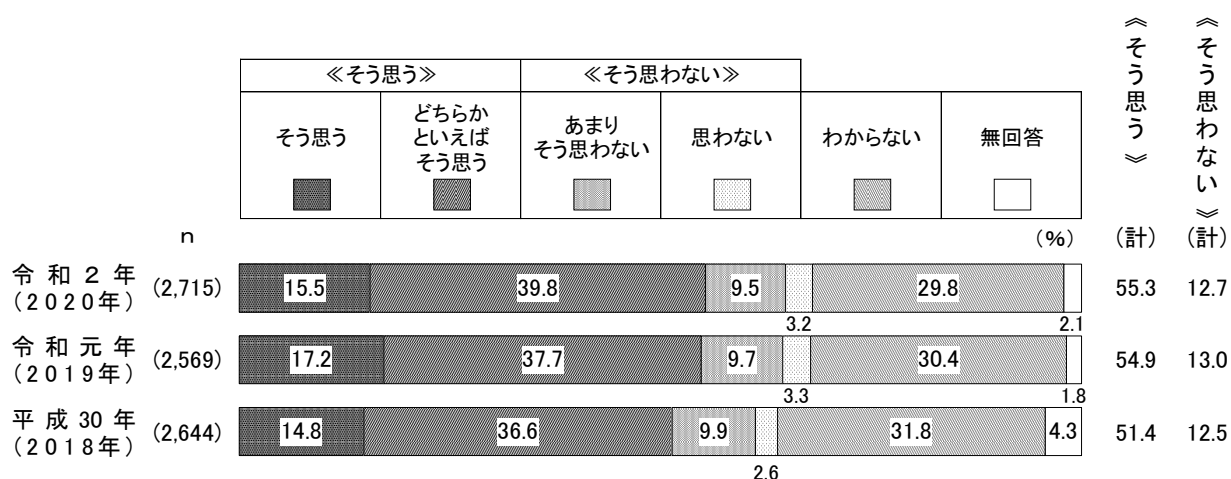
◇《《そう思う》が5割台半ば

問29 あなたは、市が、市民と協力してまちづくりを行う「市民協働」を進めていると思いますか。(〇は1つだけ)

※市民協働によるまちづくりとは・・・

- 八王子まつり、いちょう祭り、環境フェスティバルなどを市民と市が協力して開催
- 町会・自治会等が主体となって行う防犯・防災活動や環境美化活動
- 公園や道路の維持活動（清掃や除草などのボランティア活動）を地域の住民の方が担うアドプト制度
- 各種審議会や市の計画策定などに参加していただく市民委員の公募
- 計画、条例等の作成過程におけるパブリックコメント（意見募集）の実施 など

図3-21-1 市民協働の進捗状況－全体、経年比較

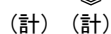


市が、市民と協力してまちづくりを行う「市民協働」を進めていると思うか聞いたところ、「そう思う」(15.5%)と「どちらかといえばそう思う」(39.8%)を合わせた《《そう思う》》(55.3%)は5割台半ばとなっている。一方、「あまりそう思わない」(9.5%)と「思わない」(3.2%)を合わせた《《そう思わない》》(12.7%)は1割強となっている。

前回までの調査と比較すると、令和元年(2019年)と大きな傾向の違いはみられない。

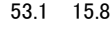
(図3-21-1)

《そう思う》
(計)



55.3 12.7

00.0 12.7



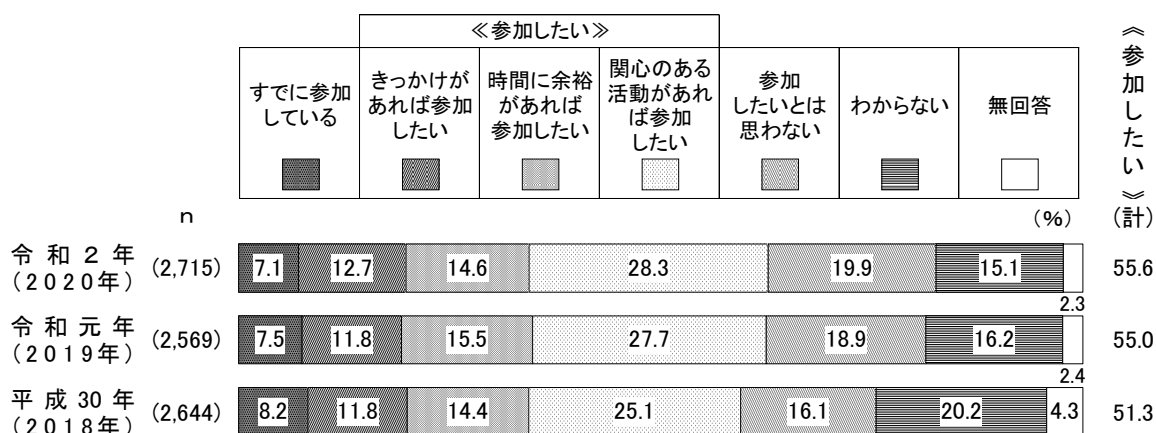
570 104

(22) 市民協働によるまちづくりへの参加意向

◇《参加したい》が5割台半ば

問30 あなたは、問29で例示したような市民協働によるまちづくりに参加したいと思いますか。(○は1つだけ)

図3-22-1 市民協働によるまちづくりへの参加意向－全体、経年比較

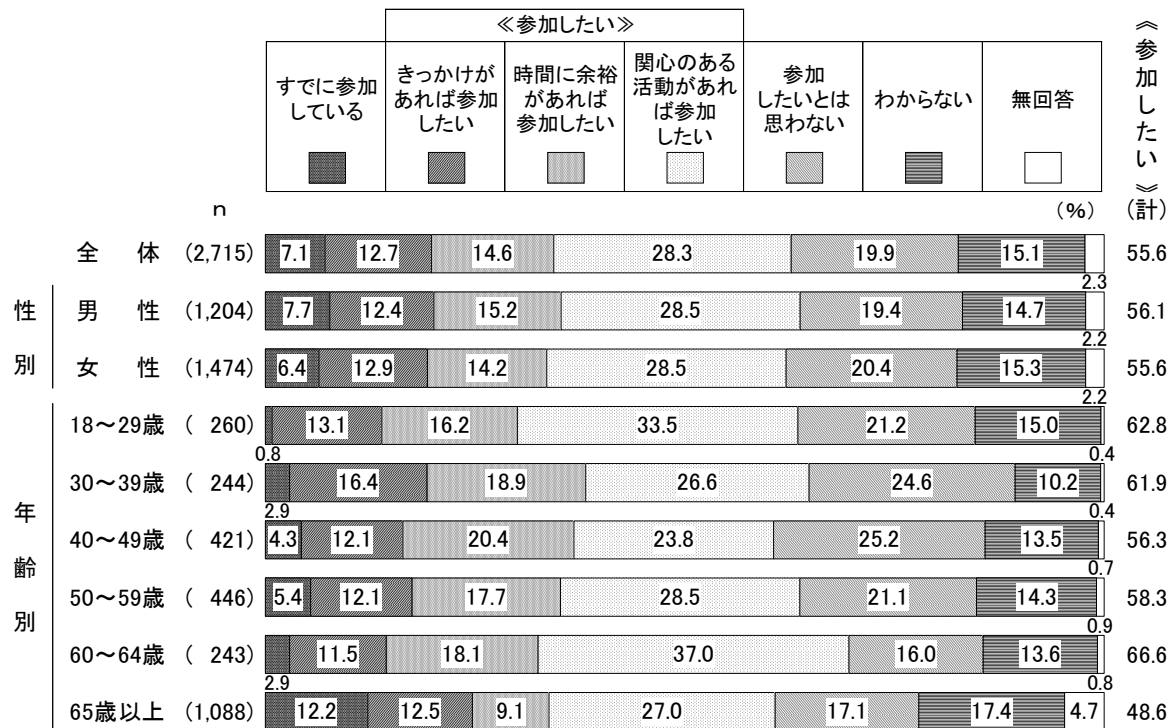


市民協働によるまちづくりに参加したいと思うか聞いたところ、「すでに参加している」(7.1%)は1割未満となっている。また、「きっかけがあれば参加したい」(12.7%)、「時間に余裕があれば参加したい」(14.6%)、「関心のある活動があれば参加したい」(28.3%)の3つを合わせた《参加したい》(55.6%)は5割台半ばとなっている。一方、「参加したいとは思わない」(19.9%)は2割弱となっている。

前回までの調査と比較すると、令和元年(2019年)と大きな傾向の違いはみられない。

(図3-22-1)

図 3-22-2 市民協働によるまちづくりへの参加意向－性別、年齢別

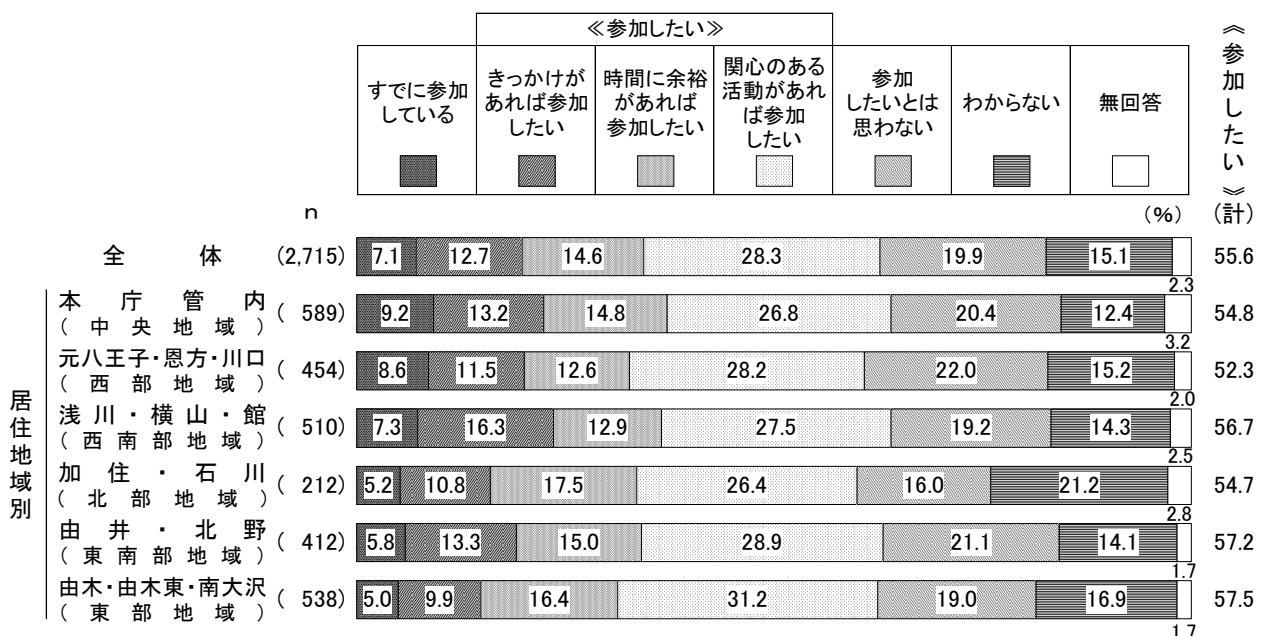


性別にみると、大きな傾向の違いはみられない。

年齢別にみると、《参加したい》は60～64歳（66.6%）で7割近くと多くなっている。

(図 3-22-2)

図 3-22-3 市民協働によるまちづくりへの参加意向－居住地域別



居住地域別にみると、《参加したい》は由木・由木東・南大沢（東部地域）（57.5%）、由井・北野（東南部地域）（57.2%）、浅川・横山・館（西南部地域）（56.7%）で6割近くと多くなっている。（図 3-22-3）

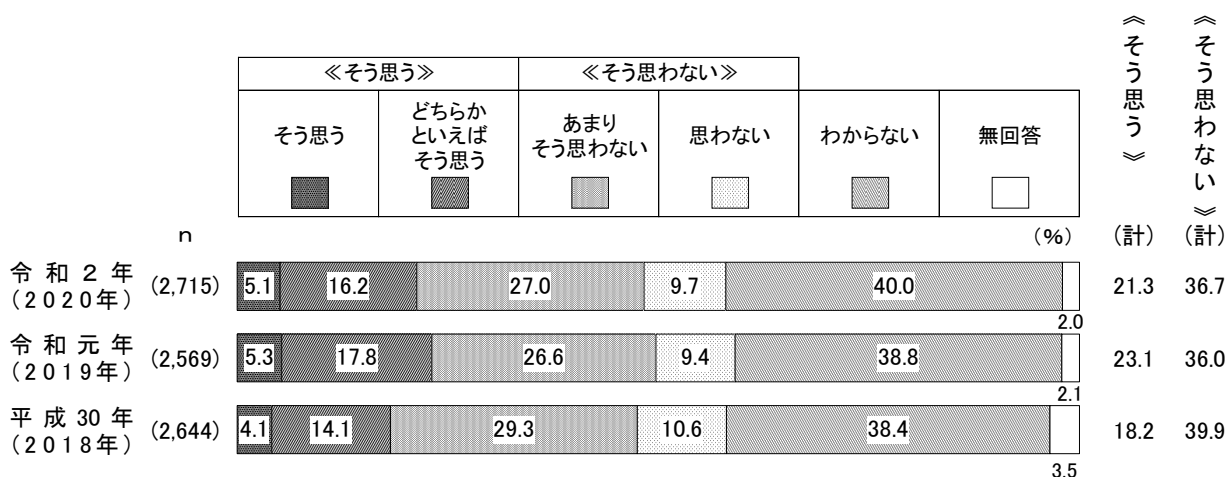
(23) 大学等のまちづくりへの活用

◇《《そう思う》が2割強

問31 あなたは、市内およびその周辺地域に立地している大学・短大・高等専門学校の高度な専門的知識や学生の活力が、まちづくりに活かされていると思いますか。

(○は1つだけ)

図3-23-1 大学等のまちづくりへの活用－全体、経年比較

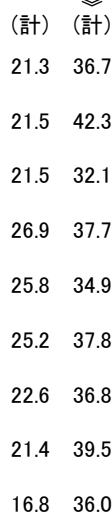


大学・短大・高等専門学校の高度な専門的知識や学生の活力がまちづくりに活かされていると思うか聞いたところ、「そう思う」(5.1%)と「どちらかといえばそう思う」(16.2%)を合わせた《《そう思う》》(21.3%)は2割強となっている。一方、「あまりそう思わない」(27.0%)と「思わない」(9.7%)を合わせた《《そう思わない》》(36.7%)は4割近くとなっている。

前回までの調査と比較すると、令和元年(2019年)と大きな傾向の違いはみられない。

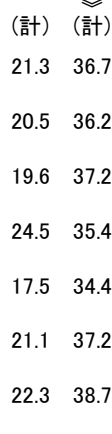
(図3-23-1)

《そう思う》
(計)



年齢別にみると、《そう思う》は18～29歳（26.9%）で3割近くと多くなっている。一方、《そう思わない》は60～64歳（39.5%）で4割弱と多くなっている。（図3-23-2）

《そう思う》
(計)



– 128 –

(24) この1年間の文化芸術活動への参加頻度

◇「半年に1～2回程度」が1割台半ば

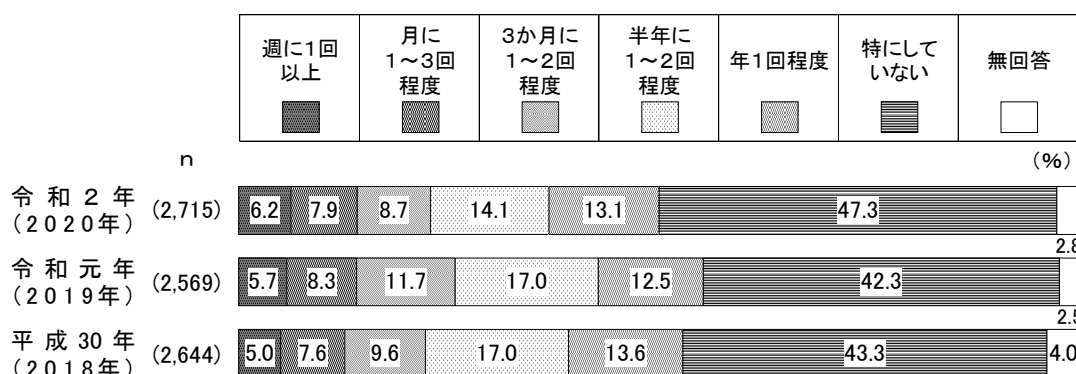
問32 あなたは、この1年間に、どのくらいの頻度で文化芸術活動に参加（観賞も含みます）しましたか。（○は1つだけ）

※文化芸術活動とは・・・

- 音楽（オペラ、オーケストラ、合唱、吹奏楽、ジャズなど）
- ポップス（J-POP（日本の若者向けポピュラー音楽）など）
- 美術（絵画、版画、彫刻、工芸、陶芸、書、写真など）
- メディア芸術（映画、マンガ、アニメーション、メディアアートなど）
- 伝統芸能（歌舞伎、落語、車人形、雅楽、能楽など）
- 歴史的な建物や遺跡（建造物、史跡、名勝など）
- 文学（小説、詩、短歌、俳句など）
- 生活文化（茶道、華道、書道、囲碁、将棋など）
- 演劇（現代演劇、ミュージカル、人形劇など）
- 舞踊（日本舞踊、バレエ、コンテンポラリーダンスなど）
- 芸能（落語、講談、浪曲、漫才など）

など

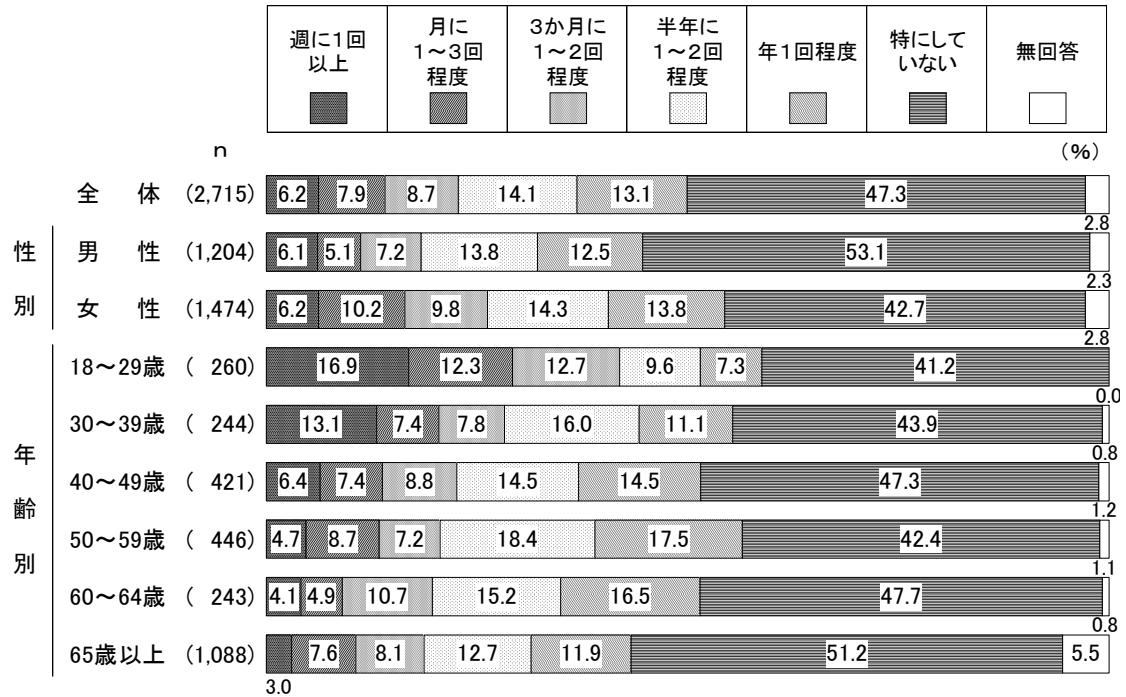
図3-24-1 この1年間の文化芸術活動への参加頻度－全体、経年比較



この1年間にどのくらいの頻度で文化芸術活動に参加したか聞いたところ、「半年に1～2回程度」(14.1%)が1割台半ば、「年1回程度」(13.1%)は1割強となっている。一方、「特にしていない」(47.3%)は5割近くとなっている。

前回までの調査と比較すると、「特にしていない」は令和元年(2019年)(42.3%)より5.0ポイント増加している。一方、「3か月に1～2回程度」は令和元年(2019年)(11.7%)より3.0ポイント、「半年に1～2回程度」は令和元年(2019年)(17.0%)より2.9ポイント、それぞれ減少している。(図3-24-1)

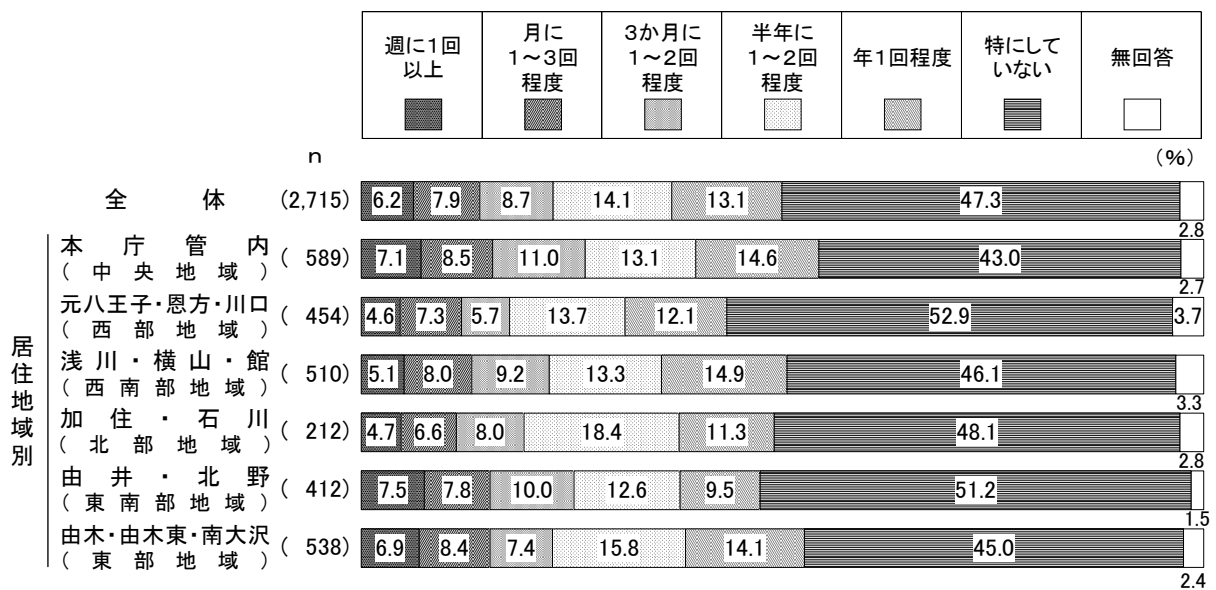
図 3-24-2 この1年間の文化芸術活動への参加頻度－性別、年齢別



性別にみると、「特にしていない」は男性（53.1%）が女性（42.7%）より10.4ポイント高くなっている。一方、「月に1～3回程度」は女性（10.2%）が男性（5.1%）より5.1ポイント高くなっている。

年齢別にみると、「週に1回以上」は18～29歳（16.9%）で2割近くとなっている。一方、「特にしていない」は65歳以上（51.2%）で5割強と多くなっている。（図3-24-2）

図 3-24-3 この1年間の文化芸術活動への参加頻度－居住地域別



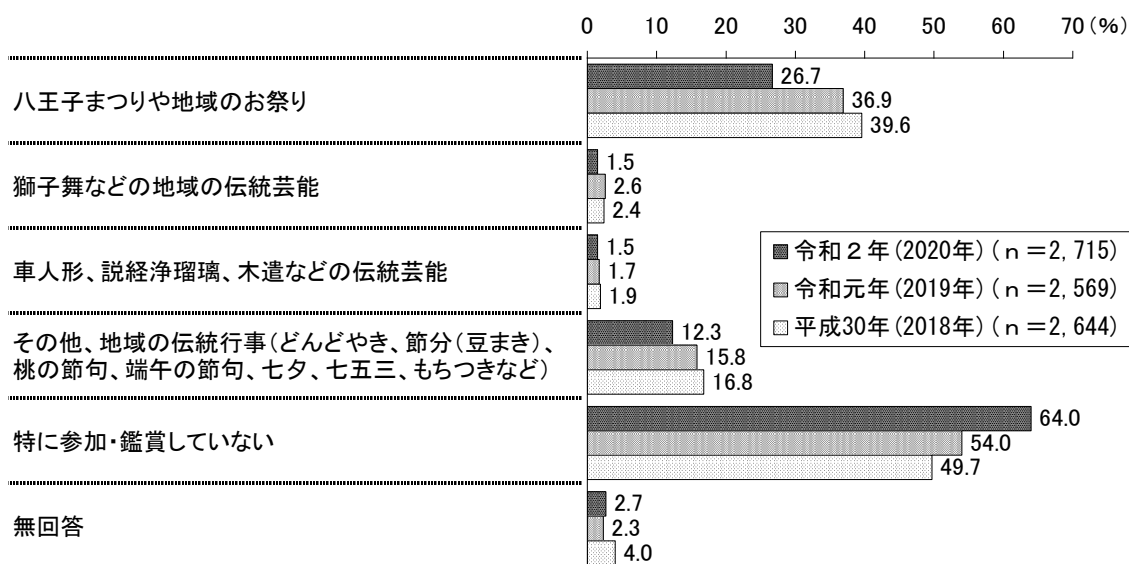
居住地域別にみると、「特にしていない」は元八王子・恩方・川口（西部地域）（52.9%）と由井・北野（東南部地域）（51.2%）で5割強と多くなっている。（図3-24-3）

(25) この1年間の地域の伝統行事や伝統芸能への参加状況

◇「八王子まつりや地域のお祭り」が3割近く

問33 あなたは、この1年間に、次のような地域の伝統行事や伝統芸能に参加（鑑賞も含みます）しましたか。（〇はいくつでも）

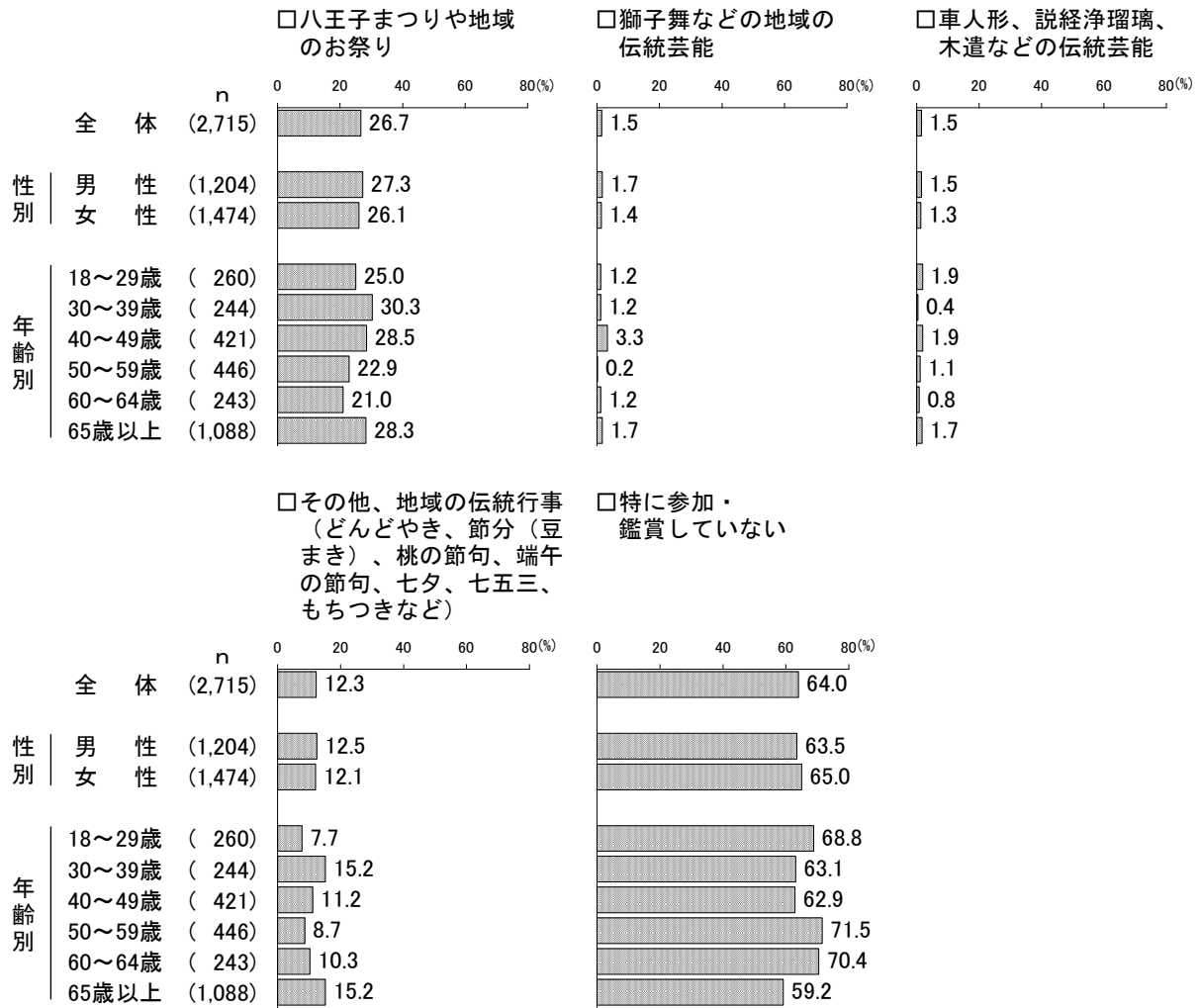
図3-25-1 この1年間の地域の伝統行事や伝統芸能への参加状況－全体、経年比較



この1年間に地域の伝統行事や伝統芸能に参加したか聞いたところ、「八王子まつりや地域のお祭り」(26.7%)が3割近くで最も多くなっている。次いで「その他、地域の伝統行事(どんどこやき、節分(豆まき)、桃の節句、端午の節句、七夕、七五三、もちつきなど)」(12.3%)、「獅子舞などの地域の伝統芸能」(1.5%)、「車人形、説経浄瑠璃、木遣などの伝統芸能」(1.5%)の順となっている。一方、「特に参加・鑑賞していない」(64.0%)は6割台半ばとなっている。

前回までの調査と比較すると、「八王子まつりや地域のお祭り」は令和元年(2019年)(36.9%)より10.2ポイント減少している。(図3-25-1)

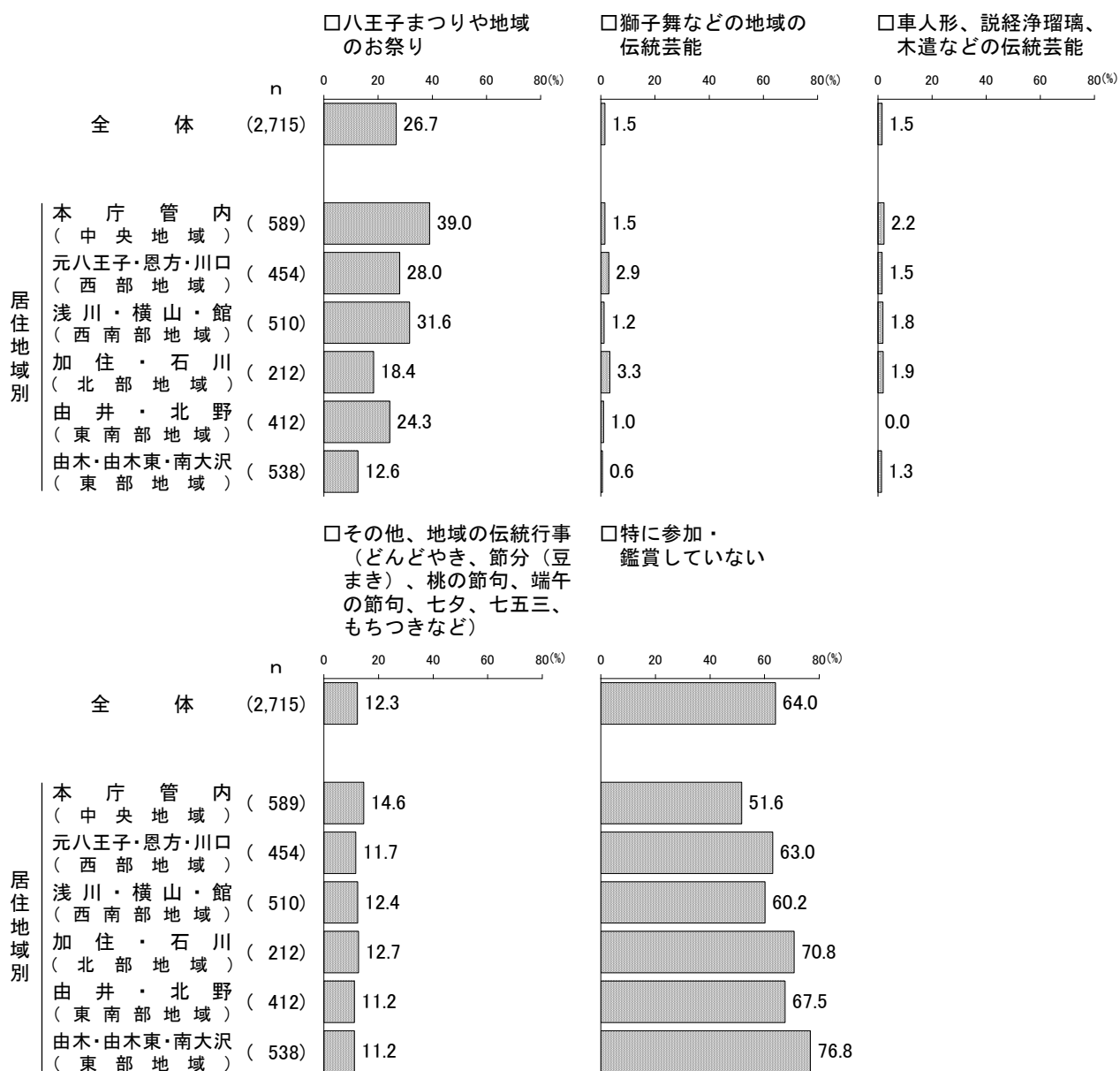
図 3-25-2 この 1 年間の地域の伝統行事や伝統芸能への参加状況－性別、年齢別



性別にみると、大きな傾向の違いはみられない。

年齢別にみると、「八王子まつりや地域のお祭り」は30～39歳（30.3%）で約3割と多くなっている。一方、「特に参加・鑑賞していない」は50～59歳（71.5%）で7割強、60～64歳（70.4%）で約7割と多くなっている。（図 3-25-2）

図3-25-3 この1年間の地域の伝統行事や伝統芸能への参加状況－居住地域別



居住地域別にみると、「八王子まつりや地域のお祭り」は本庁管内（中央地域）（39.0％）で4割弱と多くなっている。一方、「特に参加・鑑賞していない」は由木・由木東・南大沢（東部地域）（76.8％）で8割近くと多くなっている。（図3-25-3）

(26) 海外友好交流都市の周知度

◇《知っている》が約4割

問34 あなたは、市が海外友好交流都市との交流を進めていることを知っていますか。

(○は1つだけ)

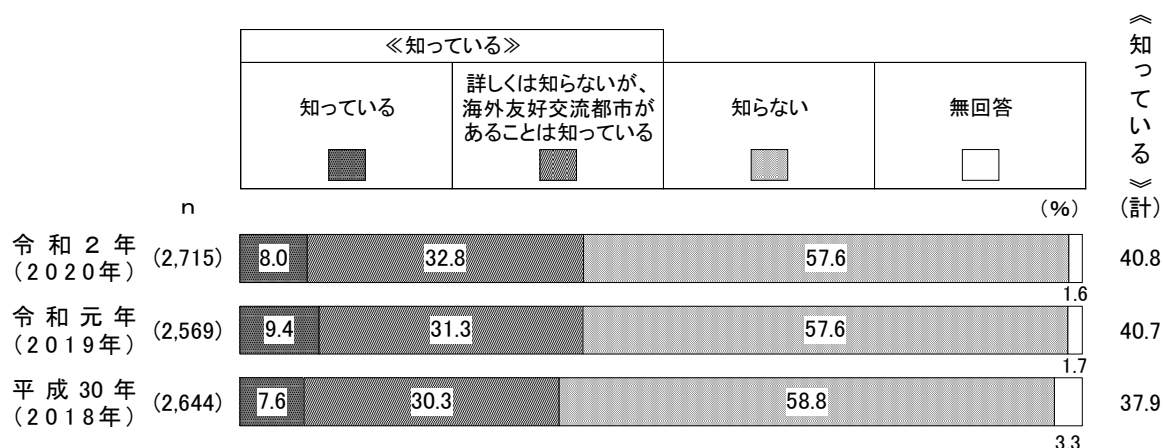
※「海外友好交流都市との交流」とは・・・

○ 平成18年(2006年)の市制施行90周年を機に、幅広い市民交流が実現できるよう、市は中国・泰安(たいあん)市、台湾・高雄(たかお)市、韓国・始興(しふん)市の3都市との間で友好交流協定を締結し、文化・教育・スポーツなど様々な面で交流を実施しています。

交流実績：海外友好交流都市写真展、八王子まつりへの出演、サッカー交流 など

○また、市制100周年の節目である平成29年(2017年)に、本市中町出身の医師・肥沼 信次(こえぬまのぶつぐ)博士ゆかりのドイツ・ヴリーツェン市と新たな友好交流協定を締結しました。

図3-26-1 海外友好交流都市の周知度－全体、経年比較

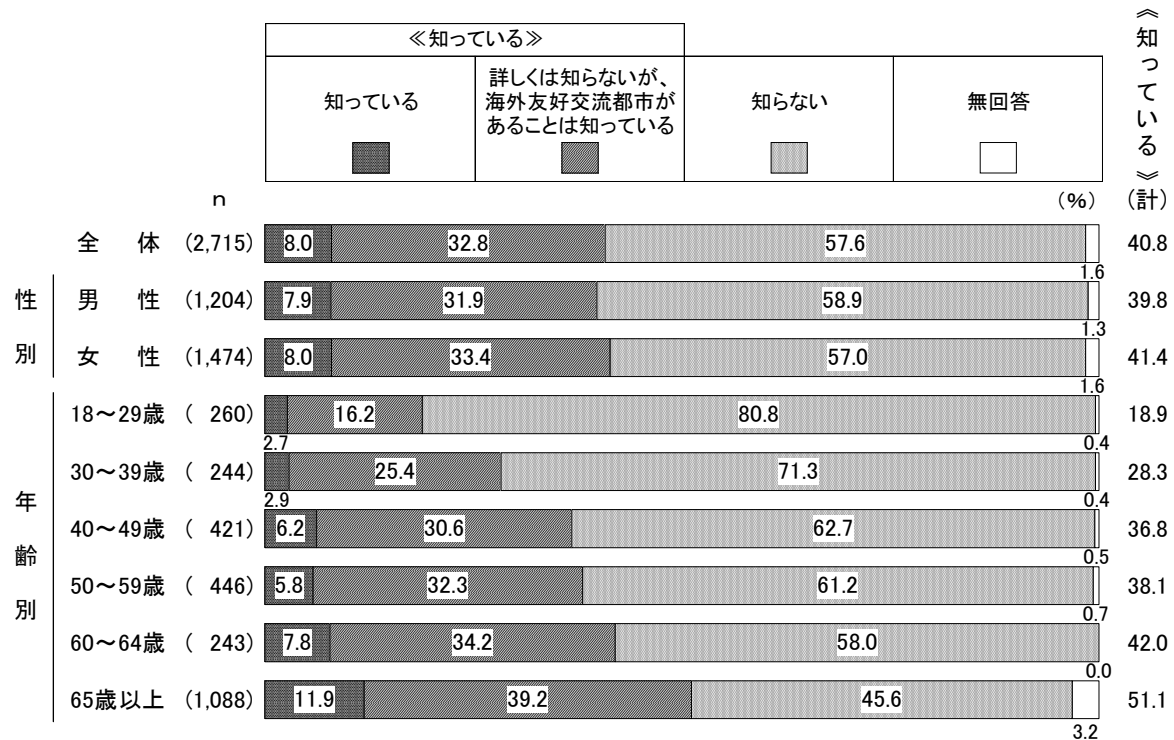


市が海外友好交流都市との交流を進めていることを知っているか聞いたところ、「知っている」(8.0%)と「詳しくは知らないが、海外友好交流都市があることは知っている」(32.8%)を合わせた《知っている》(40.8%)は約4割となっている。一方、「知らない」(57.6%)は6割近くとなっている。

前回までの調査と比較すると、令和元年(2019年)と大きな傾向の違いはみられない。

(図3-26-1)

図 3-26-2 海外友好交流都市の周知度－性別、年齢別

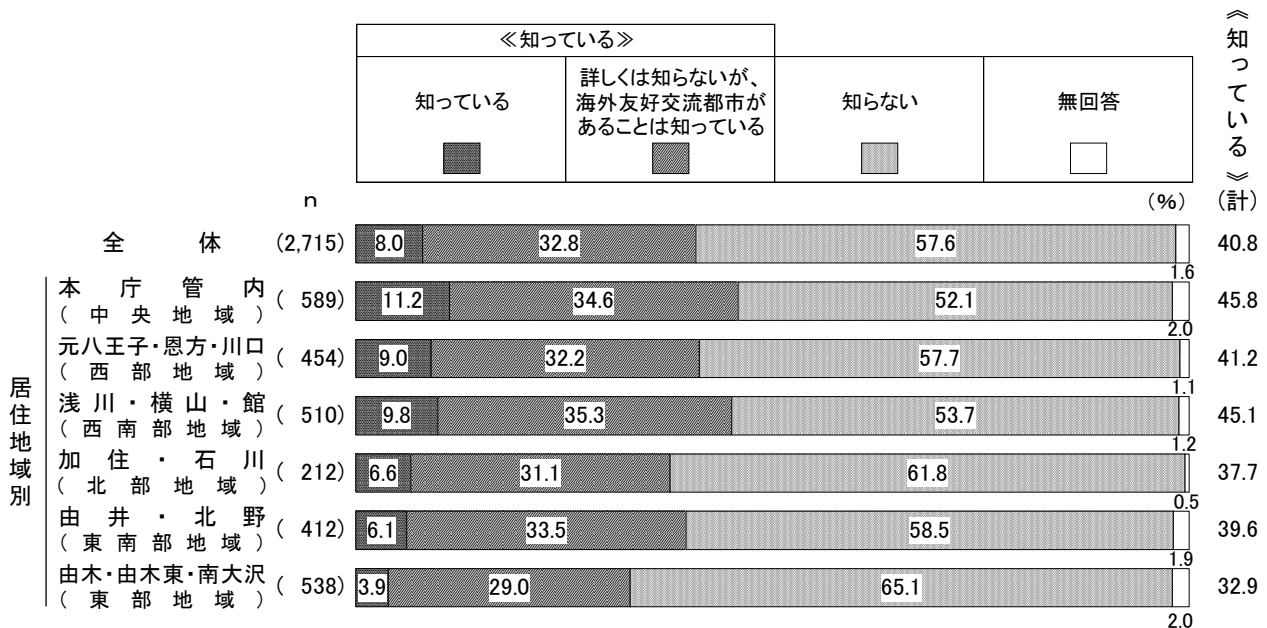


性別にみると、大きな傾向の違いはみられない。

年齢別にみると、《知っている》は年代が高くなるほど割合が高く、65歳以上（51.1％）で5割強と多くなっている。一方、「知らない」は18～29歳（80.8％）で約8割と多くなっている。

(図 3-26-2)

図 3-26-3 海外友好交流都市の周知度－居住地域別



居住地域別にみると、《知っている》は本庁管内（中央地域）（45.8％）と浅川・横山・館（西南部地域）（45.1％）で4割台半ばと多くなっている。（図 3-26-3）

(27) 障害のある方への理解や配慮

◇《《している》》が7割弱

問35 あなたは、日ごろ障害のある方に対して、理解や適切な配慮をしていますか。

(○は1つだけ)

※「適切な配慮」とは・・・

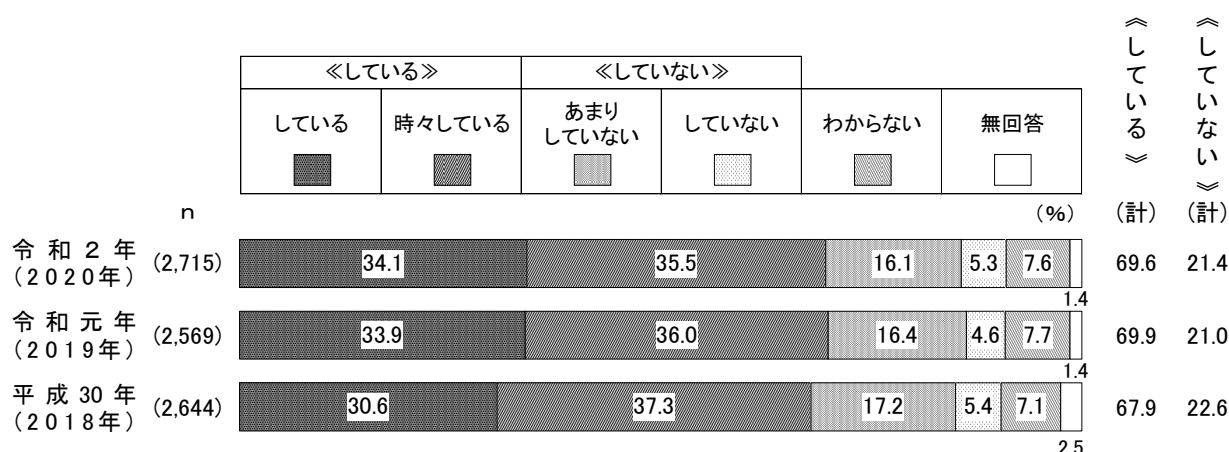
○困っている様子の方を見かけたら、声をかける。

○ゆっくりわかりやすく話すなどしたり、筆談したりするなど障害特性に応じたわかりやすいコミュニケーションの方法に心配りする。

○優先席、思いやり駐車スペース、点字ブロックなどを必要としている方の妨げにならないように配慮する。(聴覚障害、内部障害、難病など、外見からは障害がわかりにくい方々もいます。)

など

図3-27-1 障害のある方への理解や配慮－全体、経年比較

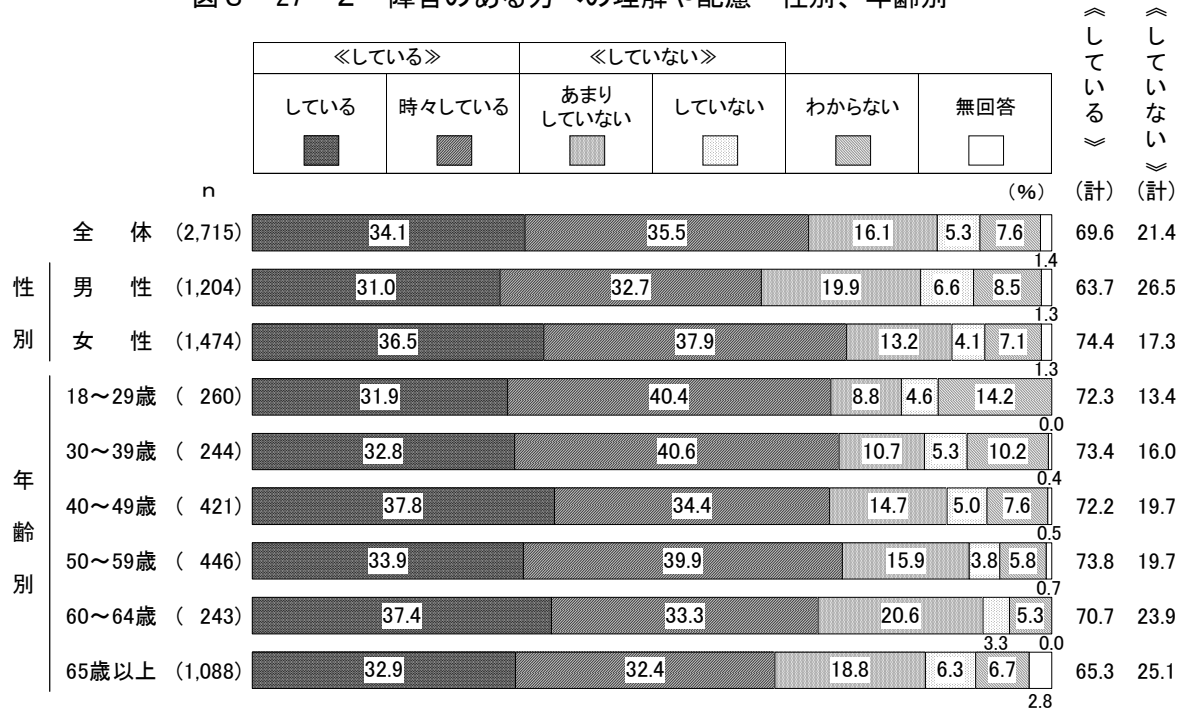


日ごろ、障害のある方に対して、理解や適切な配慮をしているか聞いたところ、「している」(34.1%)と「時々している」(35.5%)を合わせた《《している》》(69.6%)は7割弱となっている。一方、「あまりしていない」(16.1%)と「していない」(5.3%)を合わせた《《していない》》(21.4%)は2割強となっている。

前回までの調査と比較すると、令和元年(2019年)と大きな傾向の違いはみられない。

(図3-27-1)

図 3-27-2 障害のある方への理解や配慮－性別、年齢別

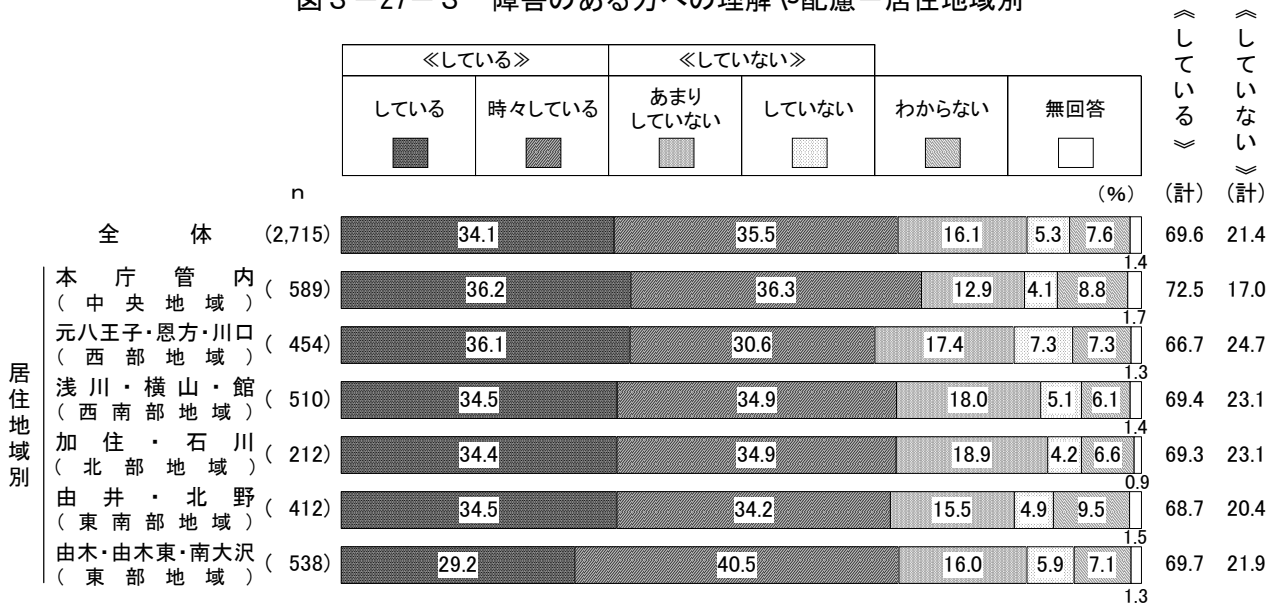


性別にみると、《している》は女性（74.4%）が男性（63.7%）より10.7ポイント高くなっている。

年齢別にみると、《していない》は65歳以上（25.1%）で2割台半ばと多くなっている。

(図 3-27-2)

図 3-27-3 障害のある方への理解や配慮－居住地域別



居住地域別にみると、《している》は本庁管内（中央地域）（72.5%）で7割強と多くなっている。一方、《していない》は元八王子・恩方・川口（西部地域）（24.7%）で2割台半ばと多くなっている。（図 3-27-3）

(28) 高齢者あんしん相談センターの周知度

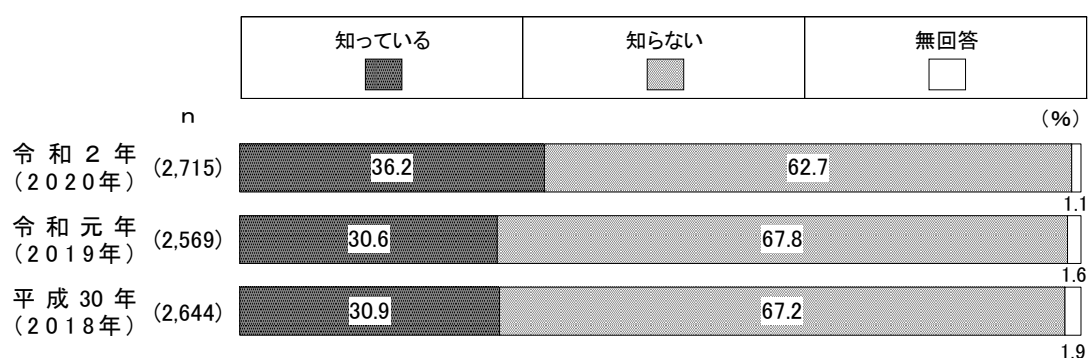
◇「知っている」が4割近く

問36 あなたは、「高齢者あんしん相談センター」を知っていますか。(○は1つだけ)

※高齢者あんしん相談センターとは・・・

高齢者が住み慣れた地域でいつまでも自分らしく暮らせるよう、地域の身近な相談窓口として市内に17か所設置している施設です。介護保険法に規定された地域包括支援センターのことで、八王子市では親しみやすいこの愛称を付けています。

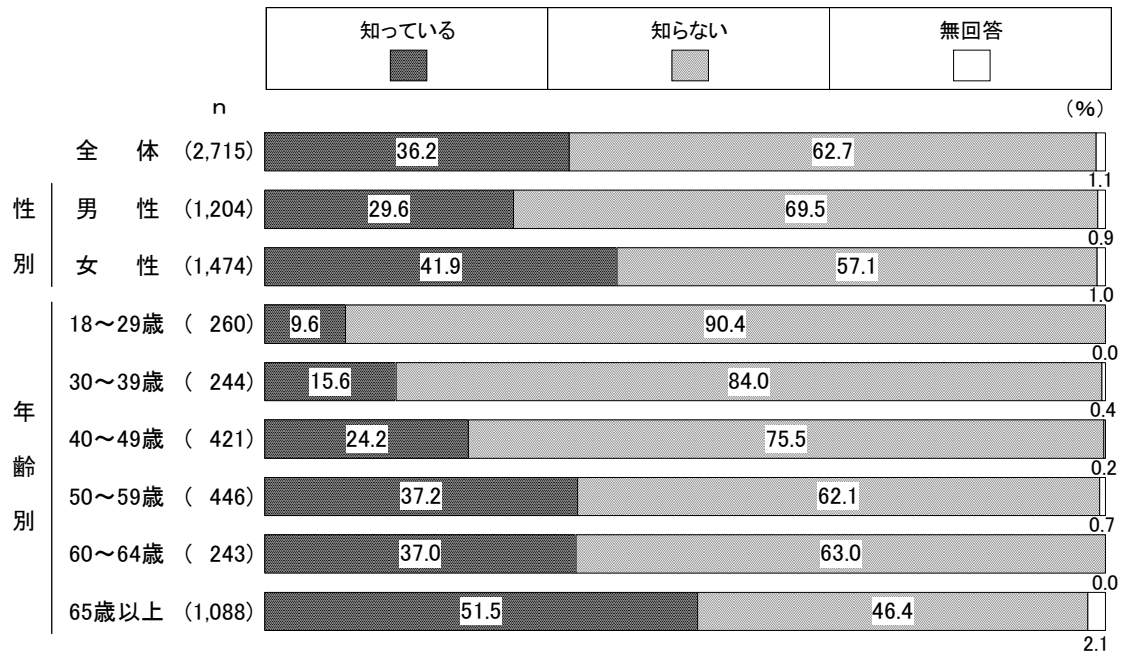
図3-28-1 高齢者あんしん相談センターの周知度－全体、経年比較



高齢者あんしん相談センターを知っているか聞いたところ、「知っている」(36.2%)が4割近く、「知らない」(62.7%)は6割強となっている。

前回までの調査と比較すると「知っている」は令和元年(2019年)(30.6%)より5.6ポイント増加している。(図3-28-1)

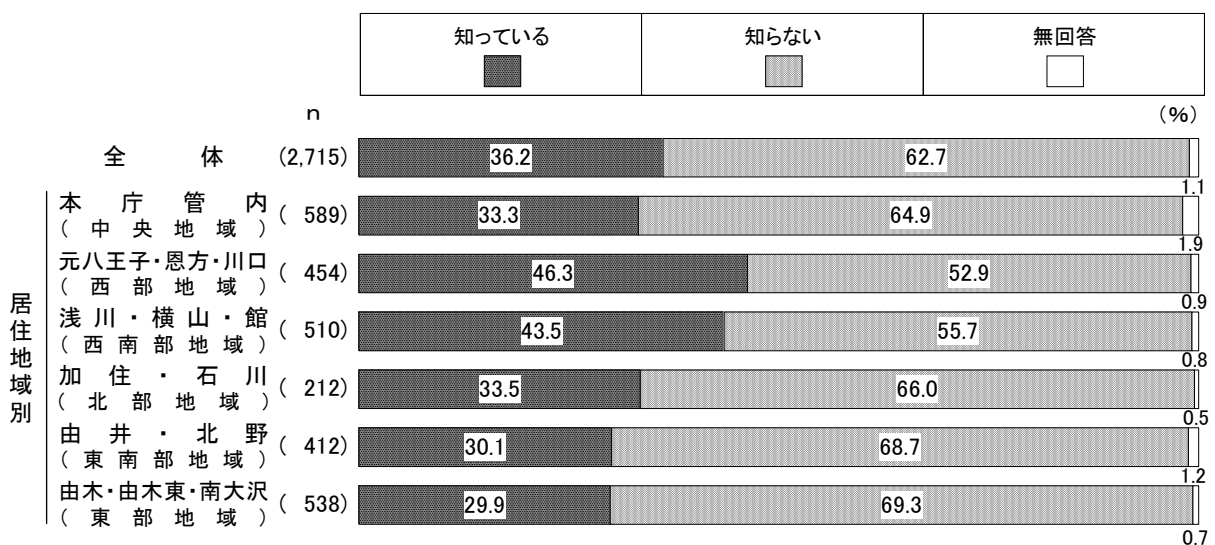
図 3-28-2 高齢者あんしん相談センターの周知度－性別、年齢別



性別にみると、「知っている」は女性（41.9%）が男性（29.6%）より12.3ポイント高くなっている。

年齢別にみると、「知っている」はおおむね年代が高くなるほど割合が高く、65歳以上（51.5%）で5割強と多くなっている。一方、「知らない」は18～29歳（90.4%）で約9割と多くなっている。
(図 3-28-2)

図 3-28-3 高齢者あんしん相談センターの周知度－居住地域別



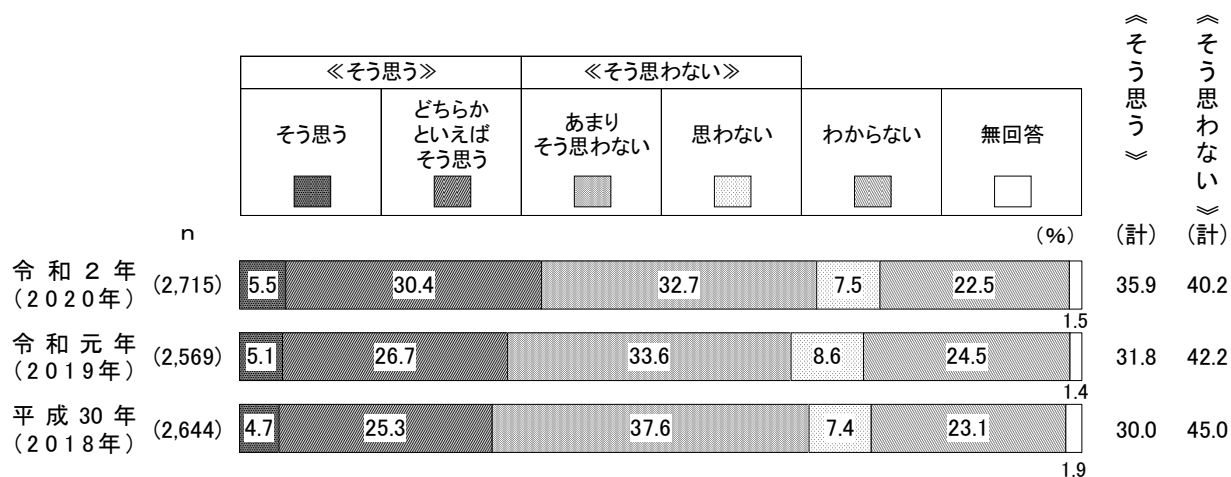
居住地域別にみると、「知っている」は元八王子・恩方・川口（西部地域）（46.3%）で5割近くと多くなっている。一方、「知らない」は由木・由木東・南大沢（東部地域）（69.3%）で7割弱と多くなっている。(図 3-28-3)

(29) 誰もが安全で快適に暮らせるまち

◇《《そう思う》》が3割台半ば

問37 あなたは、市内の道路、公共・民間施設、交通機関などにおいて、高齢者や障害者、子ども連れなど誰もが安全で快適に移動したり、施設を利用したりできるまちになっていると思いますか。(〇は1つだけ)

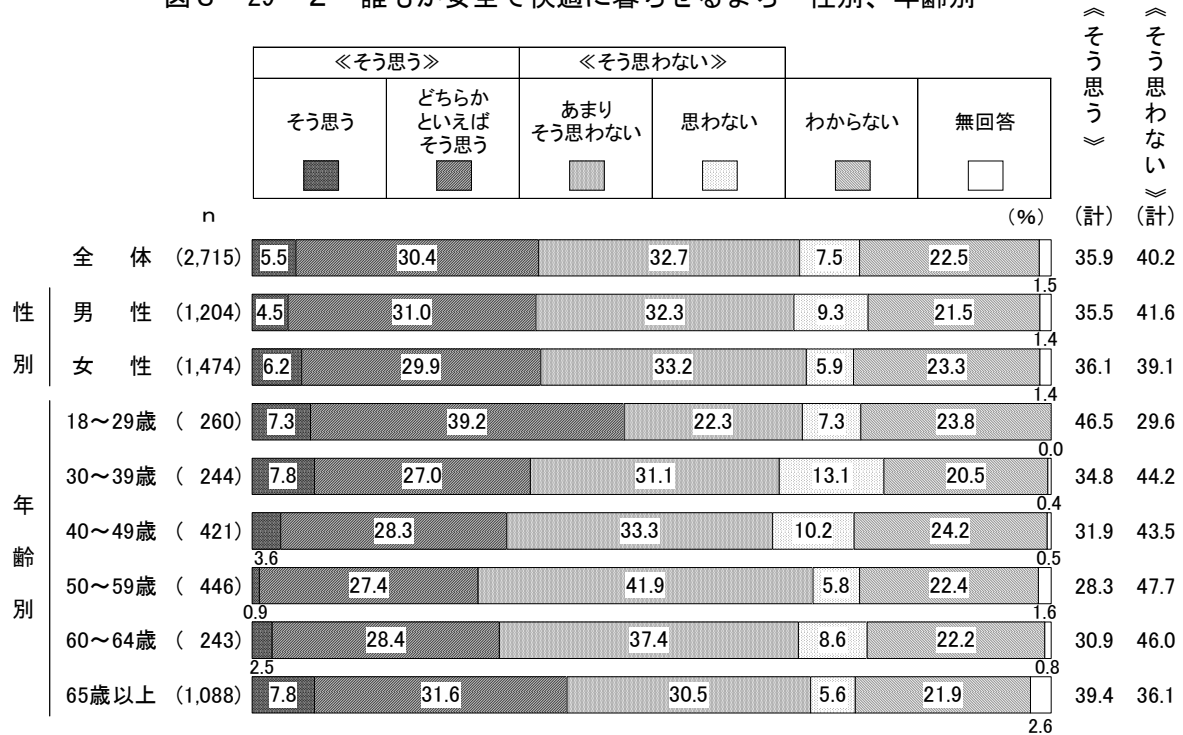
図3-29-1 誰もが安全で快適に暮らせるまち－全体、経年比較



市内の道路、公共・民間施設、交通機関などにおいて、高齢者や障害者、子ども連れなど誰もが安全で快適に移動したり、施設を利用したりできるまちになっていると思うか聞いたところ、「そう思う」(5.5%)と「どちらかといえばそう思う」(30.4%)を合わせた《《そう思う》》(35.9%)は3割台半ばとなっている。一方、「あまりそう思わない」(32.7%)と「思わない」(7.5%)を合わせた《《そう思わない》》(40.2%)は約4割となっている。

前回までの調査と比較すると、《《そう思う》》は令和元年(2019年)(31.8%)より4.1ポイント増加している。(図3-29-1)

図3-29-2 誰もが安全で快適に暮らせるまち—性別、年齢別

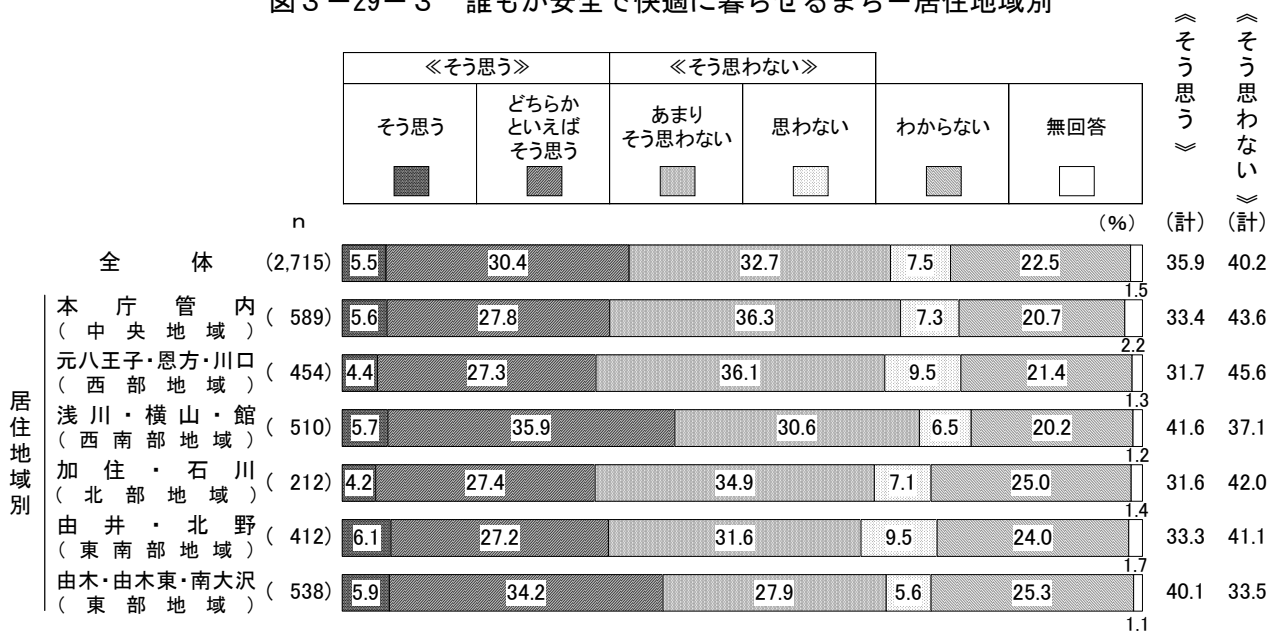


性別にみると、《《そう思わない》》は男性（41.6％）が女性（39.1％）より2.5ポイント高くなっている。

年齢別にみると、《《そう思う》》は18～29歳（46.5％）で5割近くと多くなっている。一方、《《そう思わない》》は50～59歳（47.7％）と60～64歳（46.0％）で5割近くと多くなっている。

(図3-29-2)

図3-29-3 誰もが安全で快適に暮らせるまち—居住地域別



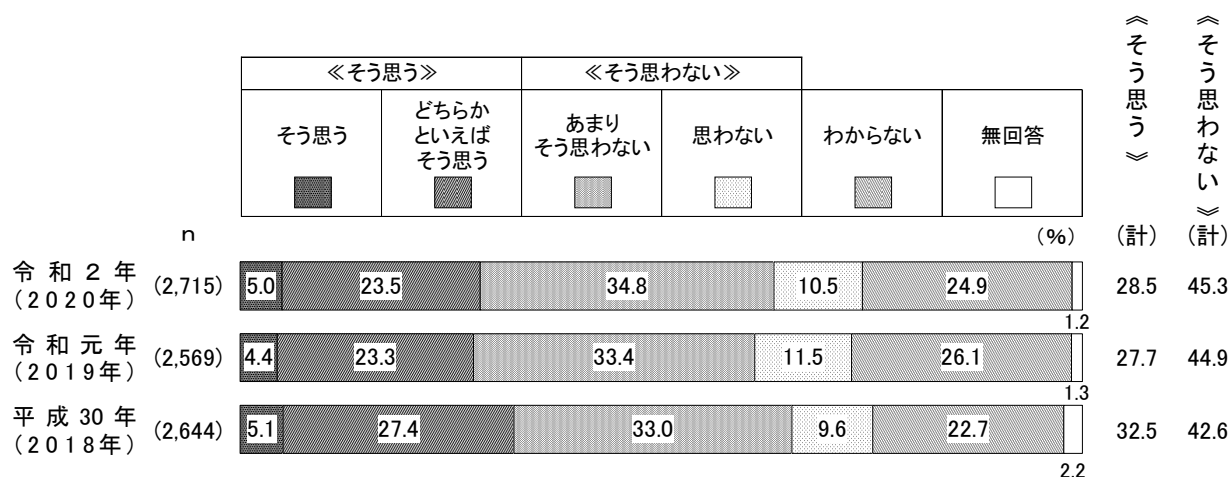
居住地域別にみると、《《そう思う》》は浅川・横山・館（西南部地域）（41.6％）で4割強と多くなっている。一方、《《そう思わない》》は元八王子・恩方・川口（西部地域）（45.6％）で4割台半ばと多くなっている。(図3-29-3)

(30) 市内の交通渋滞緩和

◇《《そう思う》》が3割近く

問38 あなたは、市内の交通渋滞が緩和されていると思いますか。(○は1つだけ)

図3-30-1 市内の交通渋滞緩和—全体、経年比較

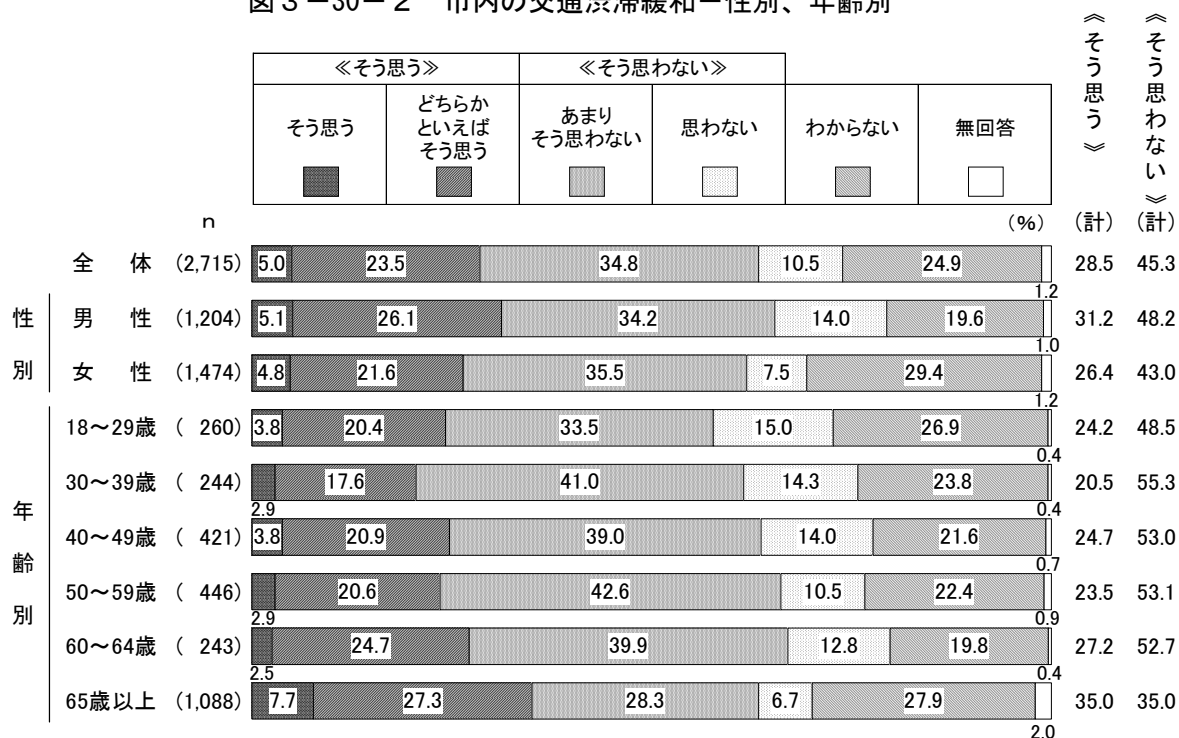


市内の交通渋滞が緩和されていると思うか聞いたところ、「そう思う」(5.0%)と「どちらかといえばそう思う」(23.5%)を合わせた《《そう思う》》(28.5%)は3割近くとなっている。一方、「あまりそう思わない」(34.8%)と「思わない」(10.5%)を合わせた《《そう思わない》》(45.3%)は4割台半ばとなっている。

前回までの調査と比較すると、令和元年(2019年)と大きな傾向の違いはみられない。

(図3-30-1)

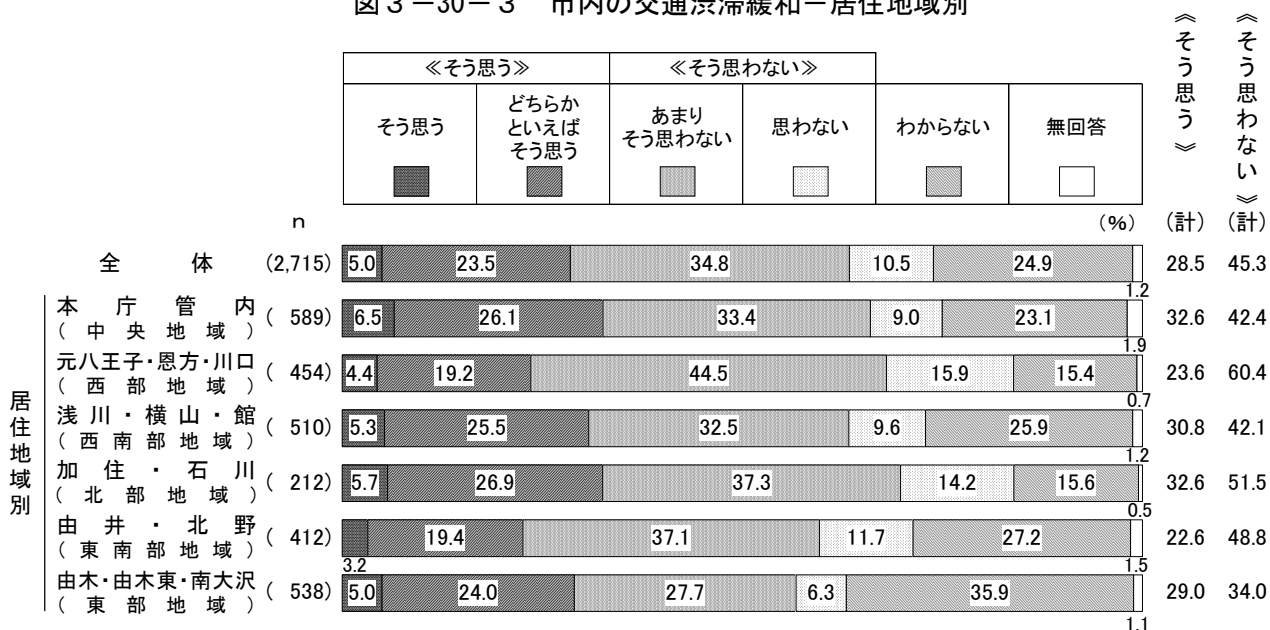
図 3-30-2 市内の交通渋滞緩和—性別、年齢別



性別にみると、《《そう思う》》は男性（31.2%）が女性（26.4%）より4.8ポイント高くなっている。

年齢別にみると、《《そう思う》》は65歳以上（35.0%）で3割台半ばと多くなっている。一方、《《そう思わない》》は30～39歳（55.3%）で5割台半ばと多くなっている。（図 3-30-2）

図 3-30-3 市内の交通渋滞緩和—居住地域別



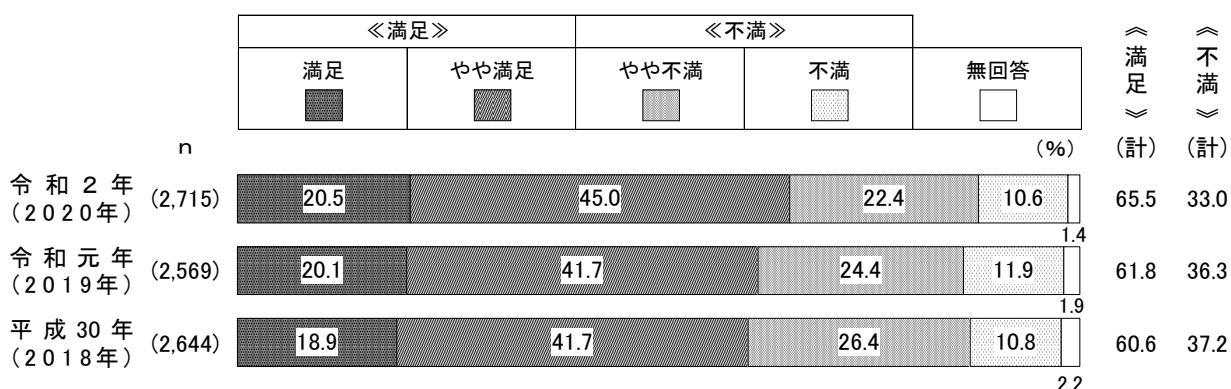
居住地域別にみると、《《そう思う》》は本庁管内（中央地域）（32.6%）と加住・石川（北部地域）（32.6%）で3割強と多くなっている。一方、《《そう思わない》》は元八王子・恩方・川口（西部地域）（60.4%）で約6割と多くなっている。（図 3-30-3）

(31) 公共交通の利便性の満足度

◇《満足》が6割台半ば

問39 あなたは、あなたのお住まいの地域の公共交通（バスや鉄道等）の利便性に満足していますか。（○は1つだけ）

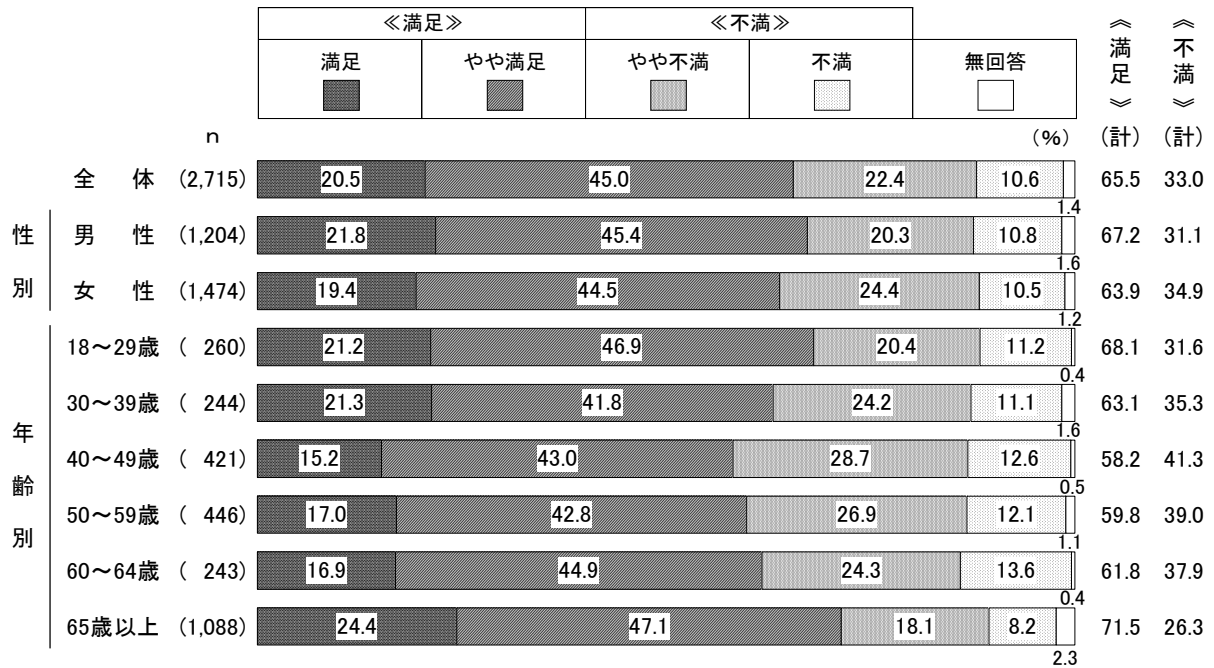
図3-31-1 公共交通の利便性の満足度－全体、経年比較



地域の公共交通（バスや鉄道等）の利便性に満足しているか聞いたところ、「満足」（20.5%）と「やや満足」（45.0%）を合わせた《満足》（65.5%）は6割台半ばとなっている。一方、「やや不満」（22.4%）と「不満」（10.6%）を合わせた《不満》（33.0%）は3割強となっている。

前回までの調査と比較すると、《満足》は令和元年（2019年）（61.8%）より3.7ポイント増加している。（図3-31-1）

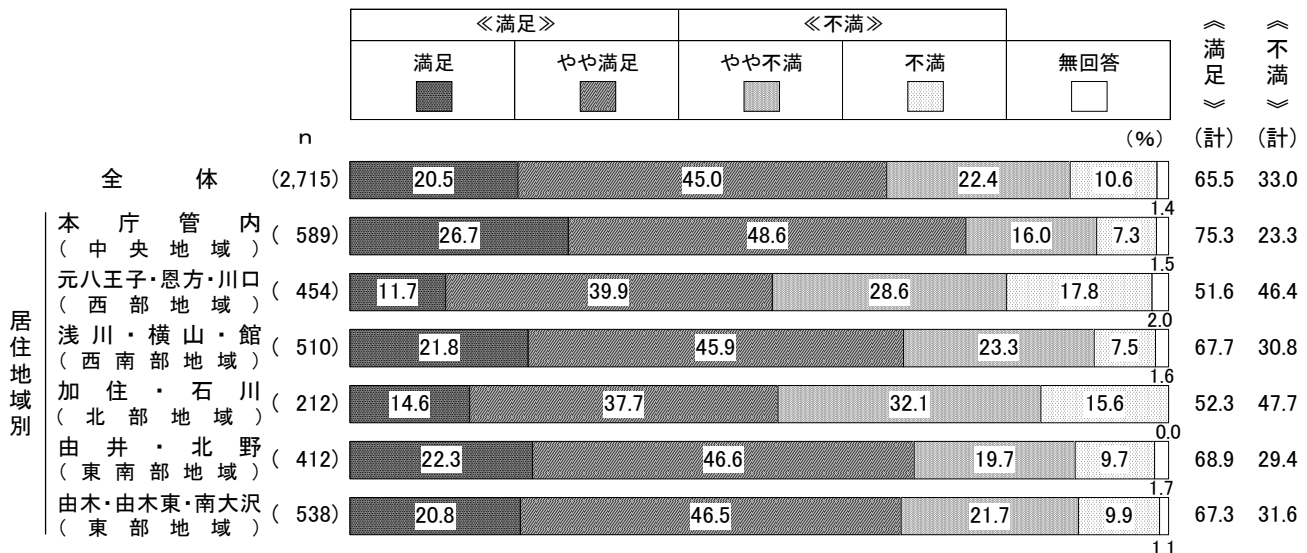
図 3-31-2 公共交通の利便性の満足度－性別、年齢別



性別にみると、《満足》は男性（67.2%）が女性（63.9%）より3.3ポイント高くなっている。

年齢別にみると、《満足》は65歳以上（71.5%）で7割強と多くなっている。一方、《不満》は40～49歳（41.3%）で4割強と多くなっている。（図 3-31-2）

図 3-31-3 公共交通の利便性の満足度－居住地域別



居住地域別にみると、《満足》は本庁管内（中央地域）（75.3%）で7割台半ばと多くなっている。一方、《不満》は加住・石川（北部地域）（47.7%）と元八王子・恩方・川口（西部地域）（46.4%）で5割近くと多くなっている。（図 3-31-3）

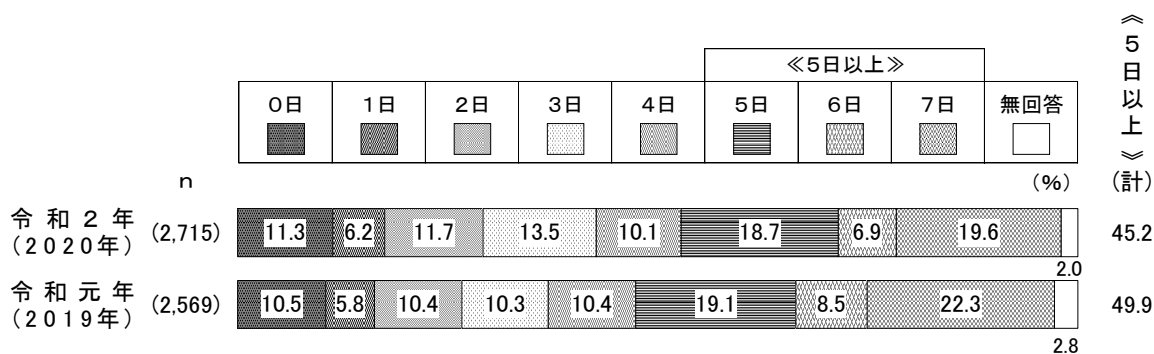
(32) 1週間のうち、10分以上続けて歩く日数

◇《5日以上》が4割台半ば

問40 1週間のうち、あなたが10分以上続けて歩く日は何日ありますか。(○は1つだけ)

※歩くとは仕事や日常生活で歩くこと、ある場所からある場所へ移動すること、あるいは趣味や運動としてのウォーキング、散歩などを含みます。

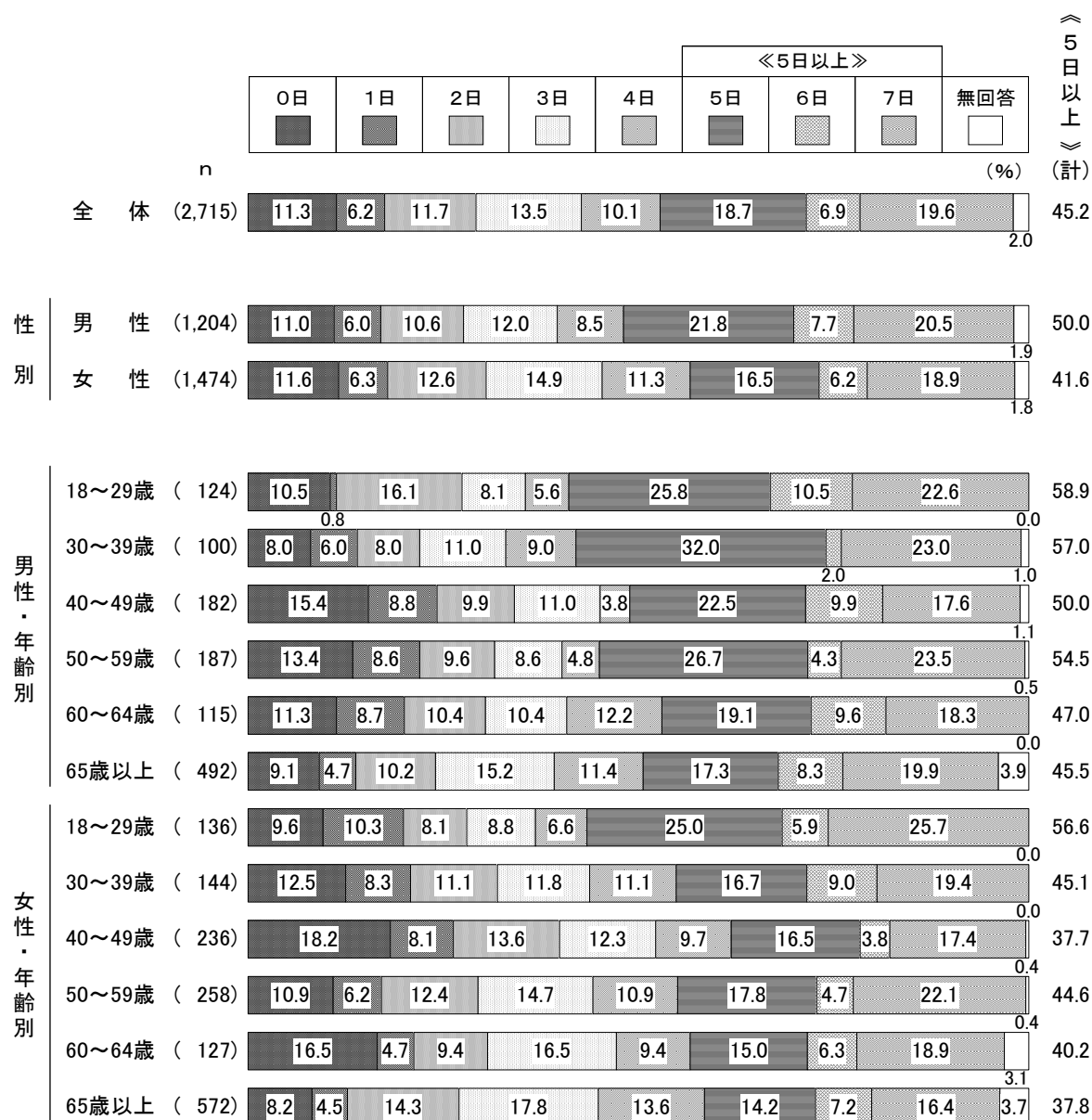
図3-32-1 1週間のうち、10分以上続けて歩く日数—全体、経年比較



1週間のうち、10分以上続けて歩く日は何日あるか聞いたところ、「7日」(19.6%)が2割弱で最も多く、これに「5日」(18.7%)と「6日」(6.9%)を合わせた《5日以上》(45.2%)は4割台半ばとなっている。一方、「0日」(11.3%)は1割強となっている。

前回の調査と比較すると、《5日以上》は令和元年(2019年)(49.9%)より4.7ポイント減少している。(図3-32-1)

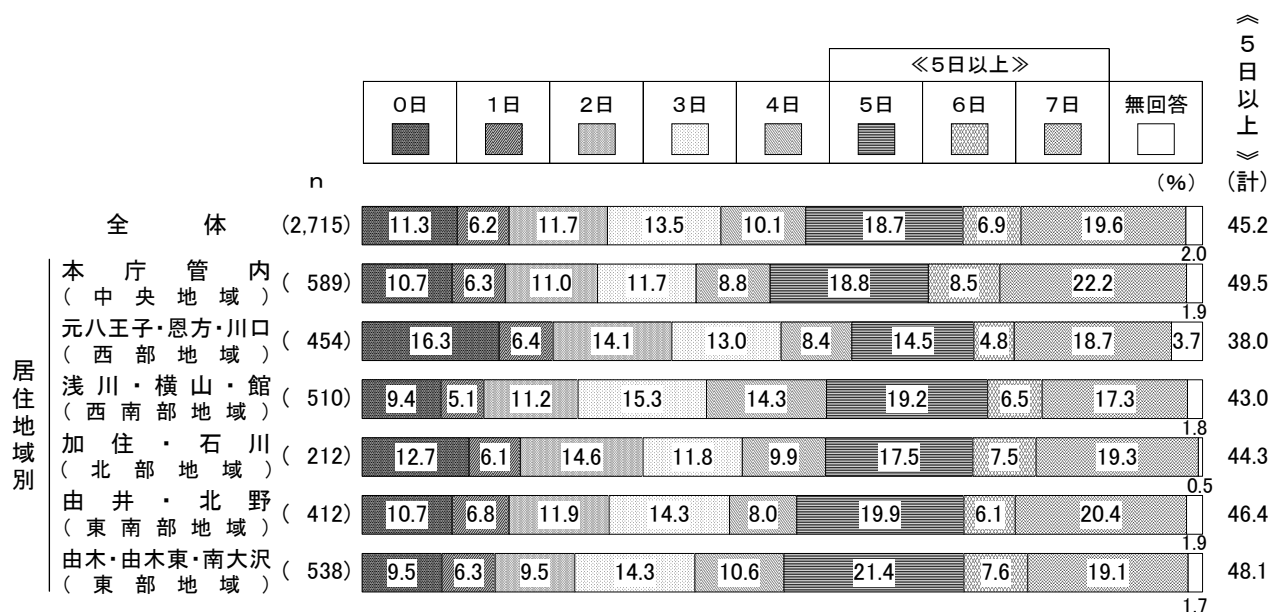
図3-32-2 1週間のうち、10分以上続けて歩く日数—性別、性・年齢別



性別にみると、《5日以上》は男性（50.0%）が女性（41.6%）より8.4ポイント高くなっている。

性・年齢別にみると、《5日以上》は男性18～29歳（58.9%）、男性30～39歳（57.0%）、女性18～29歳（56.6%）で6割近くと多くなっている。一方、「0日」は女性40～49歳（18.2%）と女性60～64歳（16.5%）で2割近くとなっている。（図3-32-2）

図 3-32-3 1 週間のうち、10分間以上続けて歩く日数－居住地域別



居住地域別にみると、《5 日以上》は本庁管内（中央地域）（49.5%）で5割弱と多くなっている。一方、「0 日」は元八王子・恩方・川口（西部地域）（16.3%）で2割近くとなっている。

(図 3-32-3)

(33) 1日の平均的な歩行時間と平均歩数

◇《30分以内》が5割強

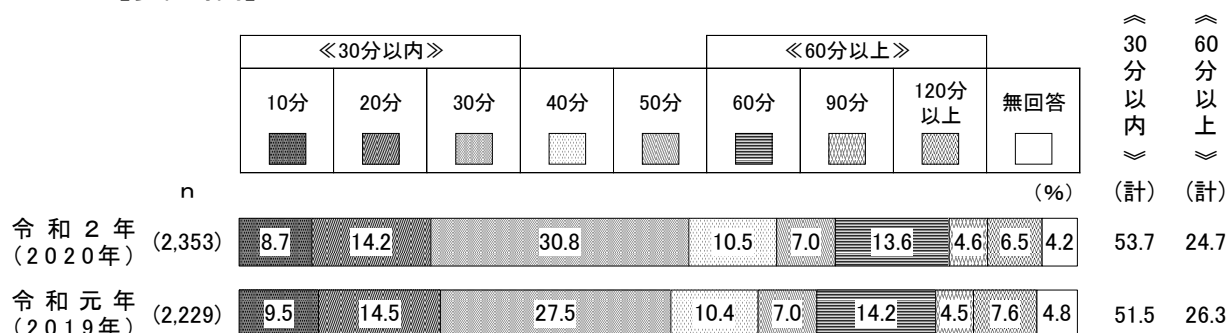
(問40で「1日」～「7日」とお答えの方へ)

問40－1 10分以上続けて歩く日のうち、1日の平均的な歩行時間はどの程度ですか。

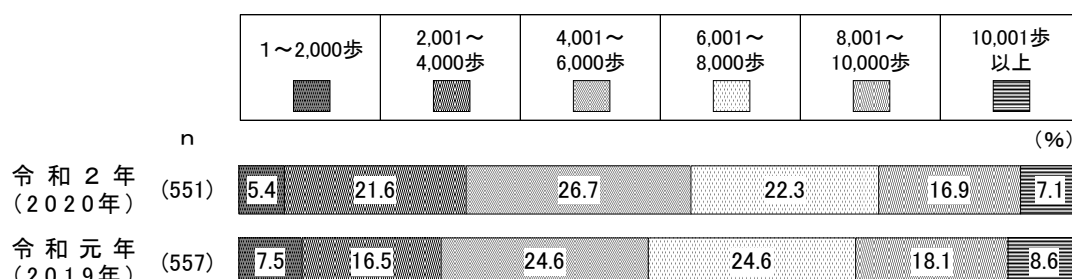
(○は1つだけ) また歩数計を所持している方は歩数を記入してください。

図3-33-1 1日の平均的な歩行時間と平均歩数－全体、経年比較

【歩行時間】



【歩数】



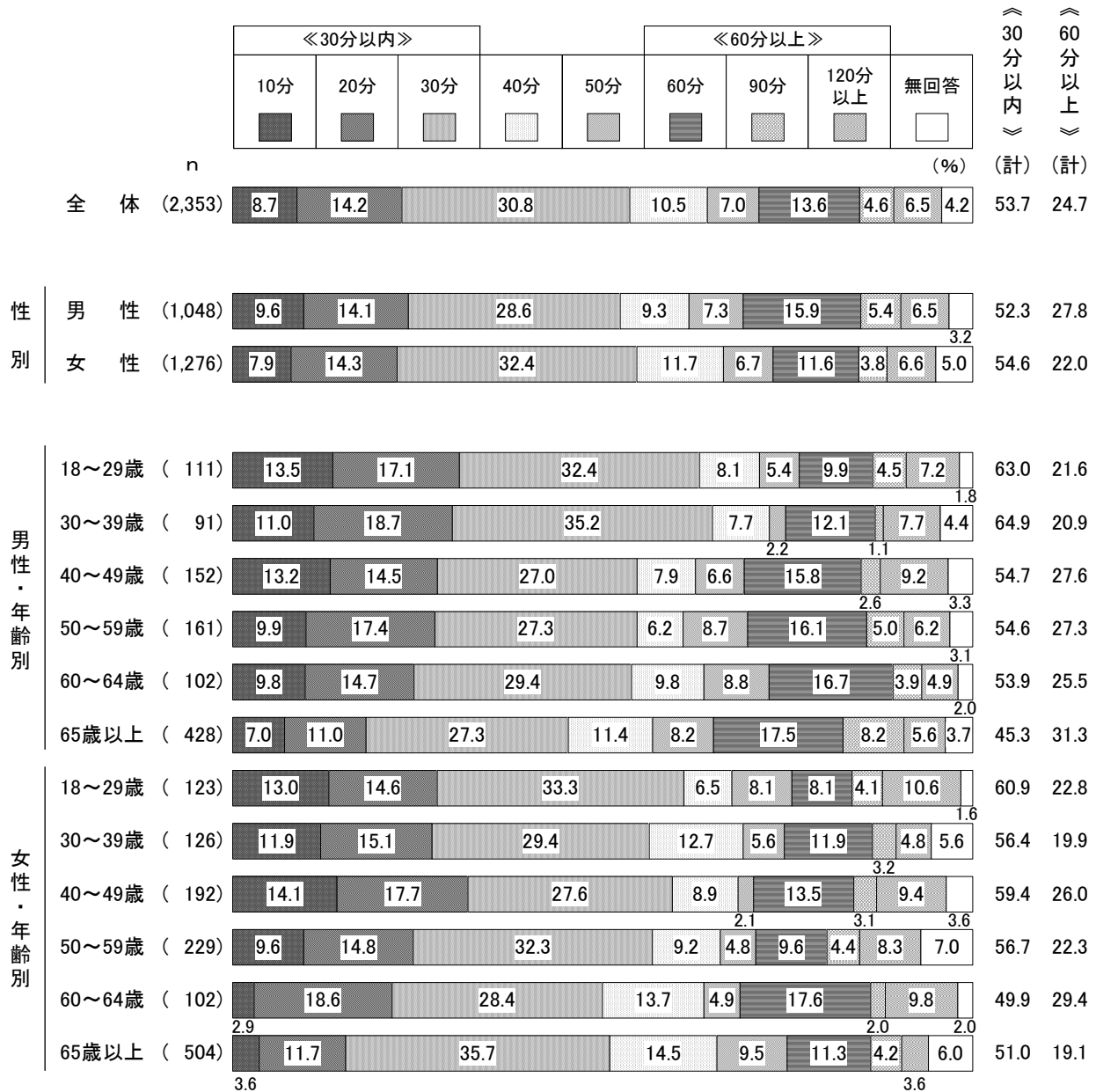
10分以上続けて歩く日のうち、1日の平均的な歩行時間はどの程度か聞いたところ、「30分」(30.8%)が約3割で最も多く、これに「10分」(8.7%)と「20分」(14.2%)を合わせた《30分以内》(53.7%)は5割強となっている。また、「60分」(13.6%)、「90分」(4.6%)、「120分以上」(6.5%)の3つを合わせた《60分以上》(24.7%)は2割台半ばとなっている。

前回の調査と比較すると、《30分以内》は令和元年(2019年)(51.5%)より2.2ポイント増加している。

1日の平均歩数について聞いたところ、「4,001～6,000歩」(26.7%)が3割近くで最も多く、次いで「6,001～8,000歩」(22.3%)、「2,001～4,000歩」(21.6%)などの順となっている。

前回の調査と比較すると、「2,001～4,000歩」は令和元年(2019年)(16.5%)より5.1ポイント増加している。(図3-33-1)

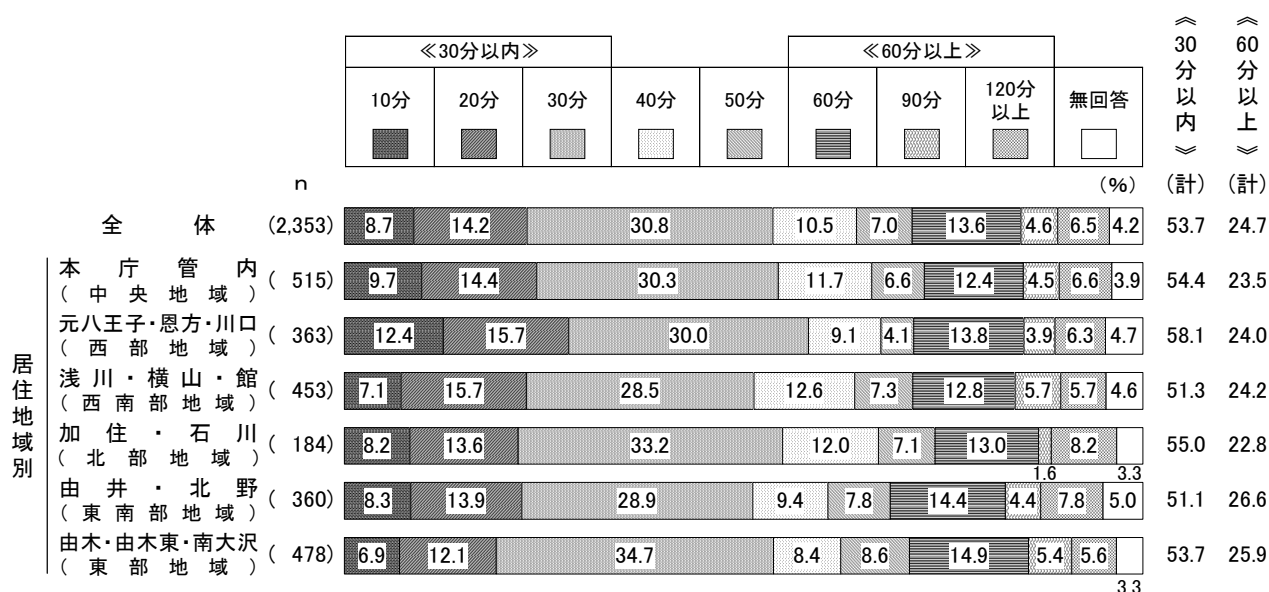
図 3-33-2 1日の平均的な歩行時間－性別、性・年齢別



性別にみると、《60分以上》は男性（27.8%）が女性（22.0%）より5.8ポイント高くなっている。一方、《30分以内》は女性（54.6%）が男性（52.3%）より2.3ポイント高くなっている。

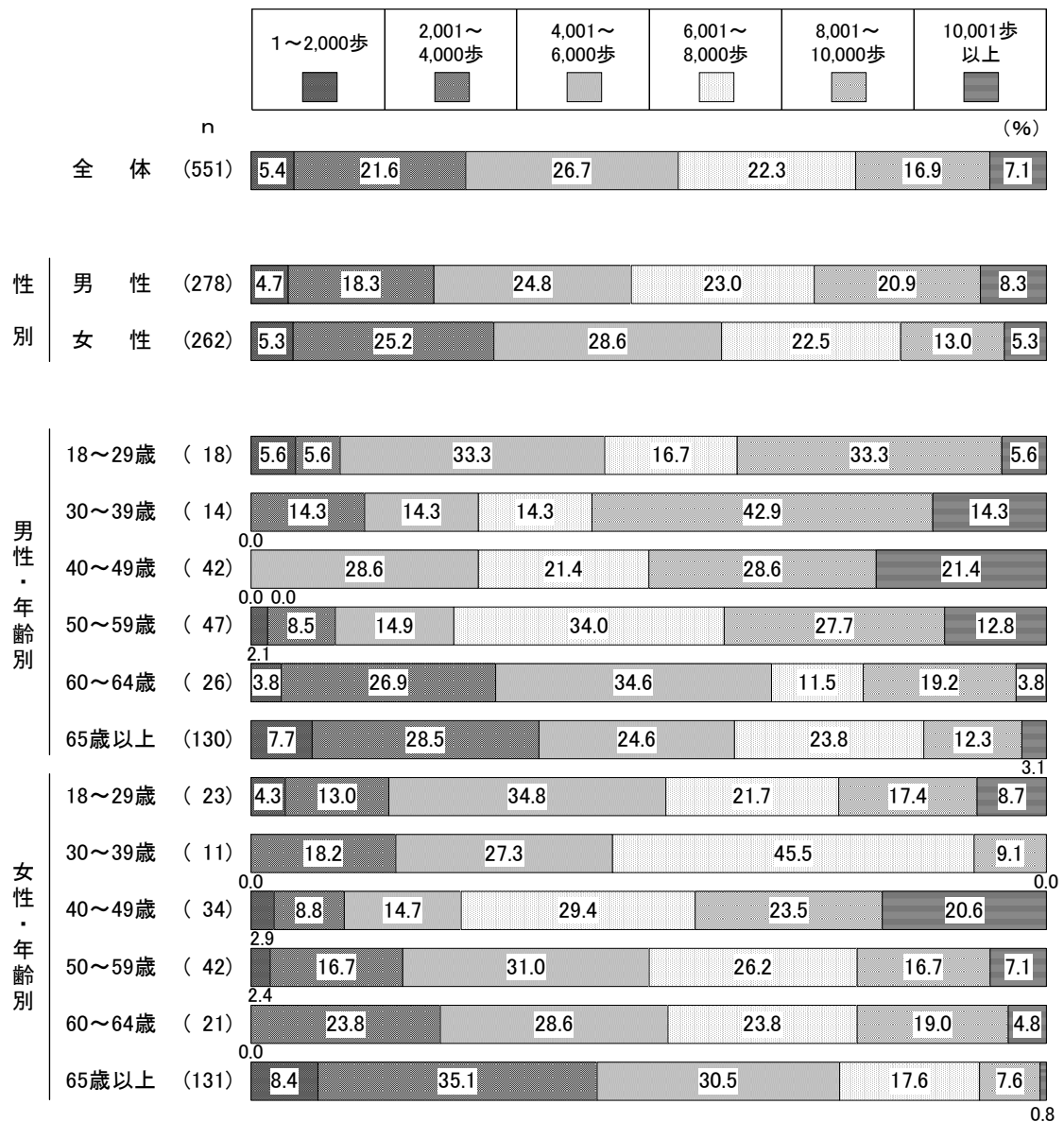
性・年齢別にみると、《30分以内》は男性30～39歳（64.9%）で6割台半ばと多くなっている。一方、《60分以上》は男性65歳以上（31.3%）で3割強と多くなっている。（図 3-33-2）

図 3-33-3 1日の平均的な歩行時間－居住地域別



居住地域別にみると、《30分以内》は元八王子・恩方・川口（西部地域）（58.1％）で6割近くと多くなっている。一方、《60分以上》は由井・北野（東南部地域）（26.6％）で3割近くと多くなっている。（図 3-33-3）

図 3-33-4 1日の平均歩数－性別、性・年齢別

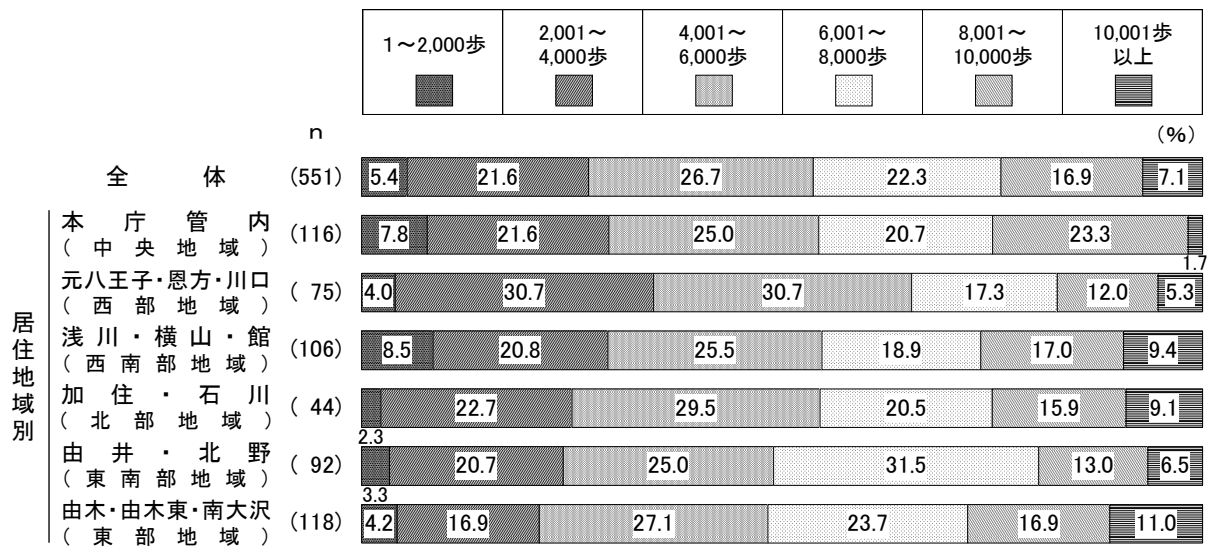


性別にみると、「8,001～10,000歩」は男性（20.9％）が女性（13.0％）より7.9ポイント高くなっている。一方、「2,001～4,000歩」は女性（25.2％）が男性（18.3％）より6.9ポイント高くなっている。

性・年齢別にみると、「2,001～4,000歩」は女性65歳以上（35.1％）で3割台半ばと多くなっている。「6,001～8,000歩」は男性50～59歳（34.0％）で3割台半ばと多くなっている。

(図 3-33-4)

図 3-33-5 1日の平均歩数－居住地域別



居住地域別にみると、「2,001～4,000歩」と「4,001～6,000歩」はともに元八王子・恩方・川口（西部地域）（30.7％）で約3割と多くなっている。「6,001～8,000歩」は由井・北野（東南部地域）（31.5％）で3割強と多くなっている。（図 3-33-5）

(34) 10分間以上続けて歩く日の主な外出目的

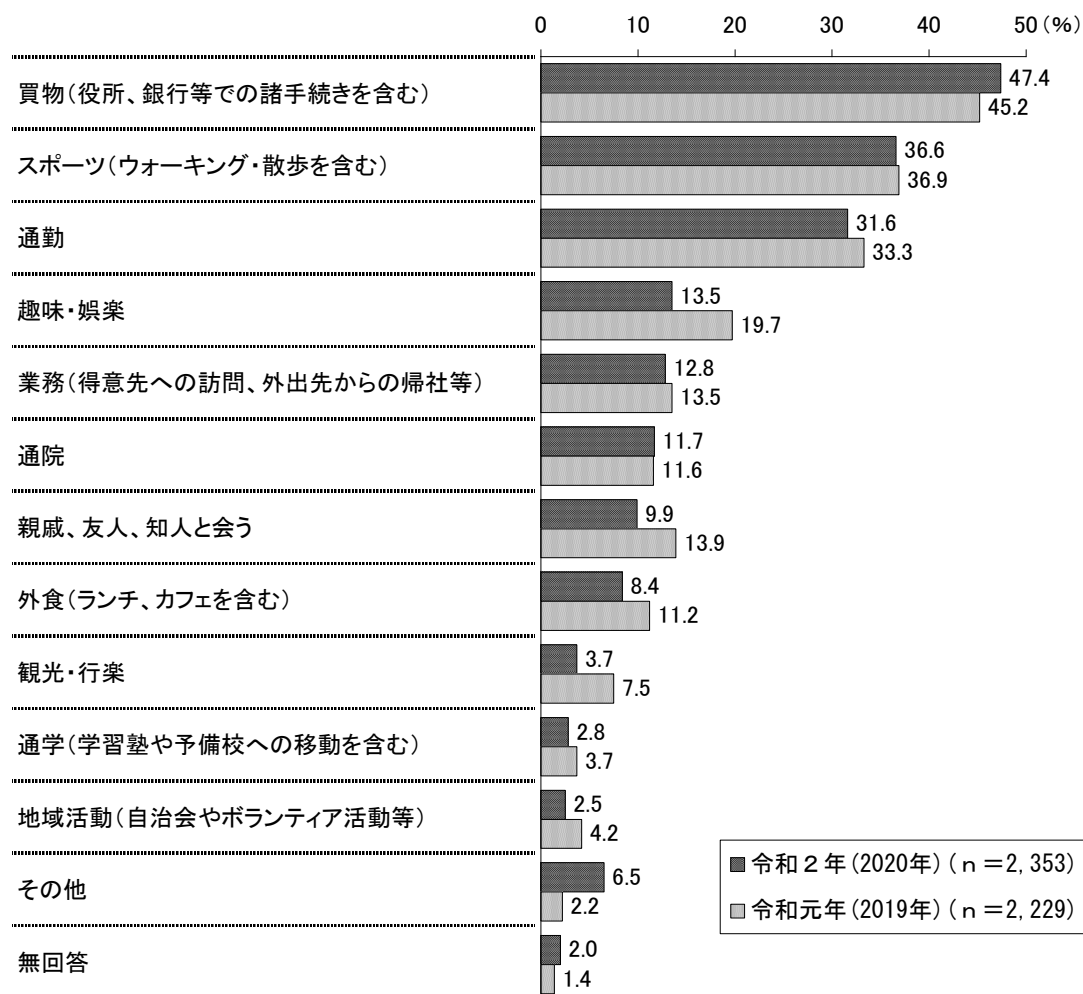
◇「買物（役所、銀行等での諸手続きを含む）」が5割近く

（問40で「1日」～「7日」とお答えの方へ）

問40－2 10分間以上続けて歩く日の主な外出目的についてお答えください。

（〇はいくつでも）

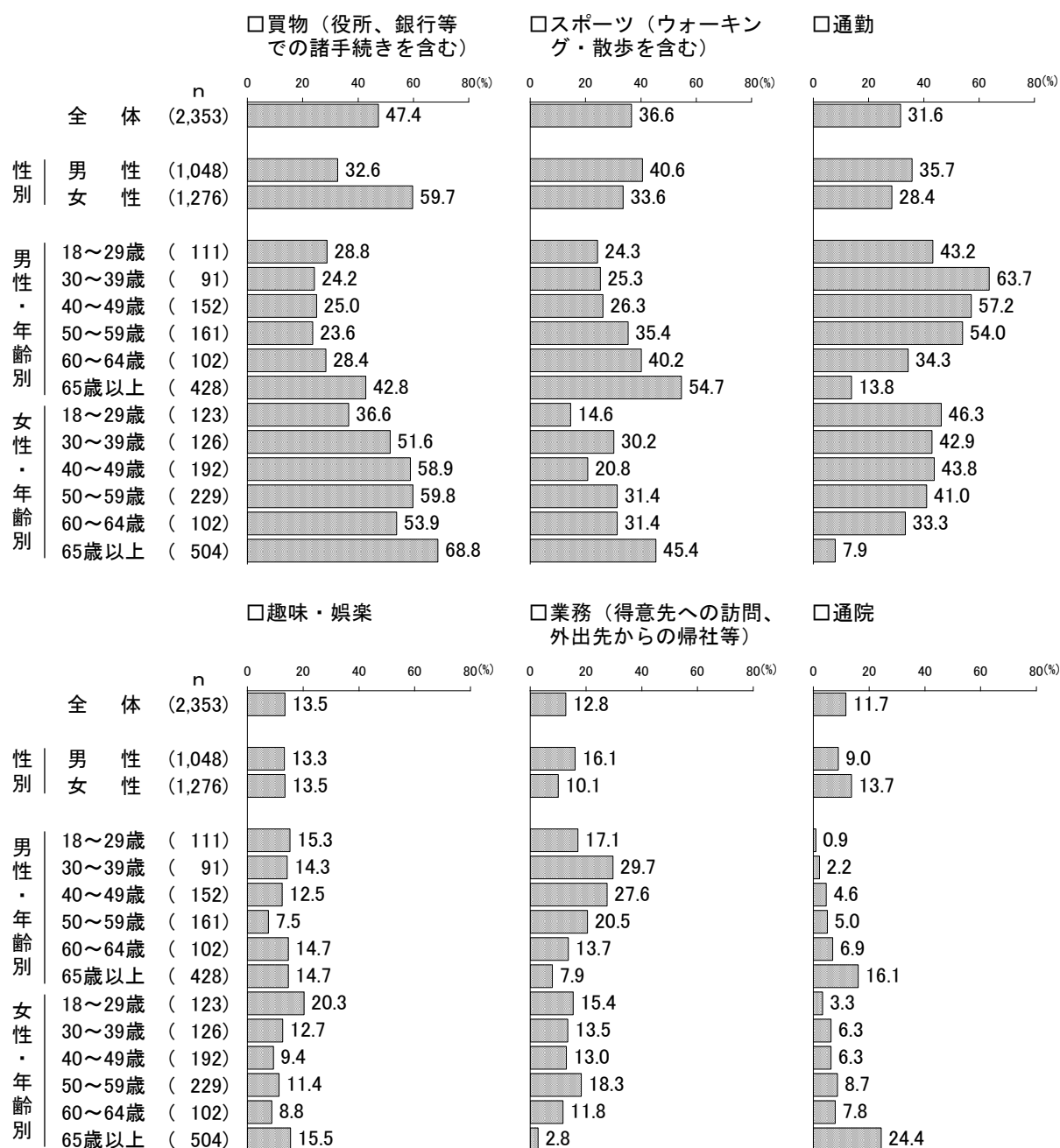
図3－34－1 10分間以上続けて歩く日の主な外出目的－全体、経年比較



1週間のうち、10分間以上続けて歩く日があると回答した2,353人に、主な外出目的について聞いたところ、「買物（役所、銀行等での諸手続きを含む）」（47.4%）が5割近くで最も多くなっている。次いで「スポーツ（ウォーキング・散歩を含む）」（36.6%）、「通勤」（31.6%）、「趣味・娯楽」（13.5%）などの順となっている。

前回の調査と比較すると、「買物（役所、銀行等での諸手続きを含む）」は令和元年（2019年）（45.2%）より2.2ポイント増加している。一方、「趣味・娯楽」は令和元年（2019年）（19.7%）より6.2ポイント、「親戚、友人、知人と会う」は令和元年（2019年）（13.9%）より4.0ポイント、「観光・行楽」は令和元年（2019年）（7.5%）より3.8ポイント、それぞれ減少している。（図3－34－1）

図 3-34-2 10分以上続けて歩く日の主な外出目的－性別、性・年齢別（上位 6 位）

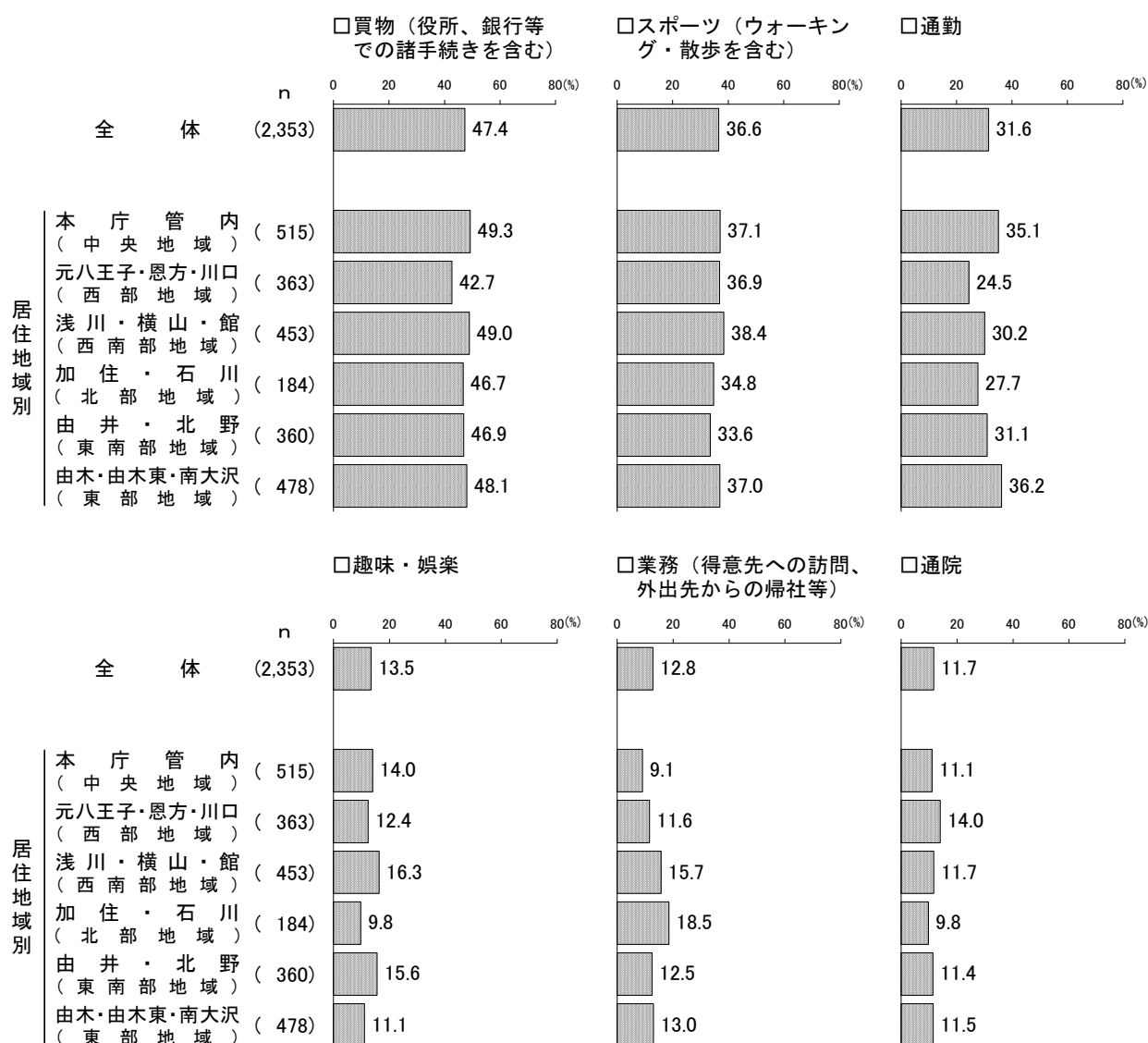


性別にみると、「買物（役所、銀行等での諸手続きを含む）」は女性（59.7%）が男性（32.6%）より27.1ポイント高くなっている。一方、「通勤」は男性（35.7%）が女性（28.4%）より7.3ポイント、「スポーツ（ウォーキング・散歩を含む）」は男性（40.6%）が女性（33.6%）より7.0ポイント、それぞれ高くなっている。

性・年齢別にみると、「買物（役所、銀行等での諸手続きを含む）」は女性65歳以上（68.8%）で7割近くと多くなっている。「スポーツ（ウォーキング・散歩を含む）」は男性65歳以上（54.7%）で5割台半ばと多くなっている。「通勤」は男性30～39歳（63.7%）で6割強と多くなっている。

（図 3-34-2）

図3-34-3 10分以上続けて歩く日の主な外出目的—居住地地域別（上位6位）



居住地地域別にみると、「買物(役所、銀行等での諸手続きを含む)」は本庁管内(中央地域)(49.3%)と浅川・横山・館(西南部地域)(49.0%)で5割弱と多くなっている。「通勤」は由木・由木東・南大沢(東部地域)(36.2%)で4割近くと多くなっている。(図3-34-3)

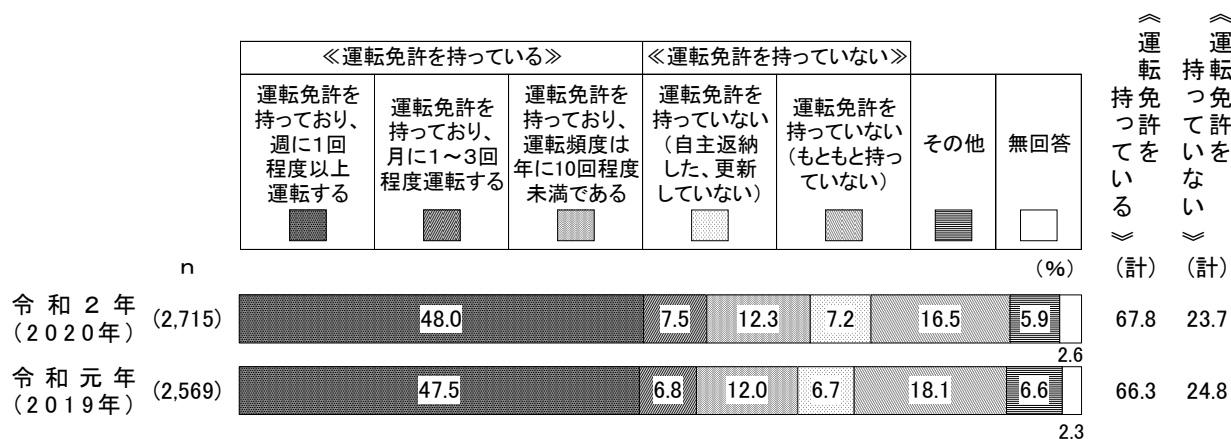
(35) 運転免許保有状況と運転頻度

◇「運転免許を持っており、週に1回程度以上運転する」が5割近く

問41 あなたの運転免許の保有状況と自動車の運転頻度についてお答えください。

(○は1つだけ)

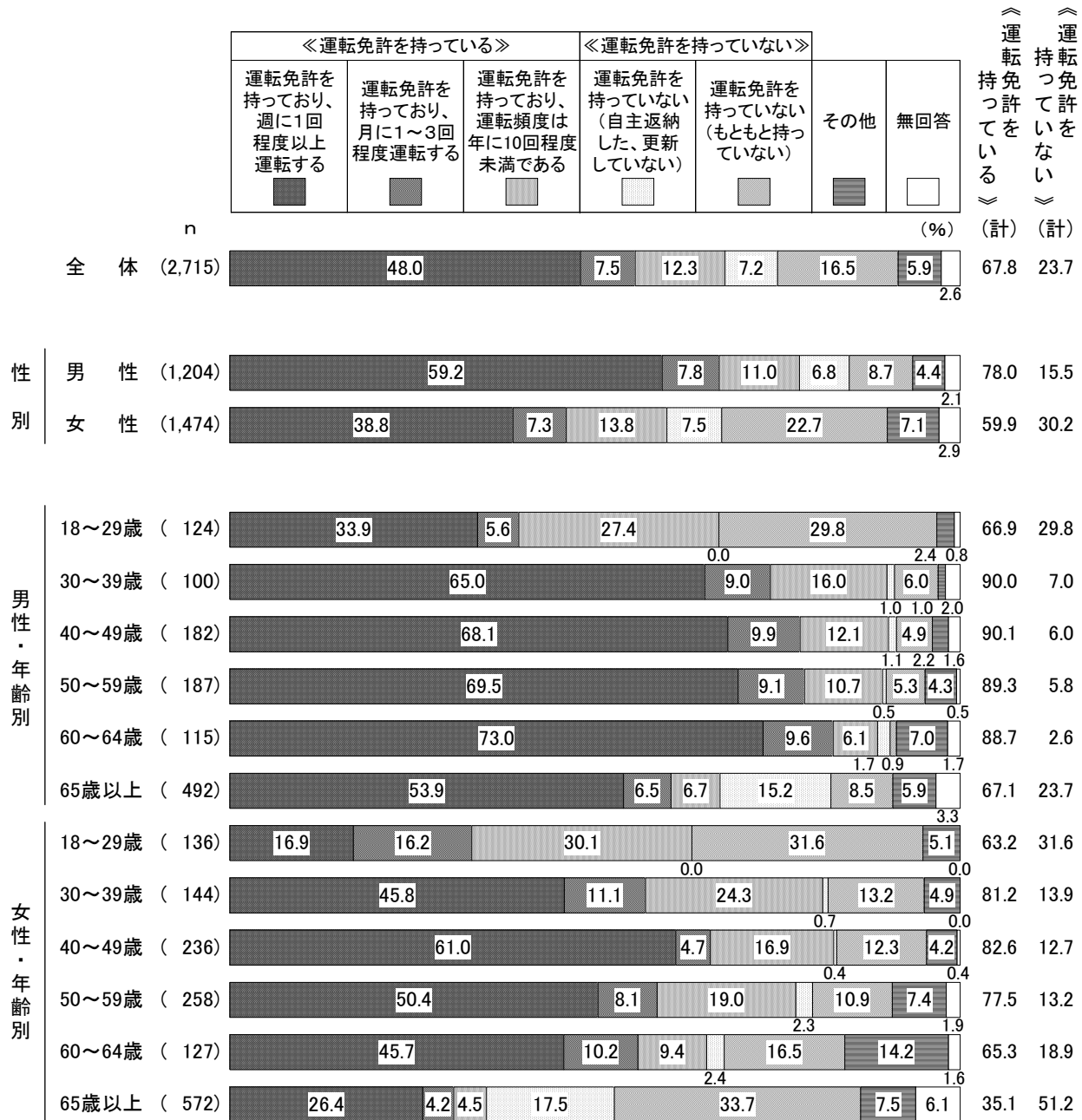
図3-35-1 運転免許保有状況と運転頻度－全体、経年比較



運転免許の保有状況と自動車の運転頻度について聞いたところ、「運転免許を持っており、週に1回程度以上運転する」(48.0%)が5割近くで最も多く、これに「運転免許を持っており、月に1～3回程度運転する」(7.5%)と「運転免許を持っており、運転頻度は年に10回程度未満である」(12.3%)を合わせた《運転免許を持っている》(67.8%)は7割近くとなっている。一方、「運転免許を持っていない（自主返納した、更新していない）」(7.2%)と「運転免許を持っていない（もともと持っていない）」(16.5%)を合わせた《運転免許を持っていない》(23.7%)は2割強となっている。

前回の調査と比較すると、大きな傾向の違いはみられない。(図3-35-1)

図 3-35-2 運転免許保有状況と運転頻度－性別、性・年齢別

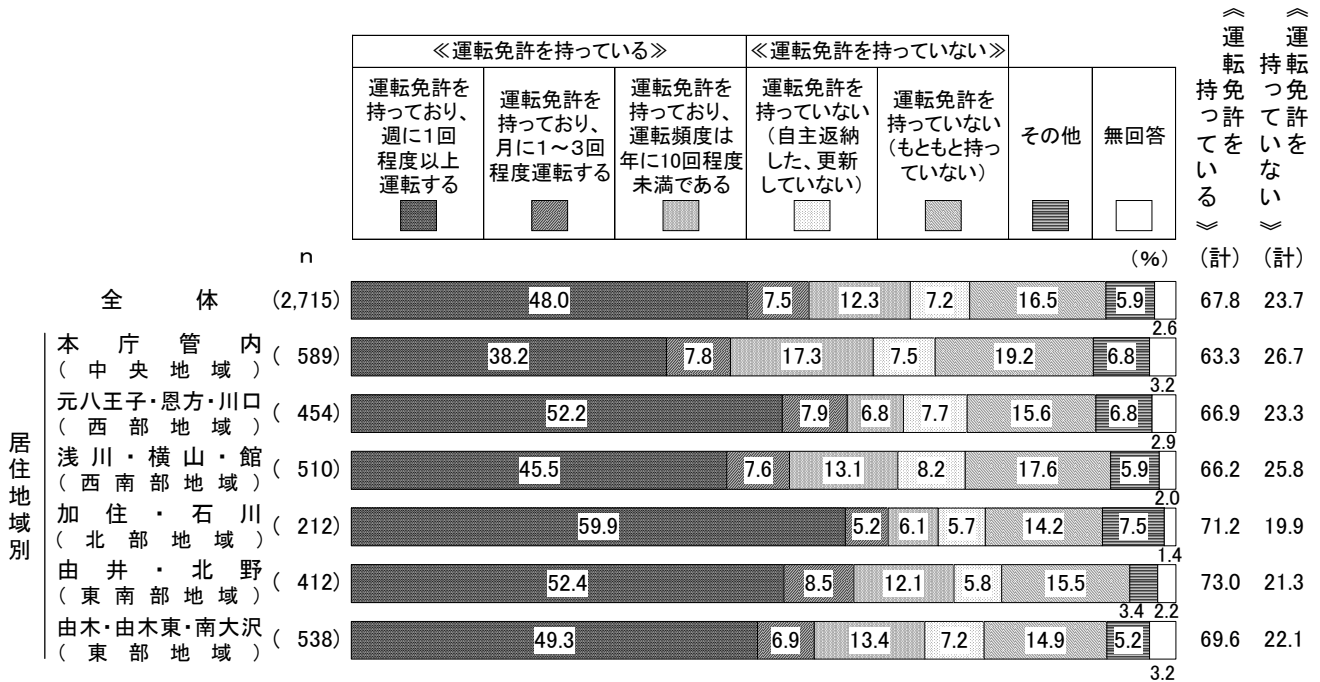


性別にみると、「運転免許を持っており、週に1回程度以上運転する」は男性（59.2%）が女性（38.8%）より20.4ポイント、《運転免許を持っている》は男性（78.0%）が女性（59.9%）より18.1ポイント、それぞれ高くなっている。

性・年齢別にみると、「運転免許を持っており、週に1回程度以上運転する」は男性60～64歳（73.0%）で7割強と多くなっている。《運転免許を持っている》は男性40～49歳（90.1%）で約9割、男性30～39歳（90.0%）で9割と多くなっている。一方、《運転免許を持っていない》は女性65歳以上（51.2%）で5割強、女性18～29歳（31.6%）で3割強と多くなっている。

(図 3-35-2)

図 3-35-3 運転免許保有状況と運転頻度－居住地域別



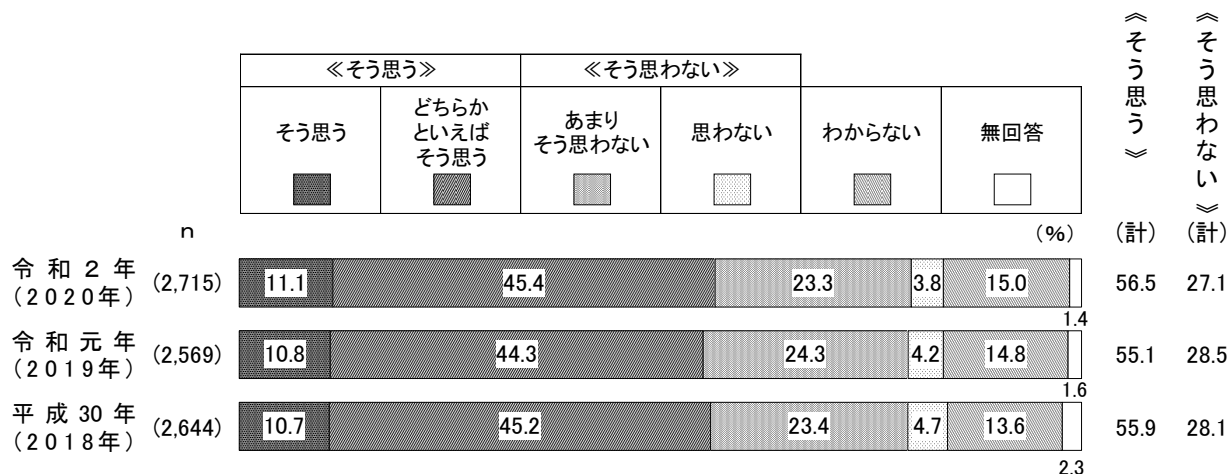
居住地域別にみると、「運転免許を持っており、週に1回程度以上運転する」は加住・石川(北部地域) (59.9%) で6割弱と多くなっている。《運転免許を持っている》は由井・北野(東南部地域) (73.0%) と加住・石川(北部地域) (71.2%) で7割強と多くなっている。一方、《運転免許を持っていない》は本庁管内(中央地域) (26.7%) で3割近くと多くなっている。(図 3-35-3)

(36) 都市の美観が保持されたまち

◇《《そう思う》》が6割近く

問42 本市は、都市の美観が保持されているまちであると思いますか。(○は1つだけ)

図3-36-1 都市の美観が保持されたまちー全体、経年比較

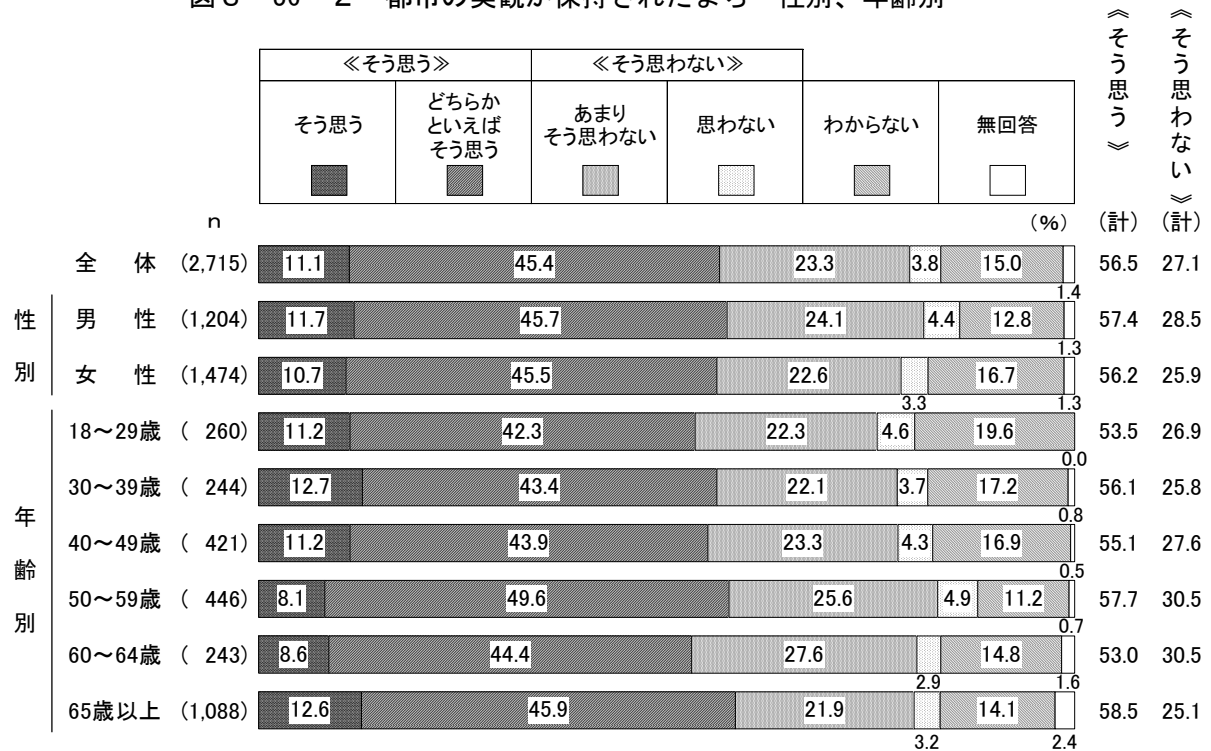


都市の美観が保持されているまちであると思うか聞いたところ、「そう思う」(11.1%)と「どちらかといえばそう思う」(45.4%)を合わせた《《そう思う》》(56.5%)は6割近くとなっている。一方、「あまりそう思わない」(23.3%)と「思わない」(3.8%)を合わせた《《そう思わない》》(27.1%)は3割近くとなっている。

前回までの調査と比較すると、令和元年(2019年)と大きな傾向の違いはみられない。

(図3-36-1)

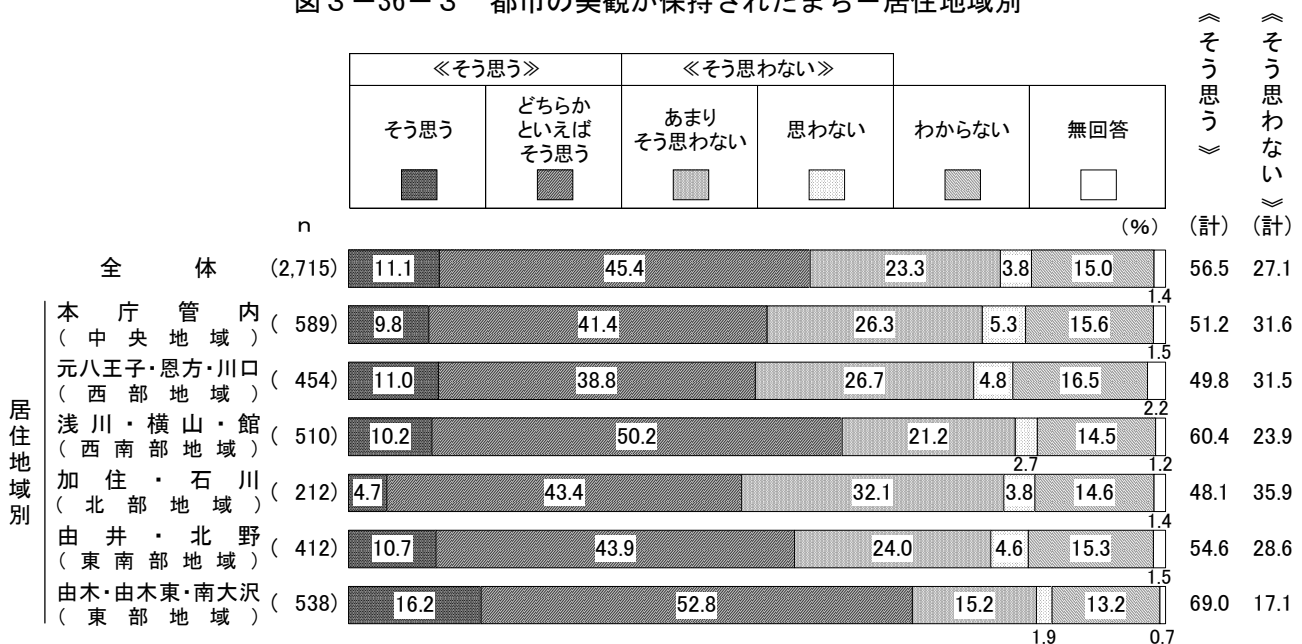
図 3-36-2 都市の美観が保持されたまち－性別、年齢別



性別にみると、《そう思わない》は男性（28.5%）が女性（25.9%）より2.6ポイント高くなっている。

年齢別にみると、《そう思う》は30～39歳（56.1%）、50～59歳（57.7%）、65歳以上（58.5%）で6割近くと多くなっている。一方、《そう思わない》は50～59歳（30.5%）と60～64歳（30.5%）で約3割と多くなっている。（図 3-36-2）

図 3-36-3 都市の美観が保持されたまち－居住地域別



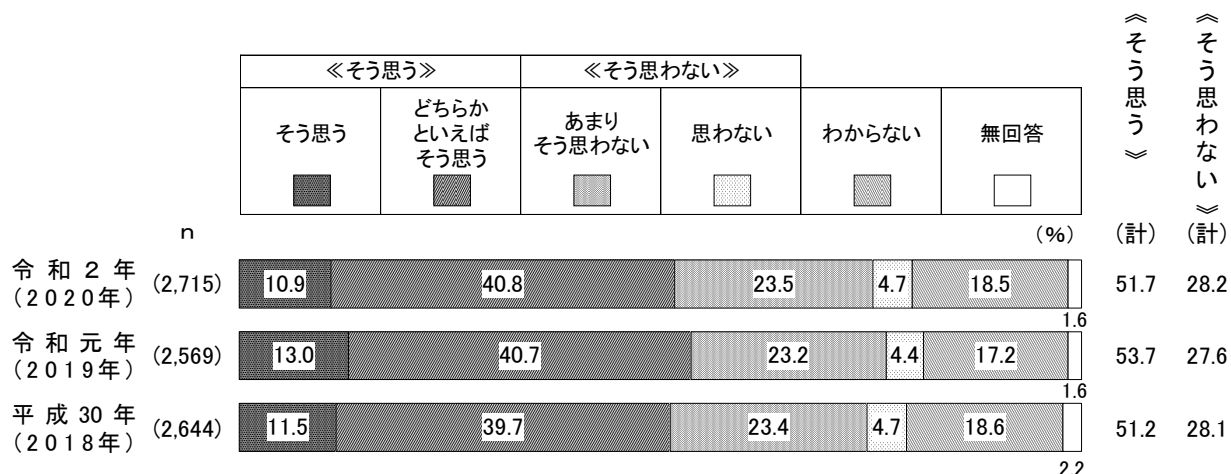
居住地域別にみると、《そう思う》は由木・由木東・南大沢（東部地域）（69.0%）で7割弱と多くなっている。一方、《そう思わない》は加住・石川（北部地域）（35.9%）で3割台半ばと多くなっている。（図 3-36-3）

(37) 自然、歴史、文化が生かされた景観

◇《《そう思う》》が5割強

問43 あなたは、市の豊かな自然、歴史、文化などが、あなたのお住まいの地域やまちの景観に生かされていると思いますか。(○は1つだけ)

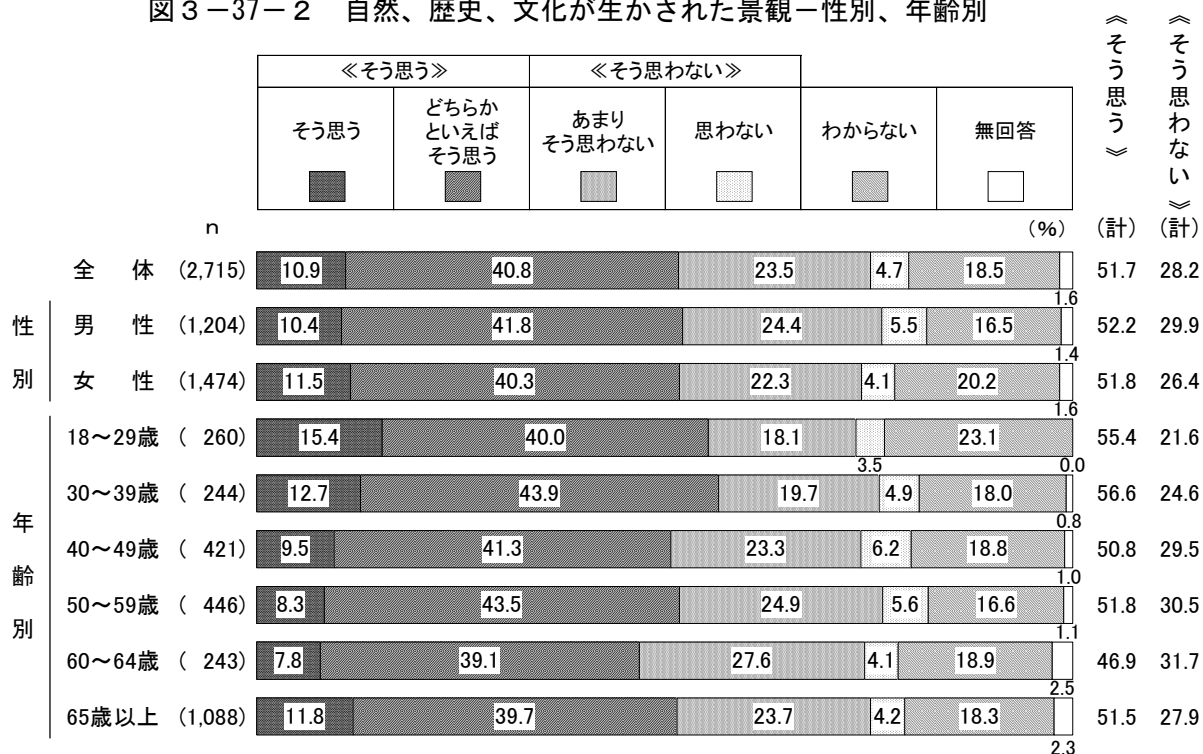
図3-37-1 自然、歴史、文化が生かされた景観－全体、経年比較



市の豊かな自然、歴史、文化などが、住んでいる地域やまちの景観に生かされていると思うか聞いたところ、「そう思う」(10.9%)と「どちらかといえばそう思う」(40.8%)を合わせた《《そう思う》》(51.7%)は5割強となっている。一方、「あまりそう思わない」(23.5%)と「思わない」(4.7%)を合わせた《《そう思わない》》(28.2%)は3割近くとなっている。

前回までの調査と比較すると、《《そう思う》》は令和元年(2019年)(53.7%)より2.0ポイント減少している。(図3-37-1)

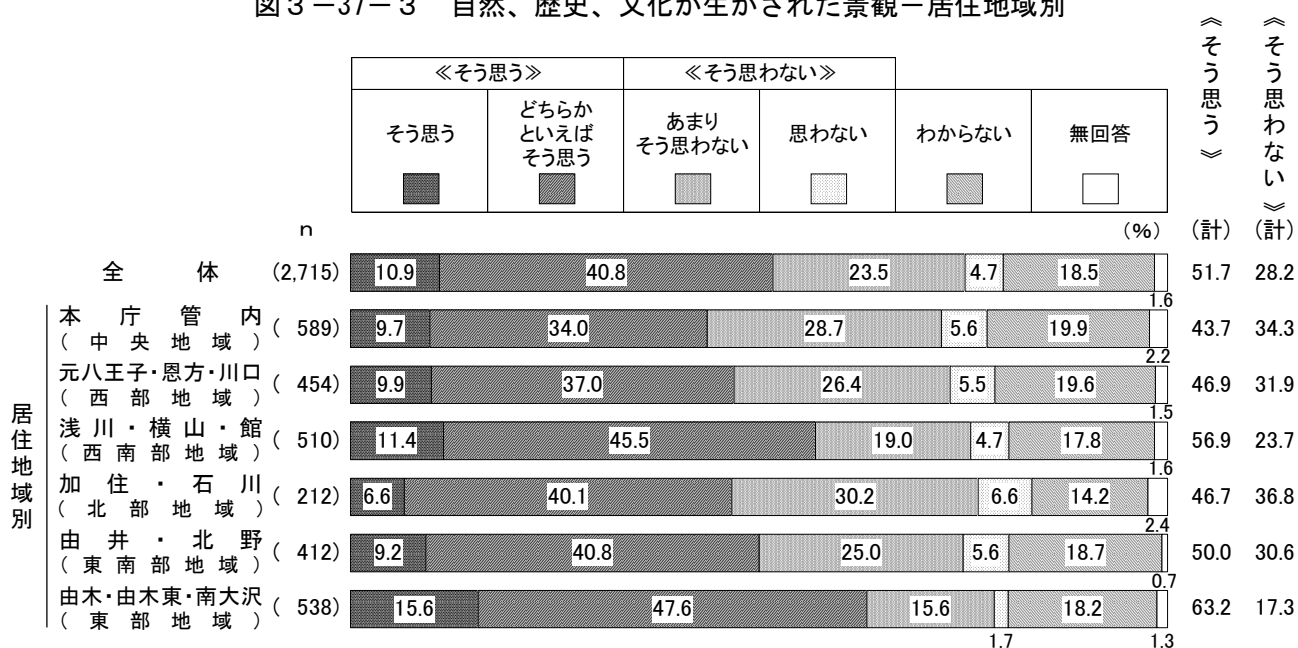
図 3-37-2 自然、歴史、文化が生かされた景観—性別、年齢別



性別にみると、《そう思わない》は男性（29.9%）が女性（26.4%）より3.5ポイント高くなっている。

年齢別にみると、《そう思う》は30～39歳（56.6%）で6割近くと多くなっている。一方、《そう思わない》は60～64歳（31.7%）で3割強と多くなっている。（図 3-37-2）

図 3-37-3 自然、歴史、文化が生かされた景観—居住地域別



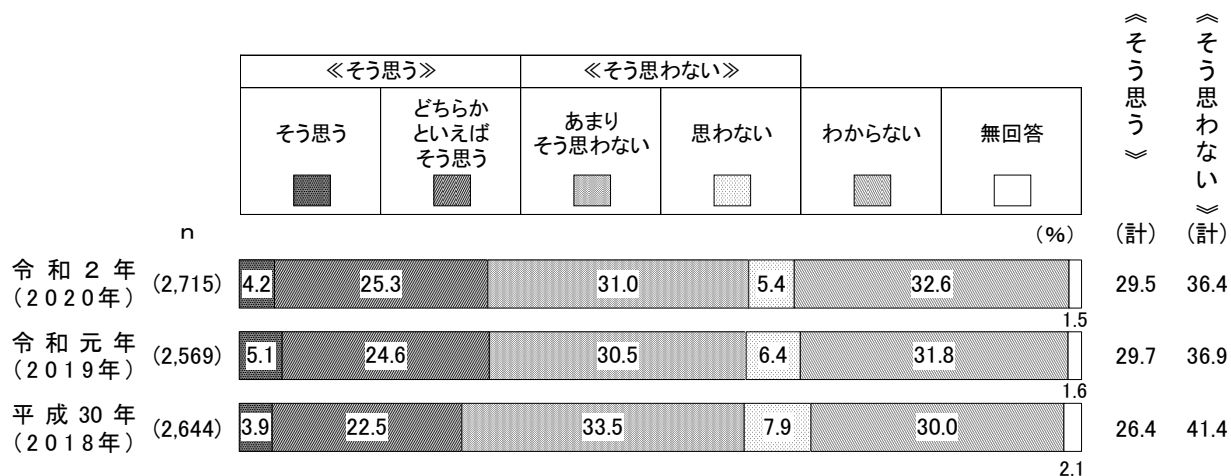
居住地域別にみると、《そう思う》は由木・由木東・南大沢（東部地域）（63.2%）で6割強と多くなっている。一方、《そう思わない》は加住・石川（北部地域）（36.8%）で4割近くと多くなっている。（図 3-37-3）

(38) 市内の産業活動

◇《《そう思う》》が3割弱

問44 あなたは、商業や観光業、農業、工業など、市内の産業活動が活発に行われていると思いますか。(〇は1つだけ)

図3-38-1 市内の産業活動－全体、経年比較

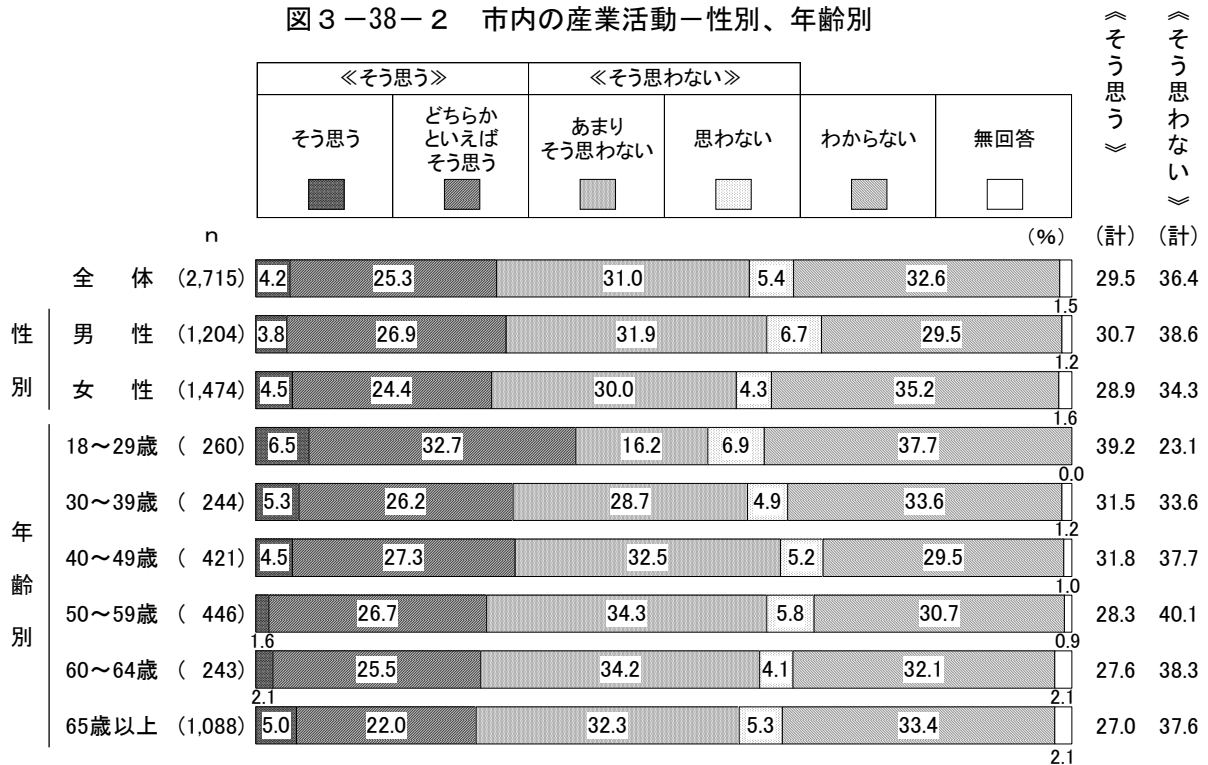


商業や観光業、農業、工業など、市内の産業活動が活発に行われていると思うか聞いたところ、「そう思う」(4.2%)と「どちらかといえばそう思う」(25.3%)を合わせた《《そう思う》》(29.5%)は3割弱となっている。一方、「あまりそう思わない」(31.0%)と「思わない」(5.4%)を合わせた《《そう思わない》》(36.4%)は4割近くとなっている。

前回までの調査と比較すると、令和元年(2019年)と大きな傾向の違いはみられない。

(図3-38-1)

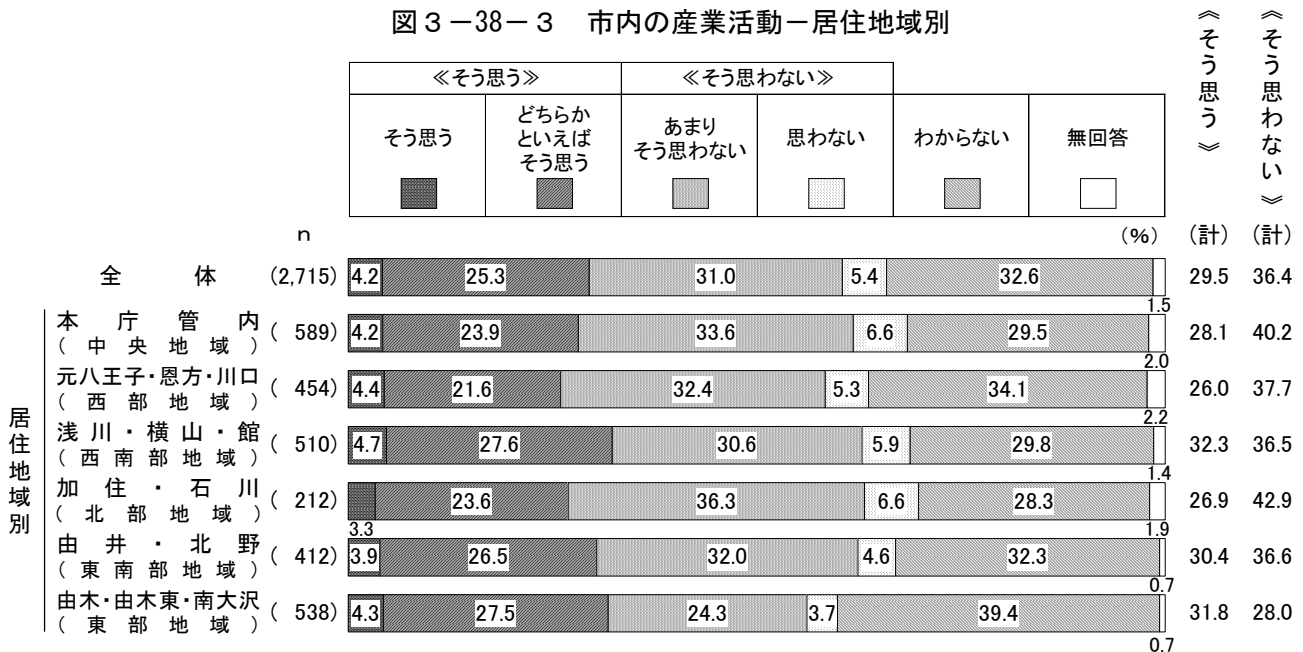
図 3-38-2 市内の産業活動—性別、年齢別



性別にみると、《そう思わない》は男性（38.6%）が女性（34.3%）より4.3ポイント高くなっている。

年齢別にみると、《そう思う》は18～29歳（39.2%）で4割弱と多くなっている。一方、《そう思わない》は50～59歳（40.1%）で約4割と多くなっている。（図3-38-2）

図 3-38-3 市内の産業活動—居住地域別



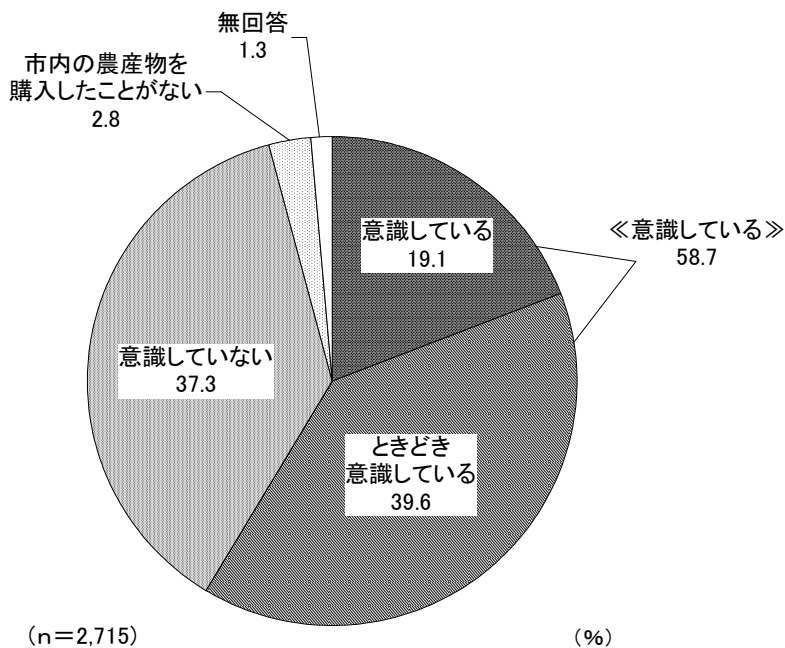
居住地域別にみると、《そう思う》は浅川・横山・館（西南部地域）（32.3%）と由木・由木東・南大沢（東部地域）（31.8%）で3割強と多くなっている。一方、《そう思わない》は加住・石川（北部地域）（42.9%）で4割強と多くなっている。（図3-38-3）

(39) 市内の農産物の購入

◇《意識している》が6割近く

問45 あなたは、市内の農作物（野菜・果物・花など）を意識して購入（消費）していますか。（○は1つだけ）

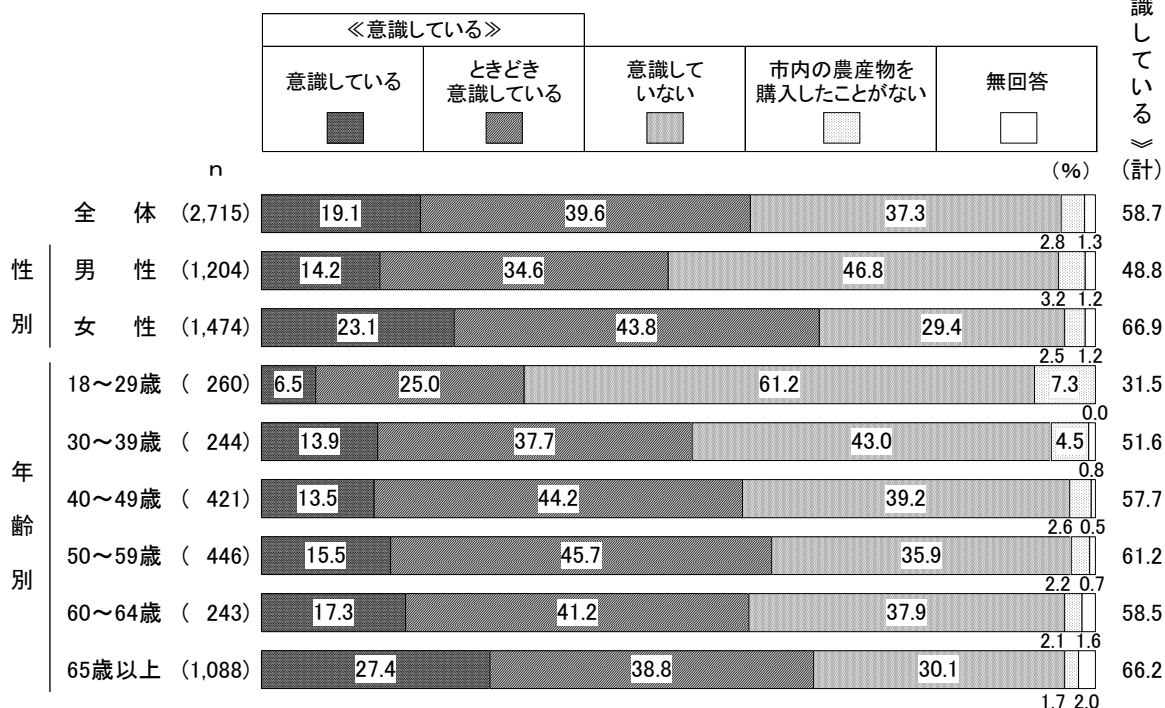
図3-39-1 市内の農産物の購入－全体



（注）新規の設問のため、経年比較はない。

市内の農作物（野菜・果物・花など）を意識して購入（消費）しているか聞いたところ、「意識している」（19.1％）と「ときどき意識している」（39.6％）を合わせた《意識している》（58.7％）は6割近くとなっている。一方、「意識していない」（37.3％）は4割近くで、「市内の農産物を購入したことがない」（2.8％）は1割未満となっている。（図3-39-1）

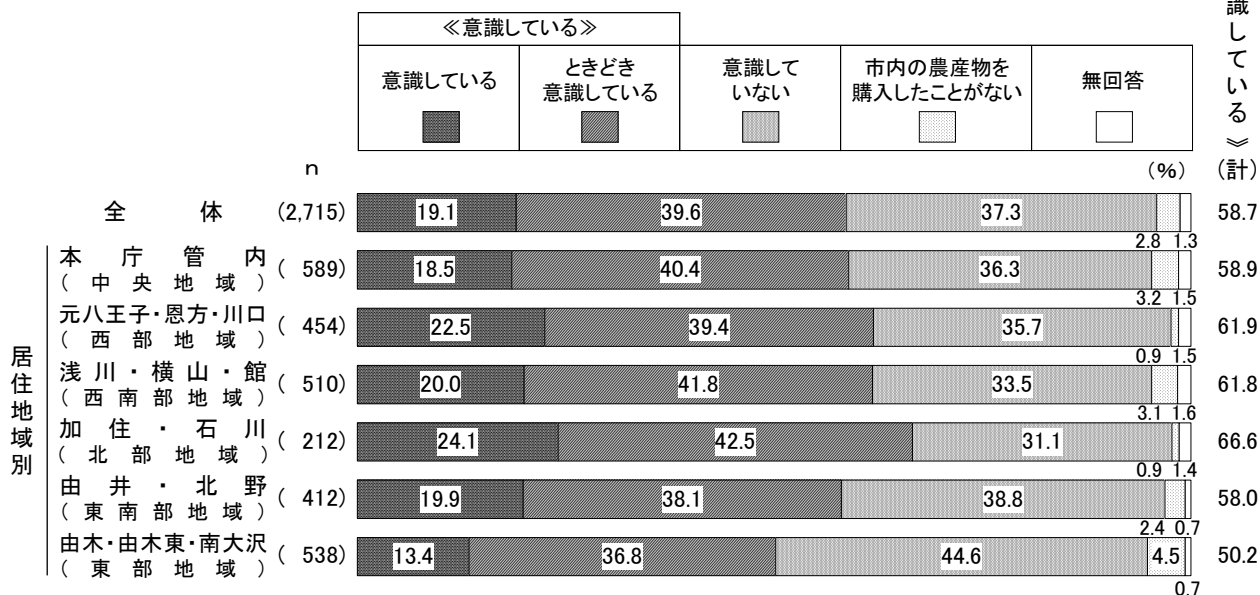
図 3-39-2 市内の農産物の購入—性別、年齢別



性別にみると、《意識している》は女性（66.9%）が男性（48.8%）より18.1ポイント高くなっている。

年齢別にみると、《意識している》は65歳以上（66.2%）で7割近くと多くなっている。一方、「意識していない」は18～29歳（61.2%）で6割強と多くなっている。（図 3-39-2）

図 3-39-3 市内の農産物の購入—居住地域別



居住地域別にみると、《意識している》は加住・石川(北部地域)（66.6%）で7割近くと多くなっている。一方、「意識していない」は由木・由木東・南大沢（東部地域）（44.6%）で4割台半ばと多くなっている。（図 3-39-3）

(40) 地球環境への配慮

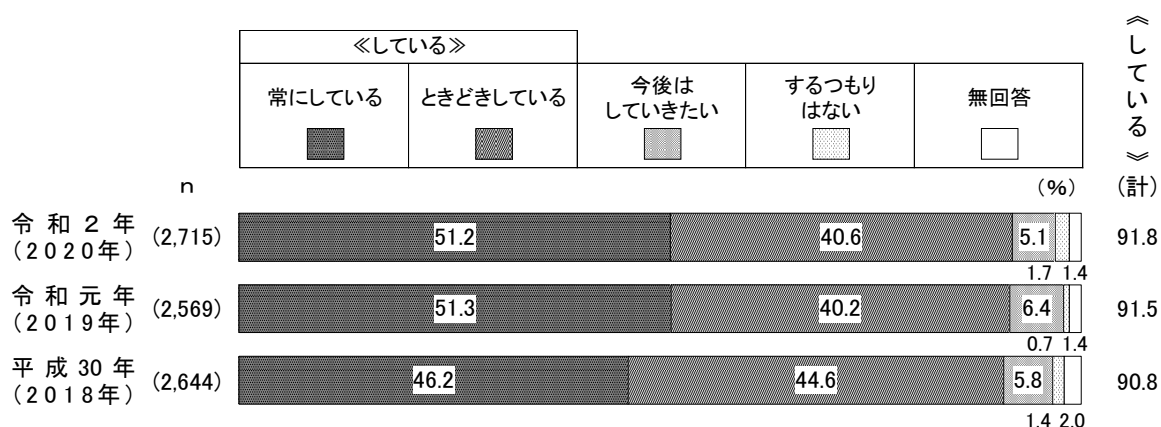
◇《している》が9割強

問46 あなたは、ふだんから省エネ・省資源など、地球環境に配慮した暮らしをしていますか。(〇は1つだけ)

※ふだんの暮らしの中で地球環境のためにできる取り組みとは・・・

- 過度な冷暖房の使用を控える
- マイカーの使用を控える
- 電気をこまめに消す
- 省エネ製品を利用する
- 冷蔵庫の開閉に気を使う
- 買物用のバッグを持参して買い物に行く
- ごみと資源物を分別し、適正に排出する
- など

図3-40-1 地球環境への配慮－全体、経年比較

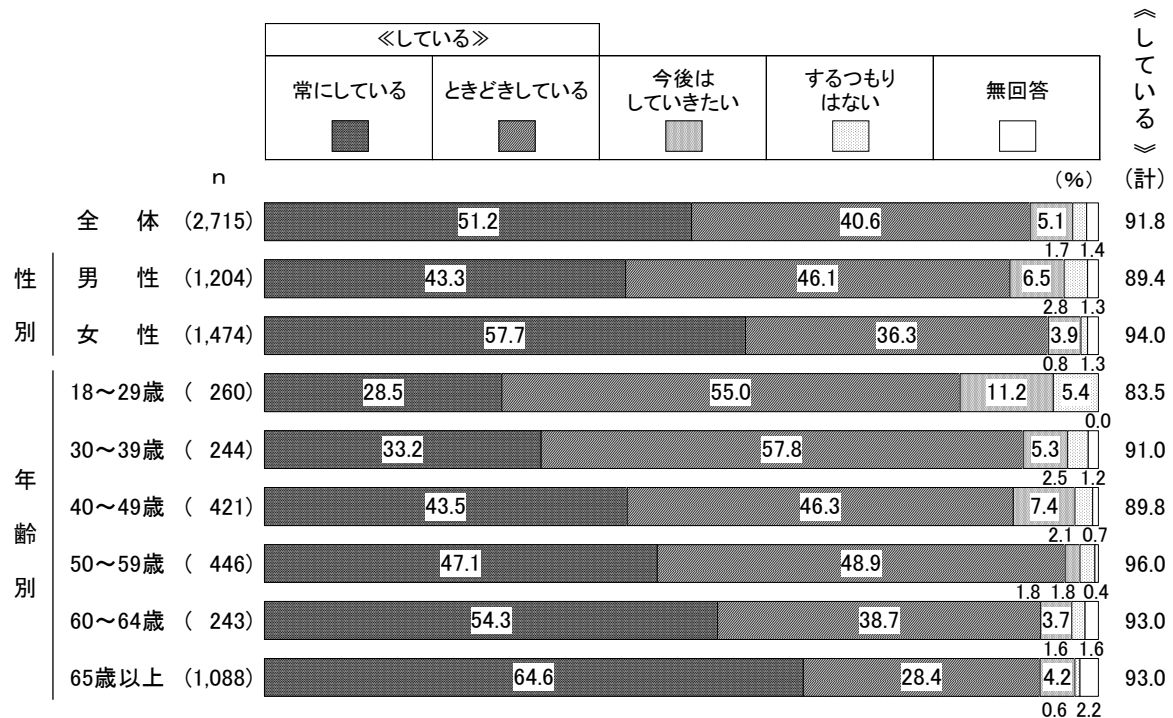


ふだんから省エネ・省資源など、地球環境に配慮した暮らしをしているか聞いたところ、「常にしている」(51.2%)と「ときどきしている」(40.6%)を合わせた《している》(91.8%)は9割強となっている。また、「今後はしていきたい」(5.1%)は1割未満で、「するつもりはない」(1.7%)はわずかとなっている。

前回までの調査と比較すると、令和元年(2019年)と大きな傾向の違いはみられない。

(図3-40-1)

図 3-40-2 地球環境への配慮－性別、年齢別

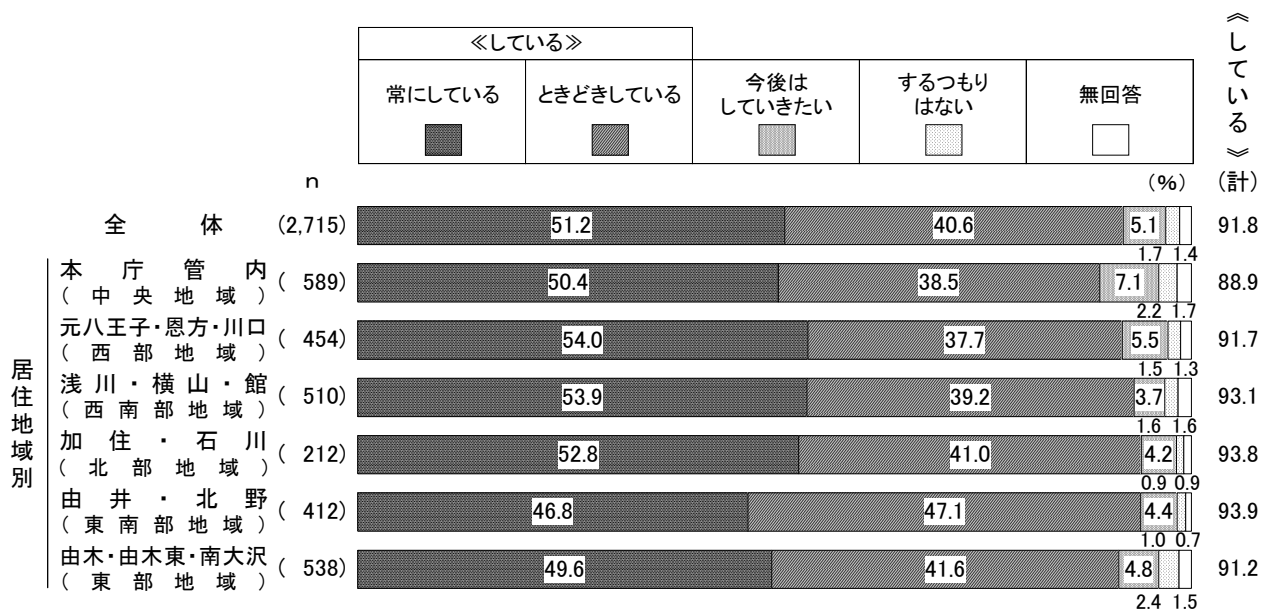


性別にみると、《している》は女性（94.0%）が男性（89.4%）より4.6ポイント高くなっている。

年齢別にみると、《している》は50～59歳（96.0%）で10割近くと多くなっている。

(図 3-40-2)

図 3-40-3 地球環境への配慮－居住地域別



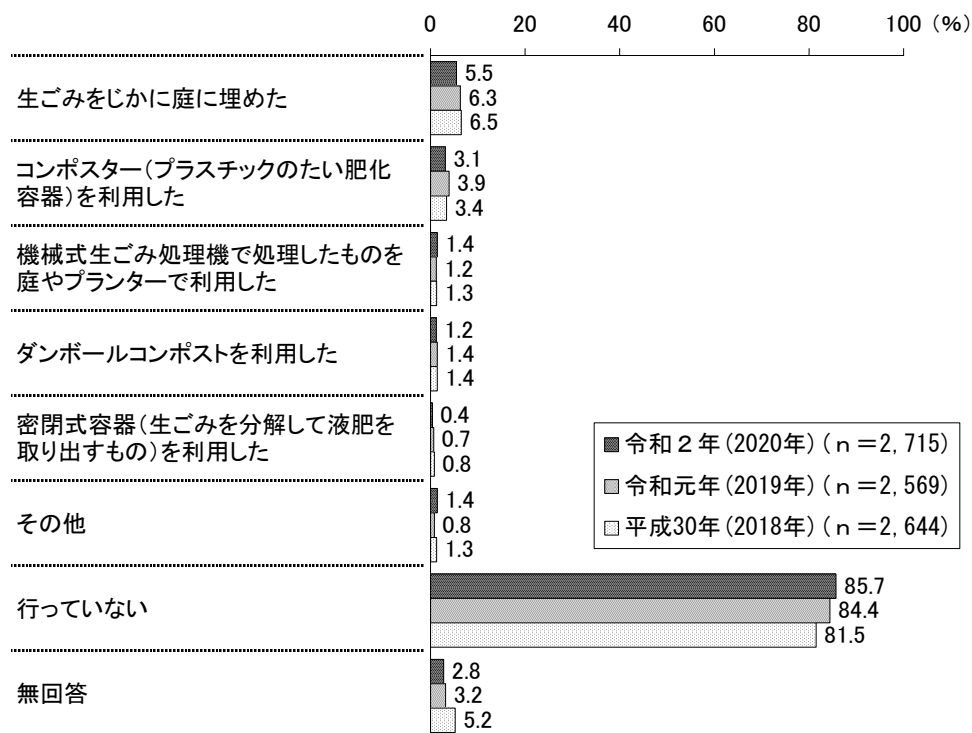
居住地域別にみると、《している》は本庁管内（中央地域）（88.9%）を除く全ての地域で9割強と多くなっている。(図 3-40-3)

(41) この1年間に行った生ごみのたい肥化

◇「行っていない」が8割台半ば

問47 あなたの世帯は、この1年間に、何らかの方法により生ごみのたい肥化を行いましたか。(〇はいくつでも)

図3-41-1 この1年間に行った生ごみのたい肥化－全体、経年比較

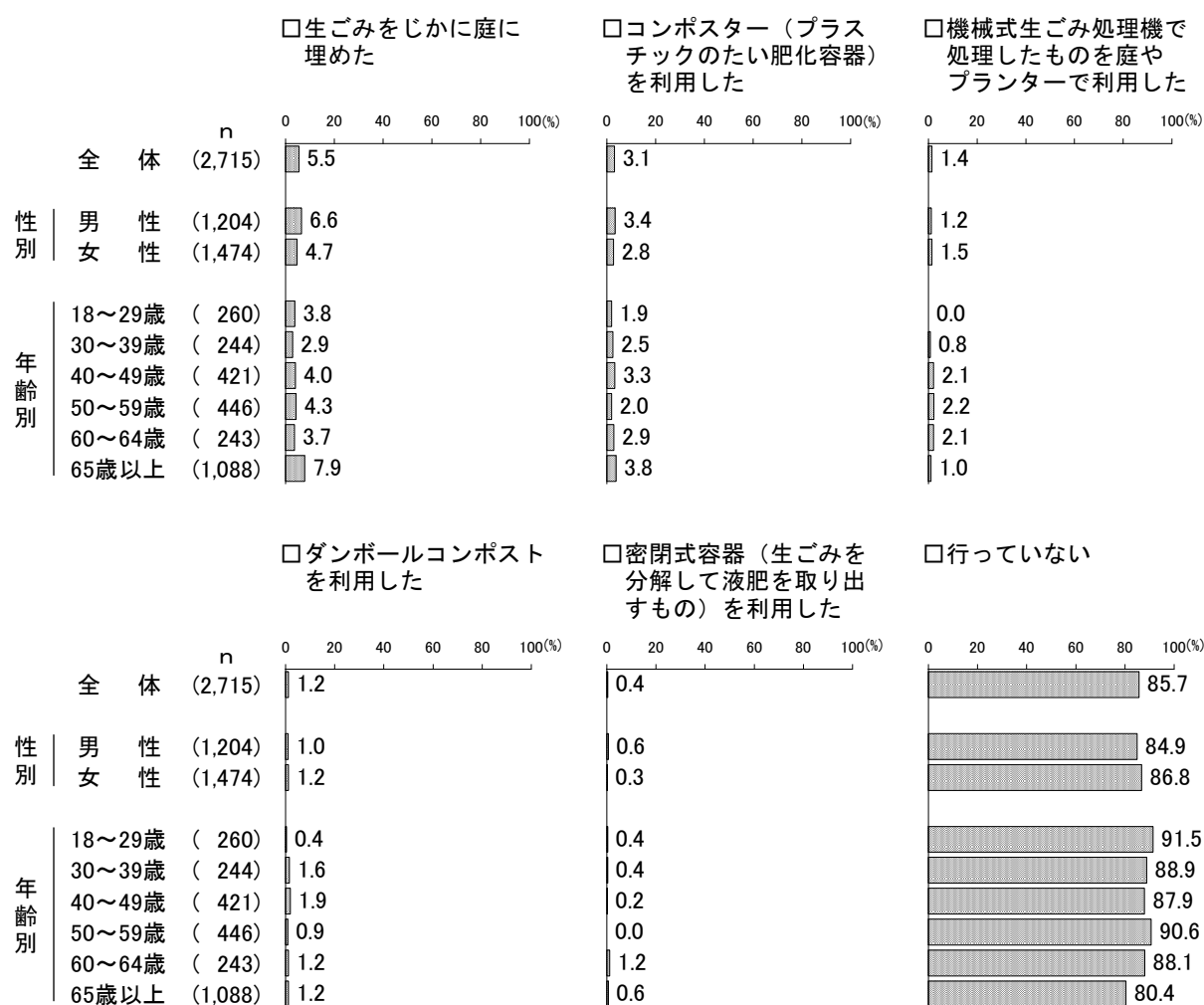


この1年間に何らかの方法により生ごみのたい肥化を行ったか聞いたところ、「行っていない」(85.7%)が8割台半ばとなっている。行った中では、「生ごみをじかに庭に埋めた」(5.5%)、「コンポスター(プラスチックのたい肥化容器)を利用した」(3.1%)などの順となっている。

前回までの調査と比較すると、令和元年(2019年)と大きな傾向の違いはみられない。

(図3-41-1)

図3-41-2 この1年間に行った生ごみのたい肥化－性別、年齢別（「その他」を除く）

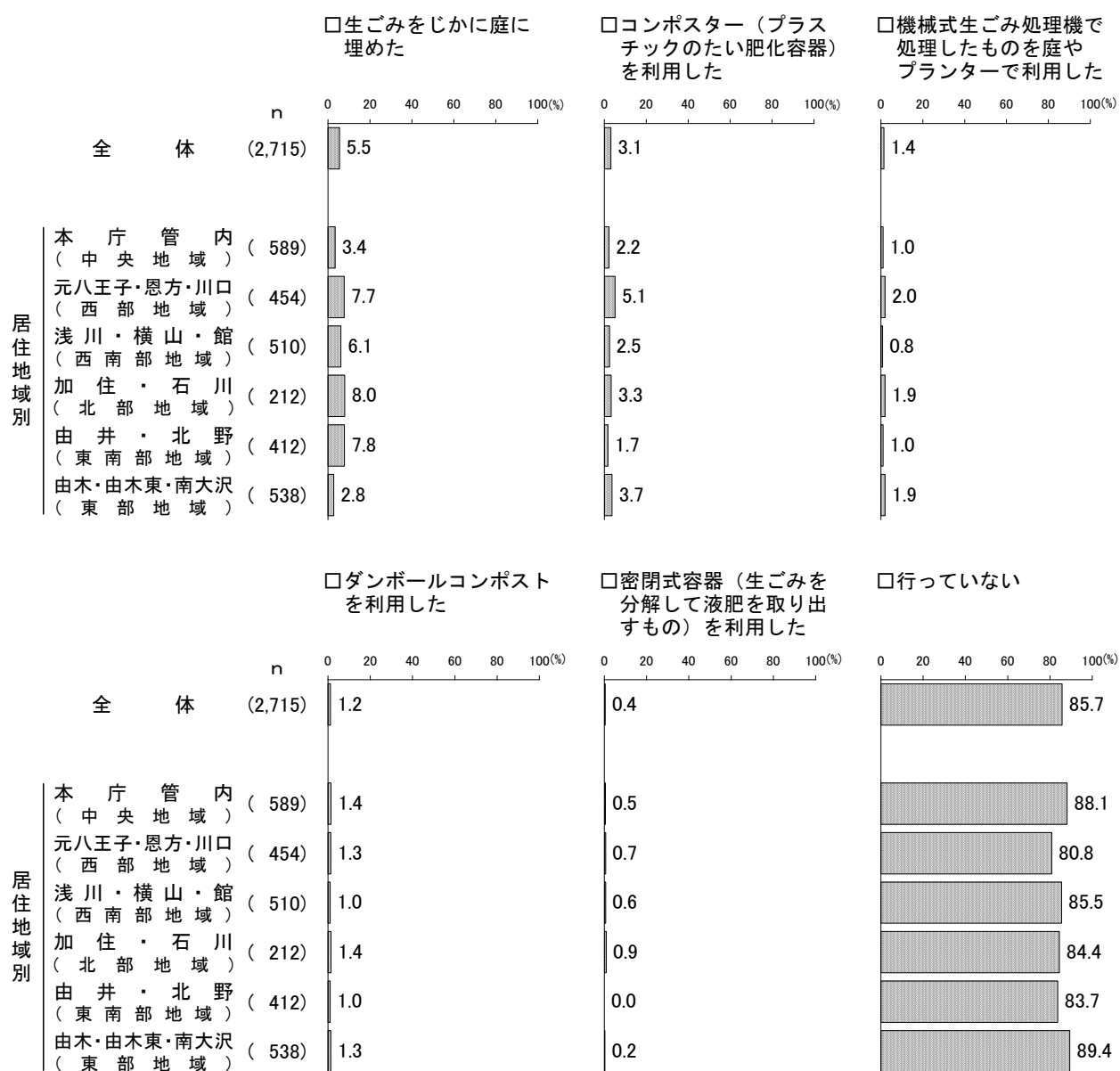


性別にみると、大きな傾向の違いはみられない。

年齢別にみると、「行っていない」は18～29歳（91.5％）で9割強と多くなっている。

（図3-41-2）

図3-41-3 この1年間に行った生ごみのたい肥化－居住地域別（「その他」を除く）



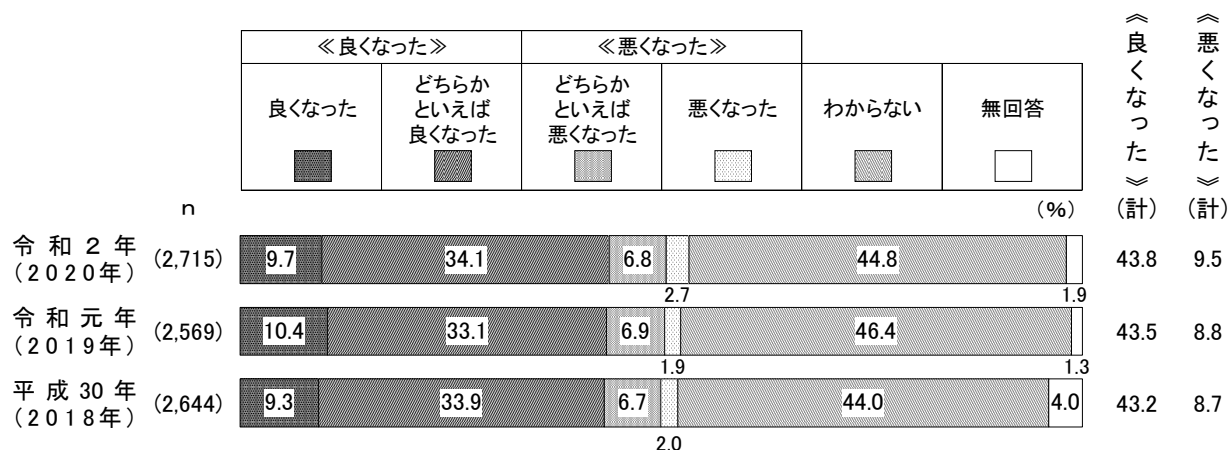
居住地域別にみると、「行っていない」は由木・由木東・南大沢（東部地域）（89.4%）で9割弱と多くなっている。（図3-41-3）

(42) 市の生活環境

◇《良くなった》が4割強

問48 あなたは、市の生活環境（水・みどり・ごみ・大気・騒音・振動など）が、以前と比べどうなったと思いますか。（○は1つだけ）

図3-42-1 市の生活環境－全体、経年比較

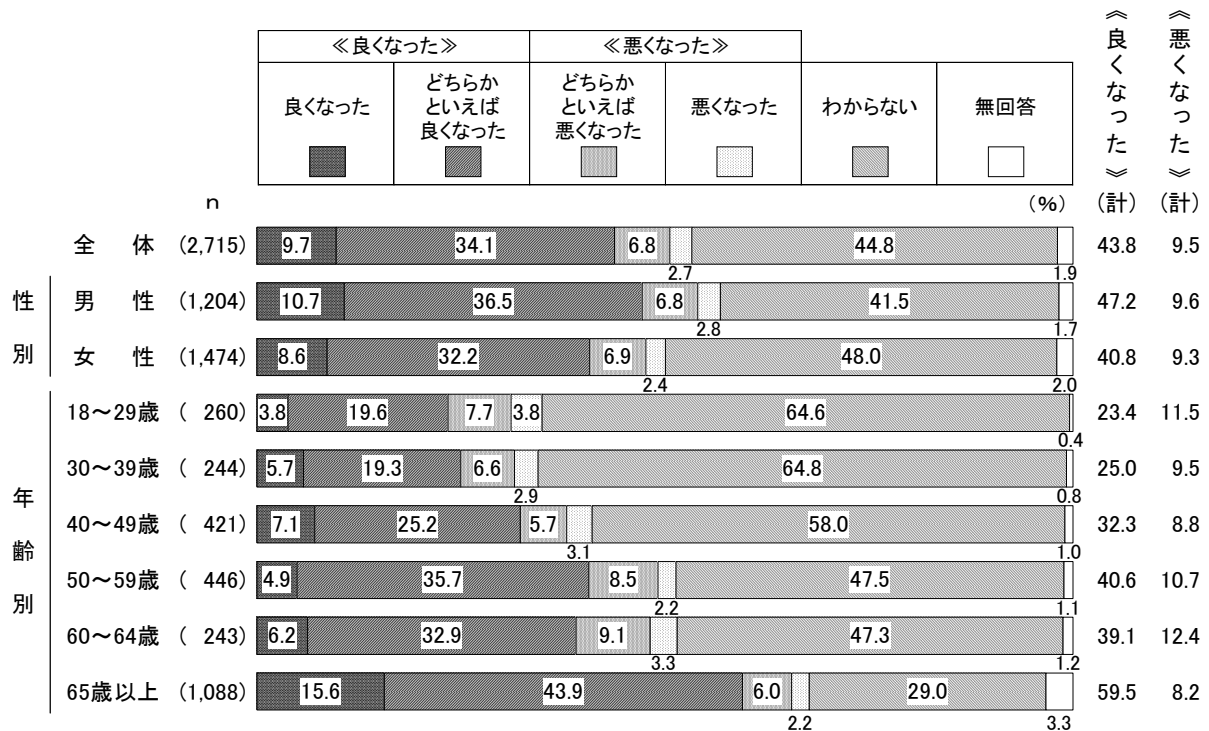


市の生活環境（水・みどり・ごみ・大気・騒音・振動など）が以前と比べどうなったと思うか聞いたところ、「良くなった」（9.7%）と「どちらかといえば良くなった」（34.1%）を合わせた《良くなった》（43.8%）は4割強となっている。一方、「どちらかといえば悪くなった」（6.8%）と「悪くなった」（2.7%）を合わせた《悪くなった》（9.5%）は1割未満となっている。

前回までの調査と比較すると、令和元年（2019年）と大きな傾向の違いはみられない。

（図3-42-1）

図 3-42-2 市の生活環境－性別、年齢別

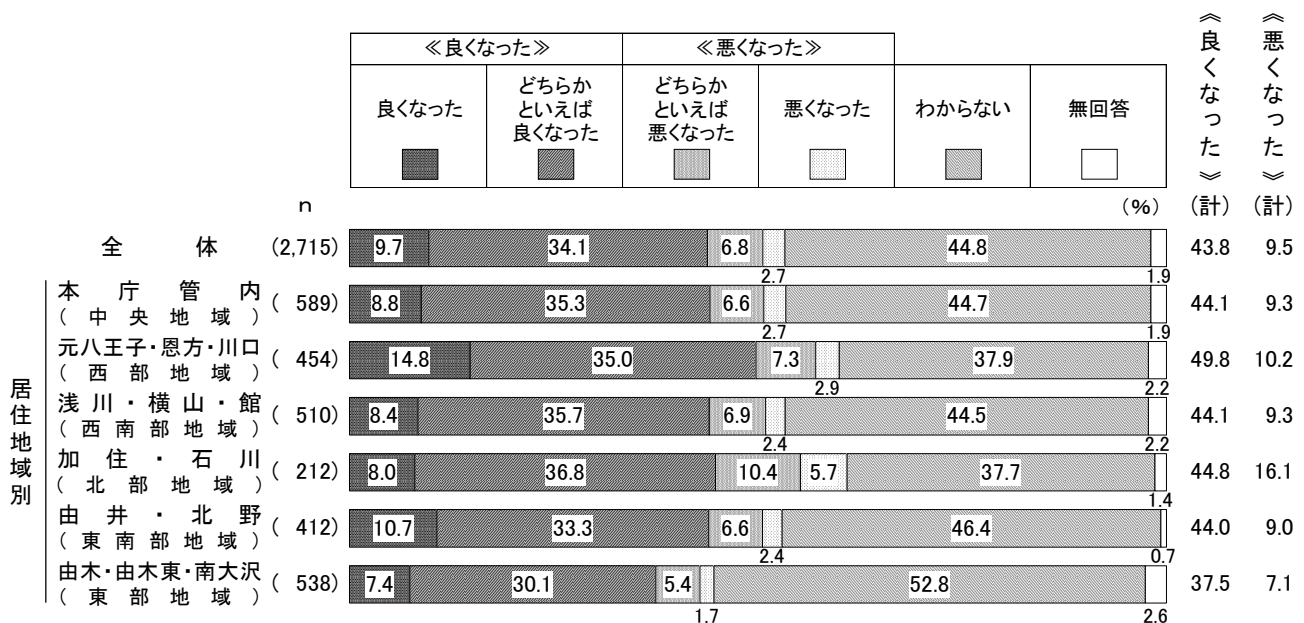


性別にみると、《良くなった》は男性（47.2%）が女性（40.8%）より6.4ポイント高くなっている。

年齢別にみると、《良くなった》は65歳以上（59.5%）で6割弱と多くなっている。

（図 3-42-2）

図 3-42-3 市の生活環境－居住地地域別



居住地地域別にみると、《良くなった》は元八王子・恩方・川口（西部地域）（49.8%）で5割弱と多くなっている。一方、《悪くなった》は加住・石川（北部地域）（16.1%）で2割近くとなっている。（図 3-42-3）

(43)「生物多様性」の周知度

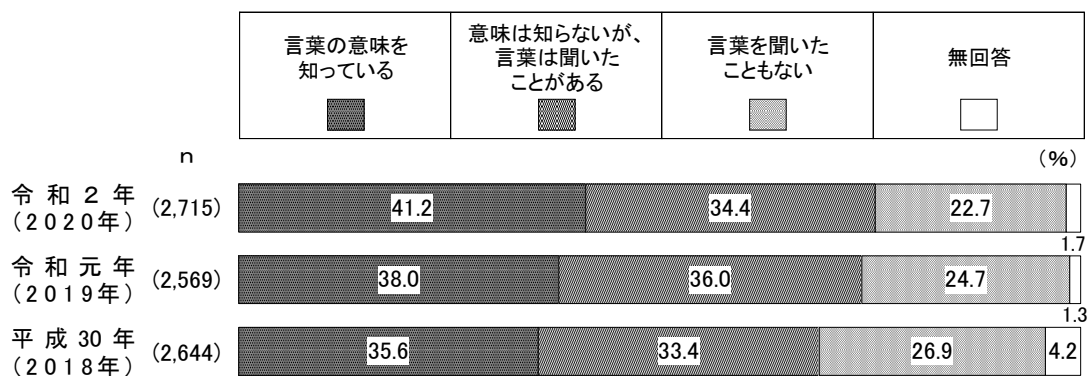
◇「言葉の意味を知っている」が4割強

問49 あなたは、「生物多様性」という言葉を知っていますか。(○は1つだけ)

※生物多様性とは・・・

動物や植物、昆虫などのいろいろな生きものがいて、それらがつながり合っていることをいいます。この生きものたちのつながりにより、地球では豊かな生態系が保たれています。生物多様性は、衣・食・住だけでなく、きれいな水や空気、薬の原料、文化の源泉など、様々な恵みをもたらしてくれます。

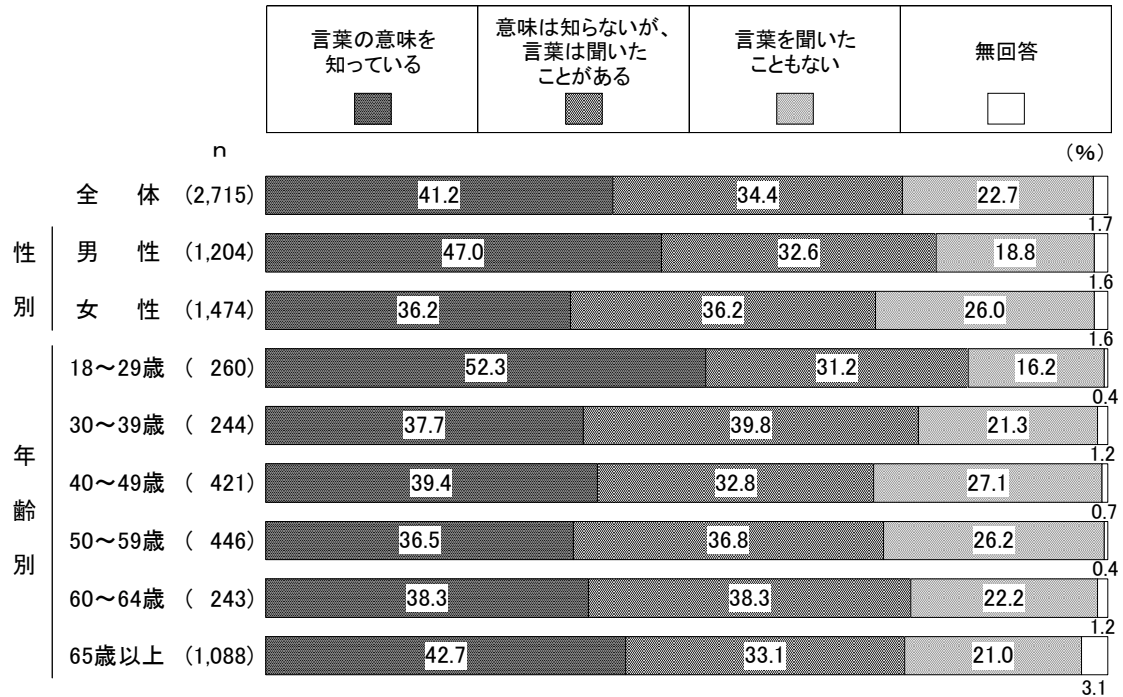
図3-43-1 「生物多様性」の周知度－全体、経年比較



「生物多様性」という言葉を知っているか聞いたところ、「言葉の意味を知っている」(41.2%)が4割強、「意味は知らないが、言葉は聞いたことがある」(34.4%)は3割台半ばとなっている。一方、「言葉を聞いたこともない」(22.7%)は2割強となっている。

前回までの調査と比較すると、「言葉の意味を知っている」は令和元年(2019年)(38.0%)より3.2ポイント増加している。(図3-43-1)

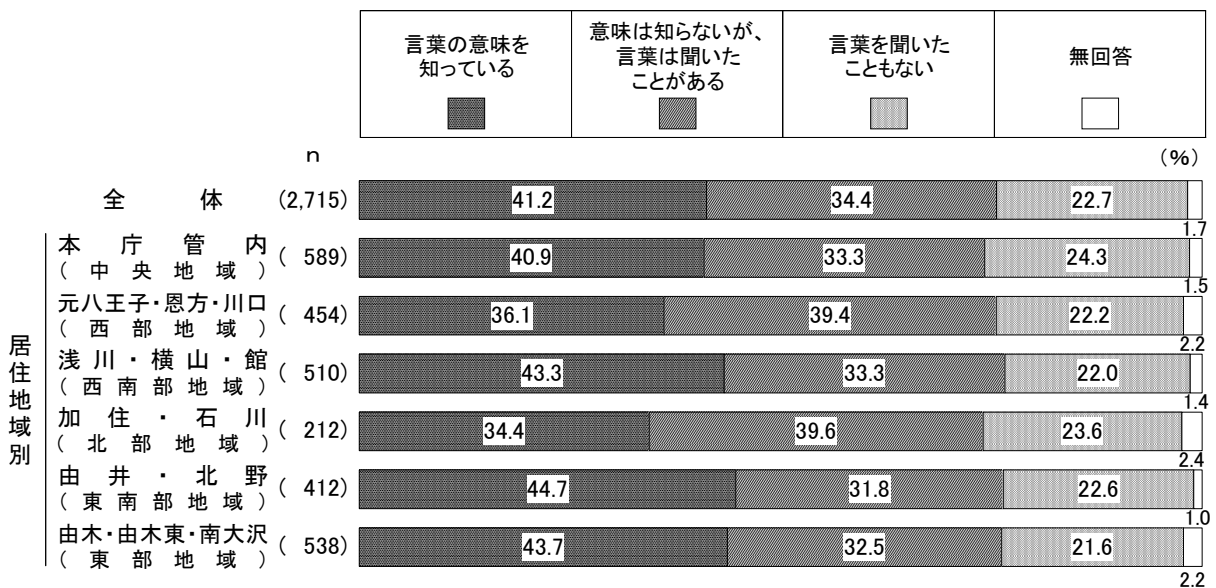
図 3-43-2 「生物多様性」の周知度－性別、年齢別



性別にみると、「言葉の意味を知っている」は男性（47.0％）が女性（36.2％）より10.8ポイント高くなっている。一方、「言葉を聞いたこともない」は女性（26.0％）が男性（18.8％）より7.2ポイント高くなっている。

年齢別にみると、「言葉の意味を知っている」は18～29歳（52.3％）で5割強と多くなっている。一方、「言葉を聞いたこともない」は40～49歳（27.1％）と50～59歳（26.2％）で3割近くと多くなっている。（図 3-43-2）

図 3-43-3 「生物多様性」の周知度－居住地域別



居住地域別にみると、「言葉の意味を知っている」は由井・北野（東南部地域）（44.7％）で4割台半ばと多くなっている。（図 3-43-3）

(44)「性的マイノリティ」の周知度

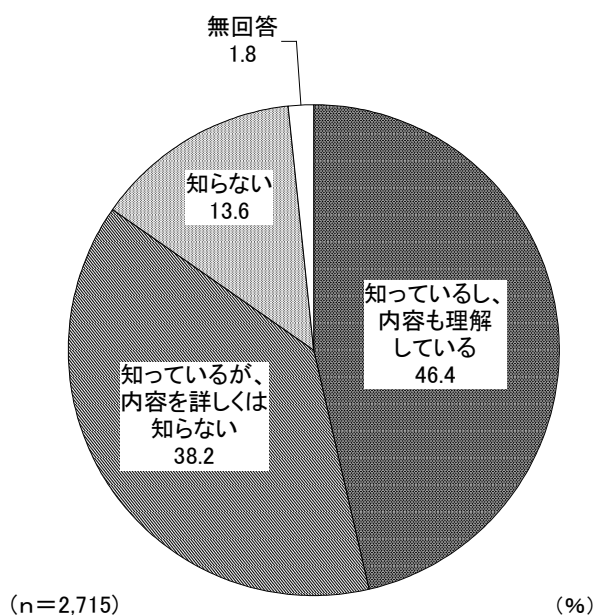
◇「知っているし、内容も理解している」が5割近く

問50 「性的マイノリティ」という言葉を知っていますか。(○は1つだけ)

※性的マイノリティとは・・・

同性を好きになる人、異性も同性も好きになる人や自分の性に違和感がある人など、性のあり方が少数派の人たちのことを言います。

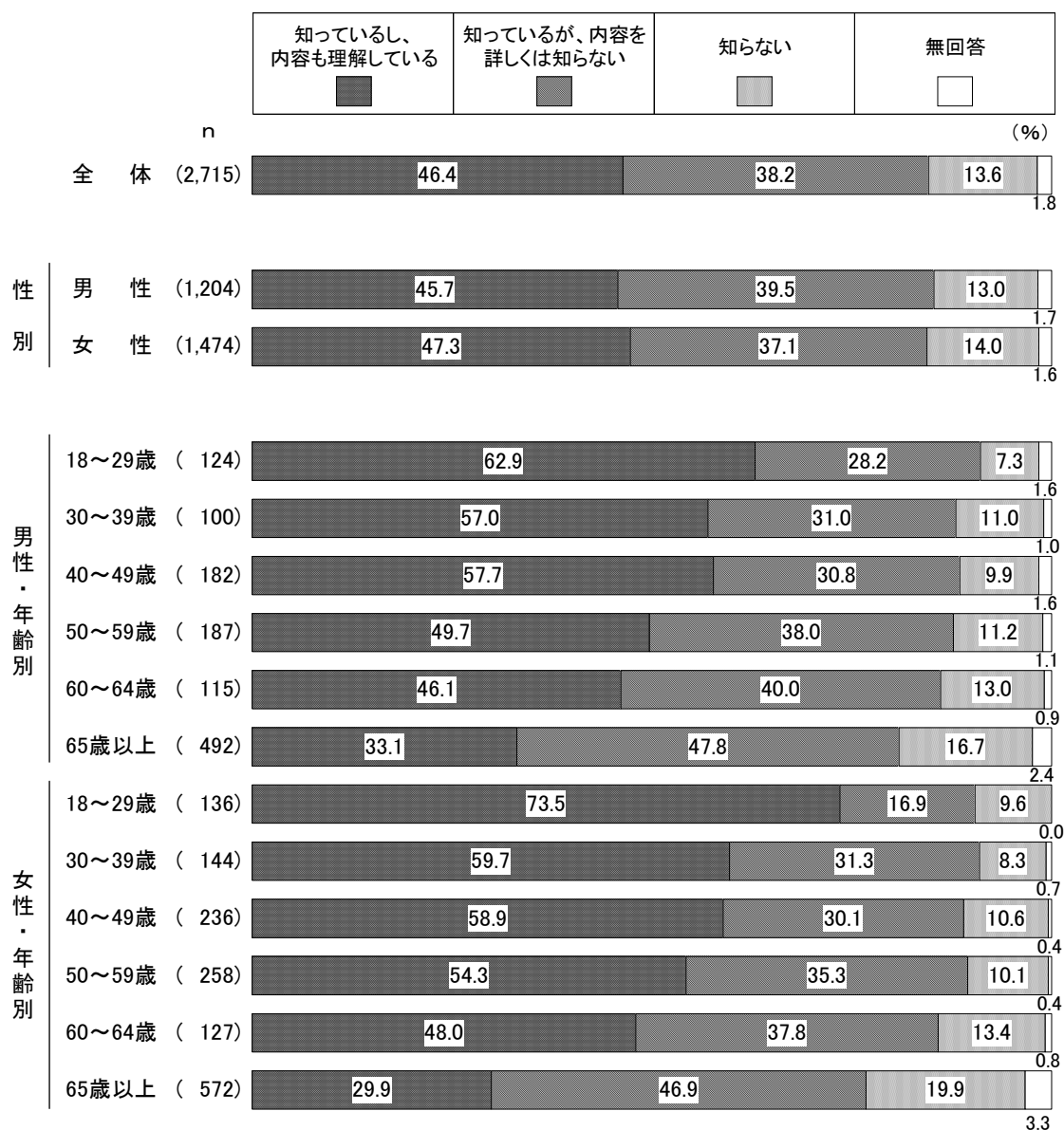
図3-44-1 「性的マイノリティ」の周知度－全体



(注) 新規の設問のため、経年比較はない。

「性的マイノリティ」という言葉を知っているか聞いたところ、「知っているし、内容も理解している」(46.4%)が5割近く、「知っているが、内容を詳しくは知らない」(38.2%)は4割近くとなっている。一方、「知らない」(13.6%)は1割強となっている。(図3-44-1)

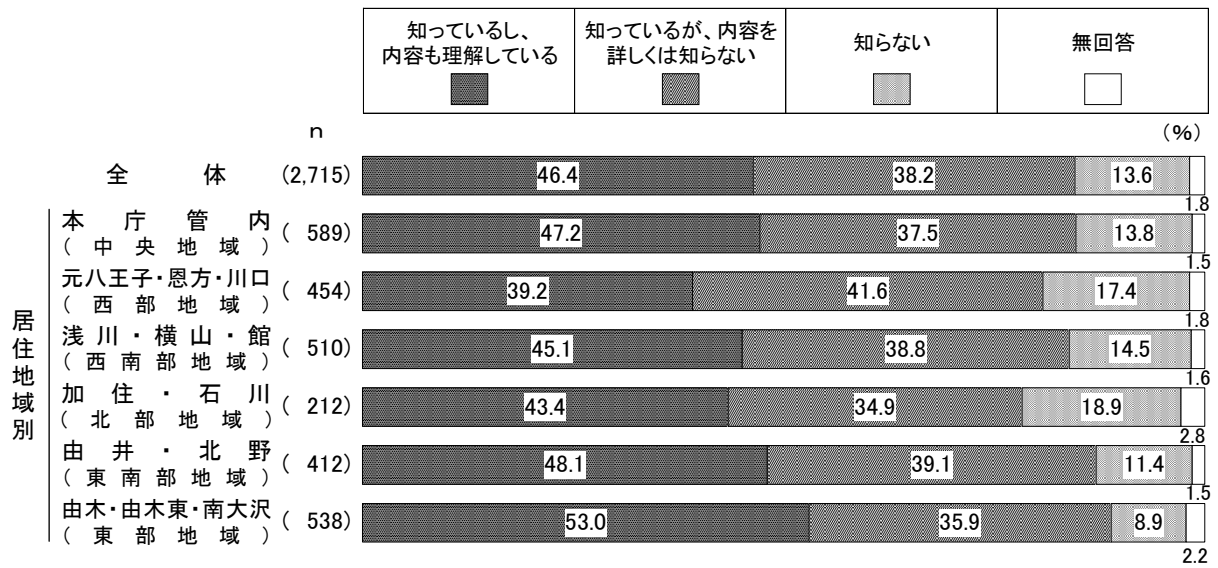
図3-44-2 「性的マイノリティ」の周知度－性別、性・年齢別



性別にみると、「知っているが、内容を詳しくは知らない」は男性（39.5%）が女性（37.1%）より2.4ポイント高くなっている。

性・年齢別にみると、「知っているし、内容も理解している」は男女ともにおおむね年代が低くなるほど割合が高く、女性18～29歳（73.5%）で7割強、男性18～29歳（62.9%）で6割強と多くなっている。一方、「知らない」は女性65歳以上（19.9%）で2割弱となっている。（図3-44-2）

図 3-44-3 「性的マイノリティ」の周知度－居住地域別



居住地域別にみると、「知っているし、内容も理解している」は由木・由木東・南大沢（東部地域）（53.0%）で5割強と多くなっている。一方、「知らない」は加住・石川（北部地域）（18.9%）と元八王子・恩方・川口（西部地域）（17.4%）で2割近くとなっている。（図 3-44-3）

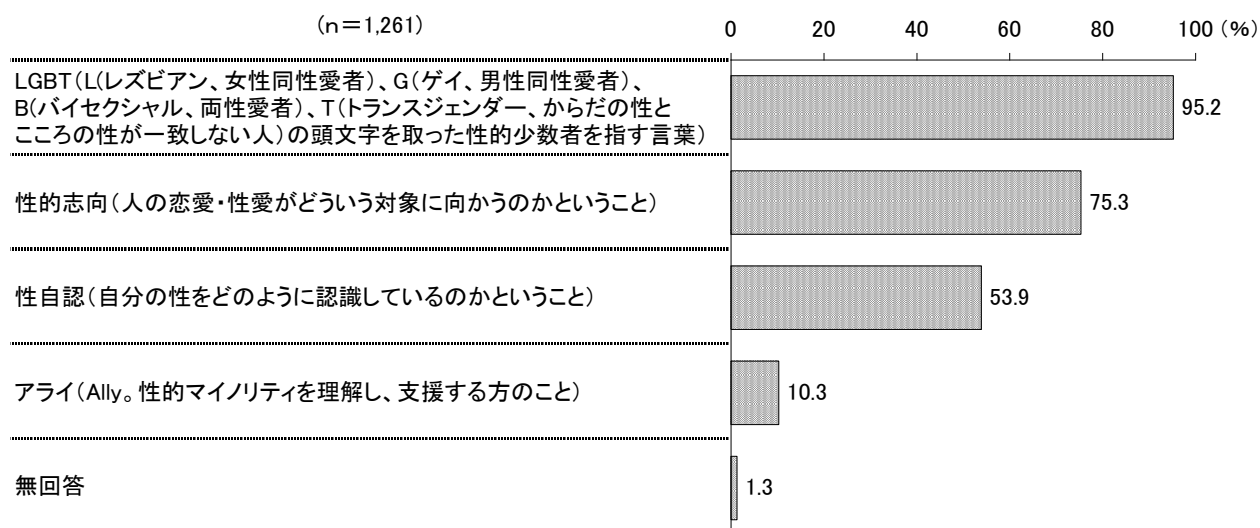
(45)「性的マイノリティ」に関連した言葉の周知度

◇「LGBT」が9割台半ば

(問50で「知っているし、内容も理解している」とお答えの方へ)

問50－1 次の言葉を知っていますか。(○はいくつでも)

図3－45－1 「性的マイノリティ」に関連した言葉の周知度－全体

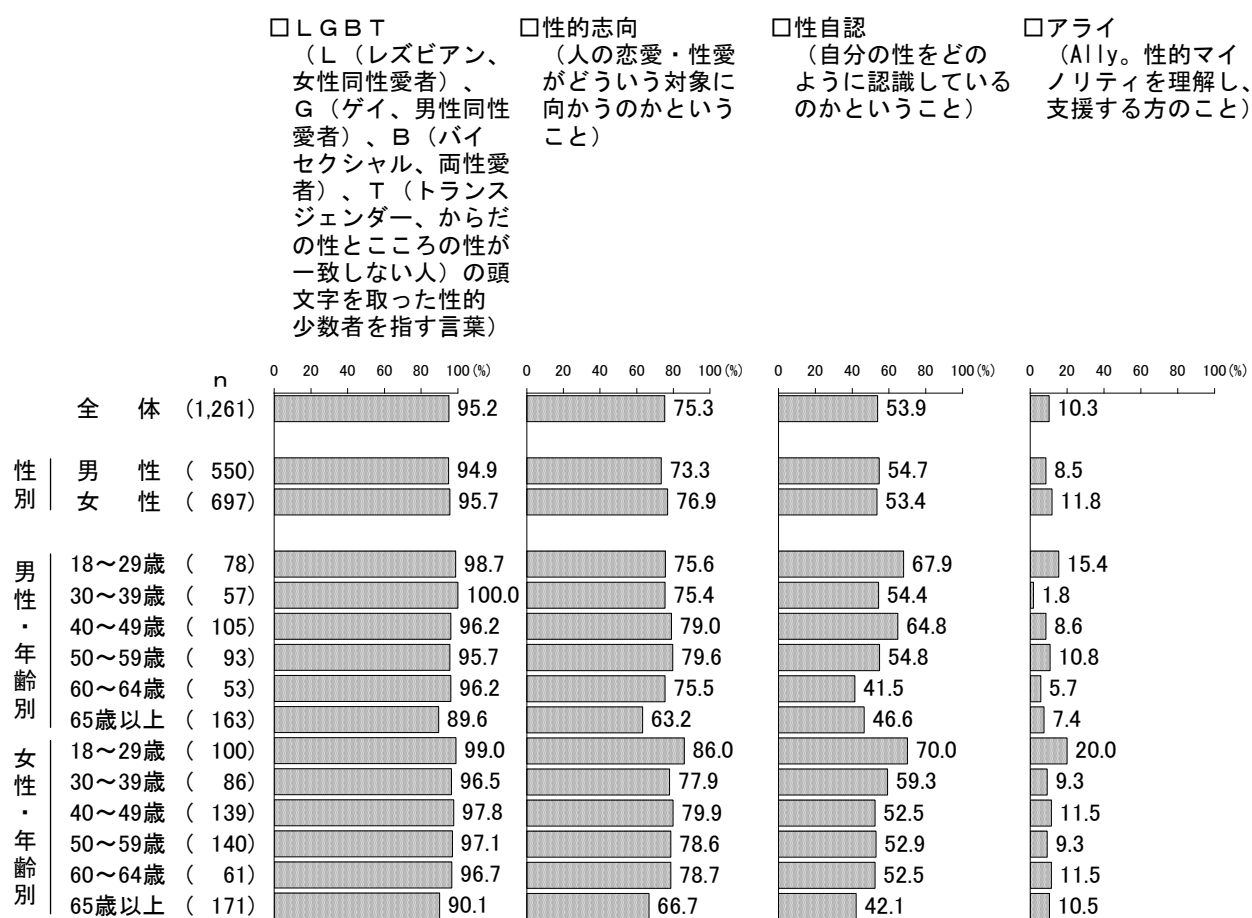


(注) 新規の設問のため、経年比較はない。

「性的マイノリティ」という言葉を「知っているし、内容も理解している」と回答した1,261人に、「性的マイノリティ」に関する言葉を知っているか聞いたところ、「LGBT (L(レズビアン、女性同性愛者)、G (ゲイ、男性同性愛者)、B(バイセクシャル、両性愛者)、T (トランスジェンダー、からだの性と心の性が一致しない人) の頭文字を取った性的少数者を指す言葉)」(95.2%)が9割台半ばで最も多くなっている。次いで「性的志向 (人の恋愛・性愛がどういう対象に向かうのかということ)」(75.3%)、「性自認(自分の性をどのように認識しているのかということ)」(53.9%)、「アライ (Ally。性的マイノリティを理解し、支援する方のこと)」(10.3%)の順となっている。

(図3－45－1)

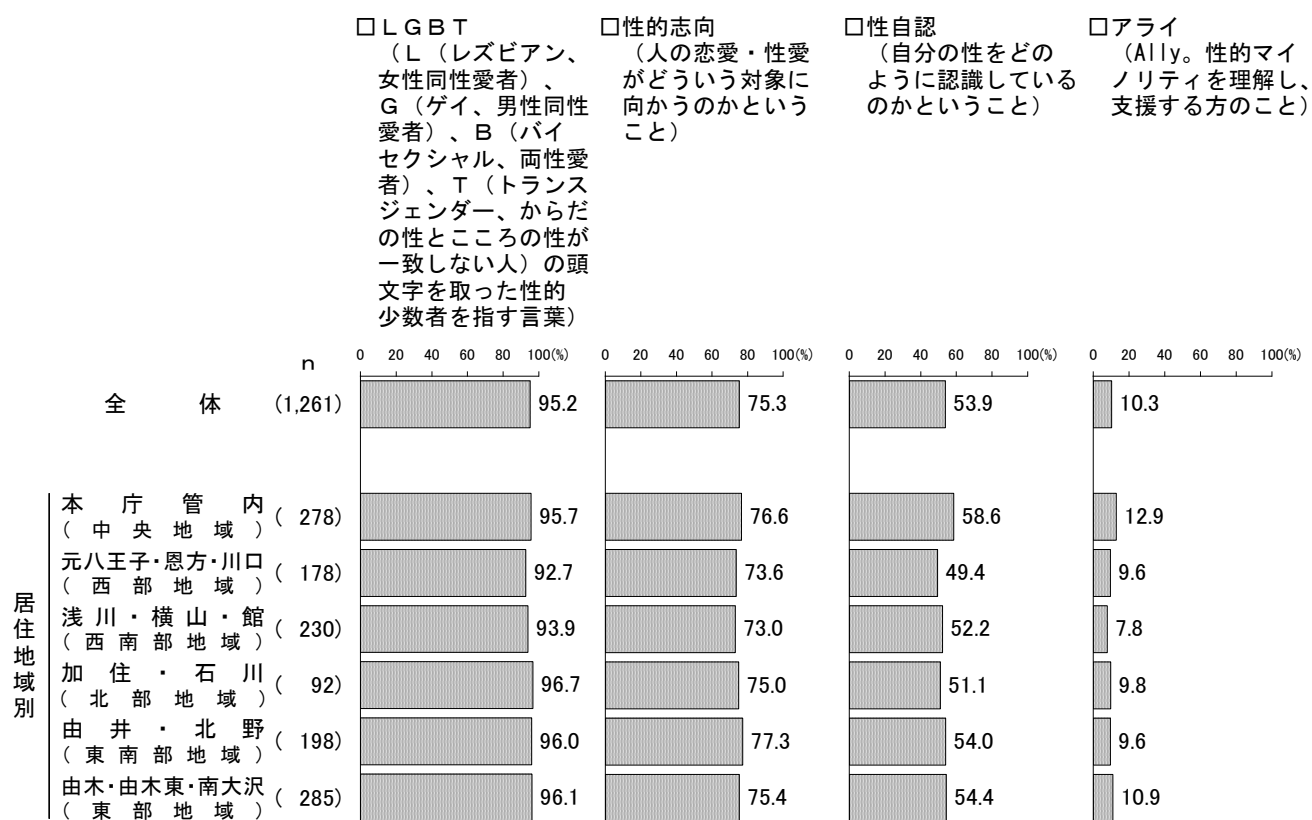
図3-45-2 「性的マイノリティ」に関連した言葉の周知度－性別、性・年齢別



性別にみると、「性的志向（人の恋愛・性愛がどういう対象に向かうのかということ）」は女性（76.9%）が男性（73.3%）より3.6ポイント、「アライ（Ally。性的マイノリティを理解し、支援する方のこと）」は女性（11.8%）が男性（8.5%）より3.3ポイント、それぞれ高くなっている。

性・年齢別にみると、「性的志向（人の恋愛・性愛がどういう対象に向かうのかということ）」は女性18～29歳（86.0%）で9割近くと多くなっている。「性自認（自分の性をどのように認識しているのかということ）」は女性18～29歳（70.0%）で7割と多くなっている。（図3-45-2）

図 3-45-3 「性的マイノリティ」に関連した言葉の周知度－居住地域別



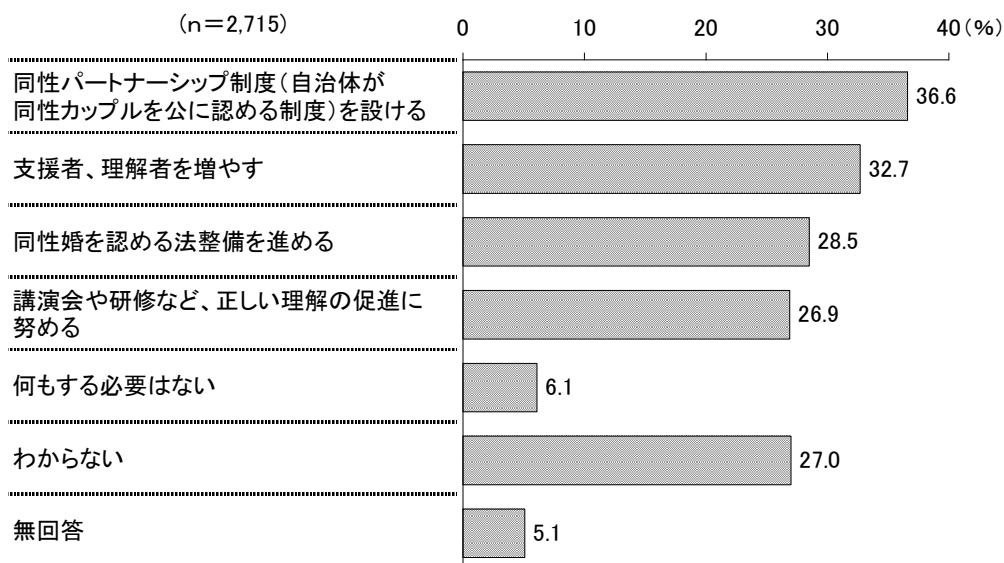
居住地域別にみると、「性的志向（人の恋愛・性愛がどういう対象に向かうのかということ）」は由井・北野（東南部地域）（77.3%）と本庁管内（中央地域）（76.6%）で8割近くと多くなっている。「性自認（自分の性をどのように認識しているのかということ）」は本庁管内（中央地域）（58.6%）で6割近くと多くなっている。（図 3-45-3）

(46) 「性的マイノリティ」の生きやすい環境づくり

◇「同性パートナーシップ制度（自治体が同性カップルを公に認める制度）を設ける」が4割近く

問51 「性的マイノリティ」の方々にとって生きやすい環境づくりのために必要だと思うことはなんですか。（○はいくつでも）

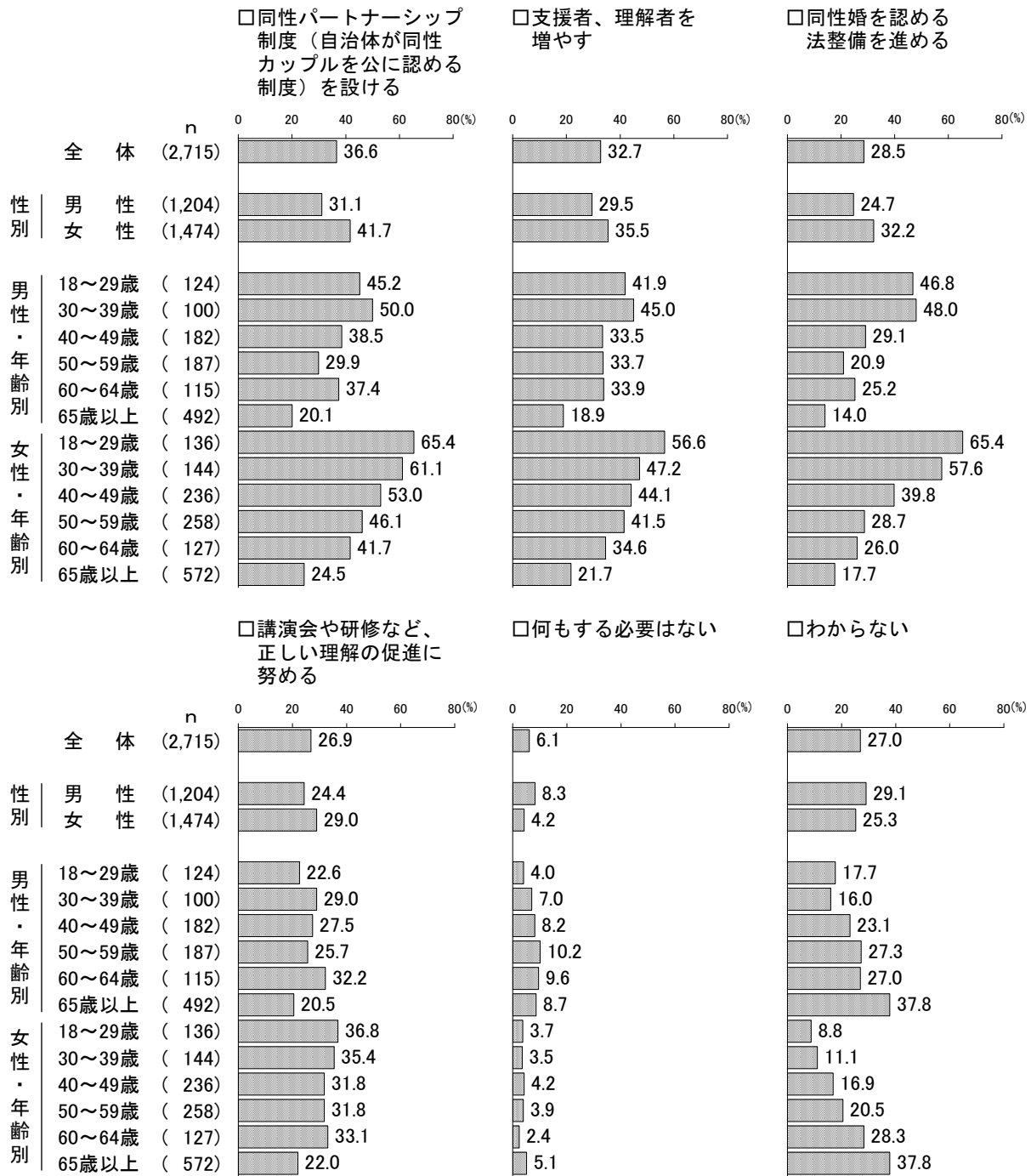
図3-46-1 「性的マイノリティ」の生きやすい環境づくりー全体



(注) 新規の設問のため、経年比較はない。

「性的マイノリティ」の方々にとって生きやすい環境づくりのために必要だと思うことを聞いたところ、「同性パートナーシップ制度(自治体が同性カップルを公に認める制度)を設ける」(36.6%)が4割近くで最も多くなっている。次いで「支援者、理解者を増やす」(32.7%)、「同性婚を認める法整備を進める」(28.5%)、「講演会や研修など、正しい理解の促進に努める」(26.9%)などの順となっている。(図3-46-1)

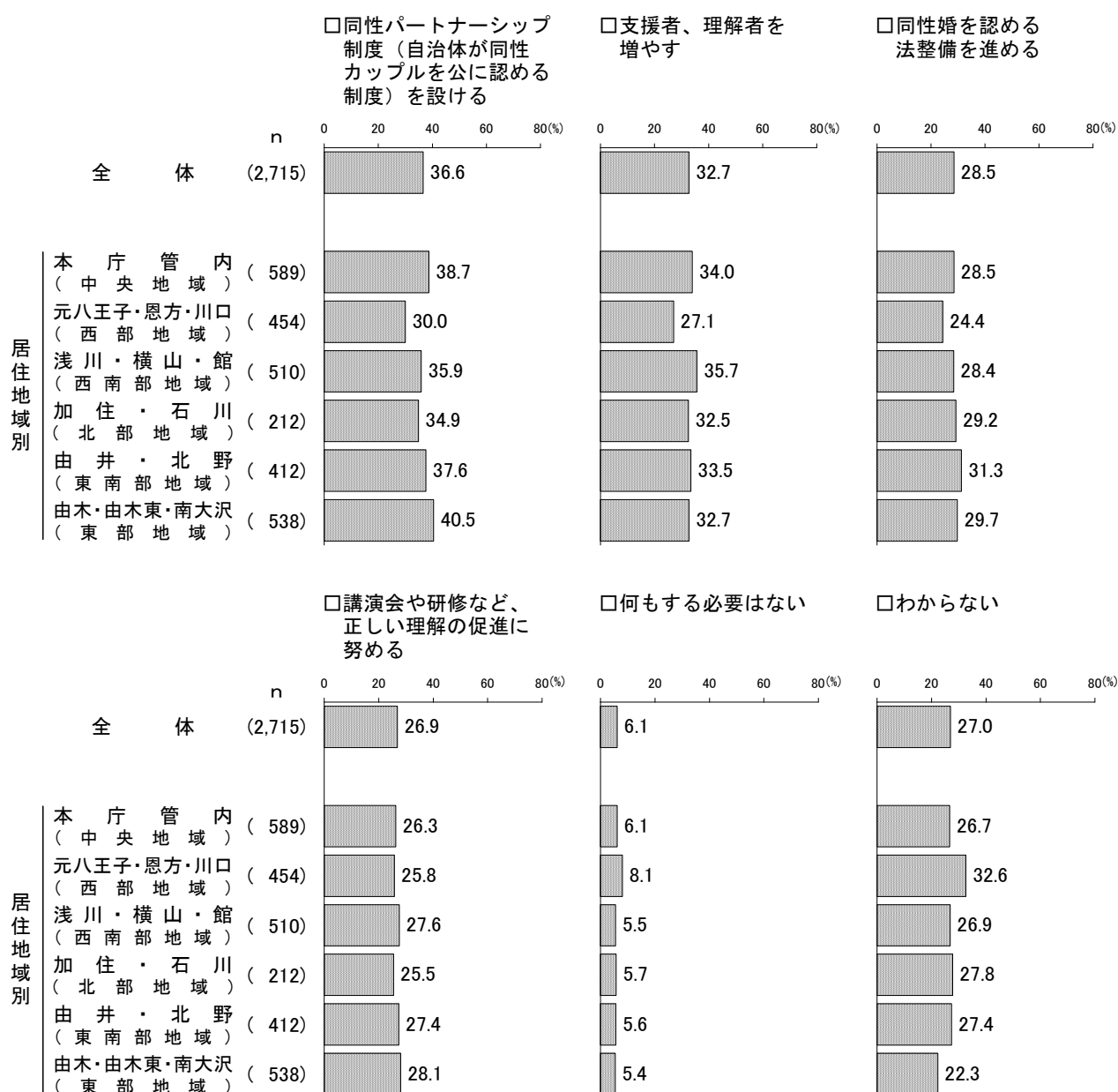
図 3-46-2 「性的マイノリティ」の生きやすい環境づくりー性別、性・年齢別



性別にみると、「同性パートナーシップ制度（自治体が同性カップルを公に認める制度）を設ける」は女性（41.7％）が男性（31.1％）より10.6ポイント、「同性婚を認める法整備を進める」は女性（32.2％）が男性（24.7％）より7.5ポイント、「支援者、理解者を増やす」は女性（35.5％）が男性（29.5％）より6.0ポイント、それぞれ高くなっている。

性・年齢別にみると、「同性パートナーシップ制度（自治体が同性カップルを公に認める制度）を設ける」と「同性婚を認める法整備を進める」はともに女性18～29歳（65.4％）で6割台半ばと多くなっている。（図3-46-2）

図 3-46-3 「性的マイノリティ」の生きやすい環境づくりー居住地域別



居住地域別にみると、「同性パートナーシップ制度（自治体が同性カップルを公に認める制度）を設ける」は由木・由木東・南大沢（東部地域）（40.5％）で約4割と多くなっている。「支援者、理解者を増やす」は浅川・横山・館（西南部地域）（35.7％）と本庁管内（中央地域）（34.0％）で3割台半ばと多くなっている。「同性婚を認める法整備を進める」は由井・北野（東南部地域）（31.3％）で3割強と多くなっている。（図 3-46-3）

(47) ワークライフバランスの実現 ①あなたの望む優先度

◇希望する優先度は「『家庭生活』を優先」と「『仕事』と『家庭生活』をともに優先」がともに3割近く

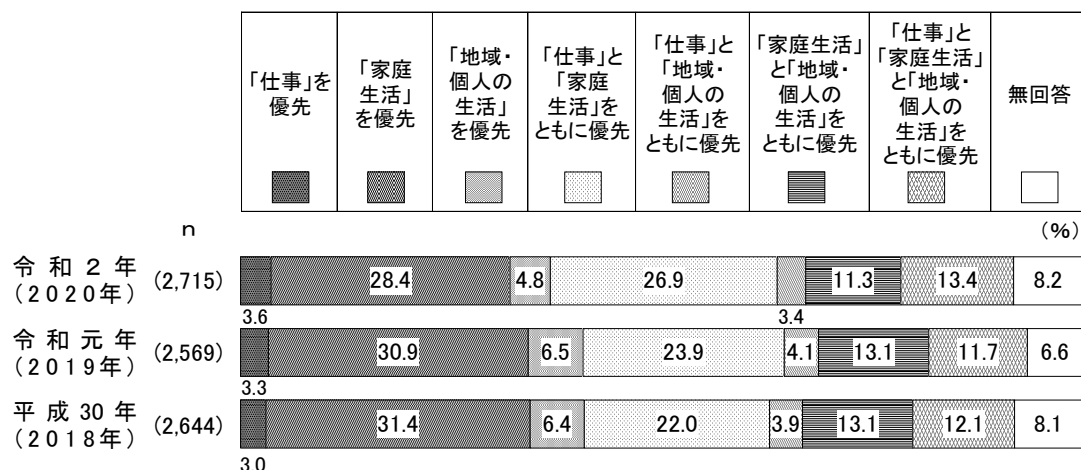
問52 仕事と生活の調和（ワークライフバランス）についておたずねします。あなたの生活の中での、「仕事」、「家庭生活」、「地域・個人の生活」（地域活動・学習・趣味等）の優先度について、それぞれあてはまるものに○をつけてください。

（○はそれぞれ1つずつ）

※仕事と生活の調和（ワークライフバランス）とは・・・

人それぞれの希望に応じて、「仕事」と、子育てや親の介護、地域活動等の「仕事以外の生活」の調和が図られる状態のことです。望ましいバランスは、人によって異なります。

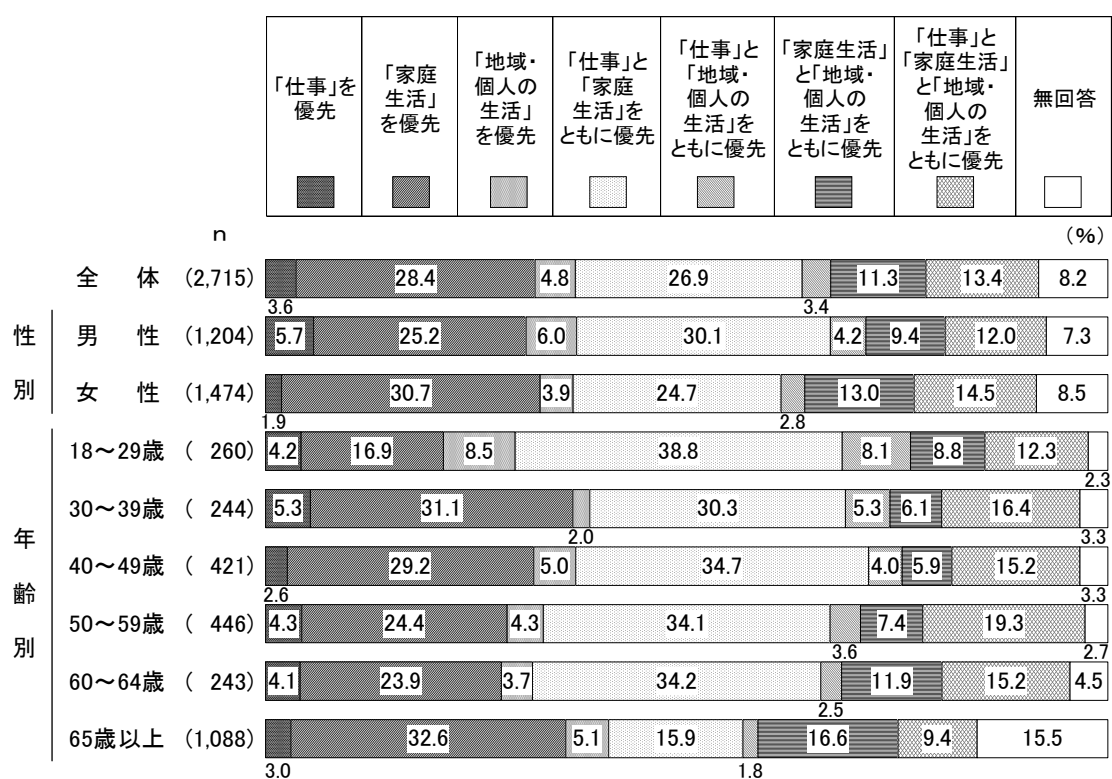
図3-47-1 ワークライフバランスの実現 ①あなたの望む優先度—全体、経年比較



「仕事」、「家庭生活」、「地域・個人の生活」（地域活動・学習・趣味等）の優先度について、希望する優先度を聞いたところ、「『家庭生活』を優先」（28.4%）と「『仕事』と『家庭生活』をともに優先」（26.9%）がともに3割近くで多くなっている。次いで「『仕事』と『家庭生活』と『地域・個人の生活』をともに優先」（13.4%）、「『家庭生活』と『地域・個人の生活』をともに優先」（11.3%）などの順となっている。

前回までの調査と比較すると、「『仕事』と『家庭生活』をともに優先」は令和元年（2019年）（23.9%）より3.0ポイント増加している。一方、「『家庭生活』を優先」は令和元年（2019年）（30.9%）より2.5ポイント減少している。（図3-47-1）

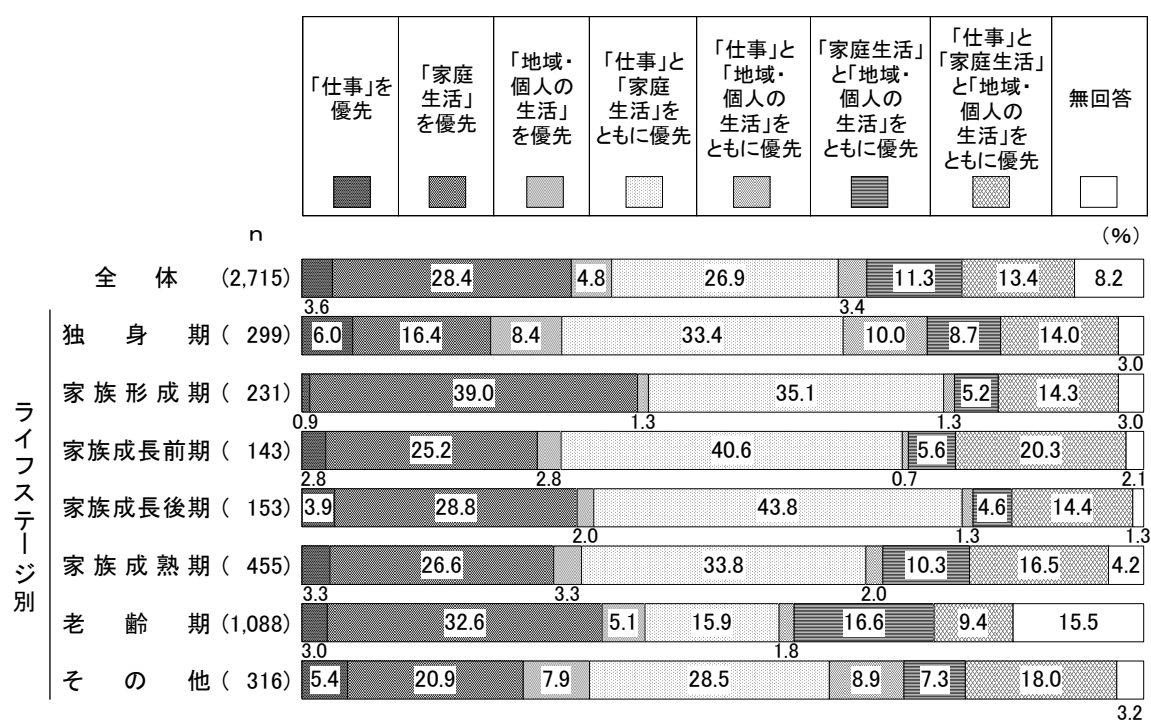
図 3-47-2 ワークライフバランスの実現 ①あなたの望む優先度－性別、年齢別



性別にみると、『家庭生活』を優先は女性（30.7%）が男性（25.2%）より5.5ポイント高くなっている。一方、『仕事』と『家庭生活』をともに優先は男性（30.1%）が女性（24.7%）より5.4ポイント高くなっている。

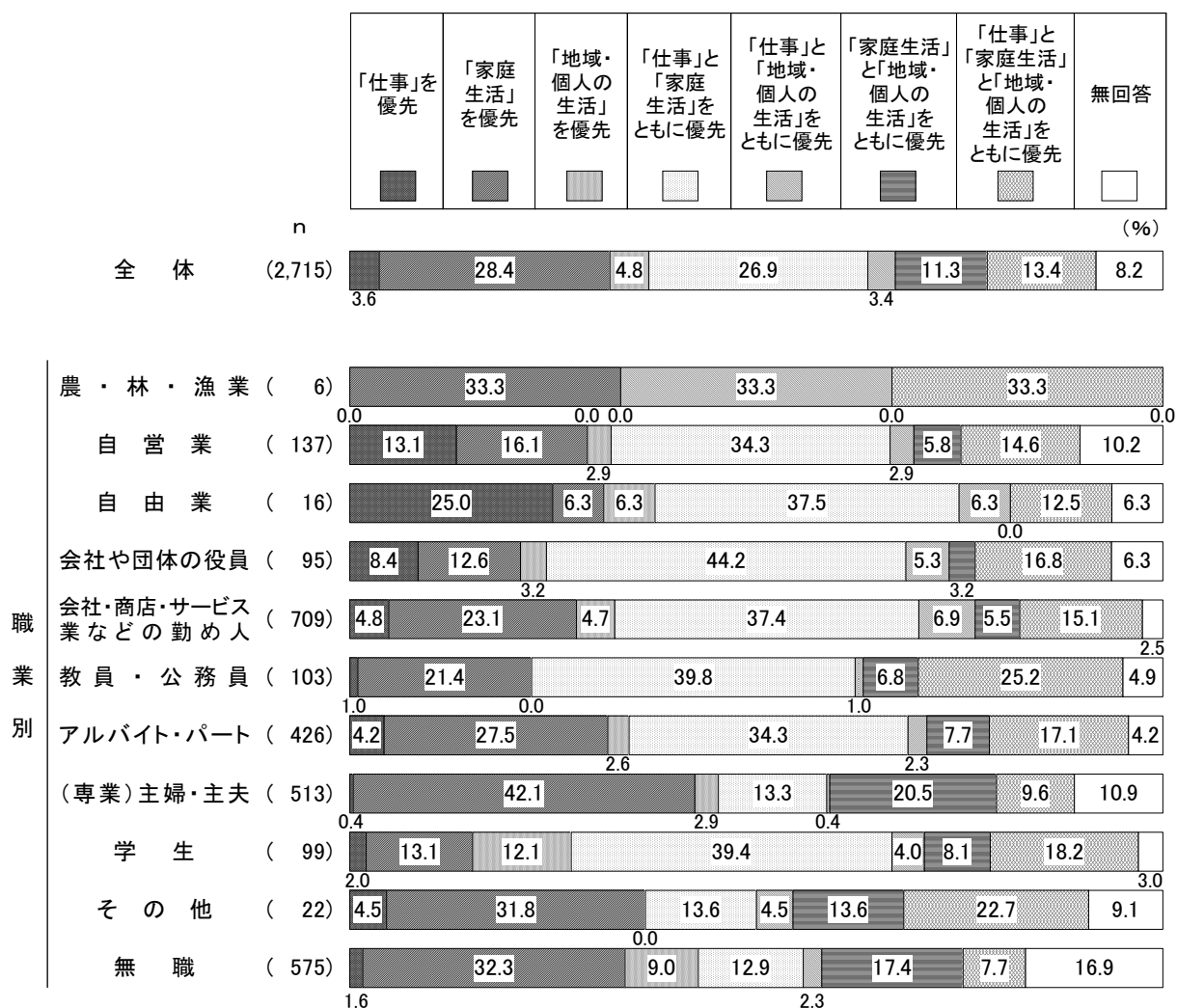
年齢別にみると、『家庭生活』を優先は30～39歳（31.1%）と65歳以上（32.6%）で3割強と多くなっている。『仕事』と『家庭生活』をともに優先は18～29歳（38.8%）で4割近くと多くなっている。（図 3-47-2）

図 3-47-3 ワークライフバランスの実現 ①あなたの望む優先度ーライフステージ別



ライフステージ別にみると、『家庭生活』を優先は家族形成期（39.0%）で4割弱と多くなっている。『仕事』と『家庭生活』をともに優先は家族成長後期（43.8%）で4割強、家族成長前期（40.6%）で約4割と多くなっている。（図 3-47-3）

図 3-47-4 ワークライフバランスの実現 ①あなたの望む優先度－職業別



職業別にみると、『家庭生活』を優先は（専業）主婦・主夫（42.1%）で4割強と多くなっている。『仕事』と『家庭生活』をともに優先は会社や団体の役員（44.2%）で4割台半ばと多くなっている。（図 3-47-4）

(48) ワークライフバランスの実現 ②実際の優先度

◇実際の優先度は「『家庭生活』を優先」が3割強

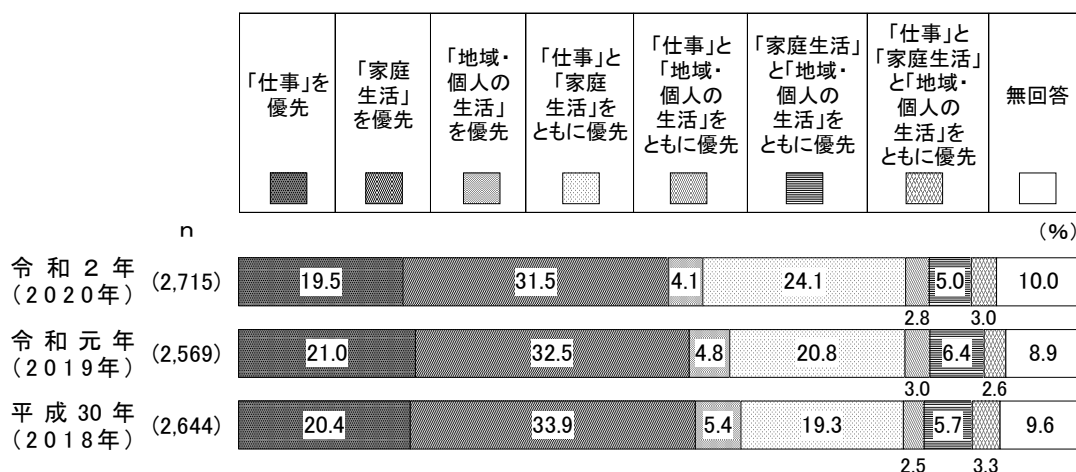
問52 仕事と生活の調和（ワークライフバランス）についておたずねします。あなたの生活の中での、「仕事」、「家庭生活」、「地域・個人の生活」（地域活動・学習・趣味等）の優先度について、それぞれあてはまるものに○をつけてください。

（○はそれぞれ1つずつ）

※仕事と生活の調和（ワークライフバランス）とは・・・

人それぞれの希望に応じて、「仕事」と、子育てや親の介護、地域活動等の「仕事以外の生活」の調和が図られる状態のことです。望ましいバランスは、人によって異なります。

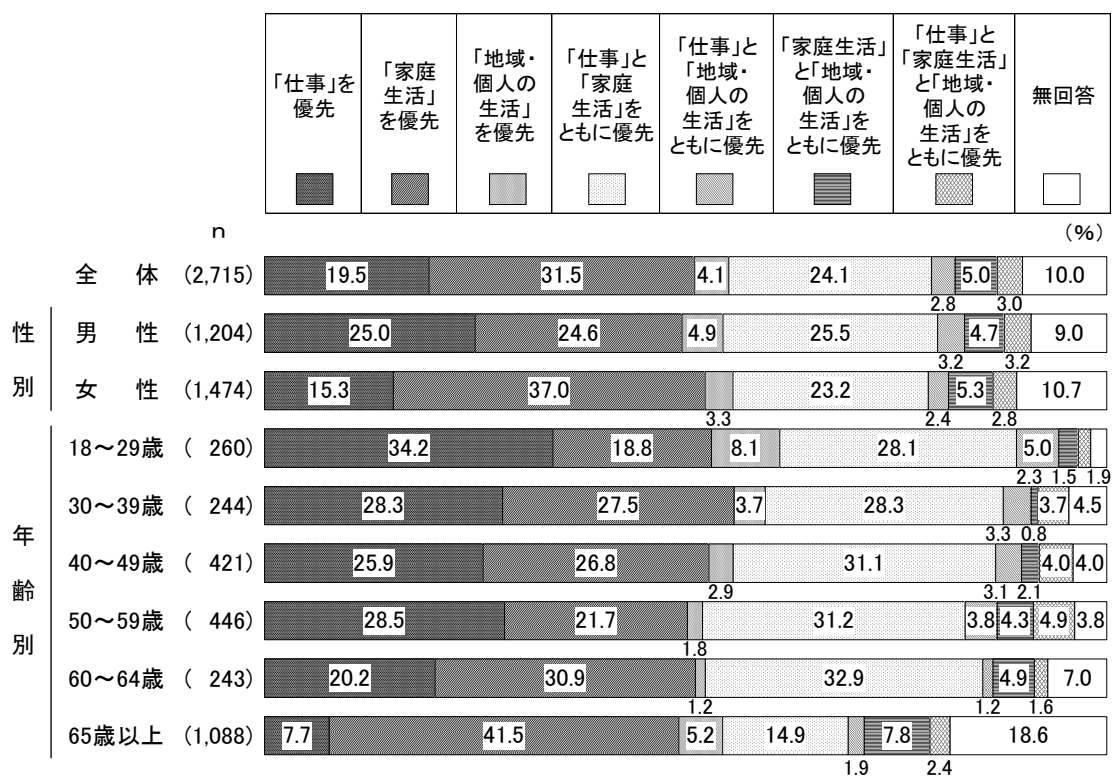
図3-48-1 ワークライフバランスの実現 ②実際の優先度－全体、経年比較



「仕事」、「家庭生活」、「地域・個人の生活」（地域活動・学習・趣味等）の優先度について、実際の優先度を聞いたところ、「『家庭生活』を優先」（31.5%）が3割強で最も多くなっている。次いで「『仕事』と『家庭生活』をともに優先」（24.1%）、「『仕事』を優先」（19.5%）などの順となっている。

前回までの調査と比較すると、「『仕事』と『家庭生活』をともに優先」は令和元年（2019年）（20.8%）より3.3ポイント増加している。（図3-48-1）

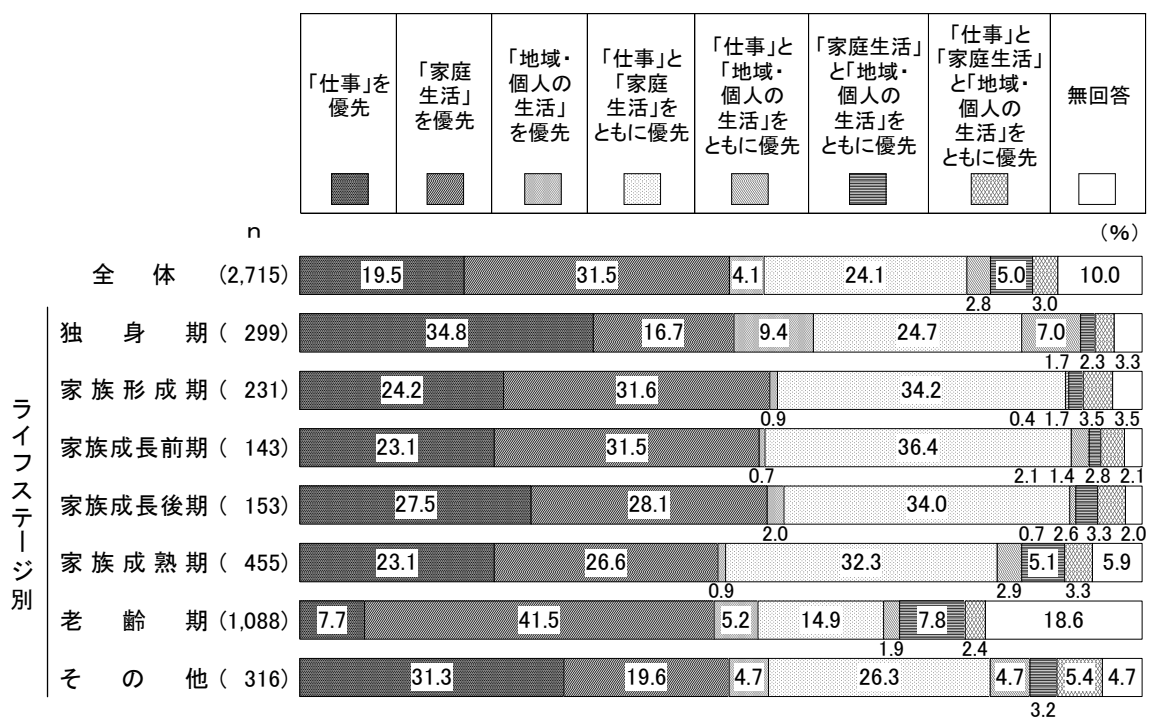
図 3-48-2 ワークライフバランスの実現 ②実際の優先度－性別、年齢別



性別にみると、『家庭生活』を優先は女性（37.0%）が男性（24.6%）より12.4ポイント高くなっている。一方、『仕事』を優先は男性（25.0%）が女性（15.3%）より9.7ポイント高くなっている。

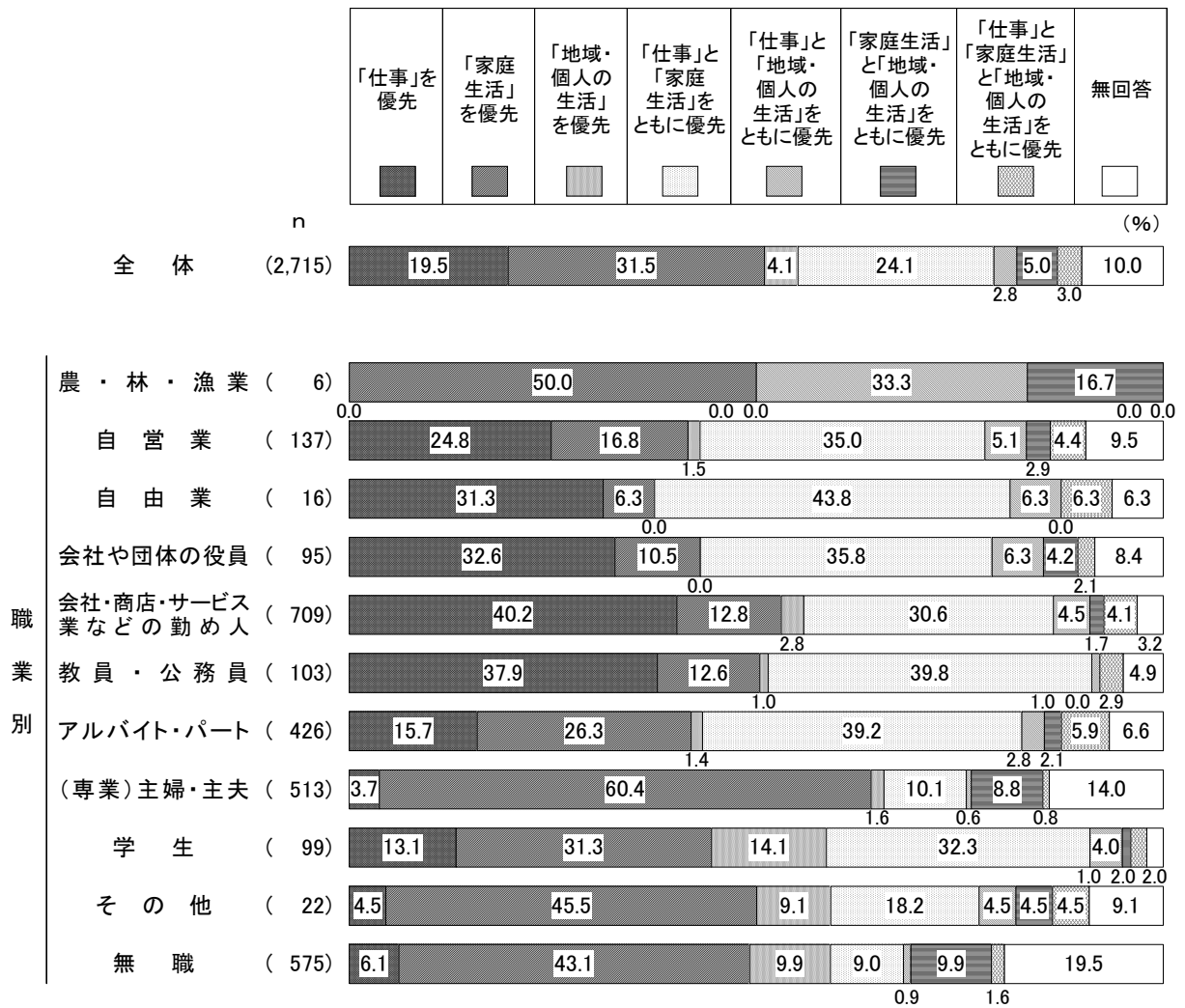
年齢別にみると、『仕事』を優先は18～29歳（34.2%）で3割台半ばと多くなっている。『家庭生活』を優先は65歳以上（41.5%）で4割強と多くなっている。『仕事』と『家庭生活』をともに優先は40～49歳（31.1%）、50～59歳（31.2%）、60～64歳（32.9%）で3割強と多くなっている。（図 3-48-2）

図 3-48-3 ワークライフバランスの実現 ②実際の優先度－ライフステージ別



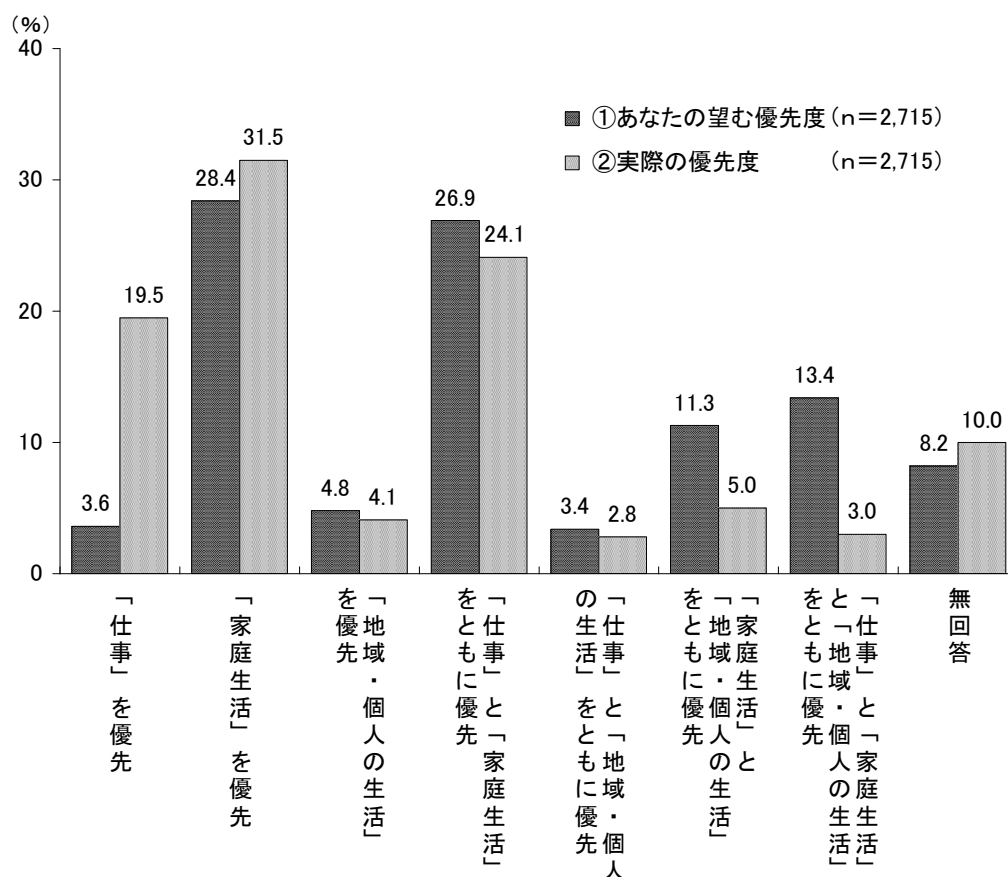
ライフステージ別にみると、「『仕事』を優先」は独身期（34.8%）で3割台半ばと多くなっている。「『家庭生活』を優先」は老齢期（41.5%）で4割強と多くなっている。「『仕事』と『家庭生活』をともに優先」は家族成長前期（36.4%）で4割近くと多くなっている。（図 3-48-3）

図3-48-4 ワークライフバランスの実現 ②実際の優先度－職業別



職業別にみると、『仕事』を優先は会社・商店・サービス業などの勤め人（40.2%）で約4割と多くなっている。『家庭生活』を優先は（専業）主婦・主夫（60.4%）で約6割と多くなっている。『仕事』と『家庭生活』をともに優先は教員・公務員（39.8%）とアルバイト・パート（39.2%）で4割弱と多くなっている。（図3-48-4）

図3-48-5 ワークライフバランスの実現 ①あなたの望む優先度と②実際の優先度



「仕事」、「家庭生活」、「地域・個人の生活」（地域活動・学習・趣味等）の優先度における、①希望する優先度と②実際の優先度について比較したところ、『「仕事」を優先』は②実際の優先度（19.5%）が①希望する優先度（3.6%）を15.9ポイント上回っており、全7項目の中で最も両者の比率の差が大きくなっている。次いで比率の差の大きい『「仕事」と「家庭生活」と「地域・個人の生活」をともに優先』は②実際の優先度（3.0%）が①希望する優先度（13.4%）を10.4ポイント下回っている。3番目に比率の差が大きい『「家庭生活」と「地域・個人の生活」をともに優先』も②実際の優先度（5.0%）が①希望する優先度（11.3%）を6.3ポイント下回っている。

一方、全7項目の中で最も比率の差が小さいのは『「仕事」と「地域・個人の生活」をともに優先』で②実際の優先度（2.8%）と①希望する優先度（3.4%）の比率の差が0.6ポイントとなっている。（図3-48-5）

図3-48-6 ワークライフバランスの実現 ①あなたの望む優先度-②実際の優先度別

(%)

		n	①あなたの望む優先度							無回答
			「仕事」を優先	「家庭生活」を優先	優先「地域・個人の生活」を	「仕事」と「家庭生活」をともに優先	「仕事」と「地域・個人の生活」をともに優先	「家庭生活」と「地域・個人の生活」をともに優先		
全 体		2,715	3.6	28.4	4.8	26.9	3.4	11.3	13.4	8.2
②実際の優先度	「仕事」を優先	530	11.3	24.2	4.0	38.1	7.4	4.5	10.4	0.2
	「家庭生活」を優先	856	1.3	56.4	3.6	15.3	0.5	14.7	6.8	1.4
	「地域・個人の生活」を優先	110	4.5	11.8	45.5	4.5	2.7	18.2	12.7	-
	「仕事」と「家庭生活」をともに優先	655	2.0	14.0	1.2	54.0	2.0	4.1	22.3	0.3
	「仕事」と「地域・個人の生活」をともに優先	75	1.3	5.3	12.0	6.7	37.3	17.3	18.7	1.3
	「家庭生活」と「地域・個人の生活」をともに優先	135	0.7	13.3	3.0	7.4	-	60.7	11.9	3.0
	「仕事」と「家庭生活」と「地域・個人の生活」をともに優先	82	-	9.8	2.4	7.3	2.4	8.5	68.3	1.2
	無回答	272	2.2	9.2	2.2	6.6	1.5	2.6	1.5	74.3

(注)  は項目内での最高値

「仕事」、「家庭生活」、「地域・個人の生活」（地域活動・学習・趣味等）の優先度における、①希望する優先度と②実際の優先度の相関をみると、実際に「『仕事』を優先」している人（530名）においては、「『仕事』と『家庭生活』をともに優先」することを希望する人（38.1%）が4割近くで最も多くなっており、「『仕事』を優先」することを希望する人（11.3%）は1割強となっている。一方、実際の優先度で「『仕事』を優先」以外の項目を回答した人たちにおいては、①希望する優先度と②実際の優先度が一致している人の割合がそれぞれ最も多くなっている。（図3-48-6）

図 3-48-7 ワークライフバランスの実現 ①あなたの望む優先度と②実際の優先度の一致

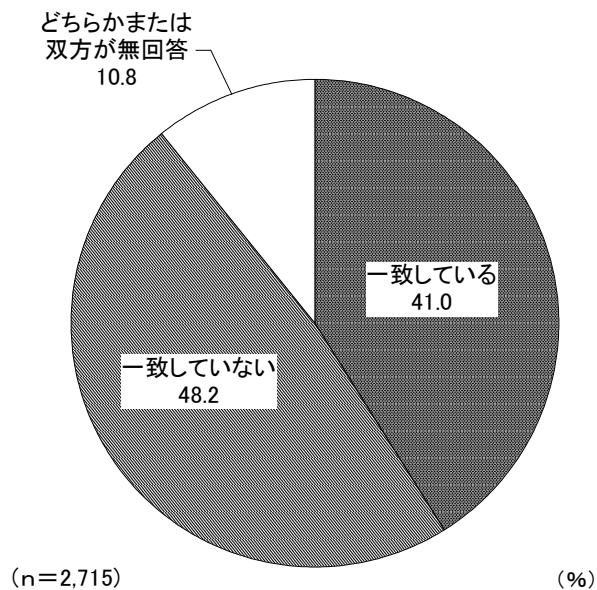


図 3-48-6 に示した、「仕事」、「家庭生活」、「地域・個人の生活」（地域活動・学習・趣味等）の優先度における、①希望する優先度と②実際の優先度の相関をもとに、①希望と②実際の 2 つの回答が一致した人、すなわち①希望する優先度のおりに②実際の優先度が実現できている人の割合（41.0%）は 4 割強となっている。

一方、2 つの回答が一致しない人、すなわち①希望する優先度のおりに②実際の優先度が実現できていない人の割合（48.2%）は 5 割近くとなっている。（図 3-48-7）

(49) 市の相談体制の充実度

◇《《そう思う》が4割弱

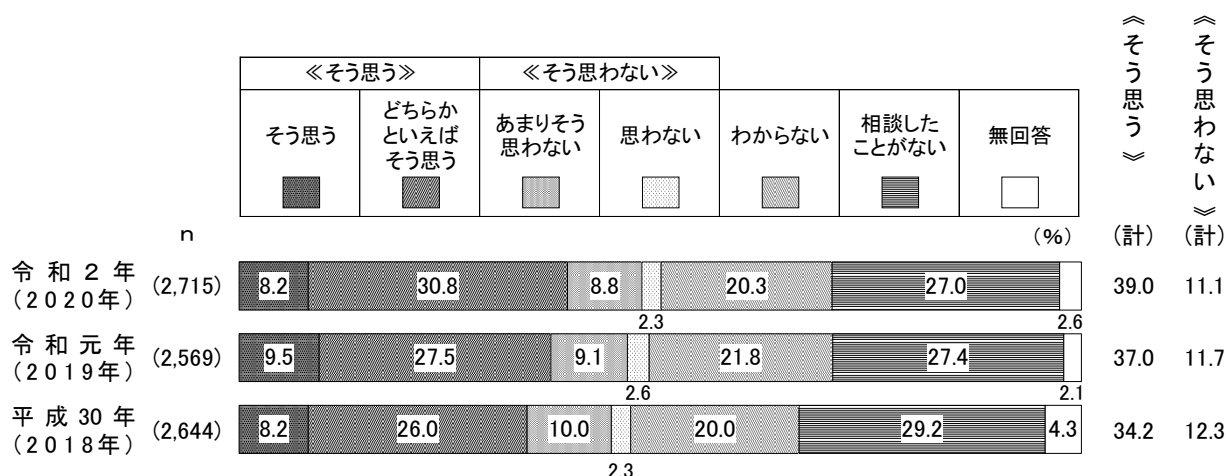
問53 あなたは、市が実施する相談体制は充実していると思いますか。(○は1つだけ)

※市では、専門機関・専門家と連携し、次のような相談を行っています。

- | | |
|------------------------------------|---------------------------------|
| ○人権、女性福祉、女性のための相談 | ○高齢者の福祉と介護、高齢者総合 |
| ○生活にお困りの方の自立相談 | ○専門家による成年後見制度・権利擁護相談 |
| ○法律、司法書士法律、不動産、登記、
相続・遺言等暮らしの手続 | ○ひとり親家庭、子ども家庭総合、
専門家による子育て相談 |
| ○年金・雇用保険・労働条件 | ○総合教育相談、こども電話相談 |
| ○交通事故 ○税金 ○行政 ○消費生活 | ○あなたの心の相談室、こころの健康相談 |
| ○外国人のための生活相談、行政書士相談 | ○H I Vに関する相談・検査 |
| ○地域活動への参加 ○起業 ○就職 | ○保健福祉・栄養・歯科 |
| ○住まいのなんでも相談、
住宅の増改築に関する相談 | ○理学療法士による健康相談 |
| | ○医療に関する電話相談 |
| | など |

※これらの相談の「日時・会場・問い合わせ先」については、広報はちおうじの「相談まどぐち」(毎月1日号に掲載)や、市ホームページをご覧ください。

図3-49-1 市の相談体制の充実度－全体、経年比較



市が実施する相談体制は充実していると思うか聞いたところ、「そう思う」(8.2%)と「どちらかといえばそう思う」(30.8%)を合わせた《《そう思う》》(39.0%)は4割弱となっている。一方、「あまりそう思わない」(8.8%)と「思わない」(2.3%)を合わせた《《そう思わない》》(11.1%)は1割強となっている。また、「相談したことがない」(27.0%)は3割近くとなっている。

前回までの調査と比較すると、《《そう思う》》は令和元年(2019年)(37.0%)より2.0ポイント増加している。(図3-49-1)

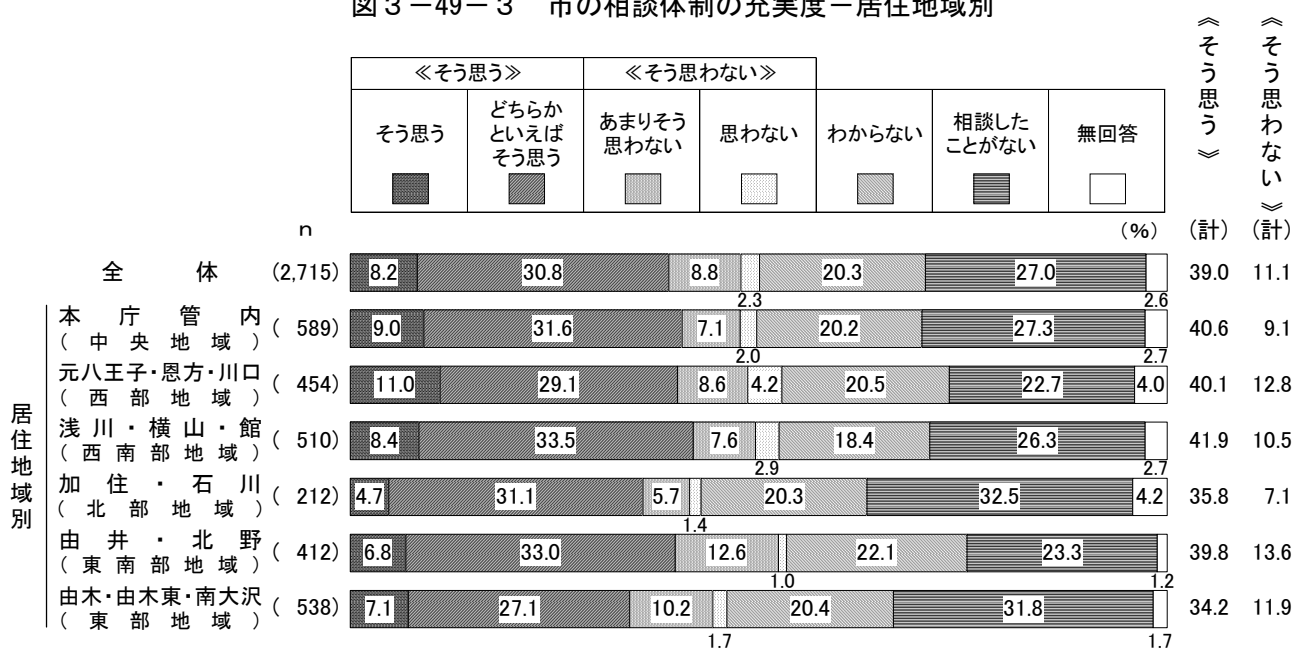
図 3-49-2 市の相談体制の充実度－性別、年齢別



性別にみると、《そう思う》は女性（40.0%）が男性（37.9%）より2.1ポイント高くなっている。

年齢別にみると、《そう思う》は65歳以上（41.3%）で4割強と多くなっている。「相談したことがない」は18～29歳（36.5%）で4割近くと多くなっている。（図 3-49-2）

図 3-49-3 市の相談体制の充実度－居住地域別



居住地域別にみると、《そう思う》は浅川・横山・館（西南部地域）（41.9%）で4割強と多くなっている。（図 3-49-3）

(50) 行財政運営

◇《評価する》が5割台半ば

問54 市は、下欄のような取り組みにより、効果・効率的な行政運営を図ることで、健全な財政運営の維持に努めています。

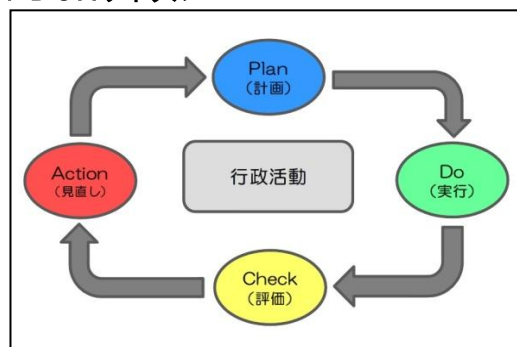
このような市の取り組みに対するあなたの評価をお選びください。(○は1つだけ)

(1) 計画行政の推進

○市の基本構想・基本計画である「八王子ビジョン2022」に掲げた49の施策の実現に向け、向こう3か年に実施する主な事業を示した「アクションプラン(実施計画)」を策定し、計画的な行政運営を行っています。

○安定的・継続的な市民サービスを提供するために、計画・実行・評価・見直しのPDCAサイクルによる行政運営をしています。

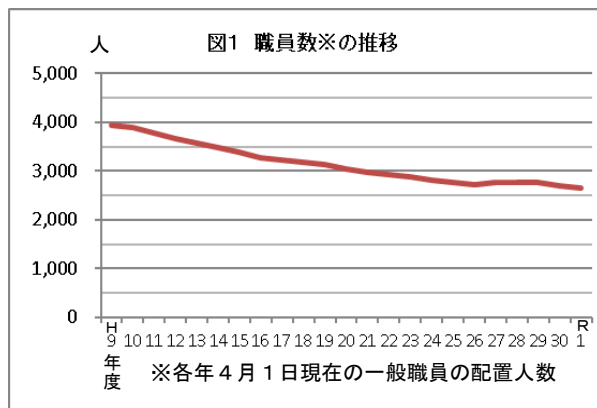
PDCAサイクル



(2) 行政運営の効果・効率性を高める取り組み

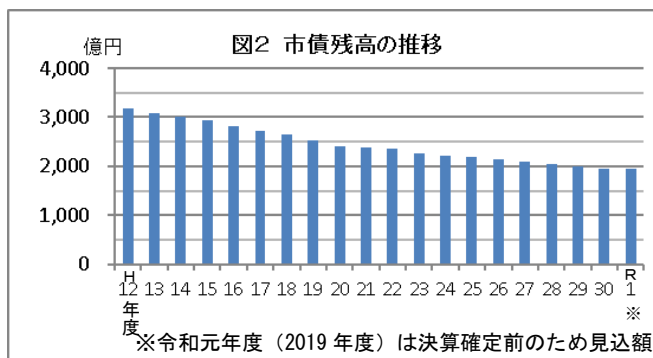
○公共施設の管理・運営などにおいて、市が実施するよりも効果・効率的で質の高いサービスを提供できるものについては、民間事業者のノウハウを積極的に活用しています。

○職員が担うべき役割を明確化し適正な定員管理を行うことにより、平成9年度(1997年度)の3,950人をピークに職員数は減少し、令和元年度(2019年度)には、2,659人になりました。(図1)



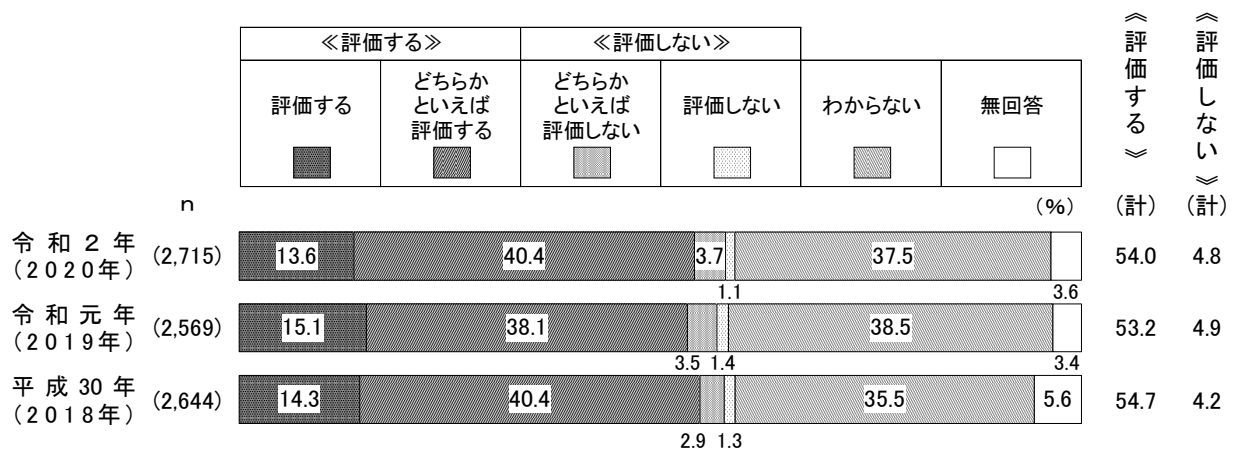
(3) 健全な財政運営

○市の借金である市債の残高をピーク時の約3,184億円(平成12年度(2000年度)末)から約1,941億円(令和元年度(2019年度)末決算見込)に削減し(図2)、市の貯金である基金の残高は、約112億円(平成12年度(2000年度)末)から約254億円(令和元年度(2019年度)末決算見込)に増やしました。



○市の支出のうち、児童福祉や障害者福祉など社会保障制度に基づき支出する「扶助費」が継続して増加する中、職員が担う役割の明確化による適正な定員管理など、行政運営の効果・効率性を高める取り組みを行うことにより、適切な市民サービスを維持するとともに、災害に強いまちづくりや地域の実情にあわせた地域づくり、子どもを産み育てやすい環境づくりなどに向けた対応を図っています。

図 3-50-1 行財政運営—全体、経年比較

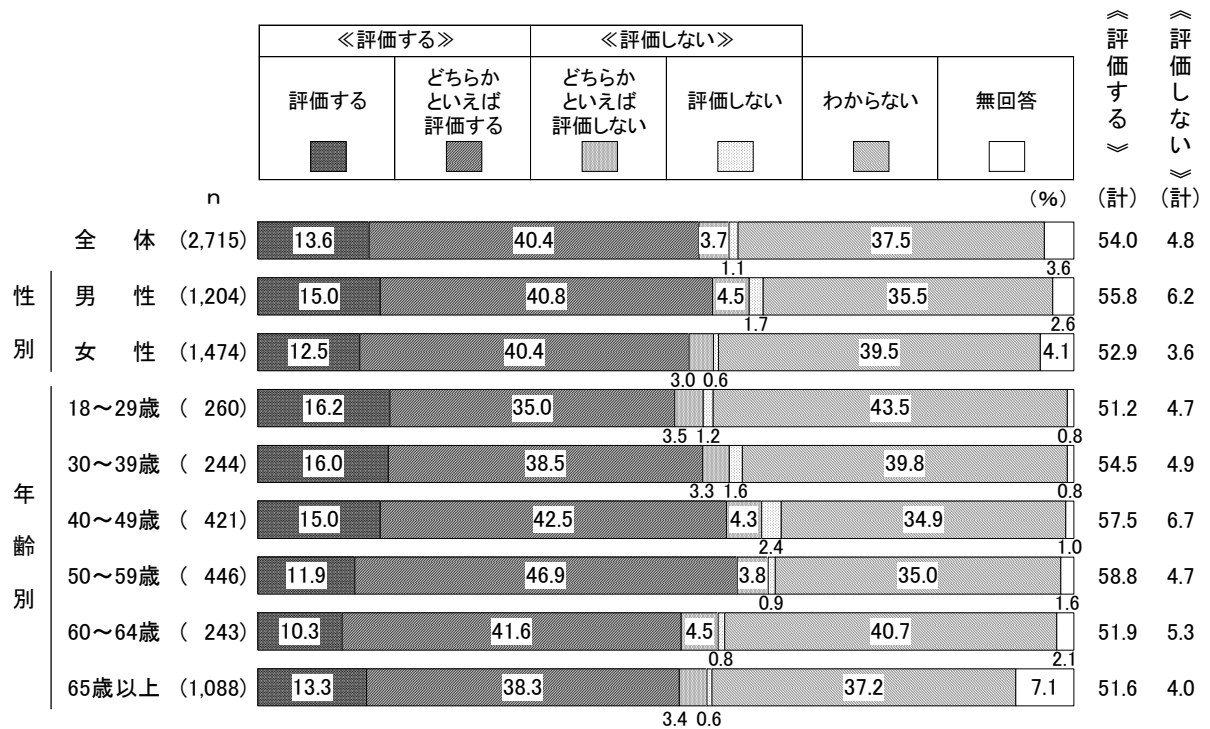


効果・効率的な行政運営を図ることで、健全な財政運営の維持に努める市の取り組みに対して評価するか聞いたところ、「評価する」(13.6%)と「どちらかといえば評価する」(40.4%)を合わせた《評価する》(54.0%)は5割台半ばとなっている。一方、「どちらかといえば評価しない」(3.7%)と「評価しない」(1.1%)を合わせた《評価しない》(4.8%)は1割未満となっている。

前回までの調査と比較すると、令和元年(2019年)と大きな傾向の違いはみられない。

(図 3-50-1)

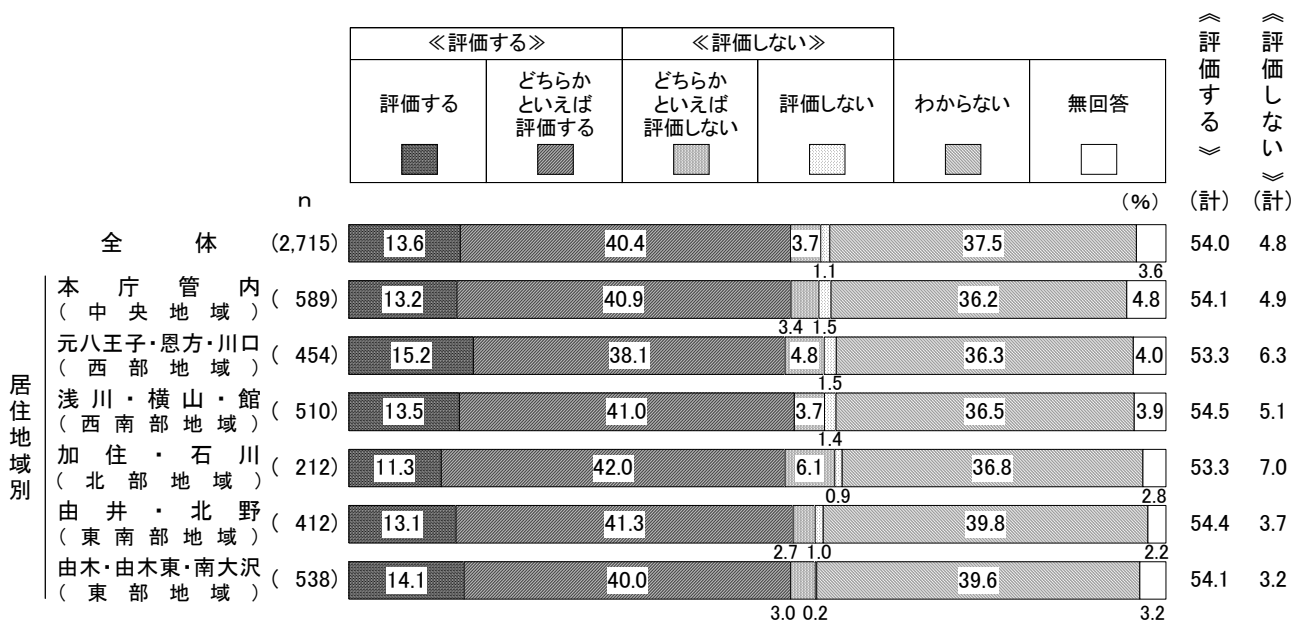
図 3-50-2 行財政運営—性別、年齢別



性別にみると、《評価する》は男性（55.8%）が女性（52.9%）より2.9ポイント高くなっている。

年齢別にみると、《評価する》は40～49歳（57.5%）と50～59歳（58.8%）で6割近くと多くなっている。（図 3-50-2）

図 3-50-3 行財政運営—居住地域別



居住地域別にみると、大きな傾向の違いはみられない。（図 3-50-3）

(51) 市の行財政運営を評価しない理由（自由意見）

（問54で「どちらかといえば評価しない」または「評価しない」とお答えの方へ）

問54－ 1 評価しない理由があれば、お書きください。（自由記述）

効果・効率的な行政運営を図ることで、健全な財政運営の維持に努める市の取り組みに対して、「どちらかといえば評価しない」または「評価しない」と答えた131人に、評価しない理由を自由記述形式で聞いたところ、61人から回答があった。その中から抜粋した意見を掲載する。なお、内容については、記述の趣旨を損なわないように留意しながら一部要約したものがある。

- 「職員数をへらす」という行為が、必ずしも良いわけではない。市としてのサービス全体で考えれば、収支が適切となる職員数、サービスの質のバランスをとるのが大事。（女性18～29歳）
- 車の免許を返納し、運転できないお年寄りが多くなると思うのでバスの時間やバス停の整備をしてほしい。八王子は広く、坂道が多いので車が使用できないととても不便になってしまう。
(女性30～39歳)
- 市民に還元されている実感がない。（男性30～39歳）
- 教職員の負担が増えているのであれば良いとは思わない。（男性30～39歳）
- 職員をもっと減らして市債を早く減らすべき。必要な職員は確保すべきだが、市役所で見かける職員はボーっとしている方もいる。市民の目に見える、納得できる行政をしてほしい。なかなか伝わりづらいですよ！（女性40～49歳）
- 中核市になったあたりから、障害児（家庭）や、ひとり親家庭に対しての助成（申請）等が、かなり通りにくくなり、厳しくなっているという声をよく聞きます。その様な家庭の現状をもっと理解して頂きたいと願っております。（女性40～49歳）
- 目に見える効果がない。（男性40～49歳）
- コロナで減収が見込まれ、国の借金も過去最大となっているので、危機的状況にそなえ、効果や時期をより精査して仕事をして、基金を分厚くしていくべき。評価しないわけではないが、より一層の健全財政への努力をお願いします。（男性40～49歳）
- 八王子市内に子供の貧困が目立ちます。修学旅行に行けない。毎日同じ服を着て学校へくる。そして、いじめがあります。もっともっと子供の貧困・いじめ・虐待に対し、1番力を入れて欲しい！子供の力で安心して相談に行ける所を作って欲しい。学校カウンセリングは、他の子供の目があり、いじめの子供は行けません。生活保護やシングルマザーへの救済に全力で取り組んで欲しい。町づくりより、子供の命・人生が大事！（女性50～59歳）
- 公務員に節約の概念がないと思っている。（男性50～59歳）
- P→D→C→AのP（計画）には、課題認識が必要。課題設定が間違いであれば計画も実行も道がはずれる。まさに今の八王子市政がその典型！（男性60～64歳）
- 無駄な工事が多すぎる。（男性60～64歳）
- 八王子の目指す将来像が見えません。駅周囲の寂れた商店街、駅前の送迎の不便さ（車で送迎ができないのは何故）、予算の使い方が必要なものに、適切に用いられていないのではないですか。他市に比べて八王子は活気がないです。（男性60～64歳）
- 「健全な財政運営」とは、どのような指標なのか？理想的な行政活動の中身を、明確に住民に知らせるべきだと思います。（男性65歳以上）
- 税収u pの施策が無い。（学生が増えても税収u pにならず）（男性65歳以上）